
COMPLEX TRIP!

T m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMPLEX TRIP!

【Nコード】

N7806M

【作者名】

Tm

【あらすじ】

眉目秀丽文武両道、何をさせても完璧で、人徳もあれば人望もある、産まれは名士の、三拍子ならぬ丁々発止のチートな完璧少年一条新。と、そんな彼を義弟に持つ、平々凡々を体現するごく普通の少女、一条姉。何もかもが違う二人は、それでも今まで仲良くやってきた。ある日いきなり、弟の異世界トリップに姉まで巻き込まれてしまうまでは。

自称モブ中のモブを謳う若干ドライな姉視点で、チートで素直な弟を詰ったりいじったり困らせたり放置して突っ走ったりするお話

です。

一条新とその姉（前書き）

初連載です。よろしくおねがいます。

なお、この小説には一人称による『物語』『作者』『読者』などの単語がありますが、決してTmが自キャラと馴れ合いを測っているわけではなく、あくまで独立して彼女がノリでそういう表現を使ったりする、という解釈をしてくださると幸いです。

一条新とその姉

これが誰のための物語なのか、私は知っている。これは私の物語ではない。これは彼の、彼による、彼のための物語。それがいつから始まっていたのかさえ、私にはいやというほどに解りきっていた。

一番初めに見たのは、つやつやとした、かすり傷一つ無い黒いローファー。中学校の入学式のために買った一足三千元のものをそのまま履いてきた私と違って、恐らくは私のそれよりも十倍以上は高値、そして新品なのだろうと一目見てすぐわかった。

目線を上げていくとそのお高そうなローファーにかぶさるグレイのパンツ、濃緑色のブレザー、紺色のネクタイが見えた。公立校の私の一着しかない制服と違って、敷居がえらく高そうなその皺の無い制服は恐らく生地も仕立も一級品だ。ご丁寧に胸元には銀色のネクタイピンが添えられていて、これも一見普通の物に見えるがそれがプラチナであることはすぐにわかった。

そして最後には、黒縁の眼鏡をかけ、利発そうな口元をきゅっと結び、私をじつと見上げる少年と目が合った。

神様みたいだ。

幼齡にして非の付け所の無い精錬されたようなその容姿を目の当たりにして、まるで金縛りにあったように一瞬呼吸さえもが停止した。その長いような短いような刹那の後、気付けばはっとするくらい聡明な瞳が私を映していた。

「新、^{あた}新しいお姉さんにご挨拶しなさい」

隣に佇む、人当たりのいい笑みを浮かべる次元の違うジェントルマンのような人。この人が、戸籍上私の義父になる人。その未来の義父に促され、新と呼ばれたその少年はにこりとも笑わずただじつと私を見つめて、ぼそっとそっけなく呟いた。

「初めまして」

これが、私と新のファーストコンタクト。この日を境に私の世界は、生活もアイデンティティも私本人ですらも、まるでオセロの駒のようにあっけなく、がらりと反転したのだった。

「……………それでは次に、副会長から新任のご挨拶をお願いします。
一条新君、お願いします」

「はい」

凜と透き通る美声。未だ高校一年生にして身から冴え渡る堂々とした風格。隙の無い所作で歩く彼の姿に、誰もが目を惹かれ見惚れ感嘆する。まだ少年と青年の狭間に居るようなその面差しは逆に中性的な印象を見る者に与え、見つめる者は男女問わず頬を赤らめてしまうほど。生徒ならばいざ知らず大人である教師までもが己の自分を忘れ彼の挨拶に心酔しきってしまったているのだから、全く理解できないほどの魅力の持ち主だ。

首席入学以来成績はいつもぶつちぎりのトップ、部活では弓道部に所属し僅か三ヶ月も経たないうちに主将の座に上り詰めてしまった英傑。少々口数の少ないきらいにあるけれどそれがまた彼の人柄を模したようで魅力の一部となり、次々と他人を寄せ付けまた期待を裏切らず人当たりもいい。一言で言うなれば、彼はチート。レベルだけは開始当初から最高値を約束された、そんな少年だった。

そしてそんな語りつくせない魅力具备了た少年を弟に持つ、たった一歳違いの姉がこの私、いちじょうかへで一条楓。容姿も成績も性格も特筆すべき点がどこにも見当たらない、有体に言えば登場人物B程度のスペックの持ち主。それが私。私に名が与えられているのだから、と、主役級の弟の姉というポジションに辛うじてぶら下がっているからに過ぎない。そんな事は、彼に出会ったあの時から既に気がついて

いた。

しかしもうそんなことは気にすべきではない。彼がこの物語の主人公ならば、モブはモブらしくモブたる所以の役割を果たしてさっさと退場するに限る。そうすればきつと私は。

「姉さん」

いつのまにか就任式自体が終えていたのか、気がつくとも目の前には主人公その人が立っていた。あいも変わらず淡々とした眼差しで私を見上げ、いや見下ろして、ぼそつと呟いた。

「帰ろう」

「……うん。かえろっか、新さん」

私は呆けていた頭をどうにか切り替えて、微笑み返した。彼は私が『新さん』と呼んだとき、いつものように眠たそうな瞬きを一つした。

いちじゅうあらた

一条新。誇るべき、私の弟。元は赤の他人だったが、私が中学一年生のときに彼は私の弟となり、そして私は佐藤楓から一条楓になった。

母親が再婚し一歳違いの弟ができ、当初の私は少なからず戸惑った。微妙な年頃だったというのもあるが、父方、つまり新の父親は俗に言う富豪の家系というやつで、私の家など家系図すらない庶民中の庶民だったために、弟というよりもお金持ちのお坊ちゃまと同居、というイメージの方が強かったからだ。

だからただでさえ口数の少ない彼に対してどう接したらいいのか解らず、私はひたすらにこにここと下手糞な愛嬌を振りまいていたわけだったが、当の本人はというと初対面から何も変わらず、それどころか私を呼び捨てにして呼んでくるので、そんな戸惑いさえもいつしかどこかに消えてなくなっていた。

そんな風にしてお金持ちの弟との生活に四苦八苦しつつもなんと

かやってきたのが高校までの三年間。私達はなかなかうまくやってきたように思える。姉弟喧嘩もしたことなどなかったし、そこは幼い時分と違い、お互いある程度の一線は踏まえて過ごしてきたように感じる。

しかし何時からだろうか。いつのまにか彼は私を呼び捨てにすることをやめ、そして私と同じ学校に入学してきて、今しがた副会長に就任してしまった。

一体なにがあったのか。それとも特に何もなかったあの偶然なのか。寡黙な弟は何も語らず、何も示さず、黙々と私の隣を歩いている。

よくよく見てみればあの時は私よりも低かった彼の身長は今ではすっかり私のそれを越してしまい、見下ろす立場と見下ろされる立場がすっかり逆転してしまっていた。

何かがあったわけではないはずなのに、確実に何もかもが当初とは違ってきている。それがなんの兆候なのか、私には解るような気がしていた。

「新さん」

「なに」

「あとで、部屋に行っていいい？」

似ても似つかない弟を見上げる。綺麗な弟。何もかも。似ても似つかない。

当たり前か、と心の中で自嘲が浮かぶ。私とは血が繋がっていないのだから。遺伝子の時点で、私達に共通点は無いのだから。

その優良遺伝子の持ち主が、前を向いたまま答えた。

「……うん」

ちらりと私を一瞥して、そっけなく頷いてくれた。何か思うところがありそうな態度にも見えるけど、あえて私は無視をして微笑み返す。

それから私は新さんの横顔を時折盗み見ながら、家についた後の予定を頭の中に組み立て始めていた。

「あはははは」

いつになく明るい笑い声が、弟の部屋に木霊する。こんな時は、私が新さんの部屋に居る証拠。そして私が新さんに変なことをさせている状況、でもある。

変なこと、だろうか。おかしいこと、とも言える。とにかく普通ではない。

「新さんすごい。すごいよソレ」

今お腹を抱えている私の目の前で新さんがなにをしているかという、単なるブリッジ。そう、仰向けになり床に手のひらと足をつけて身体を持ち上げる例のアレだ。一見するとただの柔軟かもしれないが、普段こんな事をやりそうも無い、しかも今しがた副会長の挨拶で全校の皆さんを魅了してきた少年がやっていると思うと、シユールすぎて笑いを抑えられなかった。

チートな弟が何故か部屋でブリッジをかましている。写真に撮りたいくらい、面白おかしい光景だ。ついでにそれを全校の皆さんに公開して、うなぎ登りだった好感度を光の速度で地に落としてやりたい。しかしそんな事はできない。姉として、弟の不名誉は避けたいところだ。たとえそれが、私がせがんで生み出した光景だとしても。ブリッジ新さんは私の心のシャッターに納めておくに留めておこう。

「ああおかしかった。もう止めていいよ」

微かに滲んだ目じりの涙を擦って言うと、新さんは言うとおりに体勢を立て直す。まるで何事の無かったかのように平静とした顔で。

おかしいことに、新さんは私がせがんだことは今と同じようにしてなんでも叶えてくれた。それが今のような恥ずかしいことでも、難しいことでも、もしくは嫌なことであっても、拒んだりはしない。それどころか一向に表情を崩さず淡々とそれをやっているものだから、私はこのお願いが癖になってしまい、いい年になってもうこんなことはやめようと思いつつもやめられなかった。

だってなんでも聞くから。あの新さんが。だから、つい。つい、ね。

体勢を立て直して手を払う新さんの目の前に立ち、おもむろにその片手を握った。そうすると、新さんのもう一方の片手が私の空いているほうの手をぐ、と掴んでくる。お互いがお互いを捕まえるような形になって、向き合う。暗黙の了解のように、なんの疑問もなく。

そう。これも私が提案したゲーム。家族になりたての頃、口数の少ない弟との距離感をどうにか掴もうと編み出したのが発端だ。以来私達はふとしたときにこのゲームを始める。言葉を交わさず、相手の心を読むこのゲームを。

「今日は勝てるかな」

陽気な声で言うと、新さんが私を掴んでいる手に少しだけ力をこめた。

これは単純な駆け引きのゲーム。手を離れたほうが、相手のもう片方の手を捕まえるとゲームオーバー。離されたほうは捕まえられない前にその離れた手を捕まえたらセーフ。攻守がお互いにある、名も無いゲーム。

最近の私は滅法このゲームで惨敗を喫している。やっぱり成長すると反射神経とか動体視力とか、色々違ってきちゃうのかな。前はそれでも、勝っていたときもあったのに。

それでもなにかが変化したとしても私はたった一つの盟約を彼に課して、変わらずこのゲームを行っている。それは手加減をしないこと。本気でこのゲームに取り組むこと。私の言うことをなんでも叶えてみせる彼は、未だ嘗て盟約を破ったことなど一度としてない。そんな律儀な弟に毎回敗北を喫しながらも、私は幾度と無く彼に挑戦した。なぜだろう。なぜかってそれは。

「……新さん？」

ふと、腕を掴んでいた力が、緩んだ。そういう焦らしたり匂わせたりという緩急をつけるのもゲームの駆け引きの一つだが、目前の

弟の様子が何故だかいつもと違っていた。どこか別のものを見ているように、深刻な表情をしている。

あっと思ったときには掴まれていた手を離され、それどころか掴んでいた手さえも振り払われる。反射的にいつもの癖で離れた手を捕まえに掛かり、一度は離れたその右手を取った瞬間、目の眩むような強烈な光が新の後ろから瞬いた。私はそのとき弟がどんな顔をしていたのか、逆光で全く見えなかった。

一条新とその姉（後書き）

一条家の御曹司、新のお父さんと、彼女のお母さんが再婚して、二人は義姉弟となりました。一歳違いです。

一条姉とメイドさん

うららかな春の日差し。とかいう使い古された一文がこと似合う風景。

鶯よりも薄い黄緑色の小鳥が足元をちょんちょんと小刻みに飛んでは、床にある何ともとれないものを摘んで、またちょんちょんとそこかしこを飛び回る。

陽光と織り交ざる木漏れ日の中で聞こえるのは、小さな小鳥の囀りと、風に攪られる木々のざわめき。それから、ポッドから注がれる茶褐色の液体がカップに注がれる音。つまり紅茶。お紅茶。

うーん、いい匂い。いい天気だし、ちょうどいい気温だし、平和そのもの。ここがどのヨーロッパかという一点を除いて。

「カエデ様。ミルクは如何ですか」

「ああ、はい、お願いします」

にっこり微笑まれたので、こちらもこれくらいかな？ と同じ程度の微笑を返してみる。

見るからにメイドさんな格好をした目の前のメイドさんらしきメイドさんは、心得たとばかりに頷いて、手ずからちよつどいい具合のミルクを足してくれた。つまりこれってロイヤルミルクティー？ いや、違うな。そうじゃない。これはあれだ。異世界トリップというやつ。人事なので、わりとすんなり納得できた。納得って言うか、まるまる他人事。

となるとこの猫耳が著しく似合いそうな金髪猫っ毛くるくるパーマで碧眼のお姉さんは、ヤツを、ご主人様と呼んで慕っていたりするのだろうか。うーん、絵的には問題ないけど、いかんせんイメージが学校の制服のままなのでちよつとアブノーマルな裏設定がごろごろついてきそう。この場合新さんは常道で言うところの鬼畜眼鏡生徒会長設定ってところかな。新さんはまだ副会長だけだ。

いや、駄目だ。鬼畜にするにはちよつと口数が少なすぎる。うー

ん、いや、でも、放置プレイとか視姦プレイなら新さんにも可能な範囲かな。新さんムツツリスケべっばいし。あくまで私の主観のみの印象だけど。

「カエデ様」

「あのう……」

「はい」

彼女が何か言いかけたのを失礼ながらも遮ると、特にそれを遺憾に思うでもなかったのか微笑み返してくれるメイドさん。よく教育されてるなあ。笑顔がすごく気持ちがいい。やっぱりその辺のコンビニのバイトとは指導の質からして違うんだね。感嘆。

「あの、敬称は必要ありません。それに敬語も。私は彼とは違いただのおまけなんです。したがってお姉さんが敬う必要のない端役なんですよ」

「まあ、うふふ」

名前も知らない即席命名プリティメイドさんは私の発言のどこかが可笑しかったのかからからと笑う。それでも、口元を優雅に押さえつつ、穏やかに首を横に振った。

「そういうわけには参りません。何せこの国の最高峰におられるお方の、曲がりなりにも姉君様でいらっしゃるのですから」

曲がりなりにも。うん。まあ当たらずとも遠からず。根性は捻じ曲がっていると自負しておりますが。

「……さいですか。お気を煩わせてしまい恐縮です」

まあ、こういうパターンなのも読めていた。それはそうかと肩をすくめ、大人しく紅茶を啜る。

うん、美味い。家で、というか新さんのお家で頂く味と同じくらい美味しい。ということは、新さんちで出されていたお茶は最高峰である王室の味と大差ない、というかそのレベルだったということか。とんでもない事実を再確認できたことに、表面上は微笑を浮かべつつも、果てしない動揺が私の中に産まれていた。人間、知らなくていいことというのは、知るべきこと以上に多いのかもしれない。

うららかな春の日差しを浴びてにこやかにお茶を嗜む一方で、いやに冷や汗が治まりきらない、そんな午後のティータイム。もとい、新さんお仕事につきおまけのお姉さんはおもてなしでお留守番中、だった。

事の始まりは、あらゆる時点でのハプニング。つまり不測の事態。私にとっても、新さんにとっても、そしてこちらの皆さんにとっても。

「突然お呼び立てして申し訳ありません！ ですが閣下に火急お知らせしたいことが」

例の、目も潰れんばかりの光に包まれ辿り着いたそこは、どこの舞台ですか？ とばかりに煌びやか且つ鮮やかな世界だった。緋色の絨毯や、逆にどうやって繋げたんだと不思議になるほど長く傷一つ見当たらない真っ白な石柱に、それに繋がっている天をつくほど高い天井、そして見事なモザイク画が描かれたステンドグラス。

とりあえず一通り見回してから、横で呆けている新さんを見て、その傍らで更に同じ顔をして呆けている人に目を向ける。

さっき何かを言いかけていたのはこの人か。純白の衣装に身を包み、額にサークレットをつけている、黒い長髪の男の人。さっきまで慌てていた様子だったくせに、呆気に取られたように私を見ている。

あーあ。人生で何度味わったかしのれない既視感に、毎度同じ感覚を抱く。

つまり、お呼びじゃないと。ハイハイ解ってますよ。余計なお荷物がついてきちゃったみたいで、お邪魔しましたね。解っているの、呆けている弟の右手を、ぱっと離れた。

「新さん」

「え、あ……か、いや、姉さん……」

珍しく、弟の目が泳いでいる。知られた、って顔。ああ、秘密ね。主人公にはありがちだもんね。まあ、でも、私にとっては新さんの秘密を知ろうが知るまいが大した問題ではないけれど。

「その人たち、急いでるって。聞いてあげないの？」

驚いた様子で、みんなが私を見る。なにそれ、と思いますよね、ホント。驚きたいのは、むしろ驚くべきなのは、私でしょう？

でも解ってる。ここは驚くところじゃない。読者はそんなところにページを割かれても嬉しくもなんともない。そんなパターンは恐らくは新さんの時点で既に目を通してのだろうから。だったらモブはモブらしく、あってもなくてもかまわない頁稼ぎ程度にしか使えない出番を大人しく待って居ればいいのです。

こうして、物語の進行を促した私の言葉を合図に、その後の物語は再び新さんを中心にして進行していったのだった。

つまり、どういうことかと、言う。富豪の一人息子であり、先だって副会長に就任し、インハイで主将を務め、眉目秀麗文武両道の冠を戴く、私の誇るべき弟は異世界召還されていたらしい。

驚愕の新事実、というよりももう一つテンプレが追加された、といったほうが正しい。

つまりはこれでもかというほどチートな弟は、別世界でもチートだったらしい。ここまでチート属性がついていると、もはや何かのファクションか何かのように誤解されかねない。

しかし新さんが文字通りどこの世界でもチートという事実は、思った以上に私に驚きを与えず、むしろすんなりと納得させてしまったのだ。新さんほどチートの似合う男は居ない。これが数年かけて身にしみた目下の事実であり、私の納得した理由。

けれど、ここで一つ問題が。新さんは異世界召還されていた。された、ではなくされていた、らしい。しかして、その心は。

事の発端は中学三年生に上がったばかりの頃。先だつてのような眩い光に包まれてこの世界に召還された我が弟は、所謂世界最強の力を以つてして、召還されたお国のために戦乱に喘ぐ民を救つた、らしい。受験勉強の傍らで。

そこまで聞いたところでそういえば私はその頃何をしていたかな？ と記憶を遡ってみる。そうだ、そうそう、そういえばその頃は人生ゲームに嵌っていて、やたらと子沢山で車に乗り切らない子供を抱えた新さんにお腹を抱えて笑っていた、ように思える。つくづく平凡というか、語るに及ばない日常を送っていた私。

の、傍らで新さんは見ず知らずの人々を、国を、混乱から救い上げ、平定していったと。ちなみにその時に弓を習い、うちの学校にはアーチェリー部がなかったために、弓道部に入部したらしい。

へえ、そう、そうなんだ。せめて弓道部があつてよかつたねえ。私はにつこり微笑んで、続きを促した。何故だか新さんは無表情ながらも妙に釈然としなさそうなものを瞳の奥に抱きつつも、話し出す。

それで国を揺るがす悪、つまりこの場合は王様だつたらしいんだけど、その人を倒したはいいものの、その後のアフターケアがまだあつたと。

ちよつと待てと、ここで誰もが聞きたいであろう、いや正確に言うとは私はもう察しがついてはいたのだが、読者諸君に極めて親切であるうとする姿勢、もしくは『ご都合展開過ぎるんじゃボケ』等とつっこまれまいとする作者の死に物狂いの意を汲み、あえてそれをたずねた。

「新さん学校行ってたよね？ 別に失踪してないよね」

まあ異世界召還されている間は大抵その世界間では時間軸の流れが違えど経過する時間に差異はそれほどないものであるらしく、現実世界、というか元いた世界では失踪扱いもしくは誘拐、果ては死亡として処理されるパターンなのだが、新さんに限って言うとなん

はなかった。私は毎朝新さんの顔を朝食時に垣間見ていたし、夜パジャマ姿で歯を磨いている姿も時折目に見ていた。失踪したことなどないし、恐らくは外泊さえも殆どしていなかったはず。

当然の質問に、新さんも当然のように答えた。

「こちらとあちらでは時間の流れが違う。学校から帰ってこちらに赴き、夕食前には帰ってきていた」

へえー、そう。でもその答えじゃきつと読者は満足できないと思うから、結局『やっぱりご都合展開じゃねーか舐めてんのか』と罵倒を浴びせられるのは必至じゃないかと私は思うんだけど、いいのかな、別に。罵倒されたいのかもしれないしね、もしかしたら。

まあとにかく学業の傍らこっちで国を平定しつつ英雄になって受験に合格し首席になりつつこの国の最高峰に上り詰めていたと。へえー、そう、がんばったんだねえ、こっちでもあつちでも。

私の感想に、新さんは素直にこくりと頷いた。ふうん。あつそう。うんうん相槌を打ちつつ、そろそろこの穴だらけの設定補完展開にも飽きてきたので本題へと、と話を切り替えた。

「で、今回はなんの用で呼ばれたの？」

なんか余計なモブB、つまり私も予想外についてきてしまい吃驚していらしたけれど。あのぽかんとした顔ときたら。どっちが呼ばれたんだか解らない顔だったよね。

ぶくく、と忍び笑いを漏らすと、新さんは疲れたようにため息をついた。あら、珍しい。新さんがため息をつくなんて。

「実はまだ大公殿下の即位に納得していない旧王権一派がレジスタンスをけしかけて暴動が止まないらしい。それでまた脅迫状が届いてそれが爆発したものだから、テロだ何だと混乱して、それを収めるべく俺が呼ばれたんだけど……」

へーえ、王室が混乱したからまだ年端もいかない高校一年生になつたばかりの男の子に助力を求め、ねえ。ふうん。すごいね。

一言で済ますと、新さんはますます深いため息をついた。どうやらお疲れのようだ。それはそうだろう。いくらチートでも疲れると

きは疲れるし、どこの世界に学業と異世界召還の両立を図る16歳がいるだろうか。いやないだろう。ここにいろけれど。

ほんの少しだけ同情となんやかんやを覚えた私は、項垂れる新さんの頭にテール越しに精一杯手を伸ばし、わしりわしりと撫でた。新さんは何も言わず、私に撫でられ終えるまで頭を下げたままでいた。

「しかし、そうとなると問題は私か。思わずついてきちゃったもんね。ごめんね新さん」

どうやら隠しておきたかったらしいし。でもしょうがないよ。秘密が漏れるのは主人公補正の一つだから。この場合補正と取れるかどうかはよく解らないけれど。

悪気の欠片もない私に、新さんはなにやら決まり悪そうな顔をすする。首を傾げると、彼は普段機微の少ない表情を僅かに、いや当社比で言うところと心底困ったように崩して、さぞや言いにくそうに歯切れ悪く呟いた。

「ごめん、は俺の方だ。向こうに帰れば、一時間と経っていないだろうけど、こちらでは帰るまであと、十日はかかってしまう」

へえ、そう。それはつまり、こちらではあと十日は経たないと帰れないけど、むこうに戻ったところで一時間と経っていないということか。

読者のために解りやすく纏めなおすと、新さんは本日何度目かのため息と共にこくりと頷いた。

一条姉とメイドさん（後書き）

可愛げのない姉貴でごめんなさい。

一条姉と神官様

とりあえず私は王室のお客さんとして出迎えられたらしく、パターソン通り身に余る豪華な部屋と食事が与えられた。チートの弟の姉というだけでこの扱い。世の中随分ちよろくなってしまったものだ。かといつても、もちろん物語の主人公は新さんに違いは無い。呼び出された張本人はもちろん話の進行上右へ左へと舞い込む厄介事を片付けなくてはならないらしく、何の用も無いのにただの付属品としてくつついてきた私に構っている暇は無い。

そういう訳で私はというと弟がてんやわんやと忙しく奔走している最中に王室見学などという戯けたことをするわけにもいかず、かといってチートの弟の手伝いなどせいぜいお城の窓拭きくらいしか役立たないこの身なので自重し、大人しく引きこもって時間を潰すことにした。

そんな最中に、この人だ。おいおい火急の件で人の弟呼び出しておいてそのおまけのモブに挨拶する余裕はあるのかい兄ちゃん。と私が思ったとか思わないとか。

「で、お国を救った英傑の姉の顔を野次馬よろしく見に来たと……。なんかすいませんね、誰もを魅了するあの少年の姉が、記憶にかすり傷一つ与えられない極めて凡庸たる容姿の持ち主で」

ほぼ初対面の人間相手に生意気な口を叩いてみせる小娘相手に、殊勝にも跪いて頭を垂れる白衣のその人、もとい王室神官長ソロンさんの可愛らしい旋毛を見つめながら言うと、その人は出会った当初とは全く違う穏やかな笑みを浮かべ、ゆるゆると否定した。

「そんな恐れ多い。ただ此度の件は真にこちらの不足の致すところでありまして、姉君様におかれましては誠心誠意謝罪の念を尽くす所存でありますので何卒ご容赦の程賜りたく、こうして僭越ながらも神官長の私が代表して馳せ参じた次第であります」

ああ、はい日本語でおk。新さんみたいなチートならいざ知らず、私みたいなただのモブにこんな口上つらつらと述べられたところで内容の半分も理解できないどころか飲みこめすらしない。

耳慣れないこの丁寧さも慇懃無礼にしか聞こえないけど、私にそれを指摘する権利はないしそんなつもりもない。元よりモブにそんな期待などされていないだろう。ああされていませんとも。

「それで今日はなんの御用でしょうか。まさか本当に『ごめんねお姉ちゃん』なんて言いに来たわけじゃありませんよね」

既に二人分のお茶が用意されている机に無作法ながらも両肘を突いて組んだ指に顎を乗せる。どうぞ、と目で示唆すると、ソロンさんは目礼を返して私の向かい側にある椅子に腰掛けた。

この部屋には私達以外いない。それはこの人があのプリティメイドさんにお茶の用意とついでに人払いをさせたから。

人に謝るのに人払いは要らないでしょ、さすがに。まあこの人が他人に頭を垂れる姿を見られたくないという、山より高いプライドの持ち主ならばいざ知らず。

「さすが閣下の姉君様。ご聡明でいらっしやる」

「いいええ頭の回転悪くて悪くて。為政者気取りの弟と違って私は一から説明受けないと何にも飲み込めないんですよ」

につこり微笑むと、ソロンさんの片眉がピクリと持ち上がる。おや、ぼろつと失言。

なんとなしにスルーして紅茶を一口飲むと、その水面に私をじつと真摯な眼差しで見つめるソロンさんの顔が映っていた。ああ、まあ、大体察しはついてるけど。モブたる私が一緒につれてこられた所以も、この辺の展開に由来しそうだよね。

紅茶を置いてもじつと黙って待っていると、ソロンさんが漸く切り出した。

「実は閣下のことなのですが……」
そらきた。

「私の方からこの世界に留まるように、あるいはきちんと籍を置く

ように説得して欲しい。もしくはそれとなく訴えて欲しい、つてと
ころですかね」

遮って皆まで言うと、ソロンさんは口元をきゅっと結び怪訝な目を向けてきた。おやおや人の話を遮るのは少々無礼が過ぎたかしら。それともどうして皆まで言わずそんなことが解るんだ、つて顔かな。解るでしょ、この展開なら。王道ですからね。主人公が元の世界に戻るのかこちらの世界に留まるかの選択、つてやつ。大抵は、そうだな。留まる理由が大きいほうに、普通は傾く。

王室御用達の高級クツキーを一つ摘んで、小さく齧った。ぱらりと落ちる零れカス。ああ、私もこんなもんです。

「それ、私以外には言うべき候補はいないんですかね」

机の上に零れ落ちたカスをちろりと指先ではじく。ソロンさんは少しだけ興味を惹かれたような眼差しで、私を見つめた。

「……と、仰いますと？」

「いえね。例えば新さんが懇意にしているお姫様だとか、それに準じる存在。身分に関わらず、新さんと対等な立場に立っている女の子、とかね。そういうの、こっちはいないのかな、と思いきまして」

異世界トリップの王道は基本恋愛絡みでしょ。そうでなくたって多少は盛り込まれているものなんだから、そういう出会いは少なからずあったんじゃないかな。

どうなの？ と見ると、予想外にソロンさんはほんの少し落胆した表情で首を横に振った。

「おられません。いえ、閣下が、ことそういつた流れを徹底して忌避されておられるような、そんな印象を私は感じました」

と、言うことは、そういう展開は無きにしも非ずだったわけだが、新さんがフラグをとことん折って周っていたと。

「……ふーん。そう。つまんないの」

冷めた声で言うと、また少しソロンさんは眉を顰める。これも、異世界常道の一つかな。主人公心酔補正。大抵男からも女からも好

かれる。まあ、それはあつちでもこつちでも変わらない、つてだけの話か。

紅茶に入れたスプーンを手慰みにかき回しつつ、私はなんだか醒めた思いでそれを見つめた。とことん新さん中心だなあ、と感じつつぐるぐると。

「あのねえソロンさん」

「はい」

「確かに新さんは私の言うことなら大抵の事は聞いてくれます。でも自分が決めたことは何でも曲げない。そして曲げられないし曲げさせない。少しでも新さんと時を共にしたのなら、解りますよね」
「ちらりと見ると、ソロンさんは苦笑しながらも頷いた。ああこれ、この顔。よく見るのよ。新さんのこつという性格に戸惑いながらも恭順しちゃう人の目。とことん主人公の流れに浸りきってる人。別に私には関係ないから、いいんだけどね。」

「あーあ、はいはいご馳走様です。バカップルを目撃した時のような、内心醒めた思いを抱えながらも、努めて真剣な表情をソロンさんに向ける。」

「だったら、私が言っても無駄なことはもう解りますね。私もね、そんなこと頼まれても言うつもりは毛頭ありませんし。だって言う義理も無ければ、理由もないわけですから」

「それは……そうですが、」

どこか納得がいかなそうながらも、口ごもるソロンさん。恐らくは私が今言った意味を取り違えている。少しだけ決まりが悪そうに私を見ているのがその証拠。そう思ってるんなら最初から相談してくるな、等とは当然言うわけもなく、それをあえて否定せず見逃して、続ける。

「なら貴方がすべき事は私への根回しよりも、新さんへの真摯な懇願のみですよ。彼に貴方方の思いが届くとしたらそれは、彼と同等か或いはそれ以上の信念と意思を以ってして、彼本人に直接打診することです」

言い切ると、ソロンさんは妙に驚いた表情で私を見つめた。彼が捉えた私の矛盾が何であるかを、私は知っている。その矛盾も誤解というか、なんというか。

「貴方は、ご自身が何を仰っておられるか、お解りなのですか？」戸惑いと疑念の入り交ざった声に、思わず口の端が持ち上がる。誤魔化すためにこくり、と一口紅茶を飲んだ。

ああ、美味しい。こんなに美味しい紅茶が飲めるなんて、内乱がある割りに随分とリッチじゃないの。一体どうやったの、新さん。どうでもいいけど。

醒めた笑みを浮かべる自分を紅茶の水面に見止めて、ついつい失笑。

「嫌だなあ、ソロンさんたら。私もそこまで馬鹿じゃありません。ええ、解っていますよ。もちろん。何から何まできちんとな。こう見えても私、自分の発言にはきちんと責任を持ちますよ」

につこり微笑みかけると、いよいよソロンさんの表情に笑顔がさっぱり失われてしまった。あーららこらら。私しーらない。

今しがたの自分の発言を省みず、私は心のうちでこっそりほくそ笑みながらも、また誤魔化すために紅茶のお代わりを外に控えるプリティメイドさんに頼むのだった。

夜はさすがに一人の時間が持てるらしい。すっかりこの世界に慣れ親しんだのか、紺色の長衣に身を包みながら歩く新さんは、全く違和感の無い風情で夜の庭園を歩いている。

お決まりの噴水の淵に腰掛け、隣をこれ見よがしにぼんぼん叩くものだから、仕方なく私もそこに腰をかける。これはお尻濡れるんじゃない？ 借り物の衣装だからできるだけ汚したくないんだけど。

庶民的なことを懸念しながら、無駄な足掻きとは思いつつもできるだけ浅く座った。

「はあー、しっかし、いい夜だねえ新さん」
「そうだな」

お月様が随分大きい。クレーターが肉眼でしっかり見えるくらい。天体は日本で見るのとそう変わらないのね。はいはいおざなり設定乙。

この際だから下世話なことは忘れてじっくり天然プラネタリウムを観察しよう、と空を見上げる。のけぞりそうな背中を、新さんの腕がさりげなく支えてくれた。

「おお、すまないねえ」

言いながらも、視線は夜空。

なんて綺麗なんだろう。あんなに綺麗なものなら、満天の星空の中のたった一粒でも、誇っていられるのに。

途方も無い思いでそれをじっと見つめる。隣で弟が、私の横顔をじっと見つめているのにも、気づいていたけれど。

「姉さん」

「んー？」

僅かに寂しげな声に、けれど目を向けずに私は答える。その代わりなのか、背中を支える新さんの腕が、腰をぐっと力強く包んだ。必然、込められた力に引かれて新さんの肩に凭れかかってしまう。それでも私は空から目を離すことをやめない。やめたくない。

「俺が黙っていたこと、怒った？」

恐る恐るというよりも、まるで期待をかけるような声だった。変な新さん。私は思わず笑ってしまう。

「私が今まで新さんに対して怒ったことなんか、あつたかな？」

「……無いな」

また、寂しげに答える。腰にかかる指に僅かに、力が籠もる。私も、新さんに見えないほうの手のひらを、硬く閉じていた。

「新さん」

「なに」

「新さんはすごいよ。本当にすごい」

言つと、新さんが息を呑んだのが伝わってきた。

私は新さんが何かに悩んでいるだろうということとは、当の昔に気づいていた。それこそ、ここに来る前から。でもそれに気づきながらも、あえて言及しなかった。私がそうしない理由もそれを意識していることも、新さんはとっくの昔に気づいていることだろう。

私達はいつだって、お互いの心を読み取りながらも、口に出さな
いでいた。多分それは、これからも。ある意味で、寡黙なのは新さ
んの専売特許ではない、ということ。

「姉さん」

「うん」

「俺、もしかしたら」

その続きは、言わなかった。言わせなかった、と言うほうが正しいだろうか。私が新さんの肩に頭を乗せたから。

何故それを止めようという気になつたのか、解らない。少なくとも、ソロンさんと話していたときには無かつた感情だ。今更、こんな感情抱くはずがないと思つていた。けれど気のせいかもしれない。しかし気のせいではないかもしれない。

果たして弟の悩みが、今しがた言おうとしていたことが、この異世界に残るか否かの話なのだろうか。そうであるうがそうではなからうが、私に知る術はない。ただそれ自体に言えば、恐らく彼はこの十日間で答えを出すつもりなのだろう。

私はそれを知りながらも、それを言いたくても言えないでいる弟の傍らにいながらも、ただ黙つて満天の星空を見上げた。砂のよう
なその一粒が、どこかにいまいかと必死になりながら。

一条姉と神官様（後書き）

新さんはソロンさんの上司の地位におられます。一応。つつこま
れると困るけど。

一条姉と白い薔薇

今回の件によって、私の仕事は終わったはずだ。

だから新さんが答えを出したら、私も答えようと思う。でも新さんが答えを出すことができなかったら、私も答えられない。私は新さんにどうにかこの十日間に答えを出して欲しいと願う。そうでなければ私が今まで積み上げてきた意思が、無駄になってしまうのだから。

新さんとこの世界を訪れて、もう五日は経った。その間新さんは一日の休みも無く政務とやらに追われている。

新さんが私の知らない世界で何をしているのか、私はよく知らないし大した興味も無い。ただ、宮廷での新さんの評判は、それはもうすこぶる良いらしい。

もともと国を救った英雄なのだから当たり前かもしれないけど、それに乗算してあの人柄が人々の心に新さんフェロモンとして働きかけるらしい。解りやすいことこの上ない。どちらの世界でも、新さんは必要とされる存在なのだろう。

それが顕著に現れるのが、人々の私に対する態度だ。新さんの姉というだけで、誰もが私を羨み、惜しげなく優しさを振りまき、そして僅かな希望や期待を持って接してくる。私はそれを笑顔でいなし、受け止め、スルーする。毎度のことだ。もう慣れた。新さんのおかげで、私は随分と笑顔が上手になった。

「あねぎみさま、これどおぞっ」

「ありがとっ」

下働きらしい、小さな女の子が差し出してきた白い薔薇を受け取りながら、微笑み返す。

もう新さん以外の人に『お姉さん』呼ばわりされるのにも慣れた。

ここまでいくと、もしかしたら私は世界一の弟妹もちなのかもしれない。等とこっそり嘯いてみたりする余裕まで出てくる。

そしてその薔薇を手の内できると遊びながら、私は新さんのお部屋へと向かう。これを新さんに届けるためだ。

何故かってそれは、この贈り物は『閣下のお姉さんへ』という名目の、新さんへの気持ちだからに他ならない。私はそれをバカ正直に喜んで自分の部屋の花瓶に生けたりしない。それでこそこんなものを私が持っていたら、滑稽な道化師の証以外のなにものでもない。だからこそ本来ならば、こんなものに一秒だって触れていたくない。なので、これは、あるべきところへ返してあげる。

「すいませーん。またまたお邪魔しまーす」

どうせ新さんはいないだろう。執務室かもしくは城の外か、或いは大公殿下とやらとお話しているかのいずれかなのだから。

もちろん解ってやっている。さすがにやること盛り沢山の弟を邪魔するほど腐ってはいないつもりだ。だから新さんのいない昼間を狙ってこうして訪れている。

そら、案の定。ひよっこり覗くと、誰もいなかった。図書館かと思ふ程の本棚に囲まれた、新さんらしい重厚な雰囲気のお部屋。そこに誰もいないと知りつつも抜き足差し足忍び足、書斎机の一輪挿し目指して進む。

きつと新さんは知らないだろう。そうさ。この花瓶の花を取り替えているのが新さん付きの侍女ではなく、よもや私であろうなどとは思いません。

「姉さんだったのか」

おや。思った矢先に即バレ。不用意なモノローグは慎むべきだね、やはり。自分で立ち上げたフラグを見事回収してしまい、私のはがっくりと肩を下げ観念して後ろを振り返った。

「新さん」

「その花、姉さんだったんだな」

見ると、ソロンさん他崇拜者もとい側近の皆様を伴い、入り口付

近に新さんが立っていた。

あーららこらら。ソロンさんの怪訝な眼差しが突き刺さる。そういえばあれ以来お会いしていなかったっけ。あら気まずい。えへ、とわざとらしく舌を出すと、新さんの眼差しが少し呆れたように細くなる。どうも不法侵入な姉ですいまそん。

そのまま新さんだけ部屋に入ると、ソロンさんに何かを言付けして扉を閉めてしまった。およよ。

「いいの？」

「忘れ物を取りに来たついでに、少し休憩を貰った。これからちょっと行くところがあるから」

「へえー、そう。気をつけて行ってらっしゃい」

言つと、まだ行かないつてば、と返してくる。そのまま書斎机に周り、慣れたようにその付属の椅子に腰掛けた。

私はそれを眺めて、思った。似合っている。いかな光景でも、その空間にさえ拒まれない弟。受け入れられ、馴染み、それどころか輝きを増す、魅力ある私の弟。

じつとそれを見つめているとその視線に気づいた弟は、ちょいちょい、と指でこまねいてくる。それがまるで部下を呼ぶときのような仕草であまりに馴染んでいたの、私は苦笑いをかみ締めつつも仰せの通りにと近寄った。

「その花、貸して」

一輪挿しを持ちつつ、手を差し出してくる。渡すと、新さんはそれを受け取り一輪挿しに差込み、元の定位置に置いた。頬杖をついて暫くそれをじつと見つめ、何か想うようにぼそつと呟いた。

「これ、庭園の花だな」

「……そうなの？」

聞き返すと、ちょっと驚いたようにこちらを見つめ返してきた。私が庭園の花を毎度毎度勝手にちよん切ってここに飾っていたなど思っていたのか。失礼な弟だ。

新さんはなんだか納得がいかなそうにその花に手を伸ばして、け

れどそつと白い花卉に触れる。壊れ物に触れるかのように、ひどく緩慢に、じれつたくなるほどに優しく。触れながら、独り言を言うかのように呟く。

「いつも、少し傷んでいるんだ」

「……そう、なの？　そう。まじで。ごめん、ね？」

持ち歩く道中で傷つけたのか、或いはあの子がくれた時点でもう傷んでいたのか。

まあ、それはそうか。あんな小さな女の子が毎度毎度花を一輪とはいえ差し出すなんて、まともに来るっこないのは解っていた。

けれど、そうか。

「傷んでるの、くれてたんだ……」

思わずぼろつと漏れた本音が聞こえたのか、新さんがはつと私を見る。

あーららつと。コイツにだけは聞かせるつもり無かったのにな。

最近失言が多くて参る。脳トレしようかね。

「姉さ」

「じゃあ、休憩のお邪魔するのも悪いし、退散するね。お気をつけて行ってらっしゃいまし、閣下」

「……ああ」

何か言いたそうな新さんをさらつとスルーして、素早く退室した。外では信者の皆様もとい側近の方々が待機して一斉にこつちを向いたものだから少しだけぎょつとしたけど、私は挨拶もそこそこに脱兎の如くその場を去った。

今回ばかりはソロンさんに何を聞かれても上手い答え方が出来ないだろう。それが解っていたからこそその、脱兎だった。

部屋に戻るなり、すぐさま扉を閉めてその場に崩れ落ちるようにへたり込んでしまった。震えそうな手を必死で押しとどめて、荒くなつた息を何とか宥める。

「……やばいかも」

口から零れた言葉は、真実を物語っていた。

もう駄目だ。もうそろそろ、潮時なのだろう。限界がすぐそこまで来ている。幸い、私の役目はもう済んでいる。あとは新さんが答えを導き出すだけ。そうすれば私もやつと　解放される。やつとやつとだ。

「ふふ……」

泣きたいような笑い出したいような心地を抱えて、膝を抱えたまま頭を預けた。

そういえばあの夜も、こうして新さんに頭を預けていた。これからはもう、そういうことも無くなる。あの温もりに触れることもなくなるだろう。

私はまた一人「ふふ」と笑った。その時、肩が揺れた拍子に、何かが零れ落ちる。それは一滴の星屑のようにあっけなく弧を描き、闇の中に染み込んで消えていった。

新さんはいつから私のことを『姉さん』と呼び始めたのか。忘れていた振りをしていたそれを、今回のことで思い出してしまった。

それは時期で言うと六月。梅雨明けの初夏。新さんが、進路調査書を学校から配られたとき。

そろそろ蝉が鳴きだすかという頃、その未記入の欄を見つめながら何の気もなしに私は新さんに問いかけた。志望校はどうするのと。

新さんはいつものようにそっけなく呟いた。私の予想の斜め上にある答えを。

『楓と同じ』

その日はじっとりと肌を濡らすほど蒸し暑かったのを覚えている。

けれどその瞬間だけは、全身の熱が限界まで寄せたさざ波のように一斉に引いていくのが解った。

私はそのとき何と答えたのだろうか。それだけは思い出せない。ただその時から新さんはお伺いを立てるように私を『姉さん』と呼ぶようになり、そして私はとんでもないことに気づいてしまった。私の世界がとうとう限界を迎え、崩壊し始めているという恐るべき事実だ。

「　　がか？　全く似ていないぞ」

「けど確かにこの部屋だつて報告が……」

どうやら、あのまま眠りこけてしまっていたらしい。なんとも呑気なものだ。ちつともシリアスが続かない。やっぱりモブはモブらしく大人しくしておけという暗示なのか。

周りの喧しさに顔を顰めながらも上げるとそこには、もう日も落ちた薄暗い部屋の中に誰かがぞろぞろと私を囲んでいるのが見えた。悲鳴を漏らす暇もなく、近くにいた男に口を塞がれる。その拍子に扉に頭をぶつけたせい、それとも男が口を塞ぐと同時に口元に当たってきた強烈な匂いのする湿った布のせいなのか、意識が再び朦朧としてきた。

ぐらり、と揺らぐ。暗い世界。

「どうする」

「予定通りだ。急げ」

知らない男達の緊迫した話し合いを朦朧としながらも耳にする。そのまま重力に従って傾きかけた私の身体を、粗野な力で誰かが持ち上げ、まるで砂袋のように肩に担がれた。抵抗する力も悲鳴を上げる気力さえも湧かず、私はされるがままに知らない男の肩にぶら下がる。

霞む視界。薄暗い闇。先ほどまで寄りかかっていたあの扉がどん

どん遠ざかり、男は私を担いだまま窓に手をかける。

ああ、なんだ、そうか。私は漸く気がついた。

私の役割はまだ終わっていない。むしろこれから。これからは、弟の物語の佳境であり、そして私の世界の終焉なのだ。

そこから意識はぶつくり途切れて、また繰り返し返しの夢の中。幾度となく夢に見たあの始まりからを、私は同じ夢の中で延々と繰り返し返す羽目になる。

何故だかその最中で、あの夜のことまでもが再生された。夢の中の新さんはあの時と同じように、とても寂しそうな眼差しで私を見つめていた。純粹な思いに満たされたその瞳は、どんな星よりもきらりと美しく瞬いていた。

一条姉と人攫いの皆さん

拝啓、新さん。事件です。

「おはよう姉君様」

わお。むさい声。今宵もまた一人、ごつつな弟ゲッツだぜ。パーテイでの荷物持ちはこいつに決定。

縛られながらもこんな事を思う私も、我が弟に及ばずながら中々の肝の持ち主だったらしい。

むさくてごつそうな知らない男達に囲まれて、みっちり縛り上げられているこの状態。セオリー通りもいいところ過ぎて白けてくるなるほど、私は敵役に攫われた肉親つてところかな。この分だとこの先に待ち構えているのは敵の言うこと素直に聞いちゃいましたバッドエンドルート、敵を倒しつつ姉を救出俺つてマジでテラチートルート、もしくは肉親喪失ヤンデレー直線トラウマルート。姉としては、トラウマルートだけは回避したいところであります。命に関わってきますので。

「こんにちは皆さん。ご機嫌如何ですか」

狭い部屋の中で、私の声はそう大きくなくとも全員に届いたらしい。なにやらどこかの倉庫らしいその部屋は埃臭く、地面は湿っている。

そんな中で目を覚ました途端に声をかけられたから返事をしただけなのに、なぜだか驚いたように全員が息を呑んだ。けれどそれでもじつと答えを待っていると、そのうちの一人が声をかけてきた。

「あんだ、本当に英傑アタラの姉貴か？」

英傑アタラ。一瞬何のことかわからなかったけれど、瞬時にその意味を悟りぐつと喉を詰まらせた。

アタラつて、新さん。異世界で偽名使ってたんかい。いや、まあ、新さんもといアタラさんならやりかねない。大方ゲームの主人公の名前を自分の名前にするのは些か抵抗があるから文字を組み替えて

登録してみたとかそんなノリだったのだろう。つくづく新さんらしい。

笑いかみ締めて俯きつつ、私は何とか頷き返した。

「はい、その通りです。私が、え……えいけつつ、アタ……ぶぶつ、アタラさん、のお姉さん、ですよ」

途中我慢できずに噴出してしまったが、その辺は気にもされなかったのか私の告白自体に「おお……」という感嘆の声が上がる。

ふうん。この人たち、半信半疑で私を攫ってきたわけか。なんともお粗末な計画ですこと。怪しいくらい。

出てきた余裕に釣られて悪戯心がむくむくと湧き上がり、ついっいつものエセ笑顔を浮かべて見せてしまおう。

「と、言うのが嘘だったりしたら、皆さんどうします？」

にやり、と微笑むと少しだけ皆さんの雰囲気は気色ばんでくる。

あーららこらら。私しーらない。とは言えない状況どーすんの。

「おい、冗談は無しだぜお嬢さん。俺たちや遊びじゃねえんだよ。言葉遊びがしたいんだったら今すぐあの世に送ってやるのか？」

一番最初に私に話しかけてきた男が、私の頬にひたひた、と何か冷たいものを当てる。何故よく解らないか、という目隠しをされているから。どうやら一応顔を覚えられないようにという配慮のためらしい。

ふうん、配慮ねえ。またまたいいこと思いつきましたよ、お姉さん。

声の方向に向くと、頬に当たっていた刃がひたりと止まった。うむ、よろしい。随分余裕が出てきたよ。

「遊びではないと。なるほど。ですがその割には皆さん随分と綱渡りの計画を組んでおられるのですねえ。いやはや、見上げた豪胆振りであらうしやる」

「なんだと小娘が！」

私の弟のうちの一人が気色ばんだように声を上げた。ああ失敬。ご機嫌を損ねてしまいましたかね、弟ではなく荷物持ち要員、いや

拉致監禁のメンバーさん。

「お嬢さん。なんでそう思うのかね」

私の近くにいた男が、静かな声でそう問い返してくる。落ち着いた声とは裏腹に、頬に当てられていた刃はいつのまにか首の恐らくは頸動脈と思わしき場所に当てられている。答えを間違えたら首チヨンパだから覚悟して発言してね、ということですね、わかります。うわーおぞくぞくする。新さん、今姉さんは新ジャンルのスリルを目下経験中だよ。

こほん、と勿体つけるように咳払いを一つ、大きく息を吸い込んだ。さて、ご愛嬌。皆様、とくとご清聴ください。

「まず。第一に貴方は、私がおアタラとかいう人物の姉であるかどうかという確証を得ておらず、本人と思わしき私に確認してること。第二に姉かどうかの確証も無く確認する術もこのようにして不確かであったにも関わらずその計画とやらを遂行したこと。第三にそれほど不確定要素の多い計画を遂行するためだけにわざわざ宮廷に侵入するという危険を冒したこと。それらを統合して考えますと貴方のその計画とやら自体が時間も人員も注がれていない急場の付け焼刃のような代物でしかないということを示しています。その他諸々細かいことを上げればきりがありませんが、まあ私の所感はこのところですかねえ」

いかがでしょう？ と小首を傾げると、何故だか辺りはしーんとしてしまっていた。首筋には刃が当たりっぱなしだったけど、妙に力が入っていない。

無遠慮にドツボ突きすぎたんだろうか。今更ながらに脂汗だらだら。じつと返答を待っていると、すぐ傍で短いため息が聞こえたと同時に、首もとの刃がすつと引いた。おや、どうやら首の皮一枚で繋がったのかな。

「全く見上げた根性だなお嬢さんよ。肝が据わりすぎている。これだけでもあんたがおアタラの姉だといいういい証拠になるよ」

あら。見くびってもらっちゃ困る。この程度のことでは彼の姉に認

定されるなら世の中に新さんの姉貴が何人存在することになるのやら。

考えるだに恐ろしい。私の弟妹達と数を比べたらどっこいでは済まなくなるかもしれない。嫌だなあ、こんな記録まで抜かれちゃうの。こんな状況でげんなりしながらも、気を取り直して顔を上げる。「皆さん、レジスタンスとやらの方々なのですか？」

「それを聞いてどうするんだ、ええ？ 聡明なお嬢さんよ。今度はどんなご助言を貰えるのかね。お礼は鼻っ柱一発叩き折るだけで十分かい？」

今までの誰でもない声がかかるように苛々と答えてくれた。

まあ、ですよ。こんな生意気な口叩く小娘とまともな会話できるわけないわな。客観的に納得しつつも、努めて得意な笑顔を振りまいて見せる。

さあ、一条楓の精錬されたサービスマイルをとくとご賞味あれ。「いえ、一つ提案をね、いかがかなと思ひまして。出すぎた口を利きましたね。忘れてください。沈黙は金なり。生意気な小娘は鼻っ柱が折れる前に口を閉じさせていただきます。皆様、どうぞお気を悪くなさらないくださいね」

「……おい、おいおいおい待て待て待て」

よしきた。やっぱり食いついてくれた。恐らくは一番最初に話しかけてきた刃の君が、慌てたように口を挟む。後ろでなにやら非難の声が上がったみたいだけど、効果は上場。波紋は一石一つで広がるもの。

「お嬢さん、なんかきな臭い言い方するじゃねえか。まだおちよくろうつてんならさすがに容赦しないよ？」

「ご心配なく。最初のあれは私なりのサービスですので。今は純粹な提案を呈示させて頂いております」

ざわざわと、動揺や戸惑いの波紋が次から次へと共鳴し始める。

こつでなくつちゃ。ああ楽しくなってきたあ。

「……なんで急にそんなにしおらしくなったのかね」

「あら心外。急にはありませんよ。貴方方が私に目隠しをしてくださらなければ、さすがの私も貝のように口を閉じておりました」
ざわめきが一瞬止む。うぶん、素直な反応。愛い奴らめ。さすが私の弟達。どっかの野郎とは大違い。

どっかの野郎を皮肉をこめて思い描きつつ、表面上は笑顔を維持。笑顔は万国共通心のフリーパス券。

「目隠しをする必要があるということは私に個人を特定させないため。その必要があるのは、私を生かして返す意志があるときのみです。用心深ければ例え始末する予定だったとしても目隠しをするでしょうが、貴方方がそれほどまで警戒心と猜疑心の強いお方々ならば、少なくとも私があの場合で拉致されることは無かったでしょうからねえ」

そういう迂闊さが私にこの提案をさせたということ、多分理解されてはいないだろう。私はこと、こういう部類の人間達が好きだ。

迂闊で、無計画で、無頓着で、直情型の人間達。

にこりと微笑んで辺りを見回すと、段々と彼らの言葉数が少なくなっていく。こういう素直さも、私が気に入る理由の一つ。また一つ、観念したようなため息が傍で零れた。

「で？ 提案って、なんだね。一応聞いてやろう」

またまた聞く気満々の癖して。皆がしんと押し黙ったのがいい証拠。

こんなことでよく宮廷に忍び込めたものだ。余程の力技で押し切ったのだろうか。そんな気がする。

そんな姿を想像して微笑ましく思いつつも、また勿体ぶって一つコホンと咳払い。早く早く、という急かす声が聞こえるような雰囲気。気をびしびしその身で堪能しつつ、ゆっくり息を吸い込んだ。どうでもいいけど埃くさい、ココ。

「まず。先ほどは失礼ながらも綱渡りな計画、と称しましたが私、貴方方が文字通り綱渡りの覚悟でこの計画に及んだということは少なからず理解できています」

返事は無い。というより、言葉も無い、だろうか。追い立てられるような切迫感は一先ほどこらひしひしと感じていた。だから。

「私は貴方方がどんな方達であろうと、どんな理由でどんな目的で私を拉致したかなど、はっきり言って興味がございません。持てません。聞きたくありませんし賛同するつもりも同調するつもりもございません。あしからず」

ケツ、とどこかでやさぐれた声が聞こえる。どうしてこう予想通りの反応を返してくれるのか。萌えてしまっから止してくれ。

「さりとて、貴方方のその決死の覚悟に敬意を表して、あえて申し上げます。信じるも信じないも自由ですが、お聞きください。私は英傑アタラの姉です。名は楓。貴方方がかの英傑に送る脅迫状に記すべき名です」

感嘆の声が上がる。けれど一転して、疑念たつぷりの声も上がる。「どうして聞いてもいない名まで答える。俺達をはめる気が」

「いいええとんでもない。よしんば嵌める気だったとしても、対象は貴方方ではありませんのでご心配なさらず！」

「はあ？ と口々に声上がる。言っている意味が解らないらしい。それはそうか。どこの世界に人質が犯罪教唆するものか。いえいえ、ここにいますとも。にこりと笑ってその答えを教えてあげた。」

「私が嵌めたい相手はただ一人。英傑アタラその人です」
今迄で一番動揺が広がる。そんなにすごいこと言っただかしら。

そろそろこの反応もワンパターン化してきたなあ、と半ば飽きかけてきた頃、刃の君が動揺収まりきらず尋ねてきた。

「お前本当に……アタラの姉か？」

まあ失敬な。私以外に誰があの子の姉が務まりますか。務まるというなら三年あいつに引っ付いて生活してから出直してらっしゃい。とりあえず私は長年築いてきた自慢のスマイルマスクで止めを刺した。

「どうやらご存知でないようで。私はね、先ほどこら何一つとして嘘はついておりませんよ。こう見えても私、自分の発言にはきちん

と責任を持つタイプなんです」

目隠し越しの笑顔の向こう側では、何故だか皆さんが揃って怪訝な目で私を見つめているような、そんな気がしたのだった。

一条姉と人攫いの皆さん(後書き)

姉…(ニンマリ)(>U>)()

おっさん達…(なにこの子)わい。()

一条姉と作戦会議

新さんと出会ったあの時履いていたローファー。私はあの靴を、未だに捨てていない。いや、捨てられなかった。あれはあの時の私を証明する、唯一の宝物だったから。新さんに出会う前の私も確かに存在していたんだという、確かな証明だったからだ。

「まず、一つ。まさかこちらがアジトではないだろうとは思われますが、早々に引き払ったほうがよろしいかと」

縄は解かれて、けれど目隠しはしたまま彼らと作戦会議に至る。外そうと思えば外してくれるんだろうけど、あえてこれをとらずにいてくれた彼らの好意に甘んじようと思う。

些か甘すぎるくらいはあるが、そこがまた好ましい。当初よりも随分と安心して言葉を交わせるようになったものだ。正直言って変なもの嗅がされて昏倒させられた時は死ぬかと思った。嗅覚的にも危機意識的にも。

今も私を取り囲んではいるが、先ほどまでの切るような切迫感はない。むさい空気の圧迫感はぎゅうぎゅう感じるけど。

「何故だ。詳しいことは言えんがここは信頼あるお方が用意された秘所だぞ」

「信頼あるお方、ですか。ではそのお方が既にアタラの手の内にあると言ったら、どうします」

「……何故何も知らないお前にそんなことが言える」

「その言葉そっくりそのままお返しします。仮にも私のあの弟が今

この場所を特定できていないだろうと誰が証明できます？ もしくはもう既に向かっている、どうして疑わないのですか？」

動揺の声が広がる。

どうでもいいけどこの人たちは一体どこまで情報を掴んでいるんだか。私が入タラの姉という事実を公表されていないにもかかわらず、僅か五日で掴んだことはなかなかなのだがそれ以外がなっちゃいない。子供の私でも指摘できるほどの穴が多すぎる。

妙な引掛かりを覚えつつも、どうするんだと戸惑う彼らに後押しの一石を投じる。

「移動してください。ただし地図に無い場所はいけません。逆に限定されやすくなる。……そうですね、長い間使用されていない、講堂や集会所……いや、むしろ賑やか且つ迂闊に入れない場所。ここ最近で起きた暴動の場所は？」

「いや、おい、そんな分かりやすいところにいたら軍に一掃されてお終いだぞ。それにあそこはまだ軍と睨み合ったまんまだ。下手な真似はできない」

「だからこそですよ。貴方方がレジスタンスであろうがなかろうが、連中は貴方方を見てもその一員としか思わないでしょう。無論、荷物のような私を持っていたとしても、まさかそれが拉致してきた人質だとは誰も思わない」

そんな分かりやすいところにいたらそれこそ計画破綻ですからねえ。木を隠すなら森の中つてもんですよ。

言つと皆、口を噤んでしまったらしい。一瞬の逡巡の後、よし行こう、と声が上がった。

「では私のことは麻の袋か何かに入れて運んでください。その間には人質扱いではなく文字通り荷物扱いでよろしくお願いします。万が一にも中身が漏れないように、きっちり口を閉じてくださいね」

「……お前さあ」

呆れたような声上がる。刀の君らしき人の手が私を支え、立ち上がらせてくれながら言った。

「よっぽど弟が嫌いなんだな」

ふふ。何をおっしゃるやら。新さんは私の弟なのだから、これくらいしてもまだまだ生温いくらいなのですよ。

彼らは本当に、荷物のように運んでくれとの私の要望に忠実に応えてくれた。つまり、まあ、もっと簡単に言えば折り曲げていたひじとか膝とか、頭とか肩とかお尻とかその辺のでっぱった辺りをしたたかに打ちつけまくったために明日くらいには斑模様の姉が誕生するのではないかと、そういう生産報告。

そんなわけで支援物資よろしく移動させられ次に着いた場所は、どうやら最初に連れてこられた場所とは違い、ある程度広いところのようだった。何故それが解るかというともう目隠しをとってしまっていたから。

袋を開けたら私が目隠しを勝手に取っていたから皆さん一様にして戸惑っていたけれど、実は運ばれている途中に考えていた私なりの計画のためにはこれを外しておいてもよいだろうと結論が出たから外したまで。それを言うとき私のごつい弟達は悪戯を思いついた子供のような顔をして、「聞かせるよ」と私を脅し、もとい強請ったのだった。

どうでもいいけれどもいい歳した大人が女子高生を囲んで素直にふんふんと話を聞く様はけしからんな、と思った。実にけしからんなごつい筋肉達に萌え死にしかけるとは。

「さ、て。貴方方は、私を拉致してどうなさるおつもりだったのですか？」

聞くと、なにやら目を泳がせて皆口ごもってしまった。私の左隣に座った刃の君、もとい自己紹介によるとアブラムさんをじろりと睨むと、気まずそうにサッと目をそらした。この人たちって絶対

嘘つけないタイプだ。可愛いなあ。

「私には聞かせられないと？ 先ほどは興味が無いと申し上げましたが最低限の計画の主旨だけでも教えてくださらないとどうにもできません」

「いや、だつて教えちまつたらお前益々アレだし、それに……なあ？」

計画内容を話したら私の後々での立場が、と。甘い、甘すぎる。さつきから思っていたけどこの人たち甘すぎる。砂糖菓子より甘い。しかも他にも何か理由があるのか。彼らが口ごもる理由というならその私に関する理由、と或いは新さんに関する理由、かな。

「……ああ、そうですね。目的は王室相手というよりも新さ、アタラなのでですね」

「……やっぱり解るか」

「わからないでか」

まあ、ぶつちやけると、というかぶつちやけるも何も私は王室には全く関係の無い人間。この国に対して帰国を惜しまれるほどの立派な行いをしたわけでもなく、かと言って傷一つ無い白薔薇を贈られるほど人望のある存在でもない。私は新さんの姉。そんな薄っぺらい肩書きだけだ。

自嘲が少なからず湧き上がってくる。相反して、にやりと口元だけが勝手に笑みを作った。

「ならばよろしい。最初から私達の目的は一つではありませんか。

私の詳しい目的はまあおいおい語るとして、そちらさんはアタラと直接交渉とかもしくはそのお膳立て辺りでしょうかね」

「……もう何も言わねえよ。続けてくれ」

どうやらお墨付きを貰ったらしいので、ご厚意に甘えて続けることにする。

「では、生憎と私は軍事作戦や隠密行動などの知識については全く皆無ですので、これから話すことはアタラについての情報提供、とだけ思っていただければ幸いです。計画遂行にあたるその辺りの段

取りは貴方達にお任せします。よろしいですか？」

各々、無論だ、とばかりに頷く。まあ、私を拉致してきた辺りでのその辺りの行動力は優秀なのだろうから問題ないだろう。問題は、そうだ。我がチート弟、英傑アタラ、或いは私より一歳だけ年下の少年一条新その人だ。ここからが、大事。

コホンと一つ恒例の咳払い。おっ、とばかりに皆さん聞く体制に入ったのを快く思いつつ、息を吸い込んだ。

「まず、貴方方の逃走経路はまさか、確保したりしていませんかよね？」

ちろ、と睨むと皆渋い顔をした。してるのかな。してるのかもな。仕方ないか、とため息をつくとアブラムさんが庇うように口を挟んだ。

「そりゃ俺達もあの英傑に挑んで全員がただで済むとは思っていない。ただ、ここには捕まっちゃ困る奴らもいる。そいつらだけでも逃がしてやりたいと……」

ああ。貴方方年齢もばらばらだもんね。どうせあのとき最初に私を小娘とか呼んだあの人とかあの人とかあの人とか、未成年だの妻子持ちだのという人のことを指して言ってるんだろう。

しかしそれじゃあいけない。私は否定を示すように首を横に振る。「貴方方が対峙しようとしているのはアタラ。私の弟ですよ？ 決死の覚悟でなければ会うこともかありません。いえ、それこそが彼に会うための絶対条件です」

「なんでそうお前の発言はいちいち説得力があるんだ」
「アタラはね、そういう人間だつてことです。真摯な相手の話は同じように真摯な態度で臨みますし、逃げ道を用意している相手ならばそれを徹底的に阻む。一人として逃げることなど叶わないでしょう。恐らく今想定していらっしやる逃走経路は既に彼の手の内です」

鏡のような存在。それが新さんだ。どれだけの力を持っていようと、映し出した本人そのものと同等のものしか返してこない。それが悪意や悪事ならばなおさらのこと。手加減なしと言わなければ自

身の力など全て発揮したりはしない。その上で、できうる限りの力で叩き潰す。それが一条新、もとい、英傑アタラ。

けれどその多くは、自分のためではなく相手のためだということも私は知っている。先手に周りながら、後手に動く。そんな出来すぎる弟をずっと見てきた。私は。

話しながら、心の内がすーっと醒めていくのを感じる。この感覚も、新さんに出会ってから得たものだ。もうこんな自分にさえ慣れた。慣れてしまった。

「二兎追わないのであれば、アタラはそれ以上のことはしません。つまり無計画であればあるほど、ずさんであればあるほど、アタラはそれを返してくる。そういう男なんですよ」

それこそが新さんの美德。聞いた皆の顔に、微妙な色が宿るのが見える。私はそれを見逃さない。きっとこの人達は、言わないけれど恐らく。

「じゃあ、どうすればいいんだ。全員大人しくお縄につけてか」「いいえ。貴方は複数の方がやりやすいと集められた。しかしその必要はないと言っているんです。彼を引きただけならば、実行犯は人質であり餌でもある私ともう一人、案内人だけがいい」

ちらりとアブラムさんを見ると「俺？」とばかりに吃驚した様子で見返してくる。当然。貴方以外にいないし。

すっかり頷くと、何故か他のメンバーが少しだけほっとしたような顔を浮かべた。む。私と二人つきりはそんなに嫌なのか。つれない弟達だ。

「実質アブラムさんの単独犯ということで行動させていただきません。いいですね、アブラムさん」

覚悟できてんでしょ？ と見ると、ちょっとうろたえつつも当然だと胸を張ってくれた。くそ、なんて操りやすい素直で可愛い弟だろ。にやけそうな頬をなんとか押し込めつつ、努めて神妙に頷いて見せた。

「単独で行動することの意味は三つあります。一つは身軽なこと。

もう一つは不測の事態への対処も比較的簡単なこと」

皆が頷く。アブラムさんだけは「それって単に俺だけ危険なだけなんじゃ……」とぶつぶつ言っていたけれどスルー。いい加減私に習って皆さんもスルー耐性がついてきた。飲み込みのいい弟達でお姉さんは嬉しい。

「もう一つは、彼は対一を特に好む、という理由からです」

皆が面食らったように押し黙った。その他にも私なりの理由があることには気づいていない。それよりも心なしかアブラムさんに同情的な目を向けている。

なーんでもう負けを悟ったような顔しているのかアブラムさん。喧嘩売ったばかりでしょうが。

「いいですか？ 彼は多勢に無勢と言う状況も楽しむ男ですが、対一となるとその比ではありません。こちらがそれを望めば、あちらからそれに適う状況を用意してくれることでしょう。つまりその意思を示せば、彼も同じだけのハンデを己に課す、ということですよ」

新さんはどんな相手に対しても、ハンデは用意しようとも負ける気はいつだって微塵も持ったことが無い。例え相手と自分の差が歴然であろうとそれなりの状況と状態を用意して、自分なりに対等な立場で勝負しようとする。それが私の弟、新さん。

だからこそそんな新さんに対して一人で立ち向かおうとする相手を新さんは好むし、無論それに値する状況をきちんと用意してくれる。新さんは、手加減はしても手を抜いたりはしない。戦うときはいつだって真面目に取り組む。私はそんな彼をずっと見てきた。そんな彼の傲慢さを、ずーっと傍で見つめてきた。

「だがよ……それを聞いたら益々もって無理な気がしてきたぞ。そんな奴と対一で戦って勝てるのか？」

「……果たして勝ち負けの問題なのですかねえ」

「あ？ お前が言ったんだろうが」

「失礼。今のは個人的な独り言です」

おっととまた失言つと。怪訝な皆さんの目を誤魔化すためにサー

ピスマイル浮かべつつ、頭の隅では別のことを考える。

この拉致の意味は大方のところは大体読めた。それに必要な役者と舞台は、多分私にも検討がついている。あとはそのタイミング。そこをうまくやらなければたちどころに破綻するだろう。

全く、大したゲームになつてきたものだ。ここまでお膳立てされるとは思わなかった。もう私モブどころか準レギュラーくらいの力テゴリに分けられてしまっているんじゃないだろうか。うう、ぞつとしない。せめて一話限りの準レギュラーであることを祈ろう。

「勝つか負けるかなど大した問題ではありません。貴方はただ結果を出したいだけ。そうでしょう?」

「……まあ、それは、そうだが」

「それなら簡単です。彼はどんな勝負でも最後は絶対に勝つ。負けるつもりなんて毛頭ない。だからこそその驕りが生まれる。そこを利用してやればいいんです」

「どうやって? と口をそろえて言う彼らに、私は信頼のシンボルを口元に湛えたのだった。

一条姉と作戦会議（後書き）

姉…これはもしかして俗に言う逆ハーというやつですかね。
新…全員マッスルで固められた逆ハーか……。

一条狸と狐

私は新さんに出会う前の自分がどんな人間だったかを覚えていない。どんな性格で、どんな思考で行動し、どんなことを感じていたのか、それさえも覚えていない。というより、上書きされてしまった、と言うほうが正しいだろうか。

新さんに出会ってから、まるで上書き保存されてしまったときのようにすっぱりと、それまでの私というものが失われた。それから確かに私という存在はそこに居たが、しかしそこには私の望む私という概念は、綺麗さっぱり失われてしまっていたのである。

ここはどーこだ。答えは、しゅん〜でゅん〜（狸型ロボット風に）はい正解、神殿ですね。どこの神殿かというギリシャでもパルテノンでもなくアルノン神殿とやらなのですよ。

どこよ。

つつこんだ方、そこまで気にしなくてよろしい。どっかの国のどっかの王宮にあるどっかの神殿くらいの認識で結構。イメージはググってください。正しそこは異世界でしたと。中途半端な設定補完などもう結構。飽きた。適当で良いです。どうせ数年後には主記憶装置にすら残っていない情報なんだから。

等と往生際の悪い作者のために潔く纏めつつ、なんちゃって抜き足差し足忍び足。なんだかこれって、とつてもデジャヴう。わくわくしながら無駄に長い神殿の壁を伝うように歩く私、と普通に歩くノリの悪い拉致監禁首謀者の刃の君ことアブラムさん。

その他の方々もやっぱりついていきたい！ と尻尾を振ってはいだが、隠密行動に複数人数は不要。もとより、この計画の上では多

人数は鬼門なので、却下。皆さんにはあとでとくとアブラムさんの誇張交じりの武勇伝を話してもらうことで我慢して頂こう。それが叶うならの話だけ。

まあ、計画といっても単純なもの。単純だけど、単純なほうが都合がいい。余計な画策を練って拗れるのはこちらのほうだ。だって、愚直なまでにまっすぐ行こう。恐らくはそれが、新さんにとつての鬼門なのだから。

今頃はもぬけの殻であろう場所にいると思われれる我が弟を思い浮かべつつ、ふふんと私は一人ほくそ笑んでいた。

「しっかし、お前も変わった奴だよな」

アブラムさんがわたしの前を歩きながら呆れたように呟いた。

こういう態度をとられるのはこの世界では二度目だ。お前本当に姉貴かよ、と眼が言っている。

こここのところ私の態度にぼろが出ているから、こんな風に見られてしまう。まあそれも解っていてやっていること。どうせそのうち終わりを迎える世界で私が取り繕うものなど、もう殆ど残されていない。

「あなたに相当の恨み買ってんだな、アタラは」

ちよつと。百歩譲って恨み云々はともかく、なんで同情的なの。

同情する相手が違うでしょう。

無言でアブラムさんのかかとを狙って踏みつけると、アブラムさんは抗議の目を私にちよつとだけ向けつつ脱げかけた靴を履きなおす。ふーんだ。

「そういう貴方は彼になんの恨みも無いのに大変ですね」

言つと、吃驚したように振り返ってくる。解らないとも思っていたんだろうか。彼らの態度を見れば一目瞭然だった。それが私の確信を裏付ける材料の一つになったと言つてもいい。

私は自分でも珍しいと思いながらも、自然とこみ上げてくる作り物ではない笑みをアブラムさんに向けて言った。

「貴方方の望みが、行く末が、よりよいものとなるように祈ってい

ますよ」

それ以後は口を閉じてただ先に進むことだけに専念した。アブラムさんが何か言いたそうにしていたけれど、私はそれを持ち前のスルースキルで見事にスルーしきってみせたのだった。

作戦会議は私を中心に行われた。私はこれを『マツスル・ハーレム』夏の陣』』とでも命名しておこうと思う。無論、私の心の中で、だけど。

「恐らく彼は、私達の行動など既に読んでいることでしょう。移動してもらってなんですが、この場所がばれるのも時間の問題です」「じゃあどうするんだ。そうホイホイと都合のいい場所は提供できないぞ」

何故だか慥然と言い切るアブラムさんに、私は人差し指でちっちゅと例のあれをやってみせた。やってみたかったんだコレ。

「もう場所は必要ありません。皆さんにはここで解散していただきますので」

ええつと声上がる。一番情けない声を上げたのはアブラムさんだ。なんでこうこの人は期待通りのリアクションをストライクでくれるんだろう。個人的にペットにしたいくらいだ。そうしたらきつとつんと可愛がってあげるのに。

じつと見つめると、不穏なものを察知したのかすぐく嫌そうに「なんだよ」とのけぞる。全く見かけによらず情けない弟でけしからん。可愛いんだからもう。

「ここに留まる理由が無いからですよ。彼にはもう目をつけられているんです。こんなところで私たちを待って一網打尽なんて目に、合いたくはないでしょう?」

あの場になければと、幾つかの場所にも目星をつけているだろう新さんは、多分、もうここにも手を回している。けれどそれは別

に彼らに教えなくてもいいだろう。新さんはただ手配はしても、きっと自分の足でここを訪れるまでは誰にも手を出させないはず。あの場所に残った私の痕跡を見れば尚更のこと。

だから私は新さんの手の内で廻る振りをして、好きにさせてもらう。新さんは私の心を読む。私は私の心を読む新さんの心を読む。

その先に待っているのは、とるかとられるかの駆け引きだ。どこまで読んでいるか、じゃない。どちらが先に動き出すか、だ。

「それじゃあお前達はとうするつもりなんだ。まさか本当に何の計画もなしに実行するとか言うんじゃないだろうな」

「いいええ。まさか、そんな。けれど、まあ似たようなものでしょうかね。その他の皆さんはそれぞれ解散して、私とアブラムさんは、神殿に向かいます」

「はあ？」

アブラムさん、声大きい。そんなに可愛いといい加減調教しますよ。いいんですかこれ以上私好みになっても。

ちろりと一瞥すると、本能で何かを感じたのか一瞬引きつつもアブラムさん、果敢に憤慨とばかりの表情で食って掛かる。

「お前なあ、それじゃあ本末転倒だろうが。捕まえてもらいに行くようなものだろ」

主に俺が、と付け足す。そこが大事なんですね、アブラムさん。むしろそこしか目に入ってませんね、アブラムさん。そんなアブラムさんも萌え。

「いいんですよ。逃げ回るよりも本拠地について乗り込んでしまえば交渉も楽に済みます。それに私達がここに移ったことを確認した彼が私たちの在非をまた確認するには時間がかかります。ここを選んだのは時間稼ぎの意味もあるんですよ。私達が解散して散り散りになったところで、睨み合いの軍とレジスタンスの皆さんは勝手に攻防してくれますのでね」

淡々と言う私に、皆何か言いたげな表情で視線を彷徨わせる。

まあ、つまりは、私が言っているのは彼らを囿にして私達は行方

をくらしましょう、と言っているわけで。ただ、私も何も考えずに彼らを利用しようと思っているわけじゃない。今この睨み合いの切迫した状況でただ軍に制圧されるだけじゃ、彼らの処遇もそうそう明るい未来は待っていないはずだ。だからここで権力のある新さんに直接介入させれば、新さんならばきつとうまい具合に治めてくれる。

でも新さんなら最初からそのつもりだったりするかもしれないけれど、この場合はこっちの都合でその予定を早めてもらう。もとい、その場で足止めされてくださいと。人の上に立つなら現場も知らないとして、某踊ってる大捜査線の人々が言ってた。

新さんなら多分私の意を汲んで期待通りにしてくれるだろう。どうせそれを加えてもなお自分の思い通りにできるとでも思ってるんでしょ。マジ生意気。

そんなようなことをなんやかんやともによまよぼかしつつも都合よく言葉を選んで説明すると、彼らも素直にほっとしたように納得してくれた。丸め込まれやすくしてお姉さん助かるわあ。

「大丈夫。アブラムさんの身柄は私が保証しますから」

「なんでお前にそんなことが言えるんだ」

「私は英傑アタラの姉です。それでは信じるに値しませんか？」

う、と言いよどむ。いやいやいや、絶対おかしいでしょ。自分で言っておいてなんだけど、これで黙っちゃうって対峙している相手を信じてます、って言っているようなものだけど、いいのかな。まあ、そんなものか。相手が新さんである以上、敵だろうが味方だろうがそうなってしまう。

ふーん、そう、やっぱり。そうだよな、アブラムさんたちも。

「なんだその不満げな顔は」

「いえ別に、そんなことは。……とにかく、神殿には絶対に行きません。結果論で言えばそちらさんの目的にも適っていると思いますし、それは私の目的でもあるので、これだけは曲げられません。あ、別に貴方達を罫に嵌めて自分だけ保護してもらおうとかそういう期待

をこめているわけではないので、あしからず」

妙な疑いをかけられる前に言っと、皆に解ってるよといわんばかりの顔で頷かれた。はたして脳みそまで筋肉が詰まってるゴリラの有象無象に何が解るんだか。じと目になりつつ、まあいいかとスル。余計なことは気にかけるだけ時間の無駄。

さて、あとは。

「それで、貴方方の目的はアタラとの直接交渉、いえ、そのクライアントのための誘導ということでしょうか？」

今更だけど、一応確認してみる。本当はまあ色々と見逃してはいるが、そこはそれ、スルー能力発揮ですよ。便利便利。

「まあ……そういうことっちゃあ、そういうことに、なるのか？」

「まあ、なんでもいいですけど。あ、そうだ。確認のために二、三質問しますので、ちゃんんと答えてくださいな。嘘ついてもすぐにわかつちやいますから、正直にね」

につこり微笑むと、アブラムさんが疲れたような顔でぼそつと「なんかお前怖いな」と言った。

あーららこらら。とうとう立場逆転しちゃいましたよお姉さん。

へらへら笑いつつ確認作業を済まし、私達はそろそろ行くこうか、と腰を上げた。

「あ」

「なんだよ」

「忘れていました大事なもの。紙とペン、あります？」

聞くと、さつとそれを用意してくれたので、お行儀悪くも床に這い蹲ってさらさらと書き始める。ちなみに紙とか布はあつたけどペンはなくて木炭みたいなものを渡された。書けりゃなんでもいいです。

がりごりと綴り始めると、なんだなんだと皆さん覗き込んでくるんだけど、これ日本語だから多分読めないよね。「何書いてるんだ？」と聞くので「置手紙。らぶれたあですよ」と答えると、皆さん揃いも揃って小鳥のように首をかしげた。私はそんな微笑ましい光

景に笑いをかみ締めつつも、「脅迫状です」と言い直したのだった。

で、目下潜入中。中に入ってしまったえば後は簡単だった。誰かが私達を見ても『お帰りなさいませ姉君様』としか言わない。それどころか素敵な笑顔のおまけつきだ。私もそれに倣って微笑み返し、こうしてなんの弊害も無く神殿までたどり着いたということだ。

想定通り、私が拉致された事実には公にされなかつたらしい。それどころか、町の観光に出かけていたということにされていたようだ。『町は楽しかったですか』と声をかけられたときに、『ええそれはもう。心行くまで楽しませていただきました』と即座に答えた私は表彰ものだ。ベストオブ狸イェー。

「まあ、狐はあつちだろうけど……」

ぼそつと言った台詞に耳ざとく「なんか言ったか」とアブララムさんが振り返ってきたので、なんでもありませんと笑顔で一蹴しておく。

とりあえず、ここまでは計画通り。あちらにとつても、こちらにとつても。問題はこの先か。新さんが私のらぶれたあを読んでいる間に私達は神殿に忍び込む。そして新さんを待っている間に私は。

「そつえばアブララムさん」

「なんだよ」

「私、大事なこと、言つのを忘れておりました」

怪訝そうな顔で、アブララムさんが振り返る。なんだ今更、といった表情だ。それはそつだ。もう目的地は目の前。

アブララムさんの立っている場所のすぐ後ろには、私には解読不明の文様が描かれている。見るのは二度目だ。一度目は、召還されたあの時。妙な感慨を感じながらそれを見つめつつ、私は微笑みながら教えてあげた。

「アブラムさん達が仰っていた『信頼あるお方』。そのご本人様か、或いはその上にいるお方、とね？ 私、一度だけお茶したことがあるんですよ」

にっこり微笑む。アブラムさんの目が、不信に潜まる。そんな彼の背後には、既にそれが迫っているのが見えた。

さて、舞台は整った。そしてもう一人の役者、狐さんのご登場。

私はアブラムさんに向けていた笑顔をそのまま彼の背後にいる人に向け、ゆっくりと目礼した。

「またお会いしましたね。 ソロンさん」

「……ええ。姉君様」

純白の白衣。真っ直ぐにどこまでも伸びる黒髪。私の笑顔と拮抗するかのような、穏やかな微笑み。

恐らくは今回の黒幕であろうその人を見つめて、私は自身の算段が着々と完成し始めていることに心が浮き立つのを抑えきれなくなっていた。

一条姉と宝玉

脅迫状。それは私から新さんへ向けた、らぶれたあ。つまり私から新さんへ、思いの文を綴った告白の手紙。

それを読んで新さんがどんな顔をするのか、私はそれを見れなくてほんのちよっぴり残念だったりする。けれど大丈夫。きっと彼は私の想像の中にいる新さんと同じ顔をしてその手紙を読んでいるはずだ。それは私の願いであり期待であり、これまで幾度となく新さんが私に向けてきた顔でもあるのだ。

でも、もうそれも見納めかもしれないよ、新さん。もう、私は新さんのそんな顔、見ないつもりだから。多分もう二度と私の前でそんな顔はさせないから。

だから新さん。早く、舞台上、上がってください。お姉さんからの、最後のお願いなのです。

今、用意された舞台には狐一匹と狸一匹、それからゴリラが一匹いる。私は戸惑うゴリラを押しつけて、狐相手に狸よろしくにたたと意地の悪い笑みを向けた。

「そんな笑顔浮かべちゃってマア。主を出し抜くのはそれほど痛快でしたかソロンさん」

私がかここにいることに少しも驚いた様子の無いその人は、ふんと一蹴するようにため息を漏らした。

「心外な。あまり人聞きの悪いことを仰いますな、姉君様」

「私はあなたの姉ではありません。その呼び方は不快極まりないの
で止めていただけますか神官様？」

こないじりがいの無い弟誰が持つかってんだ。あ、アブラアム
さんは俺の嫁。

「ではなんとお呼びすれば？」

「……一条」

「おい」と後ろでアブラムさんが小声で声をかけてきたけれど、目線で諭した。

別にいいの。この人の主記憶装置には既に新さんの情報でいっぱいっぱいなんだろうから。仮情報としてどうせ後々消去される運命なら、知られないほうがまだマシ。

自嘲の笑みを浮かべると、ソロンさんの眉が不快に潜まる。

「なにか可笑しいことでも？」

「いいえ、別に。失礼をば」

慇懃無礼に深々と頭を下げると、ソロンさんの表情は引きつっていた。あーららこらら。人をおちよくるのも大概にしないと夜道歩けなくなるぜお嬢さん。うん、そうだね、次から気をつける。

そんな会話を目だけでアブラムさんと交わしつつ、私はコホンと一つ咳払いした。狭くて埃っぽくて男臭い部屋の湿った空気とは違う、神殿の清浄な空気を心行くまで吸い込んだ。

「では。早々に本題に移りましょうか、ソロンさん？」

「はい。イチジョウ様」

お互いに確認を取って頷きあうと、後ろでつんつん服を引っ張ってくるごついのが一人。ああもうなんだよ可愛いなあ。いや間違えた、うるさいなあ、だ。

振り向くと、この場の雰囲気にも飲まれてすっかり混乱しちゃっているおどおどしたアブラムさんの瞳とかつちり目が合う。ちよいちよい手招きして頭をかがませ、とりあえずその触り心地の悪い剛毛を撫でた。我慢できなかったの、もう。

撫でながら、ソロンさんの方に向き直った。

「この人、もう行っていいんですよね？ ソロンさん」

「ええ。彼はもう用済みです」

「だって。帰っていいですって。短い間ですがお世話になりましたね、アブラムさん。お元気で」

いきなり頭を撫でられるわ用済み宣言されるわで目を白黒させるアブラムさんの背中をぐいぐい押して、なんとか行ってもらう。なんだか妙に名残惜しそうにこっちを振り返っていたけど、しっしと手で追いついてやった。

これから起こることにアブラムさんが巻き込まれたら、さしもの私も手に負えないだろう。早々に退場してもらうに限る。彼の役目は私を新さんから引き離し、ソロンさんの前に連れてくること。ただそれだけなのだから。

あつけない別れに私も後ろ髪を引かれなかったといえは嘘になる。だけど、まあ、これが今生の別れってことにはならないだろうし。多分。

「さて」

振り返り、極めて冷静な表情をした人と対峙する。どうでもいいけど新さんがいるといたないとじゃ大違いだなこの人。新さんがフラグ折ったのって、まさかのびーえるが背後にあったからなんじゃないでしょうね。ていうかむしろこの人が叩き折って廻っていたとかいうオチなんじゃあないでしょうね。

まあ、別にいいけど。新さんがどんな趣味を持ってようとお姉さんは反対しないよ。そんなことよりも重要なことがある。そうだよ。今大急ぎでここに向かっているであろう弟に問いかけてみる。もちろん返事は、ない。

私とソロンさん。今は舞台に二人きり。さて、物語はいよいよクライマックスだ。読者の方、作者のお前、用意はいいでしょうか。いきますよ、もう。さあ、最終章の幕開け。

「ソロンさん。貴方も困ったお人ですねえ」

ありがちな台詞を吐くと、彼も乗ったように冷ややかな笑みを返してくれた。そうそう。お膳立ては大事。来る主役のためにね。

「私、忠告しましたよねえ。新さんに残ってほしいなら」

「彼以上の信念と意思を以ってして彼本人に直接打診すること、です」

遮られた。無作法に無作法返しとはなかなかやりおる、この狐。主導権をもぎ取ったことへの優越感か、ソロンさんは最初のような穏やかな笑顔を取り戻して、一步私に近づいた。

「心得ておりますよ、ええ。もちろんですとも。ですからこれが私なりの、真摯な打診なのです。あの方への」

ふうん。へえ。随分愛されてるじゃない、新さん。ちょっと気持ち悪いくらい。ソロンさん、この人ヤンデレ属性なんじゃないの。そんな匂いが笑顔からぶんつぶん香ってくるわ。

そして解った。私はこの人と絶対相性悪い。ああよかった。嬉しい確信だわ。同時に新さんに同情。この人結構しつこいよ、きつと。……アブラムさん達をけしかけるための餌はなんだったの。お金？ 権力？」

「そのような無粋なことは致しません」

ゆるゆると、首を振る。しとやかに流れる黒髪が一緒に揺れて、ソロンさんの白衣を彩る。清浄、というのは時に、寒々しい印象を与える、と思う。この人を見ている特に。まあ、私も大差ないか。この人と違って、清浄ではないけれど。

いやな共通点を覚えている私の心情などいざ知らず、ソロンさんはまた一步、私に近づいた。

「私はただ、お願いしただけです。彼らを統べる者に『うまくやれば捕えてあるレジスタンス関係者を悪いようにはしない』と告げて……へえー。そう。うん、まあ、妥当なところですね」

つまり、彼らの上にいる人。市長か町長かを、『捕えられた町民を救いたければ言うことを聞け』と脅したわけだ。それで彼らは仲間を助けるためにその誘いに乗ったと。マア単純で解りやすいこと。しかし全く、呆れるほど甘い理由だ。私にも甘かったけれど、理由もこんなに甘ったるいとは思わなかった。あの人達の目的つてつまり、仲間を助けたかったってことか。そんなことのために危険を冒したのか。

甘いな。本当に、甘ったるい理由。馬鹿すぎて、愛しく思えてく

るくらい。可愛い弟達の顔を思い出すと、自然と笑みが零れてくる。久しく忘れていた癒しだったなあ、あの人達。見た目はぜんぜん可愛くなかったけど。

でもね、私思うんだ。馬鹿な人達って利用しやすいからついつい摘んじやいたくなるのは解るんだけど、それってつまり、やりようによるってこと。

ほんの僅かな不快感に従って、私は笑みを打ち消した。きっと私は、多分今、ソロンさんと同じくらい冷え切った眼差しを、彼本人に向けているだろう。

「　そんなのはね、新さんの仕事ですよ。解ってるでしょう。…解って、いたんでしょ」

自分でも思いのほか凄みの利いた声が出てくる。ソロンさんは少しだけ怯んだように眉を顰めたけど、すぐに思い直したように陶然と微笑んでみせた。

「ええ。しかし彼らは知りませんから。あのお方がどれだけ素晴らしいお方なのかということ」

新さんなら、そんな取引しない。必要としない。

じわじわと湧き上がる不快感と一緒に、そう思った。当たり前だ。不本意ながらも、新さんはソロンさんの言う通りの人物だから。

深呼吸をして、気を落ち着かせる。こんなことで気を荒立てるのが私の役割なんじゃない。アブラムさん達はそれでも自分で望んで動いていたことじゃないか。私がこれ以上気に止めることじゃない。

ただ、でも、と思う。こんなことのためだけに、可愛い彼らが利用されたのかと思うと心苦しく、同時に、その出会いを嬉しく思った。脅されたのが彼らでよかった、なんて失礼にも程があるけど。

私がここに立つために彼らでなければならぬ理由はなかったけれど、それでもこの偶然は私にとって何よりの思い出になった。全く、いい体験をさせてくれたものだ。それだけはソロンさんに感謝したい。

つい微笑を浮かべてソロンさんを見ていたらしく、怪訝な目を返される。おっとと。今はシリアス展開の時間ですよー、お姉さんはーい。

「それで彼らをけしかけ新さん呼び出している間に私をここに運び出し、そして」

「貴女だけを元の世界へ強制送還する」

「ご名答。この場合、私かな。」

もう一歩踏み出してきたソロンさんは既に私の目の前にいて、酷薄な眼差しで私を見下ろしながら何かを差し出してきた。見ると、その手に納まっているのは野球ボールほどの水晶玉だった。それに恐らくはこの世界のものだろうと思われる文字がぎっしりと刻み込まれている。

手を出すと、それはソロンさんの手から転がり落ち私の手の内に納まった。ずっしりと重く、そして今までソロンさんが持っていたにもかかわらず何の温度も感じない、冷たい感触がした。

「これはあちらからこちらの世界へ彼の方をお呼びするのに使用していた宝玉です」

宝玉。つまり、異世界召還に使っていた道具ということ、かな。ありがちな便利アイテム。もしくは、縛りアイテム。それがどちらの方であるかを、ソロンさんは教えてくれた。

「文字が刻まれているでしょう。それはあちらの世界への照準を記したものです。古の知恵より授かった恩恵の賜物ですので、今の我々には二つと同じものはないでしょう。これ無しでは彼の世界へ通じる手段自体が失われてしまいます。つまり」

「これがないければあちらの世界に通じなくなる。そして私がこれを持ったまま元の世界に帰れば、新さんは二度と帰ることができなくなり、そしてこの世界　この国に留まることになる」

「……ええ。仰る通りです」

やっぱりそうか。予想通り過ぎて笑えもしない。

テンプレート通りの彼のこの行動はきつと、新さんの物語に取り

込まれているからだろう。知らず知らずのうちに巻き込まれているのはこの人のほうだ。そして他の人同様にそれに気づくことはなく、例え指摘したところで喜びこそすれ嘆くことなどないだろう。まるで新さんを神と崇めて妄信しているように。

やっぱり、私の算段は正しい方向へ進んでいる。これが例え誰の手の内で廻っていたとしても、私はそれに逆らわずに手に入れることができるだろう。私の望んだ、本当の世界を。だから私は、笑ってその宝玉を握り締めた。ソロンさんもそれを見て、満足したように微笑む。

うん。貴方の役割も、もうすぐ終わる。そして私の役割も、もうすぐ。。

「姉さん」

そらきた。

予想通りといえばドンピシャ過ぎる主役の登場に、思わず苦笑が漏れる。私はゆっくりと振り返り、肩で息をする弟を目に写した。

「早すぎるよ、新さん」

「……期待通りだろう。姉さん」

ああ、そう。まっことその通り。天晴れ新さん。でもね、やっぱり早すぎる。絶対来るとは思ったけど、やっぱり君はチートだね、新さん。期待を裏切らなすぎて、可愛くない弟だ。本当に。

一条姉と裏の裏

新さんが手紙を読んでこちらに来るまでの時間を逆算して、どう考えても間に合わないだろうという時間帯にここを訪れた。けれど新さんは来た。来るはずがない、来れるはずがないという状況でも来た。

私はそれらを全て踏まえた上で、新さんが間に合ったことに微塵の驚きも抱かなかつた。だって昔から新さんは人の期待をいい意味で裏切る天才だったから。私と違って。何の才能も美德も持ち合わせていない、ただ捻くれて育っただけの私と違って。

新さんはどれほど急いだのかと思うほど、息を上げていた。肩で息をしながら、額には僅かに汗を滲ませ、心なしか目も潤んでいる。長つたらしい綺麗なだけでまとわりつくだけのそんな服で走ってきたのかというほどの息の上げようだけど、そんな姿も一枚の絵画として描けるほどに美しい。物語で言えば、絶対に無理だという状況でそれでもやり遂げた主人公のここぞという見せ場だろう。

そんな彼を前にして僅かな苦笑を浮かべつつ、私は息を整えてその場に立つ彼に近づいた。いつの間にか逆転していた、私と彼の高低差。間近で見ると、それが顕著に解る。真摯で善良で曇りのないその瞳を覗き込み、私は彼に微笑みかけて言った。

「脅迫状、読んだ？」

「読んだ」

息を整えながらも、彼は答える。

ほんの少しだけ辛そうなのは、それほど疲れたからだろうか。それともそれ以外の、理由があったりするのだろうか。それが何か気

づいていながらも、私は残酷な問いを再び彼に投げかける。

「……本気にした？」

「するわけがない」

合言葉のような問答を交わす私達。答えながら、新さんは寂しげに微笑んでいる。その顔を見て、新さんがあの手紙を読みどう受け止めたのかを私は知る。そしてそれを知った私の中では些かの罪悪感と優越感という相反する感情が、拮抗するようにせめぎあっていた。

ああ、でも新さん、大丈夫。そんな顔は今日で終わりだよ。少なくとも、私の前では。

そうして彼が間違はなく手紙を読んでいたという確信を得た私は再び、新さんの早すぎる登場に目を剥いているその人の方へと振り返った。

「ソロンさん。貴方の負けです。新さんは間に合ってしまった。もう貴方の望みは叶わない」

言つと、我を取り戻したソロンさんは、先ほどとは打って変わって動揺しきった眼差しを私に、いや私の後ろにいる弟に向けた。それはまるで縋るような眼差しにも、見えた。

「閣下。私は……」

「いや。姉さんの言つとおりだ。俺の勝ちです、ソロンさん。申し訳ありません」

ソロンさんにそれ以上何も言わせまいと遮った新さんは、その場で深々と頭を下げた。それは彼なりの、ソロンさんへの答えであることを物語り、それを目の当たりにしたソロンさんの瞳には深い落胆の色が滲んでいた。

きつと、ソロンさんはこうなることなど最初から解っていたに違いない。解っていたからこそ、こんな事をしでかすに及んでしまった。どうにもできない事実から、なんとか目を逸らしたくて。

私はほんの少しだけ、そんなソロンさんの思いが解るような気がしていた。全てではない。けれど、私はそれと酷似した思いを随分

前から抱いていたから、ほんの僅かだけ同情心が灯る。

しょうがない。内心ため息をつきつつ、未だ手の内にある宝玉を握った。これを使うにはもう暫しの時間が必要らしい。もう少しだけこの茶番にお付き合ください、読者の皆様。そして自分でも何かなんだか解っていない作者よ、とくと聞きたまえ。

さあ、最後のツメ。種明かしの時間だ。

「ソロンさん」

呼ぶと、彼は先ほどの気概などどこにも見られない気の抜けた表情で、のろのろと私の方を向いた。まだ何か、と目が言っている。可哀相な人だ。それほど新さんがこの人に、この国の人達に必要なとされているのだと、今更ながらも実感する。

それでも、私はまだやめない。止められない。後ろの新さんにも目を向けつつ、コホンと咳払いを一つ、大きく息を吸い込んだ。さて。

「ソロンさん。……新さんも聞いて。まだ、私の話は終わっていません。ソロンさんにいくつか質問します。答えて頂けますよね？」

「……はい」

怪訝な表情を浮かべながらも、ソロンさんは頷いてくれる。後ろの新さんから返事はないけれど、私には解りきっていたことなのであえて返事は待たない。とりあえず、先へ進めよう。

「私を拉致するという計画。貴方が考え、指示していたんですよね？」

「ええ。たまたま最近暴動の起きた町の町長に掛け合い、私直々に指示を出しました」

うん。やっぱり。一つ確信を得て、同時にアブラムさん達にした自分の質問を思い出す。

『貴方方に指示を出した信頼あるお方は、この町ないしこの市においてそれなりの地位にいる人ですね』

彼らはきちんと答えてはくれなかったけれど、その代わり解り安すぎる態度が言葉の代わりに雄弁と物語っていた。よし、これで一つ。

「計画の大筋もあなたが立てたと？　たとえば、その拉致の名目や、あるいは実行する日時など」

「はい。そのどちらも私が決めました。ただそれにおける計画等は彼らに一任しました。私が協力したことなど貴女の部屋の位置と、宮廷へ侵入する手引きだけです」

ソロンさんの言葉に、私も頷く。そうでなければ辻褃が合わない神殿で私が拉致されたことを隠しておくなんて、よほど痕跡のない場合でなければ誰かが疑問に思うはずだ。神殿の人達は何の疑いもなく私達に声をかけた。

つまりは、そういうこと。仮にも警備があるのに易々と進入して私を拉致してくるなんて、素人同然のあの人達にできることじゃない。第三者の誰かが手引きをしたに違いない。その辺りでは黒幕はソロンさんだろうと確信できた。

そしてソロンさんがそんな人達を動かしたのは、自分の直下にいる人間やその筋の人間だと簡単に足がつくと思っただからだろう。だったら私がソロンさんでも、解りやすくレジスタンス関係者を利用していただろう。そしてその通り彼らは利用されたと。

あ、なんかむくむくとまた苛立ちが湧いてきた。これは自分がいじめている子に別のいじめっ子がちょっかい出したときと同じ心境だな。あの人達で遊んでいいのは私だけ！

思わずじと目でソロンさんを見ていたらしく、びびっと引かれるふーんだ。あなたには興味ありませんよ、全く。おっと、そんなことより続き続き。

「では、まあもう一つの質問はおいおい聞くとして、次。私が拉致されたことを隠していた理由は？」

「それは……」

「俺がそう指示した。これは俺の個人的な問題だと判断したからだ」

初めて新さんが口を挟む。ふーん、と口元に笑みを湛えつつも、まあいいやと流した。メインディッシュはまだまだ先。

「じゃあ次。ソロンさんの当初の計画では、新さんの気を拉致首謀者の方に向けつつ、恐らくはソロンさんの部下に私をここへと連れてこさせてこの玉ごと強制送還させる。そういう手はずだったんですよねえ？」

「……仰るとおりです」

うん。素直でよろしい。着実に組みあがってきたパズルの絵が見え始めてくる。さて、そこにはどんな絵が描かれているのかな。

「よし、じゃあ大詰めといきましょう。ソロンさんのその計画の破綻についてお話ししましょうかね」

言った途端、空気ががらりと変わったような気がした。怪訝な表情を浮かべるソロンさん。後ろにいる新さん　は、見なくても解る。

そして私はこれでもかというほど愉快痛快の笑顔。筋書き通りにいったと喜ぶのはまだまだ早いよ。

「まずね、拉致のタイミング。そこがソロンさんの考えていたものと違っていたんじゃないやありません？」

ちら、と見るとソロンさんは不思議そうな顔をしながらも頷いた。なんでそんなことが解る、と言いたそうだ。これもわからないでか。

あのね、あんなに穴がありすぎる計画もないよ。思わず被害者が協力を申し出ちゃったじゃない。楽しかったからいいんだけど。まあそれも、想定内のハプニング。そうでしょう。ねえ？

「そこから計画は貴方の想像からどんどん外れていくことになる。ま、その辺の修正は私がしていきますけど」

それこそソロンさんの想定外だろう。まさか私が犯人に協力するなんて思わなかったはずだ。神殿で顔を合わせたとき内心この人が私の不可解な行動にどきまぎしていながらも努めて冷静を装っていたんじゃないかと思うかと想像すると、不覚ながらも萌えてくる。ああ気分がいい。

さて、今度は新さん。君ね。

振り返ると、思ったとおり冷静な表情をしていた。その我関せずって顔、お姉さん的には可愛くないと思うよ。

「新さんはその間、犯人の痕跡を追っていた。で間違いない？」

「ああ」

うん。予想通りの模範解答。わざとやってるな。本当に可愛くない弟だ。ちつと舌打ちを仕掛けつつも我慢して、今度はまたソロンさん。よーしいよいよメインディッシュまであと一歩。よだれが出そうよお姉さん。

「じゃあもうタネ明かしのお時間と行きましょう、ソロンさん」

「貴方は先ほどから何を仰いたのですか？ 私はもう……」

「ええ。でもまだ残ってますから。あともう一歩ですよ」

私の言わんとしている事がさっぱり読めない。ソロンさんの顔はそう言っている。いい加減きつと読者の方もこののらりくらの展開に飽き飽きしていることだろう。作者も右に同じ。

さあ皆様いよいよメインディッシュです。当店のシェフが腕によりをかけた一品ですので、どうぞとくとご賞味くださいませ。ねえ、新さん？

「私を拉致させたのはソロンさん、貴方です。でもね、その貴方をけしかけたのも、その計画をいよいよに操っていたのも、他の誰でもない貴方の主、その人ですよ」

振り向く。言われた本人は顔色も変えず、かといって言い訳もせず、ただじつと私を見下ろしている。

まるであの時と一緒にだね、新さん。初めて会ったあの時、新さんはどんな気持ちで私を見ていたの？ その気持ちは今と変わってはいない？ 新さん、あのね。私はね、変わってしまった。もうあの時の私じゃ、ないんだよ。

精一杯手を伸ばして、掲げた。そうして何の悪意もないその静かな眼差しを受けながら、私は 新さんの頬を思いつきり、ぶつた。

「いい加減にしろよバカ新^{あらた}。人の悩みに付け込んで自分の思い通りに動かして、うまくいって勝って。満足だった？ 面白かった？ 傲慢にもほどがあるよ。もう一度きちんとソロンさんに謝りな！」
精一杯の力をこめて、初めて人に手を上げた。しかもそれが、自分の弟。今までこんなふうには叱られたことなどないだろう、完璧に善良な、私の弟。

けれど私にぶたれて顔を背けたままの新さんの口元に僅かな笑みが浮かんでいるのを、私は悲しい思いになりながらも、じっと見つめ続けた。

一条姉とお別れ

「姉君様……何を」

あーまた戻った。やっぱりね。あーあ名前教えなくてよかった。思いつつも、ここでそこにつっこむKYでもないので、海より深い慈愛で以ってしてスルーして差し上げる。

そんなことよりも、おいコラ主人公。姉貴にしかられてへらへら笑ってるんじゃない。いや、この場合へらへらというより嬉しそう。新さんって、もしかしてそっちのけがある人？ と嘯いてみる。まあどうでもいいや。無視して、目を白黒させているソロンさんへと向き直った。

「ソロンさん。この馬鹿はね、最初から貴方の思惑も何もかも解った上で、貴方を利用していたんですよ。貴方が新さんを思う気持ちを知っていたにもかかわらず、腹のそこではもう既に答えは決まっていたんです。……お聞きしますが、貴方は新さんの名前を知っていますか？」

「それは……はい。閣下は自らを『アタラ』と」

何を今更というような顔をされるけど、これで確信がいった。新さんはやっぱり、偽名を貫いていたわけだ。もしもこの国に留まることを悩んでいたのなら、本名を明かさな理由にはならない。それをあえてそれで通していたということは、自分の居場所を既に理解していたからだ。

どれほどレベルを上げてもどれほど仲間を増やしてもそれがゲームである以上、それを自分の世界だと言い張ることはない。あくまでゲームはゲーム。新さんにとってこの世界は、極めてリアルなゲームと変わらなかった。そこに本当の世界があり、本物の人間がいて、例え本当に自分の命をかけていたとしても。

「それは、偽名です。この馬鹿は貴方方に本当の名を教えなかった。何故なら彼にとって本当の世界に、ちゃんと真実の名前があるから」

それだけが確信じゃないけど、ソロンさんにはこれで十分だった。驚きと共に、少しだけ傷ついたような顔になる。

それは少なからず予想していたことだった。でも、可哀相だけと言わなければならぬ。この人達のためにも、新さんの、ためにも「どうせ新さんは貴方に『もうここにはこれない』と匂わせるような発言をしたんでしょう。だから貴方は焦ってこんなことをした。それが新さんによる誘導だとは考えずに」

考えるわけも無い。今でさえきつとこの新さんがそんなことをするなんて、と信じられない思いでいるのかもしれない。それどころかもう、ソロンさんは言葉もないようだ。すっかり青ざめてしまい、可哀相になるほど哀しそうな顔で私を、私の後ろにいる新さんを見つめている。

けれど後ろから聞こえたのは、少しだけ笑いの滲んだ声。

「ご名答。さすが俺の姉さんだ」

「ほざくな。新さん、君は私を利用するだけじゃ飽き足らず、この姉を試したね」

睨みつけると、益々嬉しそうな顔をする。悪意のない、いつもの新さんの顔。でも、不愉快だ。我が弟ながら、本当に可愛くない子。私は宝玉を見せ付けるように前に差し出して、続けて言った。

「これを使って帰ることは、さっきソロンさんに聞いた。でも彼は十日かかるなんて言わなかった。例えそうだとしても、それならどうしてこれが装置に組み込まれずに私に手渡されているかということになる。だったら答えは簡単。本当は帰るのに十日間もかかるなんて嘘なんでしょう？ 新さん」

十日間の期限は新さんのためのものじゃない。新さんの計画と、私自身のために用意されたものなんだ。

問いかけに対する答えは、少しも動じない新さんの笑みが物語っていた。何を言われているのか解っていないのかと勘違いするほど、穏やかな笑顔だ。まるで、それが暴かれてむしろスッキリしていると言わんばかりに。それが益々私の苛立ちを助長させる。

「私を拉致する計画に狂いが生じたのは、新さんが何かしらの方法で予定を早めさせたからでしょう。だから彼らの行動には穴がありすぎたし、それにしても私を攫うのに手際がよすぎた」

「うん」

「うんじゃないよ。どうせ私が自分からココに来ることも解っていたんでしょ。全部読んでいたけど、新さんはあえて後手に回っていた。どうせ最後には自分の思い通りになるって、知っていたからだね。うん、ちょっと頭がいいからって調子に乗ってんじゃねーぞいっぺん肥溜めに落ちて性格矯正し直せボケ」

おっとここでまた失言。つつい心の声がぼろつとどこるかまるまる出てきちゃったぞう。

最後にものすごい台詞を付け足したことに對して、ただにここにご機嫌な笑みを浮かべている新さんとは対照的に、ソロンさんは「何今のありえない聞き間違い」みたいな顔で口をあぐり開けている。おまけに私の突然の毒舌に動じない新さんを見てもドン引きしているようだ。

私もドン引きだよ。どうせそんなに驚かないだろうとは思っていたけど喜ぶとは想定外だ。なかなかやりおるこのチート。そしてやっぱり気に食わない。

思わず深いため息をつく、慰めるように新さんが頭を撫でてきた。

「姉さんはすごい。ちゃんと俺の期待通りに動いてくれた」

「それ褒めてないから」

「うん、でもまだ一つ足りない。まだ俺は姉さんの答えを聞いていない」

答え。答え、答え、こ、た、え、ね。

さりげなく新さんの手を払いのけながら、じろつと睨んでみる。

「言う必要ないんじゃないの？」と目で訴えてみつつも、新さんは相変わらず嬉しさを隠せないような微笑を浮かべたままじっと待っている。

ああ、もう、しょうがない。観念して、ぼかーんと呆けるソロンさんへと向き直った。

「そういうわけで、ごめんなさいソロンさん。私もあの時、新さんがどうするのか知っていたのに貴方に黙っていました。ただ、あの言葉は嘘ではなかったんです。こう見えて新さんは、あからさまに縫られると弱い人なので、望みが無いわけじゃなかった」

私の言うことをいつも拒めないように、ね。

何が嬉しいんだかいつまでもここにこしている小憎らしい弟を手招きして、一緒に頭を下げさせた。

「本当にごめんなさい。新さんはあちらの世界に帰ります」

「……ごめんなさい」

頭を下げているその顔が、どれほど嬉しそうな顔をしているのか私には見えない。

きっと新さんはこの言葉を私に言わせたいがために、こんな回りくどいことを仕組んだのだろう。高校一年生になったばかりの中学生上がりの子供が考えるような、無邪気なゲーム感覚の企みによって。

そして、頭上から静かなため息が降りかかる。頭を上げると、少し寂しそうな、けれどももう諦めきった表情のソロンさんの顔が私達を迎えた。

「解っております。……ええ。ちゃんと、解っておりますとも」
諦観した、けれど暖かい眼差しが新さんに注がれている。まるで悪戯をした子供を最後には許してしまう親のような、仕方ないなつて顔。

その表情に、これまで新さんがどれだけこの人に目をかけられてきたのかが、解るような気がした。そこには私の知らない、今まで積み上げてきた沢山の思いが詰まっているのだろう。それはきつとソロンさんだけじゃない。この国にいる、新さんに関わった人々全てが抱えている、共通の思いだ。

新さんはこの国の人に心から愛されている。必要とされている。

私は今回のことで改めてそれを思い知った。本当に痛いほど、思い知った。

そして一連の事件はひっそりと終着を迎え、残りの数日間で新さんはお世話になった人々に別れを告げていった。私はそれを彼の横で、彼との別れに多くの人が涙する姿を見届けた。誰も彼もが彼との別れを惜しみ、けれどその別れすら最後には祝福に代えて、沢山の笑顔を最後の手向けにと彼へ贈っていた。

最後のお別れのための夜会が終わり、新さんは今度こそ本当に全ての人と別れを済ませた。一応その隣には私もいたけれど、もちろん蚊帳の外で、それどころか私がいることさえ気づかれていないような状態だった。

ま、いいんですけどね。役割の終えたモブに誰も用なんかありませんよね。へーへー。ぐったりしながら、私と新さんは少しだけ抜け出して休憩室のソファに座り込んでいた。

「あー本当に茶番もいいところだった。疲れた。新さん肩揉んで」「うん」

新さんに振り回された数日間を思い出しながら嫌味に言うと、新さんは特に嫌な顔をせず私に私の後ろに廻って肩を揉み始める。力の加減も申し分なく、的確につばを押さえている。こんなところまで手際がいいのはどうかと思う。気持ちいいからいいけど。

「姉さん」

「んー？」

「ありがとっ」

二人きりの部屋に、新さんの静かな声が、しんみりと伝わった。

私は新さんに背中を預けて項垂れながら、解りきっているその意味にこっそりと苦笑を漏らした。

「一応聞くけど、なんで？」

「うん。俺、姉さんがああ言ってくれると信じてたけど、本当は怖かったから」

言いながらも、肩を揉み続ける。優しい、新さんの指。その指が私を傷つけたことなんて一度もない。声も、仕草も、何もかもが、私に優しい。どうしたって、触れるときも話しかけるときも、いつももどかしいくらい、そっと私を包み込む。

それはきつと優しいからだけじゃない。新さんはきつと、私が怖いのだ。それを知りつつも、その感触をかみ締めながら、私はゆるゆると首を振る。

「お礼なんて必要ないよ。あの時は叩いてごめんね、新さん」

解っていた。新さんがあんなことをした理由も、本当はゲーム感覚なんかじゃなかったってこと。どうにかソロンさんに解ってほしくて、あんなことを企んだのだということ。きつと最後には、「自分はこの人間なのだから気にかける必要はない」と思わせたかったのだということ。

新さんは、だって、いつだって相手のことを思っているから。そこには悪意なんて微塵もない。新さんは新さんなりのまっさらな心で、いつも相手と向き合っている。そう。私と違って。

「姉さん」

「……なに？」

ふと、肩を揉む力が止む。その肩に、くすぐりたい感触がさらりと乗る。新さんの頭が、甘えるように私の肩に乗っていた。

「あの手紙、嘘なんだよな？」

手紙　とは、脅迫状のことか。まだそんなこと覚えていたのか。ふつと笑って、答えの代わりに新さんの頭をぼんぼんと撫でた。新さんは私の肩に両手を乗せて、そのままポツリと呟く。

「帰ったら、言いたいことがある」

穏やかな、けれど熱の籠もったその言葉。聞き返す前に、新さんは再び呼ばれて席を外した。

そして私はそこに取り残され、肩に残った新さんのその感触を忘れまいと、いつまでもずっとそこに座り込んでいた。

そして、最後の日。見送られるのは苦手だからと、向こうに送ってくれるソロンさんだけを伴い私達は神殿を訪れた。

ソロンさんは宝玉を新さんに託して、陣の上に立つように促した。新さんと私は陣の中心に立ち、ソロンさんが呪文を唱えている横で新さんが呟く。

「姉さん。いや、カ」

「新さん」

新さんが何か言いかけたのを遮った私の声と同時に、ソロンさんが「送ります」と告げた。それとともに、淡い光を放ちだす陣の内側。

私はゆっくりと新さんを見上げ、微笑んだ。きっと今まで生きてきた中で一番、心のそこからの、とびきりの笑顔で。

「さよなら新さん」

大き目の一步で後退し、陣の外側へ。その瞬間に、あの時と同じ光を放つ陣。啞然とする新さんをそこに置き去りにして、そして私は 異世界に一人、留まった。

一条姉

『拝啓新さん。』

事件です。姉さんはむきむきごっつな可愛いゴリラさんたちに拉致されてしまいました。でも安心してください。姉さんは無傷です。というかその筈ですよ。君が仕組んだのですから。姉さんはそれくらいお見通しです。むしろお見通しなのも新さんはお見通しなのでしょうね、きっと。姉さんは些か不愉快です。後で覚えていらっしやい。

さて、この脅迫状を読んでいるということは、今頃私は新さんの読み通り神殿にいることでしょう。知ってますよね。はいはいなんでもお見通し。はい。

それで、私には新さんが何を企んでいるのか知っています。とうか知っているから見抜いているからこんなことを企んだのでしょうか。もういい加減にしてください。どれだけ読者と作者をおちよくれば気が済むのですか。読者の皆様はともかくも作者はあまり頭の回転がよくないのでこれ以上の複線は勘弁してやってください。そろそろボロが目立ってくる頃です。

さて、では、色々とお互いさぐりーので解りきっているくせに何故あえてこの脅迫状を残しておくかという、用途はもちろん脅迫状ですので、私は新さんを脅迫しなくてはなりません。なので心して脅迫されてください。

はい、では、新さん。もしも新さんが私の本音を聞きだしたくてわざと遅れてくるというのなら、私は一人で帰ろうと思います。その際は、新さんを二度と帰れないようにしてくださいとソロンさんにきつく申し付けておく所存です。

ソロンさんにしても願ったり叶ったりですよね。ソロンさんをはじめ多くの大人をおちよくった罰です。せいぜい必死こいてこちらに来てください。間に合うといいですね。

それでは長くなりましたが、新さんが間に合うことを楽しみにしつつ、この辺りで筆を置こうと思います。道中お気をつけて。

P・S・それでもやっぱり遅れてみようとか、どうせ姉さんの脅しに過ぎないだろうとか思われては心外ですので、私の本気であるということを示したいと思います。信じるも信じないも自由ですが、私の本気の程はお分かり頂けるかと思えます。

【真実を申し上げますと、私は新さんのことが大嫌いです。ですから貴方が帰ろうと帰れまいと構いません。どうとも思いません。なので安心してゆっくりと神殿へいらっしやい（^^）ノ】

いかがでしょう。楽しんでいただけました？ それでは今度こそこれで終わります。さようなら。

敬具

陣の外へ一歩後退したその瞬間、新さんの表情がさっと変わった。そして私はその表情を見て、思い出した。あの夏の日、私は何を言ったのかを。何を、したのかを。

新さんはその時と全く同じ顔をしていた。ありえない光景に凍りついた。そんな顔。

私は一人、取り残された。いや、自ら残ったと言っべきだろう。この、私を必要としていない、私のことを誰も知らない、何の縁もゆかりもない異世界に。

そしてやっぱりその最初の目撃者は、ソロンさんだった。新さん

が行ってしまった後、残った私を呆然として見つめていたけれど、慌てて私の方に駆け寄ってきた。緊迫した状態で何かを切々と訴えかけてきたけれど、私には何を言っているのか解らなかった。もう、言葉が通じなかった。

「ごめんなさい。ソロンさんが何を言っているのか、私にはもうわからないうです」

日本語でそれを伝えると、ソロンさんは愕然とした表情で私を見た。言葉が伝わったわけではなく、私が突然意味の解らない言葉を話したことによって、言葉が通じなくなったことを理解したのだろう。それでもその切迫した眼差しが言っていた。

『どうしてこんなことを』

解りきっていたことだけに、苦笑しか浮かんでこなかった。

ただ、もう何を言ってもソロンさんには通じないし、通じたとしても私は彼に教えるつもりはない。だからできるだけ深々と丁寧に、お辞儀をして、ソロンさんから離れた。背を向けた私にソロンさんは何かを言っていたけれど、私は振り返らなかった。

言葉が不自由になったのはきつと、それまでは新さんが何らかの形で通訳のようなことをしてくれていたからなのだろう。今更それを知ったところで新さんはいない。仮に知っていたとしても、それでも私はここに留まっただろう。ここに来たときから、そう決めていたのだから。

そうして神殿の中を歩いていると、あの時の白い薔薇の女の子が柱の陰からじつと私を見ているのが見えた。不思議そうに首をかしげ、それでも私に駆け寄ってきた。

何かを持っている。あの白い薔薇だ。何事かを言いながら、きらきらとした眼差しで私に差し出してくる。今度のその薔薇には、傷一つついていなかった。

「ごめんね。それはもう受け取れない。新さんは、もうこの世界にはいないの。ここには私しか、いないの」

どうせ解らないとは思いつつも、そう告げて薔薇は受け取らなかった。彼女は訳がわからなそうに私を見上げていたけれど、私はただ苦い微笑を向けるしかなくて、逃げるようにその場を去った。

私は早く 神殿から出たくてたまらなかったから。

神殿を出るまでは、幾人か顔見知りの人がいて私を不思議そうに見ていたけれど、出たしまえばなんて事はなかった。人種が違う人間なのだから見られることには変わりなかったけれど、その眼差しにはそれ以上の意味は込められていないように感じた。そしてそのまま、とくにあてがあるわけでもなく歩いた。歩きながら、考えていた。

『どうしてこんなことを』

新さんの目もそう言っていた。

「どうして」って。それは、そうだ。私が残るなんて、新さんは微塵も思わなかったはずだ。だってこの世界が必要としていたのは、新さんだったんだから。

そんなのは解ってた。でも私は残った。こっちがよかったからなわけじゃない。あつちが嫌だったから残った。もつと言えば、新さんのいる世界が嫌だったから。それだけだ。だからもし新さんがこちらに留まると言ったらならば、私はあつちに帰っていたことだろう。最初から、新さんの答えと共に私の答えも決まっていた。ううん。きつと、多分、新さんよりも先に決めていた。だってこの世界にきたその時から、そう決めていたんだから。

どこへともなく歩きながら、今までに感じたことのない心地をじわじわと感じ始めていた。不快ではない。それどころか晴れ晴れとして、とても清しい気分。

そうだ。これが、開放されたってことなんだ。新さんから、新さんを取り巻く全てのものから、開放された。そんな気分。すごく自

由で、晴れ晴れとして、気持ちがいい。雲ひとつない空のように、爽快な気分だ。

「してやったぞー」

最後に見た新さんの顔を思い出して、独り言ちる。泣きたいような、笑いたいような気持ちを抱えて、空を見上げた。

私の空。私だけの空。私しかない、私だけの世界。新さんのいない世界。

見上げた空は、どこまでも澄み切っているような気がした。

『お姉さん』

『一条君のお姉さん』

『新君のお姉さん』

『新の姉ちゃん』

『一条の姉』

『一条姉』

私は『お姉さん』なんて名前に改名した覚えはないし『一条姉』という呼び名でもなんでもない。もちろんあなたの姉でもなんでもない。私は楓。一条楓。元は、佐藤楓。

でも誰も覚えていない。覚えない。知らない。私の旧姓が佐藤であることも、名前が楓であることも、本当は新さんの姉ですらないということさえ、誰も知らないし、聞かない、覚えない。

それだけじゃない。彼らは呼び名だけではなく私本人ですら、新さんを繋ぐパイプかなにかとしか捉えていなかった。私に対する質問も興味も話題も、何もかもが新さんに関することばかり。私自身のことなんて微塵も聞いてこないし、興味すら抱かない。

ごくたまにそうかと思えば、なんてことはない、新さんの姉だから

らという理由で興味をもたれているだけ。期待も、羨望も、嫉妬も、興味も何もかもが、新さんを媒介して向けられてくる。

私が私だからという理由で目を向けてくる人なんて誰一人としていなかった。誰もが私を一条楓という存在ではなく、『一条新の姉』として認識した。

それだけなら良かったのかもしれない。私が我慢していれば済むことだった。気にしなければどうということとはなかった、のかもしれない。

けれど私はある日突然気づいてしまった。周りだけじゃない。私、私本人が、自分自身を一条新の姉という存在として認識し始めているということに。何を考えるにしても、私は新さんの姉だから新さんのお姉さんだし。新さんのお姉さんとして。気づけば思考の基準が何もかも新さんを基準としてあてられていた。

ぞつとした。私が私じゃなくなっていることに。佐藤楓も、一条楓ですらもなくなっていることに。

何をするにも新さんの影がちらつく。どんなときでも新さんの存在が私自身を覆ってしまう。とても恐ろしくなった。いつのまにこんな変貌を遂げてしまっていたのか。もはや私は私を私と呼ぶことすらできない。私ですらなくなっていたから。

だったら私は誰。一条の姉なんて知らない。私は一条楓。佐藤楓でも思い出せない。新さんに出会う前の自分がどんなだったか思い出せない。どんなことを感じて、どんなことを思っ、どんなことに怒り、悲しみ、笑い、喜んでいたのか。それすら解らない。

私は何なの。どうなってしまったの。これからどうしたらいいの。新さんの姉として生きていけばいいの。それってどういうこと。どんな生き方なの。それすら解らない。

もう何もかもが解らない。私がどんどん消えていく。私が私でなくなつて、見る間もなく霞んでいく。

私は一体何なの。新さんを無くしたあとに、私の中に何が残るの。それとも、何も残らないの。私ですらも残らないの。

誰か助けて。怖い。嫌だ。

新さんが、新さんがいるから。新さんのせいで。新さんのせいで私が消える。

返して。元の私を返してよ。新さんなんかいなければよかった。本当は私の弟でもなんでもないので。ただの赤の他人なのに。

新さんなんか嫌い、大嫌いだ。消えて。消えてよ。私の中から、私の周りから消えて。新さんなんか私の世界から消えてしまえ。消えて、いなくなつて、一生私の前に現れないで。一生私と関わらないで。

新さんなんて嫌い。大嫌い。憎たらしくて恨めしくて疎ましくてたまらない、私の弟。

でも、新さんは消えない。消えてくれない。消すこともできない。ずっとそこにいて、私の弟として輝き続ける。どんなに願っても、消えてはくれない。

だから私は考えた。新さんが消えないなら、私が消えてしまえばいい。私が新さんの世界からいなくなつてしまえばいい。そうしたら私は、私の世界には、新さんがいなくなる。私だけの世界が手に入る。

だから留まつた。後先も考えず、他の望みも不安も展望も何もなのまま、殆ど衝動的に残つた。何の計画性もない行動。これこそが新さんの予測していなかった鬼門。私の一世一代の大勝負。

そして勝つた。もうこの世界には新さんはいない。新さんと離れて、私だけがいる。私の世界に、私だけが存在している。

それがどんなに嬉しくて、ほつとして、たまらない気分か新さんにわかる？ 心が震えるの。破裂しそうな。嬉しくて哀しくてどうしようもなく、壊れそうなくらい苦しくて心地いいの。こんな

に不安で、こんなに素敵なことつてない。

後悔なんて微塵もない。この先例え後悔することがあったとしても、私は何度でもそれでも、と思う。思い直しては喜びに震える。かみ締める。立ち上げられる。例え時間を巻き戻しても、私は何回でも同じことを繰り返す。逃げたと思われてもいい。自分勝手だと詰られてもいい。馬鹿だと笑われてもいい。それでも今の私の悦びに比べれば、そんな事は瑣末に他ならない。

私は新さんから解放された。新さんを取り巻く世界から、新さんの世界から解放された。新さんを嫌い、憎み、呪う自分から解放された。

もうあの善良な弟を憎まなくて済む。嫌わなくて済む。

ずっと苦しかった。あの優しく純粋な弟を憎むのが辛かった。でも止められなかった。どんなに理不尽でも際限なく憎み続けた。恨み続けた。

でももうそれも今日でお終い。もうそんな自分からも解放された。明日からはきつと、遠い世界で生きる弟を憎むことなく思い続けることができる。素直に幸福を祈ることができる。

私は、私の心は自由だ。自由になったんだ。

知らず知らずのうちに零れていた涙に気づいて、それを拭う。晴れた空気を吸い込んで、前を向いた。そのときだった。

「カエデ！」

その名を呼ぶ人。呼んでいた人。私は、一人しか知らない。

自由になつたはずのその心で、その身体で、私は立ち尽くした。

自由な空の下、何かに捕らえられたように、その場を動けなくなつてしまった。

カエデ

その日は蝉が鳴いていただろうか。それとも鳴いていなかっただろうか。そうであつたよな気もするし、そうでなかつた気もする。ただ六月にしては非常に蒸し暑く、鬱陶しくなるほど陽光の照る日だつた。

土曜日の午後には新さんは自室で本を読んでいて、暇を持て余した私が新さんの部屋に押し入り不躰に室内を物色していたそのとき、それを見つけた。

「なにこれ」

見ると、進路希望調査書と太目の題字が記された紙が、机の上に無防備に置かれていた。当然それが目に付き私は新さんの許可もなくそれを手に取り、希望欄が空欄なことにいち早く気がつく。

振り返ると新さんは先ほどと同じように本を掲げたままの体制でいたが、しかし視線はこちらを向いていた。私のなかに悪戯心がむくむくと湧き出し、新さんの前にその紙をぺらぺらと掲げて行儀の悪い笑みを彼に向けた。

「新さん駄目じゃない早く提出しなきゃ。まだ決まってるの？
進路」

人事だから言える台詞だ。自分もちょうど一年前には同じような悩みを抱えていたくせに、すっかりとそれを忘れて無遠慮にもからかおうとした。そんな私を一瞥して、けれどまた本に目を戻す振りをして新さんは答えた。

「決まってるよ」

意外な反応に、思わず興味を引かれる。新さんは既に幼稚舎からの私立校に通っていたから、当然エスカレーター式でそのおぼつちやま御用達の付属高校に通うものだとばかり、私は思い込んでいたからだ。どうもそうではないらしい弟の反応に、私はついいつつ

こんで聞いてしまった。

「じゃあ志望校はどうするの？」

空欄。何か、他に迷っている高校があるのか。もつと難関？ それとも海外？ 他意も何も無いつもりで、聞いてみた。本当に、何も考えずに。

そんな私を知ってか知らずか、新さんは表情を変えることなく、いつものようにそっけない態度で答えた。思いもよらない、その候補を。

「楓と同じ」

おなじ。

何を、言われたのか。一瞬、訳がわからなくなった。

私と同じ？ 同じって？ 公立校？ 推薦じゃなくて受験？ A
Oでもなくて？

本当に阿呆のような混乱を帰して、けれどすぐに理解した。いや、解っていた。彼が何のことを言ったのか、すぐに解った。解らないはずがなかった。つまり、そういうことだ。彼、は、私と、同じ。私と同じ、高校に。私の通う高校に決めた、ということ。そしてそれはおよそ一年後、新さんが私の元にやってくる、ということ。

新さんが、私の。私、と。

「な、な、んで」

うまく、口が廻らなかった。頭も。何もかもが混乱の極みで、自分が何を感じたのか、思ったのか、言おうとしたのかもわかっていなかった。ただ、私は底知れない恐怖を感じて。

「……なんでえ？」

情けない声が勝手に出てきたと思ったら、泣いていた。しかも普通に泣いていたのではない。泣き笑いだ。引き攣れた顔で笑いながら、泣いていた。零れる涙を意識せず、歪んだ笑みを浮かべていた。そんな異常な反応を示した私を見た新さんの顔。驚愕以外のなにものでもない、全てが凍り付いてしまったかのような表情。まるで絶望にも似たその表情は、およそ新さんらしくない顔だと、そのと

き私は泣きながらも漠然とそんな事を感じたのだった。

そしてその日から新さんは私の顔を伺うように私のことを『姉さん』と呼ぶようになり、そしてどんな言いつけにも逆らわない弟になってしまった。そう。私のせいで。

嘘だ。こんなの。信じない。信じたくない。だってせつかく、せつかく、やっと一人になれたのに。やっと私は私になれたのに。嫌だ。絶対に嫌だ。絶対に戻りたくない。新さんのいるあの世界になんて、絶対に戻りたくない。私はもう新さんの姉じゃない！

脱兎の如く走った。後ろを振り返らず、わき目も振らず、ただ一心不乱に走り続けた。息が切れるまで、切れてもなお、走り続けた。このまま死んでしまうんじゃないかというほど限界まで、ただがむしやらに私は逃げ続けた。私をカエデと呼ぶ、その未知の声から。

「……………は、……………」

息が切れる。切れるというより、ぶつ切れた。息を吐いているのか吸っているのかさえわからないほど、呼吸が乱れている。それほど、走った。どこへともつかず、何を頼りにするでもなく、一瞬気が遠のくほどに走った。人生でこれほど全力を出して走ったことなどない、と言い切れるほどに走った。

気づけば、全く知らない路地裏に一人座り込んでいた。どこの誰の家とも解らない玄関口の隣にある階段に座り込み、ただひたすらに身体とかみ合わない呼吸を際限なく繰り返していた。

一体ここはどこだろう。見回してみても、とんと見当がつかない。当たり前か、と自嘲の笑みが漏れる。それはそうだ。私が知っているところなんて、神殿と王宮しかない。こんなにかむしやらに走っ

てしまった今では、もうそこに戻ることすら叶わないだろう。もと
もとそのつもりで出てきたのだからそれは構わないのだが、しかし
。

「どうしよっかなあ」

途方にくれて独り言ちる。息は苦しいわ喉は渴いたわ若干お腹は
すいてきたわいいことなした。せめて神殿から食べ物物の幾つかくら
い拝借してくればよかった。それくらいのお慈悲なら、神様でなく
ともかけてくれただろうに。

今更後悔しても遅いが、自分の無計画さにほとほと呆れてため息
をつく。これじゃあアブラムさん達のことを言えた義理などない
じゃないか。むしろ私の方が相当の冒険者だ。資金ゼロ防具ゼロ道
具ゼロレベルゼロうまのふんすら持っていないビジター以前の問題
な馬鹿勇者と言える。

「とうかむしろ今の私って所謂力もって言うやつなんじゃあ。

「うわっ」

突如声上がる。それもそのはず。思った矢先に見知らぬ人登場。
それどころか二の腕がっしり捕まえられちゃってますけど。いやに
ガタイのいいそのおじさん、何か言いながら私を引つ張る。

「え、いや、ちょ、すいません。言葉わからないんです。あいどん
すぴーくいんぐりっしゅー！」

余談ですがこの文法は間違っています。英語が話せないと英語で
言う奴がどこにいますよ。正しくはググってね、よい子の皆さん
ってそんな一人コメディってる場合じゃない。しかも英語なんて
通じるわけないしそもそも英語圏どころか何語なのかすらもわから
ないというか問答無用で荷物みたいにするっずる引っ張られちゃ
ってるしああもう。

「たあすうけえてえええええ……」

危機感あるんだかないんだか情けない声を上げてみてもだーれも
見向きもしてくれない。むしろあえて目を逸らしてます、みたいな
うら若き乙女がこんなごつい男に引きずられて助けを求めている

って言うのに、この世はなんて薄情なんだろう。あ、違うか。うら若き乙女だからこそその絶好の力モなのでこうして引きずっていると。うわあ解りやすい。

解りやすいからなんだってんだ作者このやるういい加減にしてくださいマジで。難しいの勘弁とか言ってテンプレ通りにするとかこちのほうマジ勘弁です。

というかあ、あ、あ、もう駄目だ売られる買われるヤンデレ一直線トラウマルート。というかここで私が複線回収なのかふざけんなああああ。

とか思ってたらなんか背後から聞こえた。

「カエデ」

え。

え、え、え、え。

ちよつと待てまじでなにこの展開予想してないんですけどというか予想したくないんですけどこんなものってアリか。さっき全力で逃げたでしょ。回避したでしょ。フラグ叩き折ったでしょ。なんでまだ聞こえんのこの幻聴。嘘でしょ無しでしょ勘弁してよ。

再び脱兎の如く、とはいかないのが世の常人の常お話の常。リードに繋がれた犬よろしく二の腕つかまれてこれ以上進めないと。それどころか何故かぴったり止まっていますけど、みたいな。

うわあん。もうあんな雰囲気ばっちりでお別れしてきたとこじゃんマジでもうちよつと浸らせてくださいよホント空気読め頼むからああもうなんか会話してるしそんな井戸端会議するくらいならちよつと離してくれませんかね、後で戻ってくるから。その人がいなくなったら戻ってくるから。約束はしないけど。

とか言ってる間にああもうなんか二の腕掴む人が交代されてんですけど。後ろでなんか言ってるやらさつきまで掴んでた人にこやかに手振ってどっかに消えるわああもうまじふざけんなですよ一度拾ったものは責任持って自分で飼え人に押し付けるな頼むから戻ってきてええええ。

涙ながらにさっきの人攫いを見送る後ろでなにやらぶつぶつ話しかけてくるその人。勿論手はがっちり私の手を捕まえている。ああもう振り返りたくない。振り返りたくない。たら振り返りたくない。こつなつたら絶対に振り向かない手でいこう、と思つたのもつかの間、肩に手を置かれて何の苦もなく簡単に振り向かせられる。

あーもうふざけんなー。

「カエデ？」

ふざ、けん、な？

振り返つて、目の前にいた、その人。新さん、じゃ、なかった。

新さんじゃ、ない。

その人はもう一度、私の名を呼んだ。

「カエデ」

嘘。

うそ、だ。信じられない。

うそ。嘘です。嘘だよ。

だって、そんな、たった一度、だよ？ たった一度しか、言っていない。しかも一瞬。聞き取れてるなんて思いもなかった。どうせ覚えるわけないって、思つてたもん。思つてた、のに。

嘘でしょ。

もう、なんで、この人。こんなタイミング。

「アブラアム、さん」

「カエデ」

につこり。いつかの私の微笑を真似るような、満面の笑顔。

でも、私よりもずっとへたくそな、素敵な笑顔。作り物じゃない、この人らしい笑顔。

嘘、だあ。こんなの。こんなタイミング。嘘だよ。本当に。うそ。ほんと。ほんとに、居る。呼んでくれた。覚えてて、くれたんだ。

「はんそくだよ……」

私をカエデと呼ぶ人。初めて、呼んでくれた人。私を覚えていた人。私をカエデと呼んで、笑いかけてくれる人。

哀しいことに、本当に久しぶりだった。久しぶりで、久しぶりすぎて、感極まって泣いてしまった。

そんな風にいきなりほろほろと涙をこぼす私に慌てふためいたアブラムさんは何度もカエデ、カエデと呼ぶものだから、いつまで経っても涙が止まらなくて本当に困った。本当に、嬉しくて嬉しすぎて、困ったんだよ。ね、新さん。

カエデと再会

路上でみつともなくも感情に任せてぼろぼろと泣きじゃくる私に、アブラムさんはひどく困惑したように必死になって私に何かを語りかけていた。それでも何を言っているのか判らなかつたので、よく解っていない頭でなんとか首を横に振っていたけれど、それを私の癩癢か何かと勘違いしたらしいアブラムさんはそのまま、泣き続ける私の手を引いて歩き始めた。

どこへ行くんだらう。そうは思ったけれど、どうせアブラムさんだから怖いことにはならない。というかそんな甲斐性この人は持ち合わせていない。そんな失礼なことを思いつつ止まらない涙で視界もままならず、ただアブラムさんの手を握り締めて導かれるままに歩き続けた。

アブラムさんは何故だか優しく、もちろん言葉は解らなかつたけれど話しかけてくる語調がとても穏やかで、歩調ものろのろと歩く私に合わせるようにゆっくりだった。とにかく、私の顔を時々振り返っては何かを話し、時折私にカエデと呼びかけた私の涙腺を刺激しては、そのとめどない涙の粒に困ったような顔を浮かべて殊更話しかける、の繰り返しだった。

そんな事を飽きもせず続けて漸く私の涙が沈静化しかけた頃にたどり着いたところは、どこかの飲食店のようだった。泣きすぎてぼーっとしながらただ歩く私の手を繋いだまま、アブラムさんはその店の中をどんどん進んでいき、あるテーブルへと辿り着く。そこには既に客がいて席は全部埋まっていて、テーブルの上には食べかけの料理やら飲みかけの酒のようなものやらで埋め尽くされてしまっていた。何がなんだか解らない私を目に留めたそのテーブルに座っていた客達は、私を目に留めた途端目を輝かせて言った。

「カエデ！」
また。

また、だ。また、私の名を呼ぶ人。新さん以外に、私の名を呼ぶ人。新さんがいなければもう呼んでくれる人さえ現れないだろう。そう思っていた矢先に、その名を口にされる。しかも、嬉しそうに私を見て。他の誰でもない私を見て、嬉々としてその唇がつたない発音で『カエデ』と口ずさむ。

途切れていたと思つた涙がまたほろりと、頬を伝つた。

だって、名前を呼ばれることがこんなに嬉しいことなんだって、私、知らなかつたから。自分ですら時々その名前を忘れかけた。新さんが私を『姉さん』と呼び始めてからはなおさら。『楓』なんて、もう、どこにもいないと思つていた。だから、今更、呼んでくれる人がいるなんて。そんなこと思いもしなかつたから。だからこんなに嬉しくなる。こんなに、泣きたくなってくる。みっともなく、子供のように、止まらない。

私は、『新さんのお姉さん』なんじゃない。誰の姉でも、一条でも、なんでもない。私は『カエデ』。『楓』なんだ。

そうして一度は止まつたはずの涙がまた飽きもせず零れ始めるものだから、今度はアブラムさんだけじゃなくてそのテーブルにいた人全員がぎよつとして、大慌てで用意した椅子に私を座らせた。そしていやに必死な表情で何かを言いながらテーブルの料理やら新しい料理やらを私に勧めて、飲み物を殆ど無理やり持たせて、時には小さな子にするように頭を撫でたりしてなんとか泣き止ませようと苦心しているようだった。

まるで泣きじゃくる子供をどうにかあやそうとする大人みたいだ。というか、それそのまんまか。そんな事を思つて思わずくすつと笑うと、その場にいた全員がほつとした表情に変わる。それから打つて変わって皆にこにここと微笑んで私に話しかけてきて、そこで私は漸く、彼らがあのと私を攫つた人達なのだということに気がついた。

あの後どうなったのか気になつてはいたけれど、この様子だと私の願ひ通りに事態は好転してくれたい。まあ、ソロンさんは悪

人ではない。約束はきちんと守ってくれたのだらう。新さんもそれに一役買ったに違いない。

そうして暫くは彼らが話す様子にうんうんと頷いていたけれど、その内にあの時はあれほど雄弁だった私が一向に何も喋ろうとしない事に皆が怪訝な表情を浮かべ始め、そこで私は今更に身振り手振りと言葉が通じないことを示した。彼らはそれでもよく解っていないかっただけで怪訝な顔を浮かべたまだっただけで、私が落ち込んだ表情になったらまた大慌てでその場を盛り返そうとしてくれた。それが私の作戦だとは、誰も気づいていなかったと見えると、あいつも変わらず萌えるおじさん方というのが確認できて重畳だった。

そしてそのまま宴会のように盛り上がり、そんな中で私は言葉が解らなくてもなんだか楽しくて、沢山笑った。こんなに笑って大丈夫かと思って思うくらい、笑ってしまった。

それから楽しいひと時はあっという間に過ぎて、もう飲みすぎてぐでぐでんになる人やらが続出し、料理も全部食べつくしてしまつた頃合を見て、今日は解散となつたらしい。店の外で皆が私に上機嫌で口々に何か声をかけながら一人また一人と帰っていき、私とアブラムさんが最後に残った。

「カエデ。xxxxxxxxxxxx?」

もう辺りは真つ暗で、どっちがどっちだかすらも解らない。辛うじてポツポツと灯る民家からの光で道筋は解るが、それだけだ。

アブラムさんは私に向かってどこかを指差しながら何かを言っていて、私は彼が言わんとしていることがなんとなく解つたけれど、笑顔でそれを断り彼と別れを告げた。

『神殿まで送つていこうか?』

アブラムさんはきつと、そう言っていた。多分私がここに残っ

たことの経緯など何も知らずに言ったのだろう。それでも、今更神殿に行ったところでどうすることもできない。万が一にでも向こうに帰ることができるとなれば帰されてしまつのは目に見えている。それだけは避けたい。

だから私はこれからどこに行くあてもなかったというのに、無謀にもそれを断ってしまった。馬鹿だと思う。本当に馬鹿すぎる。なんの計画もなしにあんなことをしたから、今こんなことになっている。とぼとぼとどこへともなく歩きながら、まるで人事のようにそんな事を考える。

それでも。それでもやっぱり、後悔はまだしていない。これからどうしようとか、どうなるんだとか、そういう不安はある。今でさえどうしようもない状況だ。でも不思議と後悔する気にはなれなくて、まあいつか、なんて考えている。気持ちが開放されたら随分現金なもので、考え方すらも大分アウトになってしまった。

というか寧ろ、これが本当の私なんじゃないだろうか。今までは私というものが不明瞭すぎて頭がガチガチになって、だからあんな風にアブラムさんたちにも色々と細かく指図できていたのかも知れない。普通に考えればあんな状況で自分を拉致した相手と楽しくご飯、なんてありえなかったし。

でも、楽しかった。『カエデ』と呼ばれるたびに嬉しくて、けれどちょっと面映くて、いつものように上手に笑えなかった。でもその代わりに、すごく心が落ち着いた。作り笑顔で頬が引きつることもなかった。あんなに自分が自然体になれたことなんて、今までになかった。人生で一番楽しかった。そんな風に思えるくらい。

ていうか、まだまだか。まだまだこれから。これから私の人生が始まるんだ。今度こそ、私だけの。私による、人生が。

へらつと笑って、でもなあと人知れず頂垂れる。問題は、今。今が大事。幸いお腹は膨れたけど、今日は野宿かなあ。一体どこへ行けばいいんだらうとのろのろ歩いていると、後ろから声がした。

「カエデ」

「……アブラムさん」

別れたと思つたら、すぐ後ろにいた。まさか歩いてるつもりでそこから一步も進んでいなかった、もしくは堂々巡りだったというオチなんじゃ。と思つたけれど、辺りを見回すとあの店もなく、そうではなさそうに見える。見上げると薄暗い中でよく見えなかったけれど、アブラムさんは少しだけ渋い顔をして私を見下ろしているようだった。

あらら？　　なんだか雲行きが怪しい？

「xxxxx、xxxxx？」

なんだか疑るように何かを言っているけれど、よく解らない。でもこれはよくない展開かもな、と第六感が働き、また先ほど同じ笑顔でへらへら笑つて頷いて誤魔化しを図る。そして「私急ぐのでじゃっ」と手を掲げて去ろうとした途端、そうは問屋がおろさないとばかりにその手をさつと捕まえられてしまった。そしてアブラムさんは何か文句のようなことをぶつぶつと言いながら、問答無用で私を引つ張り歩き始めた。

ちよつと、ちよつとちよつと。じゃなくて、これはやばいんでないの。このパターンだと間違ひなく神殿行きでしょ。強制送還フラグでしょ。いやだああああ。一難去つてまた一難。油断させてからドーンとか作者本当に外道の極み。

だから帰りたくないんだつてば行きたくないんだつてば放つといてほしいんだつてば。そんなことを喚いてもアブラムさんは聞き入れる気がないらしく、踏み留まろうとする私をもともせず、ずるずると引きずるようにして歩き続ける。

ああもうどうしてこんなことに。いつそのこと後ろから不意打ち食らわして逃げようか。でもこの巨漢相手に不意打ちとはいえ私のへなちよこ攻撃で逃走を図るなんてヤムチャがベジータに一発当てることくらい難しいんじゃない。いやいやいやものは試しつて言つし。というか試さないと強制送還ルート直行だし。女は度胸。よしやるう！　ごめんねアブラムさん！

キャプテン翼の如く足を大げさに後ろに引いてこれでもかというほど大振りの蹴りをかます。その直前。

「カエデ」

くるつと絶妙のタイミングでアブラムさんが振り返る。妙な大勢で殺気を放っている私にもものすごく怪訝な表情を浮かべた。うわまずい気づかれたらふい打ち所じゃないじゃん。慌てて取り繕うようにへらつと笑うと、疑わしげにしつつもアブラムさんは私にくいつと顎で横を示した。

まさかもう神殿に着いたのか。ぎょつとして示されたほうを見ると、そこはなんてことはない、ただの一軒家だった。白塗りのとても小さな二階建てで、明かりはついていないらしい。箱のような形に、穴が開くようにポツポツ窓がついている。

なんだろうと目を白黒させる私をそこに置いて、アブラムさんはその家の中にさつさと入ってしまった。そのまま呆然とする私の前で、ぱつとその家に明かりが灯り、四角く切り取られた窓から淡いオレンジ色の光が漏れる。

ぼけーっとそれを見ていると、中からアブラムさんが顔を出して何か言いながら手招きしてきた。なんだろう。言われるがままにその家にお邪魔する。中はとても簡素だった。部屋の中心に丸い机と、椅子が二脚。壁際には小さな筆笥が一つと、備え付けられている取っ手らしきものに何か上掛けのようなものがかけられている。奥にも何か部屋が繋がっているらしいけれど、よくは解らない。そんなに広くもなく、一人暮らしにはちょうどいい広さだ。

そっか、ここアブラムさんの家なんだ。ああそっかあ。一人暮らし。へえー、アブラムさんって独身だったんだ。もういい年してそうなのに。

本人が聞いたら憤慨しそうなことを淡々と考えつつその場に突っ立っていると、アブラムさんがまたちょいちょいと手招きする。言われる？ がままに近寄ると、はい、とばかりに何か手渡された。

なんか、着古した、服？

「なに、これ」

思わず呟くと、アブラアムさんはなんだか懨然としながら何かいい、こつんと私の頭を小突いた。そしてそのまま何かをぶつぶつ言いながら、奥の部屋へと消えてしまった。

残された私はどうと、啞然呆然だ。一体何が何なのか。この服をどうしろと。物資？ だったらできればお金とまでは言わないけど食べ物の方が後々ありがたいんだけど。

ご飯を奢ってもらっておいで何様なことを思いつつも、持たされた服を広げる。オフホワイトの綿のシャツと、もう一枚は褪せた紺色のこれまた綿の七部丈のパンツのようなもの。どっちもアブラアムさんサイズなのか異様に大きい。サイズで言うと3LとかXLとかって感じ。

これに着替えるって？ なんで今アブラアムさんちで着替えなきゃなんないの。泊まる場所も決まっていって言うのに。

首を捻ると、アブラアムさんが奥の部屋から私を呼んだ。なにがなんだかわからずもそのアブラアムさんのいる部屋へと向かうと、そこは思ったよりも手狭でちょっと吃驚した。個室？ というか、カーテンのような目張りがされている。アブラアムさんの声はそこから聞こえてきた。そのカーテンをくぐると、むっとした熱気が降りかかってくる。中にはバスタブと、映画の中でしか見たことのない旧式のシャワーのようなものが見えた。アブラアムさんは袖をまくっていて、私に何かを言っている。

いよいよもってわけがわからなくて言葉を失っていると、アブラアムさんは私の頭をぽんぽんと叩いて何かを告げて、そのバスルームと思わしき所から出て行ってしまった。そして呆けること数分。

「あ」

そこまでされて私は漸く、アブラアムさんが家に泊めてくれようとしているのだということに、気がついた。

カエデと清濁

何がなんだかよく解らない状況、ながらも。まあ、いつか。そんな風に思い切り、遠慮なくご厚意に預かることにした。

金の猫足、とまではいかなくてもところどころちよつとだけ塗装が剥げかけたそのバスタブへと、服を脱いで入り込んだ。脱いだ服は壁に備え付けてある棚に置く。タオル、というか布らしきものもそこに置いてあったから、多分それを使っただけ、はず。

シャワーは、あの、引つ張る式。タンクがついている。これってもしや水が出てきてきやあ冷たいなんだどうしたきやあエツチ見ないでようわやめる俺が悪かったパターンだろうか。作者め。そうは問屋がおろさない。例え凍てつくような水が降りかかろうと、私は声を上げない。そんななんちゃってサービスシーンを私に易々とやらせようなど十年早い。

とりあえず、どれほど冷たいのか確認しなければ。一瞬引いたらまたすぐに引つ張って止めよう。覚悟を決めて、手を伸ばしつつちよつと身体は離してという目撃されたらなにしてんのお前というよくな格好で、イザ！ と垂れ下がるチェーンを引つ張った。

「うわ」

なんと。予想を裏切られた。お湯が出ると見せかけ実は水でしたと見せかけてやっぱりお湯でした。不覚。小声とはいえ声を上げてしまった。さすがにアブラムさんが来るような事態にはならなかったけれど、まさか作者の奴にしてやられるとは。くそう忌々しい。まあいい。どうやらモブであった私も主人公から解放されてしまえば外伝という名の物語の中で晴れて主人公のポストに納まれるらしい。まさかのまさか、どこからの複線なのかお助けキヤラ要員アブラムさんの登場で随分と進行が楽になった。きつとその先の展開が思いつかなかったからこんな安易なテンプレートに乗ったのだろう。単純な奴め。

しかし、お湯が出るといことはどこかに湯を沸かす装置がついているということなのだろうか。ここの文明ってどこまで進んでいるんだか。魔法はあるみたいだし王宮のトイレも水洗で水道設備はバツチリみたいだったしかと言って電気とかそういうタイプは見かけなかったし。この中途半端な発展というか後付設定はなに。

「……裸で考えることもないな」

ふと思いつき、人知れず恥ずかしくなってきた。まあいい。考えることはいつでもできる。とりあえず今はこのシャワーのお湯がどれほどまで使えるのかということ計算しつつ、石鹸のありかを探そう。

そうして私は全裸であちこちを物色したあかつきに念願の石鹸を手に入れ、なんと異世界独り生活一日目にしてお風呂に入るといふ快挙を成し遂げたのだった。

なんとかかすつきりして人心地ついたけれど、身体を拭いている途中でまた問題に直面した。

下着、どうしよう。アブラアムさんは着替えを用意してくれたけど、さすがに下着までは、ねえ？ 女物の下着なんか持つてても怖いし。神殿の人はブラはともかくもショーパーンみたいな下着用意してくれたのに。まさかアブラアムさんの下着を借りるわけにもいかないし、残された選択はのーぱんと使用済みを再び履くの二択。

どうしよう。のーぱん、とか。どう考えてもマニアックすぎる。

仕方がないからもう一日涙を吞んで履いて、明日何とかするしかないか。そう思いう着替えに手を伸ばして広げたその瞬間はらり、と何かが落ちた。なんだろう。紐？ 紐じゃないな。白い布がついてる。ていうかこれ。

「ぱんつ」

パンツだ。紐パンだ。多分、未使用の。

え？ アブラアムさん？ え？
とんでもない事実にまた私は呆然としてしまい、またもや全裸のままそこで暫く固まっていたのだった。

「カエデ」

お風呂から上がって部屋に戻ると、アブラアムさんは一人で晩酌をしていたのか机の上には酒瓶らしきものとまだ中身の入っているコップがそこにあった。私は戸口の辺りで止まってアブラアムさんをじーつと見ていたため、何がなんだか解っていないらしいアブラアムさんは何かをしきりに語りかけてくる。

ていうか紐ばんで。アブラアムさんってそういう趣味だったんだ。着替えはしっかり着込んでいたけれどさっと身体の大事なところを庇うようなポーズをしてみると、私が何を考えているのか察知したらしいアブラアムさんは途端に真っ赤になって何かを必死に訴えかけてきた。相当憤慨しているらしく声を大きくして喚んでいる。

もういいよ。うん。人の趣味をとにかく言うのはどうかと思うし。アブラアムさんがどんな趣味を持っていようと私には関係ないし。代えの下着があつて一応助かつたし。例えそれが紐ばんでも。紐ばんでも。大事なことで二度言いました。

ちなみにアブラアムさんの服はやっぱり大きくて、シャツは袖を何重にも捲くつたし、パンツも腰のところを紐をきっちり締めても長かったのでそっちの方も幾重にか巻いた。やっぱりアブラアムさんって大きいんだなあ、と思った。紐ばんの方はそうでもなくある程度でフィットしたけど。フィットしちやっただけだ。

「カエデ、 x x x、 x x x x x x」

ちょっと渋い顔になりながらも、アブラアムさんは私を手招きすると、近寄った私に何かを手渡してきた。陶器の壺、のようなものと棒。じゃなくて、もしかしてこれって、歯ブラシ？ 神殿でも貰ったことのあるそれ。カットされた木の棒に、硬い動物の毛のようなものがついている、それ。神殿のは白かつたけど。

ああ、歯磨き。この際使用済みかどうかは追求すると恐ろしいの
で知らないふり。多分新品、と思いたい。じゃあこれ塩かな。神殿
では塩を使って歯を磨かせてもらった。ものすごくしょっぱかった
けど、歯磨き粉が無いらしいので仕方が無い。

そうして壺の中を改めた途端、私は、すぐにふたを閉めた。なに
この匂い。香辛料？ 色々混ざりすぎじゃない？ なんかありえな
い色してたし。塩じゃないの？

ぱっと見ると、アブラムさんはなんか文句あるのか、と見てく
るので、大人しくそれを、けれど恐る恐ると摘んで、歯ブラシもど
きに振り掛ける。

そしてそれを口に入れてからの私の葛藤は、もはや、語るに及ば
ない。なんというか、思い出すだけでも胸焼けと唾液が止まらな
くなる、とでも言えばいいのか。とりあえず、終わったときには死ぬ
ほど口を濯いだ。痕跡と臭気が限界まで消え去るほど。どうにも筆
舌しがたい、未知の体験、もとい地獄の精神的拷問だった。昔の人
は偉いなあと、思います。はい。

そして地獄の歯磨きを終え、アブラムさんは二階へ通じている
であろう階段を上っていった。それに大人しくついていくと、そこ
にはベッドらしき寝台があって、アブラムさんはその傍に立って
また私を手招きした。

もじゃ、いいじゃないかへっへっへっへっへっきやあやめて私はじめ
てなのくんずほぐれつぎっこんばったんなんてことになるのでは。
ここまで来てエロ漫画ルートはないでしょう。

お馬鹿なことを考えつつも結局「どうせアブラムさんだからい
つか」という失礼な信頼を持って素直にそこに近づくと、アブラ
ムさんはそこに私を座らせて、肩にかけてあつた布でまだ濡れてい
た私の髪を甲斐甲斐しくも拭いてくれた。

結構力が強くて頭がぐわんぐわん揺れるんだけど、初めての経験
が新鮮で私はされるがままになっていた。人に頭を拭いてもらっ

てこんなに心地のいいことだったんだなあ。なんだかデジャヴのような、既視感にも似た郷愁のような念が、私の心にするりと入り込んでくる。

「アブラアムさあん……」

呼ぶと、ぐらぐら揺れる頭の上で、返事らしき声が聞こえる。どうせ解らないと思いつつ、目を閉じる。

「私ねえ、家出てきたんだ。ていうか、世界出？　というよりも新さん出かなあ」

揺れているせいか、頭の中もぐるぐるだ。なにがなんだかわからず、それでも巡る言葉を一つ拾っては、ピースを当てはめるように呟く。

「なんかさあ、何が嫌ってわけじゃないんだけどね？　何もかもが嫌になって。ていうか、私かな。私が、自分が、嫌になって、さあだから、ね？」

嫌に、なつて。嫌で、たまらなくて。呪って、恨んで、憎んで、嫌って。どう考えても理不尽で、でも決して抜け出すことのできない泥濘にいるように、際限なくそれを繰り返した私。

新さんにどんなに優しくされても心のどこかで冷ややかにそれを受け止めていたし、何をしても醒めていた。終いには彼の善良さや潔白さが疎ましくて憎たらしくて、それを見せ付けられるたびに心が凍った。きつと、多分、新さんはそんな私の本質さえ見抜いていた。それでも私への態度を変えない彼のそのお優しさが、益々私の心を棘しかない茨で覆い尽くしてがんじがらめにしてしまう。

そんなことの繰り返し。どんどん自分が薄汚くなっていくのが解った。彼が善良であればあるほど、優しくければ優しくするほど、私の心は真っ黒に染まっていく。底なし沼のようにどこまでも。

そんな自分が嫌だった。どうにか彼のように善良であろうと心がけることもあった。それでもそんな心がけなんて新さんを前にすればすぐにメッキのように剥がれて、醜い心がさあこれが本性だと言わんばかりに自己主張した。

彼は鏡のような存在。だから彼に映し出された私の本性は、目を背けたくなるほどに醜悪なそれをさらけ出していた。私はそれからずっと目を背けていたけれど、あの夏の日に限界を迎えてしまった。きつと、多分、新さんのあの顔は、私の醜い姿を垣間見てしまい恐怖したことにより、浮かび上がった表情なのだろう。そして私はその時に私自身ですらも、新さんを介して自分自身の醜さにやっとな気がついた。

それからもう怒涛のようだった。私のそんな姿を垣間見せた新さんを憎んだし、恨んだし、責任をなすりつけた。こんなのは自分じゃないと何度も自分に言い聞かせたこともある。それでも新さんがいる限りそんなものは全て一蹴され、何度でも同じように醜い私が映し出される。その繰り返し。

新さんは目を追う事に醜さを増す私に気がついていて。だからこそきつと恐れて、私の言うことをなんでも聞くようになっていた。そうすれば私の怒りも、増していく醜悪な感情も納まるだろうかと、そう信じていたのかもしれない。それでも、そんな新さんの優しささえも私の心を刺激する。何をしても、新さんが新さんである限り、新さんが私の傍にいる限り、そのおどろおどろしい感情は納まらない。

そんなことばかりを繰り返してもう何もかも余すところなく真っ黒になつたかと思っていたその頃、その転機は訪れた。新さんの異世界召還。御誂え向きに、新さんの役割はもう殆ど終えていた世界。そして新さんの思惑やソロンさんの憂いを知ったとき、私の中の醜い化け物が悪魔のように囁きかけた。

『新さんから決別するチャンスだ。それと一緒に一矢報いてしまえ』

汚い囁きだった。それでももう殆ど真っ黒に染まりきっていた私の心に、躊躇などという良心の欠片さえも残ってはいなかった。だから決行した。新さんの思惑に乗る振りをして騙し、ソロンさんを

も利用し、最後の最後で新さんを笑顔で裏切った。ずっと言いたかった言葉も言えた。

『さようなら』と『大嫌い』。

夢にまで見た、私にとつては最上の言葉。新さんにとつては最低の、恐らくは聞きたくないなどなかっただろう言葉。新さんが私を慕っていたのはわかる。何が良いのかこんな姉を姉として扱ってくれていたことも解っている。私からどんな仕打ちを受けようとも家族として、新さんは私を大切にしてくれた。

でも。それでも。私の憎しみはそれすら利用するほどに卑劣で、汚辱にまみれていた。だからこれ以上のない傷をつけるために『大嫌い』を。忘れることのできない痛みを与えるように『さようなら』を。一人で向こうに帰って新さんはどんな顔をしていたのだろう。想像すると、罪悪感よりも先に愉悦の笑みが浮かんでくる。

全く汚い女だ。気にかける価値もない、心のそこから腐りきっている最低の人間だ。

新さんから離れてしまえばこの心の醜さも浄化されるなどと期待していたのだろうか。愚かにも程がある。元々が私の本性だったものが、新さんがいなくなったこと如きで消えるわけがない。むしろ新さんという大義名分を失い、これでもかとはかりに顕著になって現れてしまった。

これが私の真実の心。誰よりも何よりも醜い、一条新の姉だ。

そう、思っていた時に。

『カエデ』

聞こえた言葉。名前すら失った化け物に、再びそれを取り戻して与えてくれたこの人。こんな私に、何の気負いもないまっさらな笑顔をくれた人。

新さんと同じ善良な心で、けれど新さんとは違う、着古した服のような暖かさのあるその心で私を包んでくれた。受け入れて、何度も名前を呼んでくれた。たった一度言っただけのその霞んだ名前を。たった一度行動を共にしただけのその女を。私を、『カエデ』だと

認めてくれた人。

アブラアムさん。不恰好で、飾らない、清い心を持った人。

「アブラアムさん……ありがとう」

右に左に揺れる視界。締めまりが悪くなり勝手にほろほろと散る涙を見送りながら、その言葉を漸く呟いた。

アブラアムさんは私の心を知ってか知らずか頭を拭くのを止めて、その無骨な手からは想像できないほど優しい手つきで、乱れた髪を撫で付けてくれた。まるで泣いた子をあやす親のように、本当に暖かく穏やかなその手のひらで。

カエデとほんの小さな気持ち

「ひ、ひ、」

ひゃーああああああもおおおお。

思わず口から漏れた言葉をなんとか心の中に押し止めて、さほど広くないベッドの上でごろごろと右に左に悶絶する。その度にベッドがぎしぎし軋むため、はっと我に振り返りぴたっと止まる。そしてまた思い出してひああああああもおおおお。以下繰り返し。

なーんでこんなことになっているかというとき、あの、あれ、あ、あ、あああぶ、アブラアムさんが悪い。あの人が悪い。あの人がいけないかった。うん、もう。

ひひゃああああああもおおおお。

つまり、遡るとほんの数分前のことになるんだけど、あの後。。

どうにも、おかしい。この異世界に留まってから、涙腺が緩みっぱなし。というか、頭のねじがはずれている、というかなんといいか。

人前で泣くとか、大っ嫌いなのに。今まで色々あったけど他人の前でも新さんの前でも絶対に泣かなかった。泣くのはいつも一人きりになってから。悔し涙ばかりで泣いてるうちにすぐ馬鹿馬鹿しくなつて勝手に治まっていたものだけど、今は寧ろどうやって治めるのかとんと見当もつかない。本当に困る。勝手に出てきては洩れるまで止まらないんだから。

なんだかもう私の涙にも慣れたのか、それとも泣き虫認定されち

やったのか、アブラムさんは慌てることなく私を落ち着かせるまで根気よく相手をしてくれてるし。調子が狂っていつのまにか涙も引っ込んでしまった。

「カエデ」

涙と一緒に髪の毛もあらかた乾いた頃、アブラムさんがぼんぼんと枕を叩く。

寝ろってこと？ でもこっつてアブラムさんの寝床なんじゃあ。心なしかおっさん臭い、いや男臭い気がするし。いや寧ろここからピンクモード突入？ アブラムさんと？ 嘘嘘、それは勘弁。

冗談はともかくさすがに寝床占領は悪いとジエスチャーで断つてベッドから降りようとするも、アブラムさんに小突かれて難なくベッドイン。あつという間に枕に頭が沈み込み、ご丁寧に掛布を肩まで引き上げられてしまう。

もう、ゴーインなんだからあ。じゃあ一緒に寝る？ とばかりに掛布を広げてさあどうぞとしてみるものの、もう私のノリに耐性ができてしまったのか、アブラムさんはハイハイもういいからと広げた掛布をきつちり元に戻してくれた。ちっ、つまらん。また次のパターンを考えるとするか。

そんな企みを頭の中で組みかけたとき、アブラムさんが、私の髪を撫でるように、梳いた。

「xxxxx、カエデ」

余談、だけど。

アブラムさんは、クリーム色に似た金髪で、水色の目をしている。熊さんみたいに大きな体躯の癖に、瞳は案外つぶらで可愛らしい。外国人らしい高い鼻筋に、ちよつと厚ぼつたい唇。顎には無精髭がちよつと生えていて、きつとそれが彼を余計に老けさせているに違いない。

それでね。

そんな、彼の顔が、近づいたの。近づいて、私の頭の上に屈みこんできて、男くさい立派な喉仏にうわあって目を取られている隙に、

ちゅって。額に押し当てられる、意外と柔らかい、あの厚みのある唇。

それで、さりげなく頬を一撫ぜしたアブラムさんは天井にかけられていたランプを取って、颯爽とそこから去っていった。多分、彼は、おやすみって言うていたんだらうと思う。

でも、でもね。なんなんですかああのでこちゅーはあああああ。

と、いうわけで、目下ひゃああもおおう中なのです。

だってだってだってなんでいきなりあんなあんなことするとかもう不意打ちどころの話じゃない。まさかアブラムさんからフラグが立つとか誰が予想しました？ しないよね。するわけない。というかあの人ただのお助けキャラでしょ。そこるところどうなの作者。というかそれを知ってどうするの私ああもうなんかまんざらでもない自分が一番わからない。

ていうかまんざらでもないとか向こう絶対そんなつもりないし。よくあるあの外国人のおやすみのちゅーみたいなノリに違いない。絶対そうだ。

くそうアブラムさん天然誘い受けなのか。襲って欲しいのか。そうとなれば私は攻めの姿勢も辞さない覚悟ですが。ご期待に添う気満々ですが。ああもう混乱しすぎて自分が何を言っているのかさえ解らなくなってきたああもおうきいいいいい。

「……バカ」

ぼそつ、と口から漏れる。アブラムさんじゃない。私。私、が、馬鹿。

なんか、もう、呑気すぎる、っていうか。気持ち自由になった途端、これだ。ちょっと暴走気味なんじゃあ、ないだらうか。調子に乗っているというか。私、こんなキャラじゃなかったし。

もう本当に、前とは違う意味で自分がわからない。いったい何が本当の自分だったんだらう。今の私って、なんなんだらう。しかもこの意味不明な自分が結構、嫌じゃないし。気づけば、にやにやと

締めりのない笑みが口元に浮かんでいる。何が嬉しいんだか、いつの間にか哀しい気持ちも泣きたい気持ちも切ない気持ちも吹っ飛んでしまっている。

むしろ暖かい。心の中がぽかぽかしてる。変なの。でも、なんだか楽しい。楽しくなってきた。まだ何か起きたわけじゃない。でも、ほんの少しだけ、前とは何かが違う。気がする。そしてその変化が嫌じゃないし、嫌いじゃない。むしろ嬉しい。何が、ってわけじゃないけど。何がってわけじゃない、けど、何か嬉しい。何か、きらきらしてる。私の心の中で。

「……ふふ」

いつかの時のような笑みが漏れる。一人きりで泣いたあの時。でもあの時とは全く違う、気持ち。

ああ、いいなあ。なんかこういうの、いい。こういうのが良かったの。劇的な変化でなくていい。何かすごいことが起きて欲しいわけじゃない。ただほんの小さなこと。

そう、例えばこんなおままごとみたいな、ときめき、とか。ちょっとだけ予想外な出来事に、簡単に気持ちが揺らいじったり。名前を呼ばれて嬉しかった、とか。世話を焼かれてちよっただけ甘えちゃう、とか。慣れないことをされて吃驚したけど嫌じゃない、とか。こんな、普通の女の子らしい、まるで乙女、みたいな感情。

おかしいの。あんなにどろどろで汚くて真っ黒で醜く見えた私の心なのに、今だってまだそれは消えずにそこにあるのに、まるでもう一つ心があるみたいに、私の中にまっさらな感情がある。少しも汚れていなくて、傷もでこぼこもなく、染み一つない綺麗な気持ち。

なんて言うんだろう。なんと呼べばいいんだろう。解らないけど、すごく心地のいい感情。ずっと持っていたくなるくらい、ぽかぽかと暖かい感情。素敵。本当に、素敵。こんな私でも、こんな気持ちを持てるんだ。こんな気持ちがあったんだ。嬉しくて嬉しくて、切ないくらい甘い気持ちだ。

ああ、いいな、これ。すごくいい。きつかけがアブラアムさんっていうのが、ちょっとアレだけど。でも私案外ムキムキタイプ嫌いじゃないし、別に面食いでもないし？ 相手がアブラアムさんでも、まあいつかあ、って感じ。

ラブコメとか、楽しそうじゃない？ もしくはほのぼの系とか。そうやってゆっくり暮らして、一から『カエデ』として自分を作り上げていくの。そりゃ、まだ私の中には化け物みたいな感情があるよ。でも、このまっさらな気持ちがあれば大丈夫、な気がする。これを大事に、時間をかけて育てていくの。そうすればこんな私でももつと真つ当な人間になれるかもしれない。望んだ心を持つ人になれるかもしれない。そうしたら最後には、もしかしたら。

そこまで考えて、ふるふると首を振った。今はまだ、考えるのは早い。まだ始まったばかりなんだから焦っちゃ駄目。これからだよ。私の物語はこれから始めていくの。これから作り上げていくの。私が望んだ、私だけの、この世界で。

そんな事を思いながら、目を閉じた。ぼかぼかと心地のいい気持ちを抱えていたら、案外すんなり眠れた。何か夢を見たような気がするけれど、私はそれを覚えていなかった。覚えなかった。それがどんな夢だったのかを。

異世界二日目。正確には違うけど、気分的には二日目なのでカウントは2でよろしく、読者の皆様と作者このやろう昨日はよくもでこちゅーなんぞ仕掛けてくれたなでかしたおはよういい朝だね。まあいい朝といっても、朝から一悶着あったわけだけど。

何がつてまあ、最初は良かった。洗顔と地獄の歯磨きを終えて出てくると、アブラアムさんが世話焼きよろしくミルク粥というなんか本人からは想像つかない可愛らしい朝ごはんを用意してくれてい

た。そのときはちょっと新妻を持った旦那気分でそれを頂いたんだけど（ごつい新妻が居たもんだ）、でもその後が駄目。

それを食べ終わった私にアブラムさんがしたことは、なんだかよく解らないお説教。言葉は解らないはずなんだけど、何を語っているのかなんとなーく読めてしまった。アブラムさんは私に向かつて切々と、女の子一人が金もない寝床もない同伴者もいないままその辺をうるつくなだとか、何があつたか知らないけれどさっさと王宮へ帰れだとか、何かしたんなら俺も一緒に謝ってやるから、な？　だとかそんなような使い古されたテンプレを飽きもせず大真面目に私へと語ってくれた。

なんで解かるかってアブラムさんが言いそうなことなんか言われなくても予想がつく。終いには右から左の私に業を煮やしたアブラムさんが私の手を引っつかんで外に出ようとしたものだからさあもう大変。私の立てた伏線通りくはずほぐれつぎつこんばつたん叩いて殴って蹴って暴れて、怒って喚いて最後には縋り付いて泣き落とし、晴れて私の勝利、強制送還フラグはなんとか回避できましてたさ。

かといって、意地は一人前でもそれ以外は半人前以前の問題。これからの生活の計画も展望も何も無いのただ嫌なものは嫌なんじやい、なんて筋が通らない話なのは解っていた。

だけど、でも、もう後戻りはできない。ううん、したくない。したくなかった。だから床に手をつけて、人生初の土下座で「ここに置いてください」と頭を下げた。アブラムさんが吃驚して何かを言っても、立たせようとしても、それでも頭を下げ続けた。それしかできなかつたから。それしかもう方法がなかつたから。

本当に、どれだけこの身が無力かわかった。ただ頭を下げるだけ置いていたって何の価値もない。むしろ売り飛ばしたほうがいくらか利益があるかないか程度の、自分がそれ程の価値もない存在だと改めて気がついた。

なんでもできる。なんでもやろう。そういう気だけはあつたけど、

でもそれだけだ。アブラムさんにとってはきつと迷惑以外のなにものでもない。たった一度の優しさ。ただそれだけだ。私はそれに縋り付いて、彼の良心に訴えかけて寄生しようとしている。それも解っていた。

でもやっぱり、そうすることしかできなかったから。だから本当に必死の思いで頭を下げた。このまま家から放り出されても構わない。矛盾しているけれど、それだけの気持ちで。

でも、やっぱりアブラムさんは、アブラムさんで。いつも私の予想の斜め上に行く。じつと頭を下げ続けた私に、次に彼がしたことは、ぽかっと私の頭を殴ることだった。もちろん、形だけの殆ど力を入れていない拳で。

予想外の反応に目を白黒させる私をその隙にさつと持ち上げて立たせると、アブラムさんはちよつとむすつとしながらも何かを言った。そして私の手を引いて改めて家中を案内すると、掃除道具のようなものを手渡し、さつさと家から出て行ってしまった。

またも私、啞然呆然。これって、どういうことだろうか。掃除してやって？ 掃除してから出て行行って事？ 一宿一飯の恩義、とか？

わけが解らずも、そのままぼけーっとしているわけにもいかず、とりあえず掃除だけは始めた。小さくても一軒家だからそれなりに大変だったけど、それはもう人生で一番本気を出して掃除させてもらった。

そうして掃除をしながら見ていく中で、色々と解ったこともあった。この一軒家は相当前に建てられたのだということ。今は一人暮らしのようで、一応掃除はしていたらしいけど隅々までは行き届いていなかったということ。そして僅かに残る痕跡から、随分前に彼には一緒に住む家族がいたのだということ。

そうしてそんな発見をしつつ一日を掃除に費やしあらかた終えてひと段落を迎えた頃、アブラムさんは帰ってきた。どこに行つて

いたのかは知れないけれど汗まみれで、私に何か一言告げるとすぐにお風呂場に入ってしまった。

そしてまた出て行ったほうがいいのかあと迷っているうちに、お風呂場から出てきてさっぱりとしたアブラムさんはさつと身支度を整えると、また私の手を繋いで外に出た。ああ今度こそ強制送還かあ。さすがにもう暴れる気も起きなくて、連れて行かれたらまあ抜け出せばいいやくらいに思いながら大人しく彼に連れられるまま歩いた。

で、連れてこられたのがどこかの民家。困惑している暇もなく、私の手を引いてその家に入っていくアブラムさん。中にはあの時アブラムさんと一緒にいた、私に鼻っ柱折るぞと脅してきたおじさんとそのご家族らしき方々が私達を笑顔で迎えてくれた。

そうしてあれよあれよという間にご飯を頂いて、また夜になって笑顔でお別れ。またまた手を引かれて帰宅。お風呂。地獄の歯磨き。寝る。でこちゅー。おやすみカエデ。

そこまでされてからやっと、私はまたもだいたいぶ遅れて、アブラムさんがこの家に私を置いてくれる気になったのだということに気がついた。

カエデと蜜月の世界

それ、か、ら。

これは、なんだろう。蜜月、って言うのかな。言わなくても、言いたいな。蜂蜜みたいに甘ったるくて、とろりと心を溶かす、目も眩むように眩しい黄金色の日々。大げさに例えると、そんな風に形容したくなる、素敵さ満点の時間を過ごした。

朝、は恒例のようにアブラムさんとすったもんだの抗争を繰り広げて、お昼はお知り合いになったご近所のおばさんにお世話されつつお手伝いして、夜は時々お招きされてお招きしたりして親交を深めたり広げたりして、また地獄の歯磨き、アブラムさんと時々言葉の通じないお話、でこちゅー、おやすみカエデ、おやすみアブラムさん。

桃色の蕾が増えていくような、そんな楽しみが増える日々。嫌なこととか、困ったこと、哀しいこと、やるせないこと、もある。でも自分や誰かを嫌ったり呪ったり疎んだりするわけじゃない。そんな辛さだけは、まだ無い。持たないようにとも思えるようになったし、そうできるようにもなった、気がする。

劇的な変化があるわけじゃないし、諸手を挙げて喜べる幸福があったわけじゃない。でも、なんだろう。言うなれば、癒される、っていうのかな。手放しの心で過ごすことはこんなに心地いいことなんだって、知れたの。時々無性に泣きたくなるくらい、穏やかで優しい時間だった。なにがなんだとか、考えずに済んで、そんな必要も無くて、ただそのときの自分を享受していられる時間。不自由なことは沢山増えたのに、何故かその分心は自由だった。言葉が通じなくて大変なことは山ほどあったけど、通じなくても伝わることだって沢山あった。それを伝えるために一生懸命になる自分も好きだった。

楽しいの。もどかしいけど、それが伝わったときの喜びは何にも

換えられない。まるで自分自身を脅迫するようなあの日々が嘘のようだと思えるくらい、何もかもが反転した世界だった。それこそ本当に、異世界なのだと納得できるほどに。

夢を見すぎていたのかもしれない。舞い上がって、都合のいいことしか見ていかなかったのかもかもしれない。それでも嬉しかった。それでも手放したくなかった。仮初めでも、本物より大切にしたい現実だった。

それでね。何よりも嬉しくて大好きになったのが、やっぱりこの瞬間。

「カエデ」

名前を呼ばれるとき。ときめくみたいに、心が跳ねた。きゅ、って締め付けられた。呼ばれるたびに甘い心地がするの。蕩けそうになるの。まるで本当に乙女だよ。本当に一瞬で舞い上がれるんだから。どうしようもなく嬉しくって、困るほどなんだから。なんでだろうね。呼ばれるたびにそんな気分になって、同時に泣きたくなる。ふるふると心が震える。忙しくって困るなあ、って思うんだけど、でもやっぱりそんなこと本気では思っていない。

嬉しすぎて困るなあ、なんて。私、本当に調子に乗ってる、と自覚する。他人から見たら馬鹿みたいだろう。以前の私が見たなら興奮めして一笑に付していただろう。でもそれでも構わないって思う自分がいるから、とことん毒されてしまっていたんだろう。出来上がり始めていた、その夢のような日常に。嘘みたいに彩られたその日々に。

たった十日間。まだ、たった十日間だけ、なんだけどね。それでも、長くて短いその期間。一日一日が濃密で、沢山のものにあふれて、次の日を迎えるのがもったいないくらいに、それぞれが素敵な一日だった。これが幸せって言うなら、これ以上はいい。これ以上はいいから、だからずっと続いて欲しい。それでいい。それがいい。これが最上だっと思えるから、だから、それがいい。

そんなことを、願っていた。心のどこかで、ずっと、ずっと。――

分一秒休まずに。

「カエデ、××××、××××××？」

一日の終わりになると、アブラムさんが私を呼ぶ。私はすぐにアブラムさんが呼ぶほうへと飛んでいって、すぐ傍に腰掛ける。それがベッドの上であったり、テーブルを挟んで向かい合わせであったり、そんな風にして。

彼は私に言葉が通じないってもう知っているくせに、それでも私に語りかけた。私は彼が何を話しているのか判らなかつたくせに、それでももうんうんと相槌を打った。その時間が一日の中で何より好きだった。彼が何を言っているのか、話しているのかなんて解らなかつたのに、なのに私は彼の話を聞くのが好きだった。ずっと聞いていたいと思うくらい、好きだった。彼が私を見て、私に向かつて語りかけて、ほんの時々「カエデ」と私の名を挟んだりすることが、たまらなく好きだった。

私は多分、恋をしかけていたんだろうと思う。それがその素敵な日々に対してなのか、私を示してくれるその名に対してなのか、それともアブラムさん本人に対してなのか、それは解らないけれど。もしかしたら、その全部かもしれないけれど。

でもそんなおままごとな感情は嫌いじゃなかつたし、持っていて心地が良かった。だから受け入れこそすれ否定なんてしなかつたし、見ない振りもせずただあるがままを感じていた。それがもつと育っていけばいいと、密かに願いながら。他愛も無いとは思いつつもこつそりと、けれどなんだか必死なほどに、願っていた。どうかどうかずっと続きますように。この、まだ小さな私の世界が育ちますように。誰にも邪魔されず、大きくなりますように。決して、枯れてしまいませんように、と。

『おやすみカエデ』

これも好き。言わずもがな、でこちゅー。

最初はものすごく戸惑ったけど、今はこれがないと落ち着かない、
って思うくらい。額に触れるその温もりはいつもほんのりと暖かく
て、柔らかくて、心地よかった。ぽつんと灯るその温もりを抱きな
がら眠るのが好きだった。

解ってる。アブラアムさんのその唇には何の他意も無い、唯一つ
だけの感情しか含まれていないこと。解りづらいいけれどほんの僅か
な、親愛の情が籠もっていること。アブラアムさんの優しさの正体
それがアブラアムさんの知る誰かと重ねられているものなのか、
それとも何かの対象 例えば妹みたいな存在、なんてものに形容
されているからなのか、それは解らない。そのどっちかかも知れな
いし、どっちでもないのかもしれないし、理由があるのかないのか、
それすら解らない。

でもそんなこと、私にとっては瑣末なことだ。気にするべきこと
ではない。ようはアブラアムさんがたったそれだけの感情一つで私
をそばに置いていてくれるということ。本当はきつと、迷惑だ
ったり困っていたりしているんだろうと思う。でもそれでも私を邪
険にしたり無碍にしたりする態度を、彼は一度としてとったことが
無い。むしろ私がそこにいるのが当たり前のような態度で接して
くるものだから、こっちが時々戸惑うほど。

いいのかな、っていつも思うのに。大丈夫かな、って不安になる
のに。それでも一日の終わりにそんな子供だましの口づけ一つで、
全部取り払われてしまう。現金で、愚かで、単純で、どうしようも
ない。

私は、だから、解っている。私は甘えている。この世界にも、こ
の状況にも、アブラアムさんにも。お情けで施されているだけのこ
とに過ぎない。そうだとしても、子供のように無防備に、手放しに、
それに甘えて擦り寄っている。自分がなんなのか、どうしたいのか
どうありたいのか、一体どうしていききたいのか。あれだけ苦しめら
れたそれそのものすらも、忘却しかけるほどに。本当に甘えていた。

それは決して、無くなつたわけではないというのに。

この世界には、鬼というものは存在するのだろうか。もしくは、それに順ずるもの。妖怪、悪魔、魔物、魔族なんてものであったり、或いはその頂点に君臨する象徴　魔王、とかね。

生憎私は、未だそれらの類に遭遇したことが無い。ここに住む人たちにそれらの類への怯えや恐怖などという片鱗は見られないし、かといって言葉の通じない私にはただでさえ乏しい知識をさらに得るなどそう容易くはないためどのような現状なのかも理解できていない。

いるの？　いないの？　それとも絶滅した？　絶滅させられた？　いるけどここにはいないだけ？　どうして？　守られているから？　排除されたから？　それは一体何が、誰が弊害になつたの？　何一つわかりはしないし知ることできない。せいぜい解ることといえば、そうだな、今日はこんな感じ。

「温泉か……」

温かいシャワーの正体。

どうやらお仕事がおやすみの日らしいアブラムさんは昼間から私を家の裏手に連れて、井戸のようなものを示した。井戸と違っても別に日本の大穴のある井戸じゃなくて、丸い石積みや円柱のようなそれに、取っ手のある仕掛けがついていた。中が覗き込めるような構造にはなっていない。

その両手で掴んでもまだ重そうな大きな取っ手をアブラムさんが片手でレバーのように何度もきこきこ上げ下げを繰り返して、キユツと音が鳴った途端にそれを止めた。私はそれが何をしているのか始めはよく解らなかつたんだけど、そこから繋がっているパイプのようなものが家の中へと繋がっているのを見て、やっと気づいた。

あーあー。なるほど。ここからくみ上げていたのね。しかも手動だったとは。きつと、多分、下からくみ上げたそれをあのお風呂場のシャワーのタンクに溜まるまでこのレバーを引き続けると。

やってみる、と示すので渾身の力を込めて引いてみたけど、半端なく重かった。両手で全体重をかけたのに、半分までしかレバーが降りてくれない。私が特別軽いんじゃないくて、尋常じゃないくらいこのレバーが重いからだ。それでうんしょこらしよと顔を真っ赤にしてレバーを下げようとする私を眺めていたアブラムさんは面白そうに笑って、そのまま無然とする私を引き連れてまた歩き出した。で、連れて来られたそこは今度は四角い大きな穴。穴って言うか、困い？ 昼間なのに湯気が立っているのが一目で解るそれは、一人が入り込めそうなほどに大きい。中には吊り下げられた籠がいくつか入っていて、ぼこぼこ湧き上がるそのお湯らしき困いの中でゆらゆら揺れている。

アブラムさんはその籠を引き上げて中から白いものをひよいと取り出すと、私に一つよこしてくれた。すごく熱くて取り落としそうになったけど、なんとか乗り切った。それはゆで卵。いい具合に湯だった、半熟の美味しいゆで卵だった。

なるほど、ここには温泉があるんだ。地下からそれをくみ上げてシャワーに使っていると。だから電気もないのに暖かったのか。便利だ。電気もないのに便利だというのもこれまた不思議な話ではあるが、私はそのゆで卵をまぐまぐ食べながらしきりに感心してしまった。

温泉かあ。温泉ねえ。島国日本の古きよき伝統かとも思っていたけど、そうでもないもんだね。ここがどういう環境なのか知らないけど、現地の人は上手にそれを利用して生活してるんだ。うーん、なんだか地理の勉強をしている気分。

うんうん頷いて食べている私に、既に二口で卵を食べてしまったアブラムさんが何かを語りかけてくる。私はいつものようにうんうん頷くんだけど、アブラムさんはいつもと違い、なんだかもど

かしそうに首を振る。

なんだろう。何かを伝えようとしているみたい。いつもそうなんだろうけど、今日はやけに伝えることに固執しているように見える。私を指差すので、私？ と首をかしげると、そうじゃない、と首を振る。その温泉の囲いを指差して、私。私？ と聞けば、私じゃない。私じゃないけど、私、と温泉。

私は身体を庇うようなポーズで、腰をくねらせてみた。

「一緒に入ろうって？ やーんアブラアムさんのエッチイ！ まだちゅーもしてないのに裸のお付き合いは気が、は、や、い、ぞ！」
「誰がそんなこと言ってる！ ……まったくお前は人がせつかくいことを、」

アブラアムさんが憤慨した。私の言葉にすぐに真っ赤になって反応して。

反応、して？

それに気付いた彼も、はっと顔色を変える。

「……おい、お前言葉が」
言葉。

アブラアムさんが何を言っているのかが、解る。そしてアブラアムさんに私の言葉が伝わっている。それが示すことはつまり。
「姉さん」

デジャヴ。だけど今度こそ聞き間違いようのないその声が、捨てたはずのその呼び名を口ずさんだ。

カエデと清い人

魔王はどこに居ると思う？

知らない。居ても居なくても構わない。でももし居るとしたら、私はその彼か彼女の気持ちをはんの少しだけ理解できる、と思う。

最初はほんの小さなことからだろう。どんな偉人だって、子供の頃があつたように。だから彼らだつてきつと、少しずつ、少しずつ、世界を征服していく。思い描いた世界を夢見ながら、一つ一つパズルのピースを埋めていくように作っていくんだ。そこにはきつと喜びがあつたり、怒りがあつたりするだろう。誰が想像しなくたって、そんなことには無縁のように感じたって、それでも世界を作り上げていくんだから。善も悪も関係なく考えればそれ自体は本当に、魅力のあることだよ。素敵なことだよ。

きつとそれが完成に近付くたびに、魔王だつて思うはず。せつかくここまで作つたんだから、壊したくない、って。せつかくここまでやったんだから、途中で断念したくない、って。形づいてくるそれを見て、それを大切にしなくなってくる。それを守りたくなってくる。

自分の望んだ世界がもうそこまで近づいているのに、どうして簡単に手放せるって言うんだろう。どうして、壊されるところを黙って見ていられるだろう。例え悪の定義が自分で、善の定義がそれを否定したからって、だからそれがなんだつていうの。自分の世界を壊される理由になんてなりはしないよ。それを肯定する理由になんてならないよ。それを守らない理由になんて、絶対にならないよ。

例えば、彼が勇者だとすると、間違いなく私の世界は悪の定義に当てはまってしまうだろう。許されざる定義に、当てはめられるだろう。その自覚さえ、私にはある。でも私は、例えそうであっても、もう認めない。もう恭順しない。

新さんが勇者になるなら、私は魔王になる。自分の作り上げたその世界を守る、ただ一人の魔王に。

「新さん……」

その人は、そこに立っていた。あの時と寸分変わらない格好で、けれどあの時よりもずっと追い詰められた表情で。まるでそれは冒険の果てに決死の覚悟で魔王に挑む、勇者のような顔。

魔王。私か？ 上等。なんにだってなつてやる。この愚かで儂い私の世界を守るためなら、なんだつて。

なりを顰めていたはずのどす黒い感情が、首をもたげたのを感じた。それに抗わず、振り返り何の感情も抱かないままにっこりと微笑むと、ただでさえ険しい新さんの表情が、もつときつくなった。

「意外と遅かったね、新さん」

一週間くらいで来るかと予測していたけれど、思ったよりも三分遅い。向こうでどれほど経ったのかは知れないけれど、嬉しいこの予想外は重畳だ。その三日分もみっちり楽しませてもらった。もちろんずっと来なければそれに越したことは無かつたけれど、そんなことは叶わないと知っていた。いずれにせよ、新さんは戻ってくるつて、解つてた。解つていたよ。

「その様子だと期待してにくれたのか」

険しい表情のまま、唸るように新さんが言った。その眼差しがどんなに苦しそうで、悲痛な色を湛えていたとしても、私は何も感じない。ただ揺ぎ無い、凍りついた心がそこにあるだけ。

もう感じないよ。新さん。もう、遅いの。だってもう私は、君のお姉さんでもなんでもないんだから。

首をすくめて、卑屈に笑ってみせた。

「残念。三日も遅刻じゃ期待外れもいいところだよ。負け犬は大人しくお家に帰れば」

「……姉さんも、」

「帰るわけないでしょ。新さんが居る世界になんか」
解りきったこと聞かないで。

切り捨てるように言つと、新さんの眼差しがぐらりと揺れた。すぐく傷ついた、って顔。

傷つけられた？ 私に？ いいじゃん。もつと傷つけてあげる。

もう二度と私に近寄る気も起きないくらい徹底的に傷つけてあげる。今の私にはそれができるよ。もう新さんがどんな顔をしたっていちいち心を痛めたりしない。罪悪感を覚えたりしない。今の私にはね、新さんよりも大事なものがあるから。だからそれを奪おうっていうなら、私、新さんでも容赦しない。どんなに傷つこうが悲しもうがもう関係ない。今ならどんな残酷なことでも言える。それでどれほど新さんが悲しもうと、私の世界を救えるなら万々歳だよ。魔王上等。この世界には勇者なんて必要ない。新さんなんて、要らないの。「ねえ、帰つて？ 頭のいい新さんなら解るよね？ 解つて来たんだらうけど、はつきり言われなきゃ身に染みてこないのかな」
ひたすらに、非情な言葉が勝手に出てくる。情なんてもう残ってるわけ無い。あの時根こそぎ新さんと一緒に捨ててきたんだし。あるとしたらそれは、これまで培ってきた化け物みたいな感情だけ。そしてそれはそれを育ててくれた張本人にぶつけるしか、消す術が無いわけよ。ご愁傷様新さん。できれば、これ以上私が酷い事を言う前に帰ってほしいな。自分では止められないから。止めようとも、もう思わないから。

それでもまだ、新さんは凍りついたようにそこから動かない。それが益々私を残酷な気分させる。負けてたまるか。新さんがどんな目をしたって。どんな目で、私を見たって。

「なに、黙つてんの？ 聞いている？ 聞こえてる？ 足りないならもう一度言つてあげようか。あのね、私新さんのこと大っ嫌いだったの。ていうか、どんどん嫌いになつたって感じ？ もう顔も見たくなくなるくらい、声も聞きたくなくなるくらい、こつやつて傍に

いることすら嫌に」

「おい、カエデ、」

不意に肩を、掴まれる。戸惑うその声にはっとした。

アブラアムさん。

アブラアムさんが後ろにいたんだった。新さんが目の前に現れたせいで頭に血が上って、そんなことすら忘れてしまっていた。ぎこちない動きで後ろを見ると、私と目が合ったアブラアムさんはほんの少しだけびくっと眼差しを揺らし身を引いた。

ああ。

見覚えのあるその顔に、ぐるぐると渦を巻いていた醜い感情が一瞬にして形を潜める。そこに残ったのは、寂しさと哀しさ。見られてしまったことへの、失望感。

ぐつと奥歯をかみ締めて、私から目を逸らした。

「行こう」

戸惑うアブラアムさんの腕を強引に引いて、ただ突っ立っているだけの新さんの横をすり抜け、逃げるように足早にそこを去った。振り返ることはできなかった。ただ、ただ、振り返ることが怖かった。

歩いている間私が何も喋らなかつたせいかわいらしいアブラアムさんも終始無言だつたけど、アブラアムさんの家に着いて中に入った途端、また困惑した眼差しを向けてきた。それには何も感じていなかったはずの私の心も、軋むように少しだけ痛む。

あーあ。見られちゃった。この人には見せるつもりなんて、無かつたのに。見せちゃった。私の中の化け物。アブラアムさんはどう思ったんだろう。ううん、解ってる。解りきってる。あの顔見れば、一目瞭然だ。あの時の新さんの表情と被るんだもん。全く、とことんついてない。

観念するように深いため息をついて、目を閉じた。ぐるぐると、想いが巡る。まだ未練はある。でも、ここもお終い。新さんが来てしまった以上、あんな私を見られてしまった以上、もうどうしようもない。これも最初から解りきっていた。そうだよ。おままごとだつて解つてたよ。どうせすぐに壊れるつて解つてたんだよ。もう、諦めなさい、楓。もう十分じゃない。満足したじゃない。

そう、言い聞かせて、力を振り絞る。もう感覚も朧な指先をアララムさんの腕から、そろりと離れた。

「ごめんなさい」

「……カエデ？」

「ごめんなさい。沢山迷惑をかけてしまつて。今まで、本当にお世話になりました」

一歩、二歩と、アララムさんから離れるように後退する。その一歩が、とても重い。顔なんて上げられない。声を絞り出すだけでも精一杯。立っているだけでもギリギリの精神状態だ。さつきとは、大違い。

のろのろと、異様に緩慢に頭を下げた。やっとの思いで。ああ、惨め。

「アララムさんには本当に感謝しています。このご恩はきつと、いつか、ちゃんと返しますから」

「おい、いきなり何言つて……」

「今！ ち、ちゃんと、出て、行きます。本当に、今日まで、ありがとう、アララムさん。さよう、なら……」

失礼だけど、頭を下げたまま、お礼の言葉を口にする。顔を上げられないので仕方が無い。これで今のところは許してほしい。そのままじりじりと下がって、入り口のところで、なんとか背を向けた。なんか、手が、震える。ドアノブを握っても、力が入らない。

楓、しっかりしなよ。あとちょっとでしょ。自分で出て行くの。追い出される前に、早く。

「待て」

だん、と頭上で大きな音がした。顔を上げられないけど、見なくとも解る。アブラムさんがドアに手をつけて開けられなくしたんだ。

ああ、もう、うまくいかない。さっきから。心だけが焦れる。焦れると同時に、怖いくらい震えてる。ううん。怖いから、震えてる。もう、やだ。

「カエデ。俺はまだ行っていいとは言っていないぞ。家主の許しもなく勝手に出て行くな」

さっきとは打って変わって、すごく冷静なアブラムさんの声。それどころか少しだけ、怒っているみたい。それとも不快なのだろうか。勝手に出て行こうとしたから？ それともあんな私を見て失望した？ どちらにせよ、怖い。アブラムさんの顔を見れない。彼が私をどんな風に見ているのか知るのが、どうしようもなく、怖い。もしも、もしもあの時みたいな目をしていたら。

「あの、わ、たし……」

「カエデ」

肩に手を置かれて、強引に向き直させられる。ただでさえ力の入らない私の抵抗なんか、アブラムさんの前では抵抗にすらならない。無言の問答の末に、逃げられないようにとアブラムさんが私の両手を捕まえた。

ああ、もう。もう！

「カエデ。こっちを向け」

「あの、いや……待って、アブラムさ、」

「俺を見るカエデ」

アブラムさんの無骨な手が、私の頬を包み込んで上を向かせる。アブラムさんの青い瞳と私の瞳が、かっちり合わさった。

「お前、なんか変だぞ？ 一体どうしたんだ。さっきの奴は？」

「ち、違う、違うんです、わたし」

なにがちがうの。

「カエデ。聞いてやるから、言ってみる」

違う。違うの。やめて。見ないで。カエデって呼ばないで。私、もう、あんな目で見られるの、いや。貴方にあんな目で見られるの、いやなの。あの時の新さんと同じ、あんな目で、もう見られたくない。

だから、逃げたくて。逃げたい、のに。なのにどうしてそんなに清い目で、私を見るの。

「あ、ぶらあむ、さん……」

勝手に決壊する、涙の粒。ほろほろ、ほろほろ、アブラアムさんの手を濡らす。それでも頬を包む温もりは揺るがない。その眼差しも、私を見ている。清い瞳で、私を見てる。あんな私を見たくせに、ちっとも変わらず私を映す。貴方の清らかさが。

「アブラアム、さん……わたし、」

「おい、カエデ。なんで泣く。くそ、また俺か？ いつも俺か」

瞳が揺らいで、慌ててる。あの時みたいに、焦ったように。

ちっとも変わらない。どんなときでも、優しく私を包み込む。アブラアムさん。

私、怖かった。心臓が凍りつくかと思った。貴方にまで嫌われると思ったら、怖かった。死にそうなほど胸が痛んでしまうくらい。怖くて怖くて、仕方がなかった。

それでも貴方は変わらない。その清らかさが、また私を泣かす。貴方の心が、こうして私を甘やかす。こうして私は、甘えてしまう。私は一体いつからこんなに、弱くなってしまったのだろう。

カエデと涙出禁

「で、なんでこうなるんだ……」

参ったなあとはかりに頭をかくアブラムさん。困らせてるっていうのは解ってるけど、もう開き直ってしまった。大体この人は私を泣かすのが上手すぎる。付け入る隙があるからこういうことになるんだ。少しは反省してほしい。そういうわけで、まだ降りてあげない。この膝の上からは。

「アブラムさんが、悪いんですよ」

「だからなんで俺なんだよ。いつもそうだけどさあ」

「嫌なんですか」

「嫌っていうかさあ」

物凄く困りきった様子で、でも私を無理やり降ろそうとかそういう気はないらしい。ただ情けない声をあげるだけ。私はというと、そんなアブラムさんの煮え切らない態度を利用して、ほろほろ泣いたままアブラムさんを椅子に座らせてまんまとその膝の上に自分も座っていた。一度やってみたかったの、これ。こんな時じゃないとできないので、ここぞとはかりに挑戦してみた。

ああ、なんかいいなあ。思ったとおり安心する。このまま抱きしめてくれてもいいんだけど、彼が自発的にするとは思えない。全く煮え切らない男だ。そういうところがまた可愛いんだけど！

久しく萌えつつ、アブラムさんの腰に手を回した。また上から「お、おい」とかうるたえた声が聞こえる。煽るだけですアブラムさん。

「全くどうしたんだ、お前？ さっきの奴はなんなんだ。何でお前あんなに怒ってたんだ」

「カエデ」

「あ？」

怪訝な顔を浮かべるアブラムさんに、ずいっと下から顔を近づ

ける。のけぞるアブラムさん。ちよつと。逃げると追いかけたくなるんですけど。あー、いちいち萌える。

「カエデって呼んでください。あとずり落ちそうだからちゃんと抱きしめてください」

嘘だけど。むしろ頑張ればもう一人座れるんじゃないの？ ってくらい余裕あるけど。もちろん誰にも座らせない。今日からここは私の特等席！ イエー！

「か、カエデ」
「はい」

にこーつと笑うと、アブラムさんの腕がおずおずと私の腰にまわる。抱きしめるっていうより支えるって感じだけど、まあいいか。ちよつと密着感が増した。役得役得。ついでとばかりにアブラムさんの暖かい胸に擦り寄ると、吃驚したようにアブラムさんが身じろぎする。そんなに邪険にしなくてもいいでしょう。少し拗ねつつそれでもその胸に頬を預けて、この心地よさに目を閉じる。

ああ、癒しだなあ。あんなにささくれてた心が一気に浄化されていく気がする。アブラムさんは私にとって天使なのかも。こんなにごつい天使、すぐ天国からクビにされそうだけど。

純白の羽が生えたアブラムさんを想像してうぶぶ、と笑うと、頭に何かが触れた。見上げると、私の頭をやんわりと撫でながら、アブラムさんが見下ろしている。笑ってる。とっても優しい顔で。「落ち着いたみたいだな」

う、わ。

また。まただ。それ反則だってば。そんなに優しく笑いかけてくるの、反則。ダメ。途端に顔が見られなくなって、ぱつと俯いて隠すようにアブラムさんの胸に顔を押し付けた。多分今、私、耳どころか首まで真っ赤だ。うわあ隠れたい。でもここから降りたくない。

ぐいぐい頭を押し付けてると、アブラムさんが擦ったそうに笑う。その振動が私の身体にも伝わってきて、ときどきしてくる。あ

あ、もう、なにいきなり。なんなのこのやるせなさは。

「カエデは変な奴だな」

穏やかな声で、時々私の髪の毛の感触を楽しむように梳きながら、アブラムさんが言う。やっていることは嬉しいんだけど、言っていることはいただけない。見上げてじろりと睨んでみると、可笑しそうに緩むアブラムさんの眼差しとかち合う。

もう、またそれ。だからそれはずるいんですって、アブラムさん。ああもういつまでたっても火照りが収まらない！

「へ……変ってなんですか」

「ああ。最初はすげえ生意気で大人びたガキだなと思ったけど、かと思えばこうやって本当にガキみたいに甘えてくるしさ」

「私アブラムさんが思っているほど子供ではありませんよ。歳も十七であと三年程度で二十歳です」

そうか。と目を細めて微笑ましそうな顔をするので、胸もそれに育ってるんですからね！ 触って確認してもいいんですよ！ とむきになって言うと、だったら少しは恥じらいを持って、と一蹴されてしまった。

くろうアブラムさんの癖にアブラムさんの癖にアブラムさんの癖に！ 十代ぴちぴちのおっぱいに触ろうとしないなんて、そんな、そんなの、いや、触ったらロリコン認定かな。どうなんだろう。別に私はいいんだけど、もしもアブラムさんがそういう嗜好の持ち主だったとしたらそれはそれでいただけない。ううん、葛藤。

「おい、カエデ」

「はい、なんででしょう。おっぱい揉む気になりました？」

「ばか！ 違うだろう。はぐらかすな」

真摯な声が、私を嗜める。それでも私は反省するどころか、妙に醒めてしまい、冷然とした顔をアブラムさんに曝け出してしまふ。

新さんが絡むといつもこうだ。心が心でなくなつて、無機質のようになつてしまふ。温度もない柔らかさもない、鉄の塊みたいな冷たい質感。まるで何も感じないみたい。ううん。多分、感じない。

感じなくなってる。それだけに対して言えば。

それでもアブラムさんは、様子の変わった私に気づいているのか、変わらざる宥めるように頭を撫でてくれる。ほんの少しだけそれが心苦しい。強いて言えば、それだけだけ。

「さつき居たアイツ、もしかしてあの、」

「そういえばアブラムさん！」

努めて明るい声で遮り見上げると、吃驚したようにアブラムさんは目を丸くした。入り混じる困惑、はスルー。スルーは得意。

「私ねえ、実は家出てきたんですよ。もっと言うと、亡命？ いや脱世界？ まあいいや。とにかく元いたところから逃げてきたんです」

陽気に言いながら、ぶら下がる両足をぶらぶらと弄ぶ。何も言わない、何も言えないアブラムさんを無視したまま、楽しそうにお話する。いつのまにか戻っている。嘘っこの、上手な微笑み。仮面みたいに動かない。

「何でかって言いますとね？ そこに大っ嫌いな人がいたんですよー、嫌いで嫌いで見るのも話すのも傍にいることすらも嫌気がさすほどにね。だから、ね。その人から逃げてきた、っていうか、その人ごと全部捨ててきた、っていうか」

そうそう。捨ててきたんですよ。彼も、彼を取り巻く人々も、そんな全てを忌み嫌う私も、全部ね。捨ててきたつもり、だったんですよ。それなのに。

「でも」

足を、止める。何もかもが馬鹿らしい。新さんがいると思うだけで、あんなに素敵だと感じていたこの世界も濁っていく。止まったつま先を見つめて、何も言わないアブラムさんの胸に、頭を預けた。

「でも、無理だったみたいです。アブラムさん、見ましたよね？

私を。ああやって、捨てたはずのものに怯えて、口汚く罵った私。アレですよ。本当の私。今までね、貴方方の前にいた私、猫被って

ました。嘘だったんですよ。偽者だったんです」

腰にまわる腕が少しだけ、隙間を作る。それを寂しく感じながらも、反面で当然だと思っ自分がある。

あの時の二の舞だ。慣れたとは言わないけれど、この先待っているもの予想はつく。もう彼は私を力エデとして見るものなんてできない。せいぜい、弟相手にヒステリックになる姉程度のものに成り下がるだろう。

ああ。自業自得だけど、若干胸が痛む。それでも張り付いて取れない笑みをアブラムさんに向けた。

もう終わりなんです。どうもでした。

「なかなか楽しかったです。でももう新さんにもバレちゃいましたし、ここには居られません。本当にお世話になりました。またお会いすることがありましたら、」

「おい」

「んぎゅっ」

呆れたように、アブラムさんが遮った。同時にごっつ、と真上から拳を下ろされる。い、痛い。手加減したんだろうけど手加減の度合いが足りなさ過ぎて首が縮むかと思った。

おっかなびっくり見上げると、アブラムさんはじと目で私を見下ろしていた。

「なんかごちゃごちゃ言ってるけどな、よくわからん。あと人の話を聞け。遮るな。勝手に自己完結するな」

「痛いんですけど……」

「おう、痛くしたからな。ちょっとお前は落ち着きが足りない。一先ず俺の話を聞け」

痛くしたって。聞きようによっては萌えるけど、現時点で物理的に痛かった。むっつり顔で口を尖らせると、拗ねるなとばかりに口を摘まれる。だから子ども扱いしないでくださいってば。

「あのな、さっきの奴、アタラなんだろう？」

「……うーむむむむん」

「うん。で、大嫌いで、お前が逃げたい相手なんだな」

別に逃げたいとかそんなんじゃないですけど。排除したいんです。言いたくても口を摘まれているので言えない。はっ。このために摘んでいるのか。うぬぬアブラムさんの癖に。

手を離せと叩いても、睨んでも、意に介さないアブラムさんは勝手に何かを納得した素振りであうんと頷き、突然私の肩をぎゅっと抱きしめて自分の胸板に押し付けた。

うわわわわ！ 破廉恥！ 密着！

「よし。じゃあ出て行くことないじゃないか。ずっとここにいろ」
「……へ？」

にかつと笑って、呆ける私の頭を撫で撫で。いやいやいや、意味解りませんから。なんでそうなるんですか。

「いや、あのですねアブラムさん……」

「あいつから逃げたいんだらう？ じゃあ匿ってやる。ずっとここにいればいい」

「なに言ってるんですか！」

急いで離れようと手を突っぱねたのに、僅かな隙間しかできない。その自分の非力さが今の自分を表しているようで、妙に惨めな気分になってやりきれなくて、たまらない気持ちになる。ああ、もう、思い通りにならない！

縫り付くようにアブラムさんの服を握り締めて、思いつきり睨んでしまった。

「アブラムさん、お人よしも度が過ぎると身を滅ぼしますよ。私はね、貴方に気にかけて貰えるほどの人間じゃないんですよ。わかるでしょう？ そりゃ、ご厚意は大変嬉しいですよ。けどね、もう少し加減というものを考えてください」

「いや、でも」

「でももなにもありませんよ！ どんだけいい人なんですか貴方は！ そんなだから私みたいな奴に付け入られるんじゃないですか馬鹿ですか！」

妙に苛々して、アブラムさんに当たってしまった。しまったと思つたときにはもう遅い。こんなことを言つつもりじゃなかったのに。気が動転しすぎて、どうもダブらせてしまったらしい。

ああ、もう。この人は新さんじゃないのに。やりきれなくて顔を背けるしかできない。もうどうして。こんなことが言いたいんじゃない。ただ、貴方が、そこまで優しくしようとするから。

「馬鹿はお前だろ。だから俺は安心して付け入れと言つてるだろう、さつきから」

「はあ？」

あーもう、何言つてんだー、この人。お姉さん理解不明。いやマジで。

「楽しかったんだらう？ なら問題ないじゃないか。あいつが来て俺が追つ払つてやる。それならいいだらう？」

何を言っているんだこの人は。私みたいな厄介者を、置いておく？ ここに？ まだ？ ずっと？ 追ひ払うつて、そんな大層なこと。あの人一応英傑とか呼ばれてた人、ですよ？ わけが解らない。

呆然としながら、それでも辛うじて「なんで」と呟いた私に、アブラムさんは言った。なんてこと、なさそうに。

「だつてお前泣くだろ。カエデが泣くとたまらん気持ちになるからな。それだつたら笑つていたほうがいいに決まつてる。だからここに居ろ。な？」

名案だろ。そう付け足して、アブラムさんは満足そうに笑つた。その笑顔を見てまた胸からこみ上げてくるものがあつたけど、私はそれをなんとか我慢した。だつて泣くとアブラムさんが困るつて言うから。泣きたくてたまらないのに、なんとか笑つて我慢したよ。

あーあ。とうとう涙も出禁だよ。ほんと、アブラムさんには敵わない。そう思いませんか？ 皆さん。

カエデとお呪い

アブラアムさん達と過ごした長くて短い十日間は、私にとって、殆ど遊んでいるような感覚だった。新さんが来るのも予想していたから、というのもあるし、何より現実味が無さ過ぎたせいもある。殆ど絶望的な状態で都合よく助けられてまんまと衣食住確保して、その上楽しい生活、なんて夢でしかない。全てが遊び感覚で、まあなくなってもしょうがない、なんて考えで彼らと過ごしていた。寧ろそれは臆病な予防線だったんだけど、アブラアムさんはそんな私に何も言わなかった。

どうして許してくれるんだろう。ありがたいと思う前に理解できないから、本当にどうしたらいいかわからなくなる。人が優しくするのは理由がある。少なくとも私は、理由無しに誰かに手を差し伸べようだなんて思わないし思えない。いつも打算的に損得勘定で考えているから、余計に解らない。

どうしてそこまでしてくれるの。どうしてそこまで想ってくれるの。どうしてそんなに、想えるの？

ねえ、アブラアムさん。新さん。貴方達のその清らかさは、一体どこから溢れ出てくるの。心根の醜い私にはそれがどうしても、理解できない。どうしても、解ることができない。それがとても惨めで申し訳ない。たまらなく、罪悪感を覚えるの。

「んー、でもなあ。それとこれとはまた話が違う」

「はい？」

完全にアブラアムさんのお人よしペースに飲まれて私が黙り込むと、アブラアムさんは何か考えるように言った。そのまま私の腰をひよいと掴んで膝から下ろすと、子供を宥めるように頭を撫でなが

ら私の顔を覗き込んできた。

「一度、会ってこい。その弟と」

ひくりと、勝手に眉根が寄る。私が閉口し返事をしないことも予想していたのか、アブラムさんは苦笑しながらも根気よく私の頭を撫ぜる。

「カエデだって、このままでいいとは思ってないんだろ。一度くらい、前からぶつかっていけ」

わかったようなことを言う。そんな苛立ちを僅かに感じながらも、それでも私は否定も肯定もできなかった。

解っている。この十日間で、解りすぎるほどに思い知らされた。

私は新さんの姉をやめることはできない。少なくとも、今はまだ。身体が遠く離れたところで、心の中には新さんが住まっている。私の中の彼はその事実をこの十日間で嫌というほどに私に知らしめてきた。まるで果てに逃れた虜囚のように、今日来るか明日来るかと、恐怖にも似た思いに追い立てられていた。いつも、どんなときも。

どんなに気づかない振りをしていても、それが消えてくれることなく、それどころか日を増すごとにそれはひどくなっていった。

確たる脅威があるというわけでもないのに、人ごみの中に黒髪を見てはどきりと鼓動が胸を打ちつけ、アブラムさんの人以外にカエデと呼ばれることさえいやな緊迫感を私に植え付けた。

馬鹿みたいだ。あれだけの浅慮な行いをしたにも関わらず、その実私はメッキが剥がれ落ちていくように存外臆病な自身の心を知った。悪事を働いたわけでもないというのに、どうして架空のものにそこまで追い詰められるのか。

答えなど簡単だ。アブラムさんの言うとおり、あれで終わりなわけはなかったからだ。それは最初から解っていたし、だからこそアブラムさんとの生活も短期間限定のお楽しみでしかなく、次こそが最終ゲームだと覚悟していたはずだった。けれど思った以上に彼との生活が楽しくて、楽しすぎて、覚悟よりも依存と杞憂の方がぶくぶくと膨らんでいった。

言ってしまったえばこの生活を失くしたくない。それだけだ。手放しの幸福にどっぷり嵌まり込んで、結局は自分自身を追い詰めた。お笑い種だ。現時点で言えば私は新さんに勝つてなどいない。むしろ今は劣勢の一途を辿っている。辛うじて繋がっているのだって、それは、今アブラムさんの傍にいるからだ。きつと一人でいたならあの場であっけなく陥落していただろう。惨めに、滑稽に、なんの面白みも無いままに。

私は結局その程度の人間。あのチートの弟に、叶うはずも無い。最初から。そう、最初から。解っていた。ずっとずっと、始めの頃から。でも。それでも。

目を閉じて、頭に乗るアブラムさんの手を捕まえた。両手で握りしめると、当たり前のように返してくれる。この、暖かさ。これ。これを知ってしまったえば、例え敵わなくても、夢を見る。見てしまう。「会ったら、最後になるかもしれないのに?」

離れたくない。離さないでほしい。ここにいたい。このままでいたい。

絶るような情けない声で、言ってしまった。この上なおも彼に甘えようとする自分の愚かさが恨めしい。それでも抑えられない。私は今、馬鹿馬鹿しいほど、世界で一番弱い。

「逃げたんです。私。それ以外に方法が見つからなかったから。だって勝てるわけない。今まで真正面から向き合って一度も勝てたことなんてなかった。勝つ見込みもないのに挑んでいたのは、失うものがなかったからです。でも今の私は、」

失うものが、ありすぎる。そしてそれを失うことが、この上なく怖い。諦めて奪われるくらいなら逃げたほうがマシだ。今までそうしてきたように。どんどん萎縮していく私の心。ちっほけで、愚かで、どうしようもない。ひとかけらの輝きさえ見出せない。

どうしてこうなっちゃったんだろう。いつから、こうなっちゃったんだろう。私はちっとも、開放されてなんかいない。

「115」

「う」

握っていないほうの手で、わしっと頭をつかまれた。そのまま強引に顔を上げさせられると、澄んだ空色の瞳が視界に飛び込んでくる。芯の強い、心が震えるような、力強さを湛える眼差しだった。

「弱気になるな。お前それでもアタラの姉か。自分で言っていただろう。正真正銘アタラの姉だって」

「私は、」

新さんの姉なんて肩書きだけ。だから苦しかった。だから結局私はこうしてどこへ逃れるとも向かうともできず。

否定しようとする私の言葉を遮るように、アブラムさんは首を横に振る。

「お前は強いよ。確かに弱さもあるだろうが、それでも強い。俺はそれを、あのときにもう知ったんだ」

あの時、って？

何を言われているのか解っていない私に説き伏せるようにして、アブラムさんが私の頬を包み込む。しっかり、言い聞かせるとばかりに。

「いいか。お前は確かに貧弱だし実際弱気になると途端に後ろ向きになるけどな、でもそれだけじゃあないんだ。弱さなりの強さってやつがお前にはある。どうにかできそうなのに、実際そういう気を起こさせない。お前にはそういう強さがあるんだよ」

そんなの。強さって、言うんだろうか。それはただの防衛本能でしかないとも思ってしまう。自己防衛だけは得意だった。卑屈な自分を守るために、いつも必死だったから。

「私は、臆病なんですよ」

「誰にだって怖いもんはある」

「ずるいんですよ。自分のためなら何でも利用する」

「それだって負担がないわけじゃない。耐える強さがなければどうしようもないだろう」

耐える。そう、耐えてきた。ずっと。何かからずっと、耐えてき

た。耐え切れなくなるまで。ぐらぐら揺れる。心が。私。私は、どうすれば。

揺れる私に瞳を、アブラムさんの空が捕まえる。雄大な、力強い、清らかさが。

「お前は強い。それでも怖いなら俺がついていると思えばいい。今度は俺が、お前の味方になってやるから」

私。の、味方。

味方。

途方もない大きな、魔法の言葉が私の心を包み込む。信じられないほどあっけなく、私の弱さを心強さに挿げ替えた。

私の、味方。アブラムさんが。吃驚するほど頼りないのに、半面根拠のない頼もしさを感じる。まるで、そうだ。きらきら光る、何かを貰ったみたい。青臭い言葉だと、希望、っていうんだろ。か。ああ大丈夫なんだな、って理由もないのに不思議な確信が持てる。おかしいな、気持ち。重たい心が一瞬にして、元に戻ってしまった。笑えるほど、簡単に。

「……しょうがないですね。少々心もとない味方ですけど」「なんだと」

わしわしと頭をかき乱されるのに抵抗しながらも、こみ上げてくる笑みを何とかかみ殺す。嬉しくてたまらないなんて知れるのはなんだか遠慮したい。でも私が少し笑ってしまっているのに気づいたのか、アブラムさんは仕方ねえなあなんて顔で笑い返してくる。

ああもう。可愛い。アブラムさんの癖に。

思わずにやりと暗黒な笑みを浮かべると、びびっと引かれる。それでも強引に詰め寄って、椅子に座って引くに引けないのをいいことに、その男臭いお顔に顔を寄せてうっとり囁いた。

「お呪いを、^{ましな}くださいませんか」

「呪い？ ^{ましな}そんなのできんぞ俺は」

「いいえ。できますよ。ここに、一つ。いつものように」

ちよん、と人差し指でおでこを指す。わお大胆。にっこり不敵装

つておりますが内心羞恥の暴風雨吹き荒れております。これで断られたら大型並みの荒れ模様となること必須。生かすも殺すも貴方次第なんですアブラムさん。本当に。

笑いながらもどきどきと返事を待つと、了承の代わりに無骨な指が、さらりとこめかみを撫ぜた。

「そんなことでもいいのか」

「それがいいんですお願いします。あ、口でもいいですよ」

言っちゃったああ。本気じゃないけど願望的にはありますよ！

若干目の色変えつつも笑って言うと、あほか、とアブラムさんの手が私の頭を包み込む。なんだかいつも以上にどきどきしちゃって、なんとなく目を閉じてその時を待つ。

これってなんだか、シチュエーションがあれみたい。はー緊張してきた。おでこに神経が集中しているのか、さらりと前髪を掻き分けるその指先に反応して無意識に身体が揺れる。ばれたかな。ばれてないよね。あー早くしてほしい。でも緊張する。

そのどきどき感がピークに達した頃、ふっと、吐息が額を撫ぜた。その刹那に、押し当てられる、ひどく優しい温もり。涙の滲むような、そのひと時。

私の中の、何かがぴたりと、どこかに納まった。最後のピースのように、ぴったりと。離れていくその瞬間に絶対的な何かを見出しながら、私の中ですとんと、心が落ち着いた。あるべき場所に納まるように。

よし、うん。大丈夫。根拠はない。でも、大丈夫。私は、大丈夫。

「えへへ。ご馳走様です」

「それは普通男の台詞だろう」

何故だかちよつと照れたのが、アブラムさんは手を離して目を明後日の方向に背ける。

うー可愛い。むしろこついほうがこういうときの可愛さは倍増なんじゃあないだろうか。ハイリスクハイリタイン的な。うん、そう

に違いない。にまにま笑ってそれを眺めつつ、私は一步後退して、アブラムさんから離れた。

もしも、これが、最後だとしても。それはそれでかまわない。そうでなければいいと願っているけれど、不思議と腹をくくっている自分がいる。

うん、よし。私は一人で立っている。私は力エデ。一条楓。大きく息を吸い込み、ゆっくりを吐き出す。

これよりは、最終戦。新さんと私の、恐らくは最後のゲーム。

長らくお待たせいたしました、読者の皆様、作者の野郎。いよいよ最後の目白押し、姉弟喧嘩の幕開けです。目を皿にして、とくとご覧くださいませ。私、全力で挑ませていただきます。

すつと気を引き締め、戸口に向かう。ゆっくり、ゆっくり、進む。緊張感はあるけれど、不思議と不安はない。

さあ、スタートの合図。

ドアノブをしっかりと握り、後ろへと引いていく。そこに居るはずであろうその人を見据えるべく、私はまっすぐ、前を向いた。

カエデと姉弟漫才

開き放たれた扉の向こうには、案の定彼がいた。真っ直ぐ前を見据える私を、同じようにして正面から真っ直ぐ睨みつけるように私を見つめる見慣れた彼の顔。確信はあつたけれど、実際本当にその通りだと妙に拍子抜けする。なんているの、なんて彼には愚問だろう。肩に入っていた力を抜くように、ふう、と深いため息が漏れた。「一応、確認なんだけど。なんで、ここが解つたのか聞いてもいいかな」

新さんは、答えない。ただその眼差しの機微を目ざとく見つけた私は、皮肉な笑みを口元に浮かべ振り返った。想定通り、私の射抜くような眼差しを受けてアブラムさんは大げさと思えるほどに目を泳がせる。

「アブラムさん。もしかしてもしかしなくとも？」

「う、いや……、まあ、だって、なあ？」

だって何よ。ついそんな心の声が浮かび、益々目つきがきつくなってしまう。しどろもどろとしているアブラムさんを見ているのはそれはそれで可愛くてたまらないけれど、それとこれとは話が別だ。

けれど、じとーっと視線攻めをし続けていると、あろうことか後ろから助け舟が出る。

「その人は悪くないよ。子供を保護するのは良識ある大人の義務だろう。彼は義務を果たしたまでだ」

どうあーれが子供ですって。百歩譲って子供だとしても私より年下の新さんには言われたくないんですけどお！

正論ぶつた物言いに途端にむっかーときてぐりんと勢いづいて首を元に戻すと、いつのまにか直前にまで迫っていた新さんが私を見下ろしていた。その眼差しがいつもの新さんとはどこか違って、まるで、私は妙に焦ってしまう。おーい負けるなー、カエデー。

「彼が神殿に連絡を入れたのは姉さんが失踪してからすぐのことだ。でもソロンさんが身元を引き取るって申し出を蹴ったんだよ。自分が責任を持って預かるって。姉さんの気が済むまで」

有無を言わせないように威圧感を漂わせ、新さんが言う。

そんな、こと。確かにそれを予想はしていたけれど、アブラムさんがそんなことまで言っていたなんて。俄かには信じられない思いで振り返ると、アブラムさんは照れたように頬をかいてそっぽを向いていた。

ああもう、アブラムさん！

無性に彼に飛びつきたくなる。けれどいつのまにか掴まれていた腕のせいで、それは叶わなかった。

「……ちよっと。離してよ。てか何気安く触ってんの。許可してないんだけど」

「帰るんだ。いつまでもここにお世話になるわけにはいかないだろう」

「はあ？ あなた私のお父さんですか？ 月並みな台詞素面で言わないで。ぞっとするから」

言いながら下を見ると、何故か新さんの右足がドアの内側に入っている。ていうか、よく見ると半身入っている。それを見て一気に頭に血が上り、その場に踏ん張ってつかまれた腕ごとふんと新さんを外に押し込んだ。

て、いうかちよっと。なんであんたもふんじばってるの。なにこれギリギリ擬似押し相撲みたいな。

「は、や、く、出て行って、よっ。ここは私とアブラムさんの愛のサンクチュアリなの！ 部外者が入ってきていい場所じゃないの！」

「おいなんか今不吉なこと言わなかったか」

後ろでなんか言ってるけど今忙しいから無理ですアブラムさんハグはもうちよっと我慢してね。今この害虫たたき出しますから。

と言っても、力じゃ叶うはずもなく。それどころか何故か新さん

のほづがじりじりとこつちを押しってくる。

なに、なんなのさつきから！ あんたさつきから生意気なんですけど弟の分際で！

「入、ってこない、で、よおおっ」

「いやだ。お邪魔しますアブラムさん」

「お、おう」

「勝手に許可しないでアブラムさん！ こいつは敵なんですよ！ 唾棄すべき外敵なんですよ！」

お前の家じゃないだろ、となにやらかぼそいツッコミが聞こえた気がするけどスルー。とにかくこいつを何とかしなくては。

じろりと睨むと、同じようにじろりと睨まれる。さつきからなんなのその反抗的な目！ 今までそんな顔したこと無いくせに！ 新さんのくせに！

「姉の言うことくらい素直に聞け馬鹿新！」

「弟の願いくらい素直に聞いたらどうだアホ姉」

「はああ？ お願いはか弱い乙女と対象年齢五歳までの幼児しか通うしないんですー！」

んもー、あつたまきた。足場を崩そうと蹴りを仕掛ける。が、早々うまくいくはずもなく難なく避けられてしまう。けれどそれで終わりなわけもなく、避けたその一瞬を狙って新さんの身体を渾身の力を込めて突き飛ばした。

と、思いきや。そのまま腕を引っ張られ、て。がっしり。

え。なに、コレ。

「って、ちよつとおおお！ 離してよ何抱きついてんの！」

「抱きついてるんじゃない。抱きしめてるんだ」

「同じでしょおおがあ！ 離せええええ変態いいいい！」

両腕をはさむように抱きこまれてるから、必然手も使えない。もがいてもびくともしないどころか、段々きつくなってくる。

く、苦しい。ていうか嫌だ。何が哀しくて弟に抱きしめられるんだ。しかもアブラムさんが見てるのに！ ていうかもうコレ殆

どホールドでしょ。締め技？　締め技なの？

「姉さん」

ふいに耳元で聞こえた。絞り出すような、弱弱しい囁き。

そのあまりの頼りなさに吃驚して身体が止まる。ひたすらに、力の籠もる腕。擦り寄るみたいに新さんの柔らかな髪を頬が撫ぜた。

「無事で、よかった」

妙に力の抜けた飾り気のない一言。まるで心から安堵したみたい。一瞬、何もかも真っ白になったような気がした。

て、オイ。そうじゃないでしょ。

「……い、いから、さつさと離せっ」

今度はあつさり、身体が離れる。けれどまたしてもちゃっかり腕だけは掴まれている。ああもう面倒くさい。

「なんなの、さつきから。ちよつと新さんおかしいよ？　いつのまにキャラ換えしたの。そういうのは本誌始まる前に済ましておいてよ。連載打ち切られるよ？」

「姉さんこそキャラが激変してるだろう。腹黒笑顔キャラから高飛車キャラに鞍替えか。随分と尻軽だな」

「アバズレ扱いですんな！　私のはツンデレっていうんですー！　いまや世間に認められた代表的人格定義なんですう！」

ていうかよく聞いたら新さん人のこと腹黒笑顔キャラだと思っただのか。マジむかつく。よしんばそれが本当のことだとしても新さんにそう評価されていたことがむかつくことこの上ない。

いつのまにか両腕取り合ってぎりぎり睨み合い。ああむかつく。

今迄で一番むかつく。むかつかないときなんか一度もなかったけど歴代最高にむかつく。何よりこの態度の変化が気に食わない。何なの本当に。これがあの新さん？　今まで従順に何でも私に言うことを文句言わずに聞いてきた新さんなの？

……ああ、そうか。それだ！

「新さん。とりあえずここから出て行って。お願い。聞いてくれるよね？」

新さんは私のお願いには逆らえない。なんだ、最初からこうすればよかったんだ。簡単なことだった。

追い討ちにっこり微笑むと、新さんも睨むのをやめる。そして頷いた。いつものように、従順に。

「解った」

そー。それでいいの。一瞬どうしたことかと焦ったけど、結局新さんも本質的なところは変わっちゃいなかったみたいだ。好都合。

でも、ほくそ笑む心とは裏腹に、ほんの少しだけ不可思議な失望感。またいつもの、醒めた心地が蘇る。なんなんだろうね、本当に私達って、結局どこまでいっても意味不明。

そう感じながらも、掴んでいた腕を離すと、新さんもそろりと私の腕を解放してくれる。そうしてその腕が下がる瞬間、けれどまた、きゅ、と繋がった。たった一本の人差し指が、縋るように。

「……なに」

「アブラアムさん。お邪魔しました」

「お、おう？」

私の怪訝な眼差しは無視して、新さんはアブラアムさんの方を向いて淡々と告げ軽く頭を下げた。アブラアムさんはさっきから似たような返事しかしていない。

てか、出て行くのはいいんだけどなにこの指。まだ何かあるんだろうか。引こうとした瞬間、それは逃さないとばかりにぎゅ、と握り締められた。

「新さ」

「転移」

「え」

無表情な新さんの呟きと同時に、ぱあ、と仄かな光が私達の周りに円を描いていく。瞬く間にそれは見覚えのある文様を描き、私達を包み込む。

あっと思ったときにはもう遅かった。アブラアムさんを振り返る暇もなく、私はまたデジャヴのように見覚えのあるあの目も潰れる

ような光に包まれ、その中に全てをかき消されてしまった。何を言う間もなく、本当にあっけなく。

ちよ。

「つとお！ なにここなんなのなんでこうなるの！」

「俺の部屋」

「ちがう！」

いやそうだけどそうじゃなくてああもうわざとやってんなコイツ。いつまでも繋がれていた指を今度ばかりはと思いつき振り払い辺りを見回すと、確かにそこは見覚えのある光景だった。以前何度も忍び込んだことのある新さんの執務室。まだ数日しか経っていないとはいえ、そこはあまりに代わり映えしていなかった。主不在のままに、そのまま残っていたかのように。

ふうん、なるほどね。まあ、私には関係ないけど。そんなことよりも、勝手に飛ばしてくれた理由はなんなのですかねえ、新さん？ ぐるりと振り返ると、新さんは悪びれもしないいつもの表情に戻っていた。それが益々私をイラつかせる。

「私まで出て行くとは言わなかったんだけど」

「俺だけ出て行けとも言わなかった」

解れよそれくらい！ と思いはしても口にはしない。解ってやっているのは見え見えなので、言ったところで無駄な屁理屈合戦に及ぶことは明白だ。

とはいえなんて横暴で強引なことか。今までの新さんからはとても考えられない暴挙だ。私の承諾もなしにことに及ぶなんて。今までなら決して逆らわず私の意に沿っていたのに。彼は本当にあの新さんのだろうか。そんな馬鹿げた疑念さえ浮かんでくる。

想像もしえなかった彼の急変に、不本意ながらも吞まれかけてしまっている。それどころか私は捉えきれない彼の急変に恐れさえ

いや、これじゃいけない。私は私。しっかりしなきゃ。自分を叱咤するべくゆるゆると首を振り、最初のと看と同じように新さんを睨み付けた。それでも、新さんは同じようににらみ返してくることはなかった。はあ、もう、なんなのさつきから。調子狂う。

「で。無理やり連れて帰ろうって？」

「いや。ひとまず話を、その前に言っておくけど、その扉は内側からは開けられないようにしてあるから」

ちっ。ちろりと扉の方に目を向けたのを目ざとくも捉えた新さんは先手を打つ。

全く不利だ。思うが俣に手繰られていることが腹立たしいけど、この場合拒否権はないってことか。まあそれも元より望むところ。ひとまず強制送還を逃れただけでもよしとしよう。

「解りました。お話、ね」

言うつと、新さんは無言で頷き窓際に寄る。壁一面に張られたその窓には、そこに沿うようにしてテーブルと二脚の椅子が置かれていた。新さんはその片側に座り、向かい側の椅子を眼差しで指し示す。それに習い私も座った。

そこで、初めて気がついた。そこからあの庭園が一望できること。あの噴水も、白い薔薇の生垣も見えること。あの庭園が、息を呑むほど精錬とした美しさを湛えていた、ということ。そんな視界の隅には、あるはずものがないその透き通る一輪挿しが、所在投げに置かれたままだった。

カエデと傷

いつのことだったかクラスメイトの女の子が、どこで聞きつけたのか私が新さんとは義理の姉弟であると聞いたと告げてきた。そして彼女はお世辞にも見ていて気分がいいとは言えない笑みを私に向け、問いかけてきた。

『もしかしてさあ、一条さんって新君のこと好きなんじゃないの？』
その瞬間、全身の血が一瞬にして沸騰し腸が煮えくり返ったのを、覚えている。すんでのところでも理性が勝りはしたが、脳内では反射的にその子を殴り飛ばす私が出た。

それほど不愉快だった。不名誉だった。屈辱的だった。例えそれが年頃の女子の可愛らしい嫉妬心からの邪心だとしても。

義理の弟だとか揶揄されるのが、じゃない。私が新さんを好き。その言葉そのものが、私にとって最大の侮辱に他ならなかった。どんな理由があるにせよ許すまじ、最低にして最悪の、愚かな妄言だった。

物語は再び本筋へ。主人公である新さんの物語の中では、一体私はどんな描かれ方をしているのだろう。そんな考えがちらりと過る。逆恨みの姉との攻防とか？ もしくは一度は離れたはずの世界に、義理の姉によって奇しくも引き戻されてしまう運命、とか？

そうなる私はある意味この世界に利用されたわけか。離れたと思つて喜んでいたのが馬鹿みたいだ。どう足掻いたところで、私は新さんの運命の上に配置される駒の一つに過ぎなかった、ということだ。自由になったつもりでその実、この身自ら新さんの運命に花を添えようとしている。

そう考えるとくだらない。足掻くことすら馬鹿馬鹿しくて、やる気すら失せてくる。こうなるともう長年培った耐性のおかげですぐに諦めがつき、それらがあるべきところへ納まるように動くのを、従順に受け入れてしまいそうになる。

でも、なあ。今までとは、ほんの一つ、たった一つだけ違う思いが、混じっている。その気持ち私の後ろ向きな心を、ぐいぐいと優しい力で押し上げていく。もう消えたはずの、それでもまだ確かに残っているあの額の感触を思い浮かべて、自然と笑みが浮かんでくる。

味方、だって。なんの根拠も無いじゃない。でも、そういえば、そうだった。新さんの味方なんて腐るほど見てきたのに、自分の味方なんて私、居たことなかったかも。

ああ、だからかあ。あんなに嬉しかったの。すっごく心強かったの。不安な気持ちが一瞬にして掻き消えた。暖かい気持ち、ぱつと広がったんだ。あのでこちゅーみたいなの、優しくて大きな暖かさだね。

アブラアムさんにもう一度、ありがとって言いたいな。貴方は、真実私のサンクチュアリになったのかもしれない。

そんなことを考えて新さんの前で、満ち足りた笑顔を浮かべそうになる自分を押しさえ込むのには、内心とても苦労した。

「で。話、って?」

内心どぎまぎしながらも、努めて冷静を装って問いかける。一瞬だけ垣間見た新さんの眼差しは真っ直ぐに私に向けられていて、けれどその眼差しからはいつもの彼と同じくして感情の機微が読み取りづらかった。かと言って見つめ返せばこっちが気圧されるような気がして、それと無い振りで庭園の方に目を移す。降り注ぐ陽光に当てられたガラスは、未だ私を見つめ続けている新さんを映し出していた。

なんだろう。ああ、この気の重い雰囲気は。なんだか無性に、た

め息をつきたくなった。でも、一度は向き合おうと決めたのだから。この、弟と。覚悟を決めて、今度はしっかりと新さんのほうに向き直った。

「話って、新さんが話をするの？ それとも私？ もしくは何か、話し合いをするって、こと？」

ゆっくりと、新さんが瞬きを返す。いつもの癖。眠たそうにゆっくりと瞬く彼のこの癖は、決して睡魔を耐えているからという理由からではない。彼は考え事をしている。それは彼がその瞬きの間にあらゆる事項をその瞬間に整理している現われだ。そしてその刹那にもう、答えは出ている。

「全部だ。話をする。話を聞く。その上で、話し合う。お互いが納得するまで」

「納得？」

いやに静かな新さんの眼差しに、私は自嘲の笑みを返す。なんだかその言葉が、ひどく白々しいものを感じて。けれど新さんは至極真面目な表情で、私に飲み込ませるようにゆっくりと、けれどしっかりと頷いた。

「姉さんが納得するまで。俺が納得するまで」

「……全部」

「全部だ」

再びしっかりと頷き返す彼に、私は怪訝な顔を浮かべざるを得ない。彼の言っていることは理解し合うという事なのだろうけど、そんな事は到底不可能なことに感じた。元々が、理解しあえる要素が欠片でもありさえすれば、私はこんな愚考に走らずに済んだ。妙にふてくされた気持ち、心の裏側を攪る。

「聞くって言っても、何を。私は別に新さんに聞くことなんかありません。それに、私が聞かれたことに素直に全部答えると思う？」

「いや」

新さんの揺ぎ無い眼差しが僅かに揺れる。これまで幾度となく彼の眼差しに過ったそれに、私は気づきながらもずっと見てみぬ振り

をしてきた。無論、今も。

それでも新さんは、再び立ち上がるように、私を見つめなおした。ぐ、と力強く。どうしてそういちいち、真っ直ぐ人を見れるんだらう、この子は。

「でも俺は知りたいんだ。姉さんの口から、姉さんの言葉を聞きたい。知りたい。だから聞かせてくれ」

「だから何を」

「姉さんが、どうして嘘をついているのか」

なに。

何を、言うかと思えば。

引きつりかけた喉を、ぐっと飲み込む。生真面目な彼の表情はどこまでも本気だ。逆に私の気持ちは、下降していくようにどんどん醒めていく。つつい、ふつと失笑が漏れた。

「嘘つて。私の何をもつてして嘘だと言ってるの？」

仄かな苛立ちと可笑しさが、奇妙に入り混じる。彼のその訳知り顔を見つめているとどうにも笑いがこみ上げてきて、私はテーブルに肘をつき立てた手のひらの上に顔を乗せ歪んだ口元を隠した。

まあ、どうせ彼にはバレバレだろうけど。

「嘘、ねえ。なんのことやら知らないけど、私新さんに対してついた嘘なんか数え切れないくらいあるんだけど。いちいち一つずつ説明しなきゃなんないの？」

揶揄するように言った。それでも半ば本心だった。新さんに対して言えば、今までの私はほぼ100% 嘘の塊だ。そんなものいちいち数えちゃいけないし、覚えてもない。謝罪を求めているのか何なのか知らないけど、彼の今更な指摘には少し辟易した。

「俺は全部覚えてるよ」

「へえー、そりやどうも。意外と粘着質なんだ」

「ああ。ネバネバだ。くつついたらちよつとやさつとじゃ離れない」
「は」

聞き間違いだらうか。予想もしなかった切り替えしに思わず啞然

と見上げると、私を見下ろす新さんの眼差しは少しだけ愉快さを滲ませていた。

くそ。私も大概だけど、新さんも相当おかしい。前はこんな切り替えししてくる子じゃなかったのに。本当にキャラ換えしてしまっただんどうか。

調子を狂わされてどきまぎしていると、合間を縫うように軽快なノックの音が響いた。

「どうぞ」

別段気にした風でもない新さんが返事をする、可愛らしい声がドアの向こう側から聞こえてきて、彼女が入ってきた。突然の訪問者に不本意ながらもほっとしつつ、またその姿を目に留めて少しだけ目を見張ってしまった。新さんが見てる手前あんまりアクションを起こしたくなかったけれど、その入ってきた人が人だけに、目を向かざるを得ない。

いや人というか、子というか。あからさまにその身に余る大きさのカートを引いて、傍目にも優雅とはいえないおぼつかなさでそれを一生懸命に押すちっちゃな手。給仕と呼ぶにはあまりに幼すぎるその子は、確かに見覚えがあった。

白薔薇の子。

「おちゃをおもちしました、かつかー」

「うん。そこに置いておいてくれるだけでいいよ。ありがとう」

啞然とする私を尻目に、新さんはこの上なく爽やかにその子へ微笑みかけている。彼女はまさしく新さんの言いつけどおりテーブルの脇でティーセットが揃ったカートを止めると、何を思ったかひよっこり横から顔だけ出した。人懐っこいきらきらした眼差しが、あの時と変わらず私を映す。

「こんにちは、あねぎみさま」

「……んには」

かすれた声でなんとかそれだけ返すと、彼女はにっこりと微笑みカートから手を離し、勢いよくお辞儀をするとそのまま一目散に扉

の方へと走っていた。扉が閉まる前にちらりと見たのは、恐らくはそれまで付き添っていた本当の給仕、あのプリティメイドさんだ。何が何やらと思っている間にも、脇で力チャカチャと新さんがカートに乗ったそれら一式をテーブルの上に移していた。一見して穏やかな表情で給仕の代わりをする彼の面差しを目に移してやっと我に返った私は、かつと頭に血が上りかけた。

なんなの。なんだっていうの。皮肉のつもり？　なんで、どうしてあの子をわざわざ私の前に　。

喉まで出掛かったそれをなんとか飲み込み、私はテーブルから身体を離して椅子に背を預けた。

ああ、もう。危うく吞まれかけるところだった。それでもやつぱりまだ悔しさは滲んでいて、わたしの前にカップを置いた新さんをきつい眼差してねめつけてしまう。

「なに？　姉さん」

心なし楽しそうな新さんの声が忌々しい。

「別に？　ただ新さんのロリ嗜好に吃驚しただけ」

「そうか」

さらつと流すな！　なにちょっとはにかんでんだ！　できてんのか、できちゃってんのかあのロリータと！

思いつつも、言葉にはできない。

馬鹿馬鹿しい。乗せられてたまるか。

「それで、なんだったかな。なに話してたっけ。お姉さん忘れちゃいましたよ」

「だから」

「あーあー、わかった！　ごめんごめん思い出したよー」

大げさな態度で遮って見せると、新さんは僅かに目を顰め閉口した。それを目に留めて、やっと私の口元にも笑みが戻る。

「私がなんで嘘つくのかって話だよー。簡単だよ？　新さんに話すべき本意なんか一つも無いからに決まってるじゃない」

これは本当。自分でも気分の悪い笑みをにまにま向けながら言う

と、新さんの眼差しがまた少し揺らいだ。

「ごめん。私にはもう罪悪感なんて残っていない。これが大詰めなんだ。躊躇なんてもう捨てた。もう少しだけ、耐えて新さん。」

「思えば嘘ばかりだったよね、私。新さんも気付いてたよね。私よね、新さんが気づいてるって知ってたけど、でもあえて訂正しなかったんだよ。なんでかわかる？」

新さんは黙っている。それでも私はまだ足りないと言いつける。
足りない？ もう十分傷つけたでしょ？

いや違う。まだ足りない。

「私はね、新さんに嘘ついてますよーって新さんに知ってもらったの。私は新さんに本音を知ってもらったの。とっつぱつちもありませんよって気持ちを感じてほしかったの。とっつぱつちもありませんよって。貴方の善良な心は誰かの救いになるかもしれない。でも善良だからこそ守りきれない弱さがある。優しい新さん。付け入るところがありすぎる。ごめんね、新さん。」

「解る？ 踏み込んでほしくないの。知ってほしいなんて、解ってほしいなんてこれっぽっちも思っていないの、私は。むしろその逆。私のことなんか放っておいて。気に留めないで。理解しようとかしないで。私は新さんと解りあいたいか歩み寄りたいとか、欠片も思っていないんだから」

例えそれが真実であっても、本来ならば、言うべき言葉じゃないんだろう。こんなことは間違はなく、大抵の人が避けて通る、言っではいけない言葉のうちの一つなのだ。

それでも私はあえてその言葉を選ぶ。これでもかという傷をつけておかなければ、私はどんどんためらい傷ばかりを作り続けるだろう。どちらが残酷かなんて解らないけれど、私は、無用な方法は好きじゃない。

「新さん」

最後の詰めに、じっとその澄んだ瞳を見つめて悪魔のように囁い

た。

「もうやめよう？ 私が君を嫌いなように、新さんも私を嫌えばいい。突き放してしまえばいいの。お優しい弟なんてもう、やめちゃえばいいんだよ」

それが一番、楽な方法。嫌い合えばいい。それが私達にとっては極自然な成り行きなんだよ。抗おうとするから苦しくなるの。だから新さん。頼むからいい加減、私を嫌いになつて。私はずっと、それだけを望んできたのだから。

息を詰める思いで、けれど表面上は悪辣な笑みを浮かべて新さんを見つめる。新さんの眼差しは私の言葉に動揺したのか一瞬、揺れた。

あともう少しだ。

そう、思った矢先。何故か新さんは、晒った。

「そんなに俺に嫌われたいのか」

自嘲するような、それでいてどこかすごく哀しさを帯びた晒い方ふと、何かが胸を突く。未だ嘗て、新さんがこんな顔をして笑ったことが、あつただろうか。何故かその微笑みは見ていて痛々しくなるくらい、私に衝撃を与えた。

おかしい。覚悟したはずのことだったのに。こんなことに揺さぶられるなんて。

「新さ……」

「いいよ。わかった。もう、いい」

突き放すような冷たい声。これは、本当に新さんの声だろうか。そう感じるほど暗くて冷たい、なんの温度も感じられない、声。

続く言葉を失った私をあざ笑うかのように、新さんは冷ややかな笑みを私に向けたまま、言った。

「もう、いい。どうせ嫌われてるんだ。だったら俺の好きなようにする。姉さんがそこまで言うなら、俺もそれに応えるよ」

「何を言って」

「姉さん」

あ。だめだ。

凍てつく眼差しのその奥に、揺らぐ炎。

「俺は絶対に姉さんを連れて帰る。もう逃がしてもやらない。泣こうが喚こうが知らない。姉さんの馬鹿げた計画なんか俺がぶっ潰してやる。いいよな、姉さん」

ああ。

とんでもない間違いを、冒してしまった。どこでどう間違ったのか。

凍りつく意識の中で、それでも直感が告げる。新さんは今、とてつもなく怒っている。私が怒らせた。もう、駄目だ。私は間違ってしまった。

その恐れのあまり気付くのに一瞬遅れた。新さんが私に手をかざすところ。その手のひらが私の視界を覆った途端、逃れる間もなく強烈な睡魔が意識を覆い隠し、そしてその刹那に、小さな声で「楓」と誰かが呼んだ。それはなんだか私の方まで泣きたくなるくらい、恋うように哀しそうな声だった。

佐藤かえでの夢（前書き）

これより過去編へ突入するためパソコン版ではレイアウトが変わりますが、見づらい、違和感がある等不都合を感じられる方はご一報くださると幸いです。

佐藤かえでの夢

勝手に死ぬなんて、お父さんはなんてひどい人なんだろう。
置いていく側の気持ちなんて何一つ考えないその頃の私は、お父さんが亡くなったとき、漠然とそんな事を感じていた。

闇。暗闇の中。真っ暗でもなく、明るくもなく、ただ平坦な闇の中。ああ、そう、これ知ってる。眠りにつく直前みたいな感覚。意識が辛うじてあるようなないような、どっちにも転べる不安定さ。

あれ、でも、なんだろう。何かが見える。誰かが、見える。
だれ？

遠い遠い暗闇の中で、それでも私の声は届いたのか、その子は振り返った。

「わたし？」
いや貴方しかいないでしょ。だれなの？

問いかけるといふよりつつこむと、その子がふつと笑ったような気がした。そして私が近寄っているのか彼女が近付いているのか、見る間にその輪郭がはっきりしていく。見慣れた制服を着ているのが解った。ああ、それ中学校の頃のじゃん。

「わたしは佐藤」
聞き返す間もなく、その子は、彼女は目前にいた。いや、違うか。私。わたし、が、居る。

「私は佐藤かえで。あなたは、わたしでしょ」
笑っているのかいないのか、私はそう答えた。答えたと同時に、馴染んだ感覚が私自身を飲み込む。

ああ、夢か。夢を、見るんだ。

『わたし』はいつもの夢の中へ、とつぷりと沈み込んでいった。

お父さんが死んだ日のことは、覚えていない。まだ五歳だったからなのか、それとも生来私は薄情だったからなのか、父親が死んで哀しいとかそういう感情を抱かなかった。

ただ、お母さんが泣いていた。この世の終わりを迎えるかのように、それはそれは哀しそうに嘆いていた。それだけは覚えていて。多分、きっと、事実お母さんの世界は終わりを迎えていたんだと思う。お父さんが死んでしまつて、お父さんのいる世界は無くなつてしまつた。だからお母さんはあんなに哀しそうに泣いていたのだろう。失つた世界に追いつがって、もうこの世にはない存在を見つめて、嘆いていた人。

逆に私はというと薄情なことに、悲しみよりも別の感情を抱いていた。

お父さんがお母さんを泣かせた。勝手に死んで、勝手にいなくなつて、お母さんを泣かせたまま自分だけどこかに行つてしまつた。

思えばその瞬間から、私は父親と言う存在を嫌いになつたのかもしれない。お母さんがそれだけ心を痛める存在。きっとそのことに子供ながらに嫉妬していたんだろう。

そうしてその時から私の世界の中心はお母さんだった。生きる寄り代。目的。私が、お父さんの代わりに一生お母さんを守る。そう、思つて、育つた。そのつもりで、歳を重ねた。

転機が訪れたのは、私が十四歳を迎えて少し経つた頃。紹介され

たのは新しい父親。と、その息子。

お母さんがはにかみながらあの人の付き合いを私に告げたときの、気分と言ったら。哀しくて、悔しくて、腹立たしくて、寂しくて、でも、どうしようもない絶望感を味わった。

その感情を味わうのは、二度目だった。一つ目はお父さんが死んだとき。そのときはまだ小さかったから、それほどでもなかった。むしろ使命感の方が強かった。でも二度目は、違う。それまで作り上げてきた私のそのちっぽけな使命感があっけなく打ち砕かれた、瞬間だった。

だってそうでしょう？ ずっと、それだけを思っ、過ごしてきたのに。生きてきたのに。私にはお母さんしかない。お母さんにも、私しかない。お母さんは私を一生懸命育ててくれた。今度は私の番。これから、これからだ。そう、思っていたのに。

新しい父親？ なにそれ。そんなものいらない。そんな人必要ない。弟だつて要らない。ずっと二人でいい。それで満足だった。それで幸せだった。そう、思ってたのに。

お母さんは、私だけじゃ駄目だったの？ やっぱ私は、お父さんの代わりにはなれなかったの？

そう、思うと、思えば、思うほど、底知れない寂しさを感じた。ずっと自分は一人だったのかと、独りよがりだったのかと、泣き喚きたくなった。

けれど、でも。お母さんが、笑っていた。はにかんで、ちょっと恥ずかしそうでも満たされたように笑っていた。あの人の隣にいるときは。

だったら、駄目なんていえないじゃない。結婚なんてしないで、ずっと二人でいようよ、なんて、言えるわけない。そんなこと、言えない。そこにお母さんの幸せがあるなら、だったら、私、一緒に笑うしかないじゃない。それしかできない。それしか、選択肢なんて無かつたんだよ。

それから、気持ちを切り替えた。ううん、心を、挿げ替えた。全く新しい、別のものに。そうでなければすぐになんかお母さんを心のままに詰ってしまいたいそうだったから、前のわたしはその馬鹿げた使命感諸共封印した。

今度はそう、お母さんの幸せを守る。そう、使命感。

そのためにはまず、この一条親子に取り入らなくてははいけない。万が一にでも私が不興を買ってこの結婚を破談にさせるわけにはいかない。そうしたらまた大切な人を失ったお母さんは泣いてしまうだろう。そんな事はさせない。これがお母さんの幸せなら、私はなんでもしよう。どんなことでも、してみせよう。これが私の、二つ目の使命感。

本当は、一条親子のことなんて嫌いだった。いやになんでも内包するように親愛めいた微笑を向けてくる一条さんも、母を奪った相手だと思えば胡散臭いと思えこそすれ好意なんて抱けなかった。二十歳も年上とは思えないほど若々しくて鋭気に溢れていて、なんでもできそうで、その通りなんでもできる力を持っている人。私とは正反対の人。おこがましいことに、自分なんかと比べて一丁前に悔しさを募らせた。

その息子もこれまた気に入らなかった。亜麻色の柔らかそうな髪に、はつとするほど真つ黒な瞳。切れ長の瞳はすつとなだらかな線を描き、まだ幼さの残る面立ちと反してひどく大人びて見えた。その容姿こそ目を奪われるほど完璧だというのに、ひどく醒めた目つきでものを見ている子で、あまり仲良くなれそうに無いな、と直感的に思った。それに、私だけならまだしも、自分の父親にも、私のお母さんにまでそんな目を向けていた。それだけでも嫌いになるには立派な理由になる。

だけど、私個人の主観なんてどうでもいい。嫌いたくても、嫌っ

ちやいけない。好きにならなくてはいけないし、好かれなくてはいけない。悪感情など結婚の妨げになる。だから私は、まずは一条親子に取り入ろうと、決めた。

幸いなことに、父親の方はさほど苦勞は無かった。元々お母さんに好意を寄せて結婚を申し込んだ相手だ。その娘の私が好意的な態度を取ったことで、向こうも快く受け入れてくれたようだった。

問題は、一条新。彼のほうだ。結婚に反対の意こそ見せはしなかつたけれど、その眼差しはいつだって無関心そのものだった。私にも、お母さんにも、或いは自身の父親でさえも、一連の流れのように捉えて興味の片鱗さえ見せない。時折、そんな彼を持って余して寂しそうに苦笑する一条さんを見ることがあり、私は新という男の子の厄介さをほとほと感じ入ることとなった。

そんな中で結婚の話は着々と進んでいった。まずは籍を入れる前に一度共同生活を敷いてみることから始めると、一条さんは言った。同居。

一瞬「げえ」って思ったけど、またすぐに思い直した。好都合だ。生活を共にすれば、今よりもっと身近になれる。ともあれば、取り入る隙を伺えるということ。新たな使命感を胸に宿し、私は新生活に燃え滾る熱意で挑んだ。

新生活に及ぶにあたり、一条さんは住まいを用意した。一軒家。アパートとかマンションとかじゃない、まるまる一軒家。お風呂も床も床暖房で全部屋空調ついてお母さんの夢だったベランダも庭もあってシステムキッチンで冷蔵庫がどっちからでも開けられるやつでとにかくああもうなんかすごい家だった。夜になると廊下とかに足元にちっちゃい電気ついてるし。窓なんかリモコンでぴつとやるとぱつとなるし。玄関なんか家の柵から若干遠いし。意味解らん。「すごい。すごいねえ、かえでちゃん！ねっころがつても暖かいよー」

きやつきやつふふとばかりに、人様の用意した家で躊躇なく寝転がりアホみたいにゴロゴロと喜ぶお母さんの傍らで、正直私はドン引きしていた。表面上はお母さんに習って無邪気に喜んではいたけれど。

だって、ねえ？ 共同生活の為にまるまる庭付き一軒家って。百歩譲ってもマンションとかでいいじゃんとか思っただけは私だけ？

お母さんが夢のマイホームを密かに思い描いていたのを叶えてくれたのだと、お母さん本人はただ手放しに喜んでいただけ、私はそんなものをぽんと差し出す一条さんの常識やら財力やら金銭感覚やらその他諸々まるっと理解しがたかった。

なので、一条さんには悪いけど空恐ろしいやら気味悪いやら胡散臭いやらで警戒値がぐぐつと鰻上りになったことは否めない。その共同生活一日目、私は一条さん監視名目による内面調査を懸念事項の一つ加えた。注釈にはこう加えた。

『 場合によっては破談も止む無し。 』

ともあれ、難なく始まった共同生活。基本的には、なかなか快適だった。今までの自分の生活と近代の文明の利器との感覚格差には些か苦労したけれど、それ以外はさほどの問題は無かったように思える。お母さんは好きな人と生活できて年甲斐もなく乙女のように振舞って可愛かったし、一条さんも最初の懸念はどこへやら、生活の全てがお母さんへの思いやりで満ちていた。少なくとも二人は心底思っているのだとまざまざと見せ付けられる、腸煮えくり返る、もとい順風満帆な生活模様だった。ある一点を除いては。

私の、弟。正確には未だ弟じゃなかったけれど、未来の、と付け加える。

共に生活してみたものの、まったく言っていないほど隙が無い。可愛げも無い。面白みも無い。新はそういう子だった。彼はいつだって褪めた目でものを見て、周りを見て、人を見ていた。相手が親

だろつが教師だろつが他人だろつが関係ない。誰も彼もが彼の前では等しく、性差万別なく、あるいはものとも人とも機微を見せない眼差しを向けてくる子だった。

当初私はそんな得体の知れない彼に近付きがたいものを感じずにはいられなかつたけれど、それでも決意を押し通して彼に向かった。とりあえずは嫌われてもいいから関心を向けること。そこから私と新のやりとりは始まった。

「あーらた君！ なにしてんの？」

結論から言おう。相手にされてましえん。毎度毎度このように特攻しつつ、あたかも闘牛士の如くさらりと交わされてしまします。つて私は牛ですか。自分ノリツツコミも飽きてきたその頃。そろそろ進展がほしいところだった。

こんな事を言っていると誤解があるかもしれないけれど、新さんは別に、私に対して冷たいわけではなかった。挨拶もすれば返事もする、微笑みも浮かべるし感情の機微のような表情も時折見せる。見掛けはごく普通の、人当たりのいい少年だった。

でも誰だって、ずっと同じ人を見ていればそれが本物かどうか位は、俄かにでも解ってしまふ。見えない新の心。誰に対しても、自分自身に対しても、まるで執着が無いかのように見えた。いつも感じるものがなさそうで、けれどそうは見せなくて、でも、どこかそれは作り物めいていた。何もかもが本物じゃない。本当になんにも感じていないんじゃないかってくらいに。正直不気味さを感じたことさえある。

彼自身はそれを、自覚しているのだろうか？ そんな疑問を抱きつつ、いつしか私の目的は自分でも気付かないうちに、新の本性を暴くことへと摩り替わってきていた。

その次の、小さな転機は同居を始めてから三ヶ月経った頃。進展の無い距離感にマンネリを覚えた私は、とうとう嫌がる（と言っても表面上はそんな様子を見せなかった）彼を外に連れ出した。

どこへって？ 街です、街。彼みたいなお坊ちゃんが行ったことのなさそうな、けれど私みたいな一般人の慣れ親しんだ、街。

「行ってどうするの？」

彼はそう言った。遊ぶのに理由なんて要らないと思ったけれど、彼の中の常識では逐一理由が必要で、そもそも無いほうがおかしいし理由の無いことに時間を費やすことすら甚だ疑問だったらしい。けれど、まあ、天邪鬼な私でありまして。それならいっそのこと、とことん無駄な時間を過ごさせてやるう。そんなのはた迷惑極まりない事を思いつき、思う存分彼を振り回してしまった。

それでも、ただ振り回されるだけで終わる彼でも無かった。流石、新。彼は私に無言の宣戦布告を言い渡した。なんてことはない、少し目を離れた隙に、忽然と姿を消してしまった。

おやまあ、なんと、あの新が。彼を見失ったとき、私は呆然とするよりも先に感心してしまったものだ。だって今まで自分からは何もアクションを見せてこなかった彼が、ボイコット。もしくは自主迷子。

私は考えた。これは、あれだろうか。もしや、見つけてみるっていう、彼からの宣戦布告？ それっぽい。そうに違いない。よろしい、ならば戦争だ。闘争心に火がついた。生来の猪突猛進な面も手伝ってか、目的はその瞬間に一条新と『逃走中』ごっこに変更された。

が。世の中ってのは早々甘くない。甘くないというか、完璧に私の認識が甘かった。

「何故」

珍しく自分から私の部屋を訪れた彼は、扉を閉めるなりいつもより低い声で、ぼつりと言った。ただそれだけの一言でしかないのに、気圧されるほどの威圧感を覚える。吃驚だ。彼が、怒っている。作り物めいた感情じゃなくて、本当に。恐れおののきながらも、妙な新鮮さを感じてしまった。

何故彼が怒っているのか。その理由には勿論、心当たりがあった。

突如始まったかくれんぼに俄然張り切った私は、ありとあらゆる心当たりを探した。彼が行きそうなところ、興味を持ちそうなところ、もしくは隠れそうなところ。広い街の中では私の方が有利だ。負けるわけにはいかない。絶対見つけるぞ、と意気込み、私は一条新搜索に没頭してしまった。

気付いたのはそれから三時間後のこと。足が棒になるまで探し回り、はっとした頃には既に辺りは暗くなり、時刻は疾うに夜の八時を悠々と過ぎていた。これはまずい。連絡もなしに夕飯ぶっちはお説教フラグです。その時初めて焦りを覚えた私は、なんと浅はかだったのだらう。

しかしこれだけ探して見つからないなんておかしい。彼ならきつと頃合を見つけて自分から出てくるはず。まさか、彼は本当に迷子になってしまったんじゃないだろうか。だとしたら大問題だ。私が彼を連れ出したのに、見失った拳句迷子にさせるなんて。監督不行き届きで私の積み上げていた株が下がってしまう！

彼への心配というよりもむしろ自身の保身の為に寒気を覚え、そのとき私は漸く家に連絡を取る術を思いついた。慌てて取り出した携帯を見てみれば、着信が数十件、同じアドレスからのものが表示されていた。言わずもがな、『家』だ。ついでに『一条さん』と『お母さん』も数件、あり。

まずった。そう思い一気に青ざめすぐさま家へとリダイヤルし家人と連絡を取ったその時。そう、その時漸く私は、自身の発想の貧困さを、まざまざと思い知ったのですよ。

彼は勿論、家に居た。無論、私から離れてすぐに自宅へ直帰ですよ。まあ、常識で考えれば一番最初に思いつく。でも私は思いつかなかったんだなあ、これが。

「ご心配おかけしてすみませんでした。あの、迷子になっていました。パニックで家に連絡することも思いつかなかったんです。ごめんなさい」

恐れ多いことに一条さん自ら迎えに来てもらい、家に着くなり心配で泣く寸前の表情になったお母さんと、珍しく渋面を浮かべる一条さんに問い詰められ私はすぐに謝った。ここはもう、謝り通すしかない。下手に余計なこと言っただけ掘り下げられたら自分で墓穴掘っちゃいそうだし。でもまだ納得していなさそうな一条さんが、訝るように傍らに佇む新にちらりと視線を送りながら言う。

「一人で？ 新が楓ちゃんと出かけたって、聞いたんだけど？」

「はい。でも、途中で解散したんです。その後迷子になったんです。うっそでえす。本当はバッチリその新君を探していました。」

我ながら苦しい言い訳ですとも。でも、真に不本意ながら空気を讀んだ私の胃が盛大に空腹のファンファーレを鳴らしたためその件はうやむやになり、私は追及を逃れるため一条さんが折れるまでとにかく謝りとおし、事なきを得た。

問題は、その後。そうです。ご飯食べてお風呂は入って人心地つきました、はあー我が家が一番だな。そんな満ち足りたため息をついたその直後、ベストタイミングで彼が尋ねてきたのです。

空気も読める子一条新。そんなアオリ文が浮かびましたとも。

というわけで目下、この通り。『何故』と、聞かれても。だって勝手に勘違いして勝手に闘争心燃やして勝手に熱中した拳句それが勘違いで回りに迷惑かけましたー、なんて言えるかい。

けれどどうやら彼は、私が彼のことをかばったのだと思っ
ていらしい。ああ、帰って早々面倒くさい。いや待てよ。これを借りに
するのはどうだろう。貸し借りで一気に彼との距離がぐっと縮まる
わけないか。わけないな。そんなことしてみなさいよ、寧ろぐ
っと広がりそう。彼のATフィールドがね。

待て待て、うまいこと言ってる場合じゃない。むしろ今はうまい
言い訳の方を考えなければ。うまい言い訳。うまい言い訳。

「あー、別に、嘘ってわけじゃないよ。半分迷子になりかけたし」
「どうして」

なんでちゃんかおまいは。

飾り気の無い追求だからか余計に息苦しく感じる。新君は尋問の
才能もあるんだね！ わあすごい。

「えー、いや、だって、」

彼は視線を一ミリたりとも外さない。いやに一条さん譲りの眼力
があるせいで、どうも二人がダブる。似たもの親子め。そんなとこ
ろまで似なくていいのに。無言の追求に耐え切れなくなり、ついに
折れたのは私の方だった。そのとき漸く気付く。そうか、私は一条
さんを折れさせたんじゃないかと、折れてもらったのか。ちくしょ
う。

それでも最後の悪あがきのように目を逸らして、限りなく小さな
声で白状した。

「探してみろって、いうことだったんじゃないの？」

だってさあ。本当は一瞬、見たんだ。新が私を置いて人ごみの中
に紛れるところ。それで、その一瞬に確かに見えたの。いやに不敵
な微笑み。どこか挑発するような、底の見えない表情。まるで新の
深淵を見たいな気が、したんだよ。だから、追いかけてよって、

さあ。

「探して、見つけてみるっていう、宣戦布告をされたのかなーって、思っちゃってさ。つい、絶対見つけてやる！って躍起になっちゃって……まあ、それも勘違いだったみたいだけどね」

もごもご言い訳のように言いながらちろりと新を盗み見てみると、何故だか居を突かれたように目を見開いていた。そんなに的外れなことを言っただろうか。ふざけんじゃねえーとか言っただけさーサイ 人化するかどうかこのまま見守っていたい気もするけど、本当になつたら洒落にならない。この子じゃ冗談も下手に笑えない。ここはひとまずゴマ摺っとくか。

「いやあ、新君には完敗ですよ！ まさか家に居るとはねえー。いや盲点！ それとも私がアホだっただけかなー、なんて……はは、は」

笑えええ。もしくは怒れえええ。なんかリアクションしろよさつきまで絶妙な空気の読みっぷりだったくせに。なにこの滑った感。ダメ押しに自分で言っただけで自分で笑っちゃったし。ひいひいっそ殺してえ。

耐え難い空気に私が身もだえしている間も、彼は微動だにしない。一体怒っているのか呆れているのかあざ笑っているのかはつきりしてくれ。ついに耐え切れなくなり、私の方から固まる彼に近寄りその彫刻のように滑らかな作りこまれた美貌を覗き込んだ。

「あのー……あーらた、くーん？」

ひらひら、と手を振ったとき、ぐつと彼の眉根がよった。心なし切れ長の目も日本刀さながら鋭くつりあがっている。それはもう、嘗てないほどに。

とうとうぶちきれたか。やったあ目標達成あれでも全然嬉しくないむしる怖い怖いぞおお。

恐れ半分期待半分で身構えると同時に、彼はそのままさつと踵を返し、瞬く間に無言で部屋を出て行ってしまった。呆気にとられる私を残して。

こうして、小さな転機はひっそりとその終末を向かえ、そしてまた新たな変化がそれと同時にひっそりと始まり始めた。それを関知できるはずもないそのときの私といえば、次はどんな顔をして彼のご機嫌伺いに向えばいいのかと、そんなことばかり考えていた。

佐藤かえでと夏の夜の夢

例のゲームはいつ生み出されたか。それは件の出来事から数週間経った頃のこと。煮えたぎるような夏の日々も終わりそろそろ初秋に差し掛かる、季節の変わり目。いつからそれは動き出していたのか、私達の関係にも以前とは違う何かが、見え隠れし始めていた。それが私と新を繋ぐ糸の、変わり目。

あれから新の態度はそう変わることなく、私の方が拍子抜けするほどいつも通りに新は接してきた。いや、接してきたというか、特に接する機会もなく従って避けられる事自体が起こりようが無かっただけの話かもしれないけれど。

そして懲りない私はというと、自分で言うのもアレだけど鬱陶しさも更にパワーアップしていた。

「あーらつたくん、ご機嫌いかが？」

ぼんぼんぷニツ。よくあるよくある。

誰もが一度は経験済みの、肩を叩いて振り向きざまに人差し指トランプ。無論誰かに悪戯など仕掛けられたこともないお坊ちゃまちやまの新君は面白いほど簡単に引つかかってくれ、その時の彼の表情ときたら、思わず心の中で会心のガッツポーズを決めてしまったほどという上出来加減。その瞬間は彼の子供らしい一面を垣間見れた、貴重なナイス悔やし顔でしたとも。

しかし事はそれでは済まなかった。後日再び、勉学に励むべく机に向っている彼の後ろに忍び寄り私。再びトランプを仕掛けようと手を伸ばしたその私の右手を、あろうことか手前からぬっと現れた彼の左手が素早く捉えた。

「お、つとお？」

思わず面食らい呆けた声を上げると、会心の微笑み、一条新バー
ジョン。どや顔で振り返りこちらを仰ぎ見る彼の端正な面差し。そ
の勝ち誇った眼差しに、私の中の闘争心がめらつと一気に燃え上が
った。

よかるう。ならば左だ。うらあつとばかりに繰り出す豪速の左手。
しかし。

無駄無駄無駄アとばかりに再び鋭い徒手空拳が私の左手を阻んだ。
うおおおい読んでたよこのお坊ちゃん。再びどや顔二割り増し
追加入りました！。

「ふっ」

なかなかやるじゃあないか。悪戯に免疫のない箱入り息子と見て
侮っていたよ。薄ら笑いで力の籠もっていたその両手を弛緩しかんさせる
と、彼も笑むように目を細め拘束を緩める。両手が開放され、私は
ほっと一息つくように息を吐いた。

「ほー！」

唸れ、閃光の両手！
キラートゥーハンド

中二めいた技名を思い描きながらどつく勢いで両手を繰り出す。
が。

「甘い」

ぱしぱしっ、と後ろからの攻撃を見事に掠め取られる。ぐぬぬ生
意気な。ならば、と追撃。再び阻止。

そうして、そんな攻防を飽きもせず小一時間続け、いつしか飽き
たから攻守を逆転したいとのたまう彼の言葉に試合は一時休戦、ル
ールの考案へと移行された。再び小一時間後、何故かオリジナルゲ
ームの成立となる。どうしてこうなった。

そんな訳でどんな訳で、なんやかんやで例の遊びはこのような経
緯で生み出された、というわけです。面白いことに、そんな流れで
作り出されたゲームにも関わらず何故か彼のほうがいたくお気に召
したようで、時折思い出したように仕掛けられることとなり、また

一步私と彼の距離を縮めることが出来た。その頃になると私も打算とは別に彼に親近感を抱き始めていて、次から次へと紡ぎだされる新しいやり取りを楽しく感じるようになっていた。

何が変わったのか、誰が変わったのかは解らないけれど、確実に私と彼は当初とは全く違う思いでお互いに接し始めていたはずだ。けれどそれは私達だけの間に留まらなかったようで、もう一つの繋がりもまた季節の移り変わりのように緩やかに、けれど確実に織り交ざり始めていた。

その兆しが見えたのは、ある夜のこと。もう残暑も過ぎ衣替えの季節となり、月が昇る刻限には夜風も肌寒く感じるようになっていた頃。明日は休みだからと夜更かしをしていた私は不意に喉が渴いて、何か飲み物を失敬しようとキッチンに通じるリビングへと赴いた。

そしてその時その人は、そこに居た。

「ああ。楓ちゃんか。一瞬紅葉さんかと思ったよ」

誰もいないと思って入ったりリビングのソファには、一条さんが座っていた。仕事かなにかから帰ってきたのか、仕事着のまま上着だけ脱いでそこに寛いでいたらしい。吃驚した、というより口から心臓が飛び出るかと思った。

だって電気もつけずにぼけーっと座ってるから。月明かりに照らされてね、ぼやーっと現実なんだか幻なんだか幽霊なんだかただのジェントルマンなんだかっていう、感じで。言い方悪いけど。誰だって予告もなしにそんなの見たら吃驚しますよ、そりゃあ。

そんな風に私を驚かせた当人はいつもよりも少しだけ疲れたような表情で、それでも私を目に止めると気が抜けたように穏やかな微笑を向けてきた。そのときに気付く。

あ、髪が下りてるから今日はジェントルじゃない。いつもより若く見える。ていうかこの場合、歳相応か。一条さん、お母さんより

五歳くらい若いらしいし。

「眠れないの？」

「……ちよつと、喉が渴いて」

優しい声で問いかけてくる。それでもなんとなく言い訳みたいに答えると、何が可笑しかったのか一条さんはふつと笑みを濃くして、それから首もとのネクタイを緩めてシャツのボタンをいくつか外し寛げた。

「じゃあ、悪いけど僕の方もくれないかな。水を一杯」

「あ、ええ、はい水ですね」

「うん、よろしく」

呑みの帰りだろうか。それとも接待か。とんでもないお金持ちの一条さんが接待。される側じゃないの。

とりとめもない自問自答を繰り返しながら、私は冷蔵庫から麦茶と水のボトルを取り出した。傍らに置いてある洗いざしのコップを取って、水を注ぐ。次いで自分のコップにも麦茶を注ぎながら、ちよつとだけリビングの一条さんを盗み見た。

なんだか余程お疲れらしく、珍しくだれているような様子でソファに身を預けて頂垂れている。呑みすぎたのかな。それともこんな時間まで仕事してたのかな。どちらにしてもこんな夜も更けた時間帯まで続けば、そりゃあ多少なりとも疲れるだろう。一条さんって休みの日自体殆どないんじゃないかってくらい少ないし。休日でもぱりつとスーツの人だ。

出来る人は大変なんだなあ、とか思いながらコップを持って一条さんの方へと向う。この場合、お疲れ様でした、とか言ったほうがいいのか？ そんな事を思いながら近付くと、気配に気付いたのか一条さんが顔を上げた。

「あの、えと、お疲れ、様デス」

うう。なんだかどきまぎしてしまった。想像ほどスマートにはいきませんって。

だって美形過ぎるんだもん。大人の色気満々っていうか。ドキッ

というより、オーラが違いすぎて居心地が悪い感じ。普段の何割り増しなんですか一条さん。こんな人と恋人って、お母さんすごい。我が母親ながら、思わず斜め上に尊敬してしまった。

「あはは。ありがとね。……ああ、楓ちゃん」

「え、あ、はい？」

「もしまだ眠くないなら、少し話せないかな？　くたびれた親父への労いだと思って」

「どうか、なんて小首を傾げて言うから断れるはずもなく、おっかなびつくり向い側のソファに腰を下ろした。

うう。面と向かって話なんて、したことないんですけど。深夜になんなんですかねイキナリ。酔ってるんですか。でも不思議とお酒の匂いはしてこない。それほど呑んでいないのか、それともただ純粹に仕事だけだったのか。

訊ねてもいない問いに一条さんが答えるはずもなく、彼は私の手渡したコップ一杯の水を一息に半分ほどまで飲み下した。

「はあ、ああ、いいね。深夜に娘と一杯。おつなもんだ」

「……はは」

なんと返せばいいのやら。いやまだ娘じゃねーしそれ酒じゃねーし何も何も事実上水と麦茶と他人同士だし。と心の中で私がつっこんだとかつっこまないとか。

しかも、返答に困って苦し紛れに麦茶をちよびちよび飲んでいると、なにやら視線を感じた。いやな予感がしてコップの淵からちらっと覗き見てみれば案の定、一条さんがこつちを見ている。どうもさつきよりも上機嫌なようで、にこにこ膝に頬杖をつきながら私を眺めていたらしい。

「一体なんなんでしょう。年頃のレディに向ってその眼差しはちと不躰すぎやしませんかね、未来のマイファーザー」。

「楓ちゃんは面白いね」

「……はあ、ああ、いえ、私なんてつまらない、いち学生ですよ」「そうかな」

「そうです」

何の面白みもない返答を返してみても、一条さんは楽しそうに相槌を打つ。今更悪感情持たれても困るけど、いきなりここにこされても対応に困る。新以上に謎なオヤジだ、この人。

「こうしてみると楓ちゃんと面と向かって話すのは、初めてじゃないかな」

「そう、ですかね」

「そうだよ」

まるでさっきの会話が逆転してしまったみたいだ。特に困ることもないのに、一条さんがここにこすることに私のいたたまれなさもどんどん積みあがっていく。

まるでジェンガをしている気分だ。穴ぼこの会話の向こうに居るのは勿論、一条さんその人。一つ一つ積みながら、崩れないように、けれど崩れそうになるのを楽しんでいるかのように、一条さんは会話をつなげる。私はただただ、おっかなびっくり、抜いた欠片を当たり障りの無いところに置くだけ。

「楓ちゃんはさ、お母さんが好きだよね」

む。嫌なところを抜かれたらしい。くつと言葉が詰まりそうになるところを、麦茶を飲み込むことで何とか誤魔化す。

大好きだつてさ。解ってる解ってるなんて言い方してくれちゃつて、狸ジェントルマンめ。

「そう見えますか」

「そう、見えるよ」

否定も肯定も無い可愛くない切り返しをしてみても、一条さんの優位は揺らがない。くそう。ならばくええ。

「それじゃあ一条さんは、お母さんのことを大好きなんですか」

さあ答えてみる。一瞬でもたじろいだらせせら笑ってやる。臆面もなく肯定したら白けてやるぞ。けれど一条さんはそれを読んでいたのかそれとも天然なのか、私の予想を軽く裏切ってくれた。

「いや、ちよつと違うかな」

「え」

「僕、紅葉さんにぞつこんだからねえ。いい年したおじさんがみつともないんだけどね」

苦笑しながらぬけぬけと。このキザ狸。たかだか出会って半年ちよつとの貴方が私のお母さんへの想いより勝つてると言いたいのか。そうなのか。ちつくしようにどうしてくれよう。

いつも新へ向ける闘争心が当社比二倍でめらつと燃え上がった瞬間、その人は絶妙のタイミングで爆弾を投下した。

「あ、楓ちゃんのこと大好きだよ」

おげえ。闘争心ぶち折れ。

思わず顔をしかめかけてしまい、慌ててコップを口元に寄せて顔を隠した。けれど一条さんは見抜いていたようで、愉快とばかりに忍び笑いを漏らしている。

うつうつやり辛い。新をこれでもかそこねくり回して魔改造を繰り返した状態を相手にしているような気分だ。

思わずだんまり決め込んだ私に、一条さんはふつと苦笑いを浮かべた。

「ごめんごめん。でも本当だよ。なんてつたつてあの初対面の日に、僕は君たち親子に一目惚れしたんだからね」

はあ？

突然意味不明なことを言い出すものだから、思いつきりそれが顔に表れていたらしい。一条さんは面食らったように目を丸くして、突如噴出した。

「……一条さん」

「ごめん、いや、はは、悪かった。悪いね、うん」

そんなに面白い顔をしていたのか、一条さんは未練がましく喉の奥でくつくつ笑っている。

私はというと、何も言えないでいた。笑われているのに腹が立つたんじゃなくて、少しだけ、驚いたから。面食らって目を丸くしたときの一条さんの表情が、いつかの時に見た彼の表情にそっくりだ

ったんだ。それにああ血の繋がった親子なんだなあ、なんて妙に納得してしまい、怒るタイミングを完全に見失った。

一条さんは笑いがひと段落つくと、小休止とばかりに水を一口煽って、私に向き直った。

「からかったと思ってるね。本気で言ったんだよ。これは本当」
本気だとしても色々と問題があると思うんですけど。とは、思っても言わない。言わないけど、隠しても今更なので目線で返事した。「信じてないね。でも本当のことだ。僕はね、君たち親子を見て、家族になりたいって心底思ったんだよ。自分でも驚くくらい、はつきり感じた」

かぞくって。まさかのまさか、この人の口からそんな月並みな言葉が出るなんて。

俄かには信じられない、というよりなんだか似合っていない、と感じた。似合わないでしょ。一条親子は、家族と言う言葉が似合わない。一瞬そんなようなことを、漠然と思った。

「そうは見えないかな。そうかもしれないね。事実、夢かもしれないと思うときがある」

私の心を読んだかのように、一条さんはぼつりと呟いた。

「……ゆめ」

「そう。毎日が夢のようだよ。君たち親子と一緒に住めて、暮らして、まるで家族のようだ」

何を言っているのか。その時の私には、一条さんの言っている意味を半分ほど飲み込めていなかった。それでも、それを解っているのかいないのか、一条さんは独白のようにコップを見つめてその夢とやらを紡ぎ続ける。

「紅葉さんから、君の話をして山間いたよ。まるで宝箱をこっそり開けて一瞬だけ見せるみたいに、紅葉さんは大事そうに君の話をしてくれた」

お母さん。その言葉だけは、じん、と染み入った。私の中に。

一体なんの話をしたのやら。どんな顔で私の話をしていたのかを

想像すると、泣きたくなるような心地にさせられる。もしかしたら一条さんも、同じものを思い描いていたのかもしれない。最初とは比べ物にならないほど穏やかな表情で、お母さんの名前を口にしてるから。それこそとっておきの宝箱の中身の話を、するかのよう

に。
「僕は紅葉さんから話を聞くたびに、君と会っているような錯覚を覚えたよ。初めて会ったときはね、勝手だけど、まるで初対面という気がしなかった」

本当に勝手だ。私はそれまで一条さんのいの字も知らなかったというのに。

まあお母さんが一条さんの話を私に聞かせなかったと知ればどんな顔をするかと想像すれば、少しは溜飲が下がるけど。

「ねえ楓ちゃん」

はいはいなんでしょう。次は何を言うの。

「君は、お母さんのことが大好きなんだね」

それさつきも聞いた。違和感を覚えてなんとなくちらっと一条さんを見ると、一条さんも私を見ていた。何か微笑ましいものを見るかのように柔らかい、けれどどこか芯の通った強い眼差しで。何故か、ぎくつとした私。

そして彼は、言った。

「大好きなお母さんのために我慢したんだね、楓ちゃんは」

慈愛に満ちた声で、恐ろしく残酷な言葉を口にする。

思わず目を逸らしたのは私の方だった。机の下で拳を握り締め、なんとか表に出さずに済んだ。いや。そうできていると、思っていた。

「君は優しい子だ。すぐに解った。これが紅葉さんの宝物なんだと貴方に何が解るの。」

喉元まで出掛かった言葉を、けれど歯を食いしばることでやり過ごす。怒りなのか、悔しさなのか、それともこみ上がる哀しさなのか、解らない。その全部かもしれない。ただ、彼の口からお母さん

の心を勝手に代弁されたことが、どうしても受け入れられなかった。どうしてそんなことが解るの。どうしてそんなに簡単に言うの。そんなどうとも言えない感情が、私の中でぐるぐる、ぐるぐる、際限なく渦巻く。

「そ、んな……ことは、」

うまく言葉を紡ぎ出せなかった。にっこり笑って「そんなことないです」とでも言えばよかったのに。そのときばかりはうまく、出来なかった。

「楓ちゃん。でも、それじゃあ駄目なんだ」
なになが。

胡乱に見つめ返した私を、一条さんは寂しげな笑みで迎える。

「僕はね、紅葉さんにぞっこんだと言った。でも結婚する理由はそれだけじゃない。紅葉さんと、君。僕と、新。四人で家族になりたい。そう思ったから、結婚しようと思った。彼女もそう思ったから、僕と結婚してくれる気になったんだよ」

きれいごとだ。

一条さんの言葉は、そんな風にしか私の耳に届かなかった。何か別の意味があったのかもしれない。とりあえずとばかりに無言で頷き返した私の反応が望んだものでなかったのか、一条さんはそのなんともしえない微笑を浮かべたまま、空のコップを持って立ち上がった。

「ごめんね。夜も遅いのにこんな話して。でも知っておいて貰いたかったんだ、僕達の気持ち。出来れば今度は楓ちゃんの気持ちも、聞かせてほしいと思うよ。……じゃあ、おやすみ」

僕達、だって。もう夫婦気取りときた。

背を向けた一条さんには、私の乾いた笑みは見えなかっただろう。彼がりビングを去ったその後も、私は崩されたジエングを見つめるように、ただ呆然と飲みかけの麦茶を見つめていた。

佐藤かえでとホワイトクリスマス

拍子抜けでした。

だってそうでしょう。私には細かいことなんて解らないけれど、一条家って言ったなら一族張れるくらい相当大きな括りの家系らしいし。それこそ一条さんの用意したこの一軒家もささやかだと思えるほど大きくて国宝に指定されるくらい歴史のあるお屋敷、『本家』があるって話じゃない。そんなところの偉い人が、『家族』って。そんな甘ったるいことを言うような人には見えなかったから、なおさらだ。

どう考えても、彼が私に何を言いたかったのかを完全に理解することは出来ない。何故あんな話を私にしたの。私の心根を読んでいたのなら、その意思だっただうせ汲み取っていたはず。私はお母さんがよければそれでいいの。私の意思も気持ちも関係ない。元よりお母さんの結婚に、どうして私の気持ちが要するというの。必要ないでしょう。貴方もそう思っていたんじゃないの。みんなそうじゃないの。私の気持ちを聞いたところで、それで何がどう、変わるって言うの。

でも。そう感じる一方で、一つだけ解ってきたこともある。

それこそ夢の中の出来事みたいに甘ったるいことを言ったあの人だっただけれど、お母さんを想う気持ちにだけは、嘘は含まれて居ないんじゃないかってこと。日々の生活の中でも、お母さんを一番に思いやっている。私にも同じように良くしてくれるけれど、まあそれもひとえにお母さんのためと思っていはいはずだ。それを考えれば、少なくともお母さんと一条さんの間の気持ちに偽りは見えない。一緒に居て心底安らぎを感じている。そんな風に見えた。お母さんのあんな手放しの微笑なんか久しく見ていなかったから、なおさらのこと。

だから。それなら、いいの。このままずっとこうならそれでいい。一条さんは我慢って言ったけど、それだって当初からしてみれば、そんなことを考えることも殆ど無くなった。お母さんが笑っていいばいいの。出来ればこのままずっと、憂いもなく、不安もなく、安らいでいてくれればそれが一番なの。もしもそれを一条さんがこれからずっと守ってくれるなら、それでいい。結婚だって、家族だつて、なんだつてかまわない。私にとつてもそれが一番だつて、思えるんだから。いくらだつて家族ごっこも演じてみせる。

そう、だから結局そういふ結論に至る。そうして、もう一つ考えていたことは気付いていない振りをした。考えれば考えるほど得体が知れなくて、それに蓋をした。

『我慢したんだね』

あれは本当に、一条さんの言葉だつたのだろうか。もしかして一条さんは、お母さんに聞いたんじゃないだろうか。そんな事を考えると、底の無い沼を潜るような心地になって、すぐに考えるのをやめた。私はお母さんに気付いてほしいのか。それとも、気付いてほしくないのか。どちらかといえばきつと、そのどっちもだつたのだろう。私はその気持ちごと、自分の弱さに蓋をした。

秋は暮れ、冬が煌く灰色の空。降るか降るか空を見上げる日が増え、朝でなくとも吐息が白い靄を作る頃へと移り変わった。以前ならば身を突く寒さに身震いして目が覚める朝も、この擬似家族ごっこを始めてからはむしろ目覚めるのも億劫なほど快適な朝へと摩り替わった。というかそれは設備のおかげか。それでも階下から聞こえる食器の鳴る音に誘われて、いつものようにのろると身支度

を整えてからリビングへと向かう。

そんな朝、強烈なものを見た。

「おはよーございま、す？」

語尾がはてなのは、別に朝食の献立が気に入らなかったゆえの無言の反抗心とかそんな理由からじゃない。お母さんが朝早起きしてせっせと作ってくれたものに文句なんかあるうはずもない。

そうではなくて、問題は、目の前にある光景だった。

「やだなあ、恥ずかしい。忘れてね新君」

「はい……っふ、ははは」

「もう、言ってる傍から！」

十二。なによ、このきゃっきゃうふふ的な洗礼は。新が笑ってるなんて、そんな馬鹿な。私を差し置いて既に机に座りご飯を食べながら、あるうことか談笑しているなんて、そんな馬鹿なこと。しかもお母さんと。

信じられない光景だった。何故かって、お母さんはいつものことだからまたアホなことをしてかしたのだろうけど、まさかのまさか、新が笑うなんて。いや、そりゃ笑わない子ではなかったけれど、作り笑いかどや顔しか見たことのなかった私には、目の前にある新の純粹な笑顔が信じられなかった。クララが立った並みの強烈具合だ。暫く呆然として、リビングの入り口で呆然とそれを眺めてしまっていた。

「おはよう楓ちゃん。どうかした？ 何か面白いものでもあった？」

まるで私を現実に引き戻すかのような、快活な声が頭上から聞こえた。あまりの不意打ちに飛び上がりばかりに驚いてしまい過剰な速度で身を翻すと、ぴつちりとスーツを完璧に着こなす一条さんが私の真後ろに立っていた。なにやらしい匂いまでする。あらまあ着てる本人含めて高級そうですこと。

「いや、あの、」

「ああ、美味しそうな匂いがする。おなかが減ってきた。さあ一緒に食べよう」

いえ遠慮します。なんて、そうは問屋と腹の虫が下ろさない。笑顔の問答無用で一条さんに促されるまま、私も定位置の新的横に腰を下ろす（ちなみに私の前がお母さんの定位置で、新的前が一条さんの定位置だ）。その時ちらりと新を横目で盗み見るも、もう彼は笑みの欠片もなくなただ黙々と端正な表情を崩さずご飯を口に運んでいるところだった。

さっきのは、幻だったのだろうか。いやそれにはいやに強烈過ぎるような。

悶々としながら箸に手を伸ばしたとき、ふと視線を感じる。なにこの覚えのありすぎる感覚。嫌な予感に恐る恐る目を向けてみれば案の定、一条さんがにこにこまたあの楽しそうな微笑を浮かべ私を眺めている。ぎよっと身を引く私に意味深なウイंकを投げかけた一条さんは、その後何事も無かったかのように、御飯茶碗を手渡すお母さんに優雅な微笑を惜しげもなく振りまいていた。

何なのよ本当に。訳のわからないことの連続で、何が何やら結局うやむやになってしまった、新の笑顔。それは衝撃的だったにもかかわらず、存外すんなりと、私たちの空気に溶け込んで終わった。

しかし。それにしても、あの新までも笑顔にってしまうお母さんはやっぱりすごい。最終的になにを思うかといえば、私はただただお母さんに尊敬の念を募らせるだけなのでした。

クリスマスイヴ。その日の朝、ニュースでは新人のお天気お姉さんが楽しそうに、今日はホワイトクリスマスになるかもしれない、と予告していた。

さもありなん。ホワイトだろうがブラックだろうが砂糖無しのカロリーハーフだろうが今年のクリスマスはいつもとは一味違う。な

んてつたつてクリスマスイヴ。日本圏内では恋人達の為の日だ。勿論私と新がその空気を読まないはずもなく、事前に互いの親には話をつけてあった。つまりは、自分達は友達と過ごすからイヴは二人だけで過ごしてくれと、そういうあざといおせっかい。ともあれば解り安すぎる遠慮だけど、むしろそれがいいだろうという案に乗りシンプルにそれだけを告げた。

子供たちが気を使って二人きりにしようとしてくれている。断つたらその気持ちを無碍にしてしまう。友達とも約束があるようだし、だったらイヴの日くらいそれに甘えたほうがいいんじゃないだろうか。

そんな感じに受け止めてくれるだろうとまで考えた私達は、少なからず小賢しい部類に入るだろう。

一条さんはそこまで見抜いてそうだけど、あえてお母さんにはそれを教えずに二人きりのクリスマスを選んだに違いない。ちつくしよう調子のんじゃないぞ特別なのはイヴだけなんだからな、と何様もいいところな私がギリツギリ歯を食いしばったとかそうでないとか。

かくしてあつたつたなお二人さんは私が学校から帰宅した時刻には既にデートに繰り出していて、それから間もなくして窓の外には予告通りの初雪がちらほらと舞い降り始めたのでした。っとくらあ。

「まづった」

その考えに思い至ったのはよりにもよって当日。をいをい、自分のご飯はどうするのよ。無論、クリスマスイヴに友人と遊ぶなど約束した覚えは無い。だってそうでしょ。クラスで一部の女子が皆で集まって女子会やるうよとかなんとかスイーツ（笑）な会話をしていたけど、生憎私は集団できゃっきゃうふふよりもサシとか数人でものを楽しみたいタイプだし。というか早い話が集団の、みんな仲良くやるうよ的空氣が大の苦手なために逃れてきただけの話、なんですもの。

さーでどうしたとか。とりあえずはと着替えを済ませ時計を見ると、時刻は既に六時をきっていた。うむむどうするべきか。新の予定は聞いてなかったけれどどうせお坊ちやまのお仲間連中であるんだらうし、そうなるとうちは私一人が残るっていう。

まず自炊は却下。出来ないとは言わないけど私の料理ってフィリングで作るから当たりはずれが激しいし。クリスマスイヴにまずい飯食べたくないでしょう。外に食べに行くにしても自力で行くとすると若干遠いし面倒だし雪降ってて寒いしの三重苦。

去年はそんな心配なかったもんな。うちに帰って部屋の飾り付けをしてるとお母さんが帰ってきて、一緒にご飯作って、甘ったるいシャンメリー飲んで、二人で二号のケーキにフォークぶっさしてクリスマス特番見ながら食べるの。お手軽で安上がりで手作りの飾り付けみたいなのなんかホント幼稚だったんだけど、でも、不満はなかった。その分お母さんがニコニコ笑っていたからかもしれない。

今年は一人だ。まあ別に寂しいってことはない。小さい子供じゃあるまいし。寧ろ気楽でいい。うん。

「……はあ」

うむ。とりとめもないこと考えていてもしょうがないので、ここは腹をくくってコンビニで適当になんか買って食べるしかないか。イヴに一人でコンビニ弁当。しょっぱすぎて涙も出ませんね。

虚しさをかみ締めつつ鞆の中を弄り財布を引っつかんで、いざ行かんとならう首にかけた。そのとき、ささやかなノックの音が聞こえた。

「あの、俺だけど」

「はい。なんででしょう」

今から出かけるんですけどと言わんばかりにそのままの格好でドアを開けると、新さんは暫し閉口してじろじろと私の格好を上から下まで眺めた。

そんなトリッキーな格好している覚えはないんですけどねえ、彼にとっては相当前衛的に見えたのかしら。それにしだって親子揃っ

て不躰だこと。この似たもの親子が。

「なに？ 用があるなら早くおっしゃいな」

なんとなく高飛車な態度で物申すと、新は何故か決まり悪そうに目を逸らす。その泳ぐ視線に逡巡を見つけると同時に、新は漸く口を開いた。

「風呂を沸かしたんだ」

「……あ、さいですか。これはご丁寧にどうも」

「いや」

何を言いたいのか奥歯に物が挟まったような言い方しかない。

若干その現状維持にも飽きた私の気配を察知したのか、新はいやに強い眼差しで私をじっと見つめてきた。

「入れば」

「え、いや私これから」

「いいから入って。ほら早く」

早くってあーたこつちの都合も聞かないで。なんて言う間もなく、彼は問答無用で踵を返し階下へと降りていってしまった。ぽつねんと残される、マフラーを首にかけたままの私。

かくして、そのマフラーは使われることなく所在無さげにベッドの上にて放置される羽目になりましたとき。

しかし一体どういう風の吹き回しかと、湯船の中で考える。別に夕ご飯は逃げやしないからお風呂の後でもいいけど、何故に今風呂入ってって何。私が入ることで新さんに何らかの利益がもたらされるんだろうか。

ていうかその前に出かけてたんじゃなかったのか。私が帰ってきたときには誰もいなかったはず。となると帰宅して私が自室でごろごろ時間を潰している間に帰ってきていたということか。ただいまくらい言ったらどうなのかね。寡黙にも程があるってもんですよ。

そもそも彼は友人と約束があつたのではなからうか。もしかして新も実は一人寂しいクリスマス？ だから暇で暇でしようがなくてお風呂を沸かした。なるほど。

「なわけないでしょド低脳め」

自分自身にも関わらず辛辣な独り言を呟き、鼻の下までお湯に潜りこみぶくぶくと潜水ごっこ。そのままとりとめも無いことをぐだぐだと考え続け、真性のド低脳に茹で上がるまで私は湯船に浸かり続けてしまった。

ド低脳な私は頭の血の巡りが悪いのだろうか。それともひどく鈍感なのだろうか。或いは発想が貧困なのか。そんな事を追求したところで、何故こんなことになっているのか、という疑問への答えにはならないだろう。答えは彼だけが、知っている。

「ナンデスカコレ」

「夕食」

風呂上りで程よくド低脳な私にも解る簡潔かつ明瞭な返答をあげた。ありがとうございます。でもごめんなさい。言葉は解るんだけど、意味が解りません。

目下絶句する私の前にあるもの。それはテーブルに並べられた完璧な食卓。彩り豊かな葉野菜に盛り立てられたポテトサラダ、湯気の立ち上るミネストローネ、こんがりベーコンの乗るカルボナーラ、程よくスライスされた木の実たつぶりのシュトーレン。おいおいおいおい中央にはゴ丁寧にキャンドルまで灯されてましてよ。

なに。これからディナーショーでも始まるの。途中ビンゴ大会織り込みつつワイングラス片手に優雅に談笑する設定なの。一体何なのコレ。

「あ、の、これ」

「冷める前に食べよう」

説明なしかい。背を押され、椅子を引かれ座らされ、あれよあれよという間にいただきますタイム。呆気に取られる私を前に、新は

涼しい顔をして小皿にサラダを盛り付けて私に手渡してくれる。甲斐甲斐しいなあ、おい。いやいやいやそうじゃなくてですね。

恐る恐るシュトーレンの一切れに手を伸ばし、口元に運ぶ。ゆっくり頬張ると、鼻腔に広がるように豊かなナッツの香りが届く。表面はかりつと、中はふわふわしつとりとしていた。ちろつと新を見ると、二人にしては賑やかな料理の向こうで彼も伺うようにこつちを見ている。これはもしかや、まさかのまさかって、やつでせうかね。「シュトーレンまで焼いたの？」

「違う。それは予約してたやつだ。そこまでしない」

存外に、それ以外は自分が用意したと言っている。彼自身も自覚があるのか、ぽつと頬を赤らめ誤魔化すように傍らの水を一気に煽っていた。

「これ全部」

「悪いか」

「いえそんなことは」

「ござーません、けど。」

いや、なんというか、改めて不思議な子だなあ、といやに感心してしまった。風呂に入れと言ったのはこのためか。わざわざ私を風呂に追い払って、せっせとこの料理を用意して、キャンドルまで立ててムードまでお膳立て。普通の中学生はここまでしないでしょ。

思いついてもやらないし、というかこれほどの料理を用意するのも簡単ではないはずだ。

なんでも出来るのだろうと薄々感じてはいたけれど、まさか料理まで完璧にこなされるなんて。しかも、ここまできつちりと。生来のなんでも出来る気質による完璧主義なのか、それともこれは彼の優しさだったりするのか。

だとしたらなんと不器用で不恰好なことだろう。平然とここまでやったかと思えばこちらの様子を伺い、指摘されれば頬を染めて照れる。年頃で言えばこんなことすること自体恥ずかしいだろうに、よくここまでやってくれたものだ。もしかや私がクリスマス一人で過

「ごすことを懸念して、彼もわざわざ家に残ってくれたのか。それでこんなものまで用意して。」

え。もしかして、私、慰められてる？ うそ、それってすんごくしょっぱすぎ。」

突飛な考えに思い至り、けれどどうにもそれが勘違いではないよ
うな気がして、言葉にならなかつた。あの父親といい、この息子と
いい。人の要らぬところまで見ているときている。全く煩わしいほ
どの観察眼だ。

思わず閉口していると、若干眉間に皺が寄つた新がぼそりと呟く。
「要らないの」

なーにそれ。またまた面食らう。なんでふてくされたような顔し
てるの。私が拒否しているように見えているのだろうか。冗談じゃ
ない。そこまで気を使われてられるか。

半ば負けん気交じりでスプーンを手にして、ミネストローネを口
に運ぶ。

うん。程よい塩加減で野菜が甘く感じる、優しい味のミネス
トローネだった。

「美味しいよ。ありがとう」

まあ、これは本心。本当に美味しいし、本当にありがたいと感じ
た。まさか彼が私にこんな解りづらい優しさを示すとは思っても見
なかつたけれど、厚意を素直に受け取らないほど私も意地っ張り
ではない。

頑張つたのだろう。これは厄介すぎる。厄介すぎてなんだか少し
じーんと来るほど、穏やかな味が口に染みた。

「新君はいつでもお嫁にいけそうだね」

茶化して言うと、彼もまたふつと苦笑いを返してくる。なんだか
不思議な気分だ。いつもよりもいやに素直な心地になっている気が
する。それは新の方も同じなような気がして、何をトチ狂つたのか
普段では言わないようなことを、私は口走つた。

「新君のお父さんがね、家族になりたいって言ってたよ」

おいおい。一体どういふつもりでそんな事を言ったのか。皮肉なのか、それともただの思いつきなのか、不意にそんな無意味なことを告げてしまった。そんなことを言っただけ、私は彼にどんなリアクションを期待していたんだろう。彼もそう思ったのか、それとも自身の父親がそんな事を言っていたことに驚いたのか、目を丸くして私を見つめ返した。

「いつ」

「うーん、二ヶ月くらい前の夜中かな。喉が渴いて下りたらリビングに一条さんがいてさ、ちょっと話さないかって言われて話してたら、そんなようなこと言われた」

そのときの私といったら目も当てられないような惨敗を喫して、たくせに、それを新に知られるのはプライドが許さなかったのか、異様なほど平然と説明した。言い終えると新が聞こえるか聞こえないかの細かい声でぼそつと「あの親父」と呟く。当然私はそれを耳にしたわけで、彼の感想が少しおかしくて噴出してしまい、咎めるように睨まれてしまった。

それでも、彼は言った。ぼそつと、そっけない一言で。

「いいんじゃないの」

「え」

今なんて言った？ 『いいんじゃないの』？

今度は私が、目を丸くする番だった。まさかそんな答えが返ってくるなんて思いもしなかったから。いや、彼がそう思うということすら、ありえないと端から否定していた。それが覆された。つまり彼は、この結婚に反対の意を本当に持っているということ。それどころか『家族』という言葉さえ肯定してみせた。それは今までその問題について言明してこなかった新が始めて見せた、意思表示だった。

「……そう、かな」

家族。

その言葉を彼が肯定するのが信じられなかったからだろうか。そ

れとも私自身が否定したかったからだろうか。それとも他の理由からなのか、私は返すべき言葉を見失い曖昧な返事を返した。私は一体何がしたいんだろう。新に、なんて答えてほしかったんだろう。妙にもやもやとした心地を抱えながら、その後はお互い無言で終始食事に徹した。

『いいんじゃないの』

いいんだろうか。

不意にそんな疑問を抱いた。おかしな話だ。私はとっくにその問題について納得していたはずなのに、彼の答えがまるで私に向けられたもののように感じて、途端に居心地の悪さを感じてしまった。

まったく、一条さんも新も、何だって言うんだろう。まるでこれじゃあ私一人が反対しているみたいじゃないか。反対なんて、していない。私はそれでいいと決めた。でも、じゃあどうして新の言葉に、素直に頷くことができなかったんだろう。それとも、もしかして一条さんは私のこんな宙ぶらりんな気持ちまで見越して、あんなことを言ったのだろうか。

でも、でもね。そうだとしても、それでも。

「どうしろって、言うの」

どうしようもない本音が、ぼろっと零れた。紛れもない、本音。だってさあ、どうしようもないじゃない。理性ではちゃんと解ってるの。ただ、うまく出来ないだけで。何が駄目なのかなんて、嫌なのかなんて、そんなの私にも解らない。それじゃ駄目なんだって言われてるのもわかる。

でも、じゃあ、どうすればいいの。答えなんてどこにもないじゃない。だったら優等生ぶって物分りよく頷くくらいしか、私には出来ないでしょう？ これ以上何をどうしろって言うの。どうしたら、

皆満足してくれるの。

悶々としながらそんな思考を繰り返しているそのとき、ふと頭上に影がさした。

「なに、してるの」

淡々とした声が聞こえ反射的に見上げると、案の定新が私の座るソファの傍らに立っていた。照明が逆光になり見上げた先の表情ははっきりとは見えなかったけれど、何故だか私が顔を上げた途端少し眉を顰めたような気がした。いつのまにかおかしな顔でもしてしまっただろうか。今更ながらにいつものようにへらっと笑い、その手にあるものを掲げて見せる。

「わっか繋いでるの。よく小学生のお誕生日会とかに部屋に飾られるやつ」

左様で。つまり私は夕食の後リビングに残り、こんなものを黙々と作っているうちに混沌とした思考の輪に嵌ってしまったと、そういう経緯でございます。

随分とくだらない考えに嵌っていたものだ和我に返り、作業を再開する。新はテーブルに広げられた色とりどりの折り紙やら何やらと私を一瞥し「ふうん」とシンプルな返事を返すと、そのまま自然な流れで私の向かいのソファに腰を下ろした。

お風呂上りだろうか。シャンプーのいい香りが、鼻を擽る。

「作ってどうするの」

「飾るんですよー。我が家の女王様の命でございますれば、下働きのワタクシはこのようにせさせと準備しているのであります」

実を言うと毎年作っていた。いつも二人っきりでクリスマスを過ごしていたから、見た目だけでも賑やかになるようにわかを作ったり風船やら百円均一で買ったモールやらをでこでこ部屋一面に飾る。毎年、そんな事をやっていた。

きっとお母さんは私の為にやっていたんだらう。お父さんがいなくても寂しくないように。そんなことしなくても私にはお母さんが

いればそれでいい。それで満足だし、楽しい。そう言いたくて、でも言葉には出来なくて、言葉の代わりに飾り付けには毎年精を出した。

そして今年も、同じように作る。ただ、今年からは少しだけ意味が変わる。今年は私のためなんかじゃなくて、その話を聞いて羨ましがったという一条さんのため。お母さんは毎年のことだからと言ったけど、一条さんの話をしたときはすごく優しい顔をしていたから、きつとそういう意味。

だから私は実質一条さんのためにせつせとこうして飾りつけの下準備をしているって訳。感謝しろ感謝。何様なので胸の内に秘めておく本音をわっかに込めつつ作り続ける。

すると、じーっとそれを見ていた新がはさみに手を伸ばしてきた。

「俺も作ってみたい」

「あら、じゃあお願いしようかしら。じゃんじゃんお願いしますよ」
いちいち教えなければならぬほど難しいものでもないためか、それとも以前に作った覚えでもあったのか、新は何も言わずに黙々と作業を開始した。心なしか楽しそうなその様を作業の傍ら盗み見て、なんだかまた悪戯心がむくむくと湧き出してきた。

「ねえ、さっきの話さあ」

「うん」

なんのことを言っているのか解っているのか、新は手元を見つめながら返事をした。益々悪戯心、いや意地悪心がわきあがるのを感じて、私はついついにまっと思どい笑みを浮かべてしまう。

「私が新君のお姉さんってことになるんだけど、本当にいいの？
新君、私の弟になっちゃうんだよ？」

試すような行儀の悪い笑みが、納まりきらずに目に滲む。そんな私をちらつと一瞥した彼は、けれど涼しい顔して返事した。

「いいんじゃない」

う。またか。

いやにどきつとして、浮かべた笑みも途端に引っ込む。

何だっというんだらう。最近こんなんばっかり。

「いいってさあ、私が新君のお姉さんだよ？ 上だよ、上。エベレストより高いプライドが邪魔したりとかさあ、ないの？」

「どんだけ高いんだよ俺のプライド」

ふつと彼が笑う。意図せず笑わせてしまい、益々混乱してしまう私。くそう、あの父親にしてこの子ありだ。当初から今までまともに心を読めたためしがない。というか寧ろ私の方が悉く読まれている。ああ忌々しいどうしてくれよう。

「じゃあさ、あだ名決めていい？」

「あだ名？」

「そう。新君じゃよそよそしいし、もうちょっと歩み寄った呼び方をね、させてもらおうじゃないの」

お姉さんなら弟のこと好きに呼んでもかまわないわよねえ、なんてにまにま笑って言うのと、これまた肯定。呼び名よりわっか作りの方が気になるみたいだ。

いちいち拍子抜けするなあ、もう。こうなったら普通の呼び方や駄目だな。呼び捨てとかありきたりすぎて論外。呼ぶほうが恥ずかしくならないように程よく面白い呼び方にしてやるう。

新さん、新あいたつち、新あいたどの、新あいたちゃん。

いかなんか妙に萌え系アニメ思考な気がする。もうちょっと捻ろう。漢字が『新』だから、シンとか。駄目だそれだけだと普通にかっこよすぎる。そうじゃなくてもうちよつと程よくぶち壊した感じの。

ああそうか！

「新しんさん！」

ぱつと脳裏に閃く暴れん坊紳士なあのお方のイメージ。いいねえ新さん。ナイスネーミング。と、同時に止まる、新もとい新さんの作業の手。きーめた。新さんに決定。変更負荷。アドレス帳にも新さんって入れとこう。うっしっし、ざまあ新さん。

「よーし決定。よろしく新さん」

きひひ。微妙に納得いつていないけど今更否やも口に出来ないそのなんとも言えない表情がオイシイのなんのつて。姉はなかなか小気味良くてよ、新さん。

「別に、いいけど。じゃあ俺も呼ぶ」

「なに」

「楓って呼ぶ」

「えっ」

なに。いきなり。

びつくりして笑みも引つ込み、そんな私を見た彼は目元を緩めた。穏やかに、彼が微笑む。

「今度から楓って呼ぶ。いいよな、楓」

「ん……う、ん、まあ」

駄目とも言えず歯切れの悪い返事を返した私にふつと笑みを深めると、彼は再び作業を開始した。なにやら、機嫌がよくなつたらしい。心なしかまだ目元が笑んでいるようにも見えた。

ああ。びっ、くりした。あんな顔、できるんだ。

今まで完璧な容姿を持っているとは思っていたけれど、何かが違うといつも違和感を覚えていた。けれどそのとき漸く、その意味が解った。

いつも、いや、今までは人間味がなさ過ぎたんだ。どう言葉で表現しようと捉えきれない彼の容貌は、その完璧な造作があまりに人間離れしすぎていた。それが今微笑んだとき、崩された気がしたんだ。なんて言うか、そう、それは本当に人間らしい表情。温かみのある笑顔。それを目にして、それがあまりに優しげに見えて、心臓を掴まれたかのように吃驚した。

笑うと、綺麗というより可愛く見えるんだ。そっか。そうなんだ。あれ。なんかちよつと、嬉しいかも。なんだろう。触発されたように、何故か私も笑みが浮かんだ。変だな。面映いつて言うか、くすぐったい感じ。あー変なの。

「なに笑ってんの」

「新さんこそ」

ちろつと見詰め合って、また笑う。それが妙におかしくて少し恥ずかしい感じがして、誤魔化すようにまた笑った。すごく変な感じでも、すごくおかしな心地だった。もやもやしていたさっきとは違いく代わりにもっと笑った。心の隅で再び浮かんだ新さんの言葉に、私もやつと返事を返した。

『いいんじゃないの』

うん。まあ、悪くはない。わかんないけど、悪くはないのかも、しれないね。

翌日は、一条さんと新さん、私とお母さん、全員でクリスマスの夜を過ごした。一条さんとお母さんはイヴの日に買い物をしたように、私には冬物の真っ白なコート、新さんには腕時計をプレゼントしてくれた。二人で選んだというそれには、つまり一条さんも一緒に選んでくれたってことで、逆で言うと新さんにはお母さんも一緒に選んだということ、つまり、うん、なんとなく照れた。勿論、別に嫌だって訳じゃなくて寧ろ嬉しかったから、素直にお礼は言った。

でも、そういえば私はプレゼント用意してない。毎年お母さんにはささやかなものを用意してたけど、今年は色々あってすっかり忘れていた。しかもお母さんのぶんまで。愕然とする私に、一条さんは言った。

「楓ちゃんからはもうプレゼントを貰っているから、いいんだよ。素敵なクリスマスをありがとう」

そんなきざなことを言って、笑った。イヴに見た新さんの笑顔と

そつくりの、けれどずっと大人びた微笑。

まさかそんなことでお礼を言われるなんてとか、こんなちやちな飾り付けで本当に良かったのだろうかとか、色々なことに吃驚したけど一番はやっぱりその顔。新さんとかぶるその目元が優しく緩む微笑は、私に彼らが本当の親子なのだということを実感させた。疑っていたわけでも、似ていないと思っていたわけでもない。むしろ幾度となく似たもの親子だと散々胸のうちでため息混じりに呟いていたけれど、そのときはそれとは大きく違う感覚だった。

でも今のはそれと全く違う。新さんの髪をぐしゃぐしゃと撫でて笑う一条さん。いきなりそんな事をされて面くらい、怪訝な目で自分の父親を見上げる新さん。そんな二人はまさしく、ごく自然に普通の親子の絵として私の目に写った。今更だけど、そのとき彼らは紛れもなく親子だった。

ああ、そつか。そのときほんの少しだけ、なんとなく解るような気がした。一条さんが『家族』という言葉を使った意味が。そうしてそんな二人を嬉しそうに見つめるお母さんを見て、お母さんの気持ちもほんの少しだけ伝わってきた。

うん。一条さんもお母さんも、ただ一緒にになりたいから結婚したいんじゃないのかもしれない。それだけの理由で、結婚を決めたんじゃない、ってことなのかも。誰のためかなんて、一言では言えなかったんだ。

それでも、言明できるほど理解できたわけじゃない。ただほんの少しだけ、その糸口が見えただけ。

いつか、もしもそれを本当の意味で理解することが出来たなら、きっとそのとき私も言えるんだろうか。新さんみたいに笑って、『いいんじゃないの』って。その、いつかの時を思うと面映くなつて、私も皆に混じってこっそりと笑った。

それが始めの、ホワイトクリスマス。四人でいて初めて楽しいと感じた、始まりの日。私にとって夢そのものの日々の、始まり。

佐藤かえと一七四代目

元旦は例年よりも多い積雪が観測されました。

だっけ。例年よりも多いのだそうです。雪が。ついでにすんごく寒くて、ニユースのお姉さんが言っていた通り雪だるまが作れるくらい雪が降って、新さんが作った雪だるまは雪だるまというよりミシユンのあのキャラクターで、その出来の良さに大笑いして、それから初詣に行きました。道中道連れには例年よりも二人ほど多い人数が観測されたそうです。

人ごみの中に一条さんと新さんのとんでもなく目立つ二人がいると、便利なのがよく解った。

まず、その存在感ゆえに道行く人が前を歩く人でさえもその存在を察知して振り返り、目で追わざるを得なくなる。そしていざ境内に入ると半端ない人ごみだというのに、二人の不可侵のオーラが働いているのか心なしあんまり人とぶつからない。ある意味人避けに最適な二人であった。

と言つても、やっぱり混むものは混むようで、時折人にぶつかりそうになったり何もないとこで躓きかけたりするお母さんを、一条さんは見事にエスコートしていた。そんな二人を見て私は隣の新さんをちろりと見やり、なんだよと視線を返す彼に向かって肩で軽く小突いた。特に意味はない。案の定新さんも小突いてきたので、私と新さんはいいムードの二人の後ろでいかに人ごみに迷惑をかけずに小突きあうかという意味のないゲームを始めていた。

ともあれ、地味に前に進んでいたようで、いつの間にかお賽銭入れの前に辿りつく。例年通り『重々ご縁がありますように』の願掛けで私は二十五円を放り投げ、神様にご挨拶する。お願いは去年と

同じく無病息災家内安全。毎年願掛けと願いが一致しない。ついでにとばかりにちらつと横を見るとお母さんはまだ目を閉じていた。きつと、『今年一年家族みんなで楽しく過ごせますように』とか日和見的なお願いをしているんだろう。そんなお母さんを見て、私も思った。

大丈夫。お願いはきつと叶うから、大丈夫。そうでなくても私が絶対、それを守ってあげる。お母さんのお願いが叶うように、守ってあげる。

神様でもないのに偉そうな返事を、心の中でお母さんに向けて呟いた。そんなお正月。本当にそれを全うすることになるとは、実のところ本気では思っていなかった。

一条さんは忙しい。お休みだつて不定期つてくらいまともに取れていない。それでもここぞというイベントの時にはしっかり休みを取ってくれて、皆で沢山いろんなことをした。吃驚するくらい、濃密な時を過ごした。

あの時私は確かに満ち足りていた。不満なんてもう殆ど、残ってはいなかったんだよ。多分ね。

年明けて、私は受験生になり、新さんは中学二年生になった。桜も葉桜へと移り変わり、冬の名残の寒さも薄れた頃、私はそれに気がついた。

きつかけはクラスメイトの一言から。

「佐藤さんてさあ、あ的一条君と一緒に住んでるって本当？」

『あ的一条君』

最近良く耳にする言葉だった。二年のときはそうでもなかったのに、何故だか春を過ぎた頃からこんな質問が多くなった。どこから情報を仕入れてきたのかは知れないけれど、どこぞのご親切な方が懇切丁寧に噂を広めてくれたらしい。ありがとう。お礼をしたいから是非名乗り出てほしいんだけど、一体今どこで油を売っているのかな。ちやくちやくとお礼参りの手段構想が増えていく日々。そんな中でいつも耳にしていた『あ的一条君』。

別に、気にしなかったわけでもない。あ的一条君がどの一条君なのかと問えば、十中八九がフルネームで答えてくれた。となるとやっぱり新さんのことには違いないけれど、新さんは公立でさらっと入った私とは違い幼稚舎から連なるお坊ちやま御用達の私立校に通う未来のエリート様だ。なんでそんな彼のことを知っているのかと問えば、愚問とばかりに誰もが驚いていた。驚きたいのは私の方なんですがね。

さて、そこで無知な私に彼らが切々と語った、一条新逸話伝。

まず、天上天下あまねく全てのものを魅惑する美貌の持ち主。あ、これは知りえた情報から私が勝手に備え付けたアオリ文だけ。こつちも考えた。

『その美貌、世界を征服す　！』

どうよ、どうよ。誰かに言う勇氣は流石にないけど。それはともかくも冗談と言うわけでもなく、一条新はその界限では知らない人間は誰もいないくらい有名ならしい。その界限ってどこなんだろう。新さん闇の住人扱い？

噂では亡国よりお忍びでいらしたお姫様の心を奪ったとか、その美貌ゆえに老若男女問わず日々求婚される毎日とか。かぐやひめかい。と私がつつこんだとかさうでないとか。今度新さんに火鼠の衣や子安貝を持っているか聞いてみようとき心に固く誓いましたとも。

それから、これ。神童。噂では新さんはもう既に大学課程すらも

海外で修了しており、今も数多の大学からの要請により内密に籍を置いていたところが多数存在する、と。ギャグですやん。ここまでくると。笑いをこらえるのに必死でした。

でもまだあつた。一条家の裏の総帥。それが一条新なのだという。一条家自体も相当大きな家系らしくて、私の住んでいる町の隣の街なんかには高級住宅街が軒を連ね、そこには一条家の人間も多く住まっっていて、その街自体を一条家が総てしているも同然な市政なのだという。それでなんで新さんが裏の総帥とかボスキャラ倒したあとの真のボスキャラ扱いされているのかと言うと、一条家は時期当主を既に新さんに定めていて、半ば崇めているような状態なのだという。

だがしかし。眉唾物臭がぶんつぶんするその噂、出所を聞いてみれば案の定誰も彼もが曖昧で、それまでその噂とやらをまるで見てきたかのように話した様子は見る影もなく形を顰めた。つまり噂が一人歩きどころか全力ダツシユで駆け抜けている最中らしく、私が新さんと住んでいる、もとい家族ごっこしているという噂もそれに乗せられて広まったらしい。

全くはた迷惑な話だ。新さんがどれほどのものかは知らないけれど、ここまできると例えそれが彼を信奉するゆえの噂だとしても悪質だ。結局のところ誰も彼の人間像を知っている者はいないんじゃないか。呆れを通り越して疲労感さえ湧いた。

なんなのだろう。一条家とは。新さんがすごいといっても、むしろその噂は一条家たる所以から湧いて出たものにさえ感じる。このとき漸く、少しだけだけど、考えもしなかった一条家という大きなその存在を、私も意識し始めた。

噂については勿論新さんに言及してはいない。単純に考えれば、自分がどこでどう噂されているかなんて知りたくないだろうという話になる。知っていたとしても、今更そのことを私にどうこう言われたくもないに違いない。私とてそんな話をして何か利益が生じるならともかく、逆に不興を招きかねない話題だ。あえてそういった

類の話は、避けて通った。

私はよく一人で出かけることがある。何故一人なのかなんて特に理由は無けれど、いちいち誰かにお誘いをかけるといって一連の流れが面倒で、買い物もお母さんと行くか一人で行くか、専らせっぱいつもそんなもの。勿論人に誘われたら大抵は断らない。ただ自分が行く場合は、一人で行って一人でさつと帰るのが好き。それだけ。

それだけ、なんだけど。最近の私はそんな一人の買い物機会さえ、めつきり減っていた。理由は何故かって、言わずもがな、新さんだ。今だつてそう。隣で何を見るときもなく、心なしまらなそうに私の傍らに陣取っている。機微が見えないから無表情にしか見えなくてどうとも言えないんだけど、その辺りはこれまでに培った新さんの表情レパートリーの統計上そんな感じに見えるから、きつと当たっているはず。

「つままないならさあ、ついてこなくていいよ」

つままない顔されて横に張り付かれてもこつちが楽しくないからついてこないで。

と、オブラートに包みまくつて言うと、今度は子リスみたいに目をパチパチさせる。言われたことに自覚が無かつたらしい。なんだつてこの子はこういう理解不能な行動に出るのだろう。何を察知してほしいのか、解れと言う方が無理な気がするの私だけなのかね。「なんでさあ、ついてくる、いや、ついてきてくれるの？」

危ない危ないぼろつと本心が零れかけた。この思ったことをすぐ口に出す癖なんとかしなきゃ。とは思いつつも、しっかり顔には出ていたらしい。新さんは少し俯き、ちらつとお伺いを立てるように上目遣いで私を見た。はい、美形でなきゃ殴つてるところですね。

「ついてこられると迷惑なのか」

「いや、そういう問題じゃなくてだね」

じーっと一心に目を見つめてくるものだから、敵わない。どうしてこうこの子はあけすけもなく人を真っ直ぐに見るのだろう。いつかそれで痛い目を見るんじゃないかな。いやもうあっているのかも。ため息つきつき、新さんを伴い店を出た。

「新さんだつてさあ、暇じゃないでしょ？ いちいち私についてくれないでよ」

「暇だ。ものすごく暇だ。暇を持て余してる。どうしようもないくらい。狂おしいくらい」

「それはちよつと病院に行ったほうがいいよ内科的な意味で」

もうなんなの。一体全体何がどうしてこうなってるの。SPじゃないんだからさあ、出かけるたびに逐一ついてこなくていいんですけど。

とは、言いたくても言えない。なんでかって、彼がこんなことをしている理由に一応心当たりがあるからです。最初と一緒に出かけたときに、置いてけぼりにされたこと。多分謝るタイミングが見つからなくて、代わりにこんな行動に出ているんだろう。

つくづく性根が真っ直ぐというか、口数少ない割りに正直というか。すれてるのかと思いきや根本的には全くの手付かず。時々羨ましくなるくらい、彼は私に純粋な一面を見せる。少なからず信頼を得た証拠なのかと思えば嬉しくなくもないけれど、なんだか心境は複雑だ。確かに、新さんはいい子だ。でもなんだかそれが危うさにも感じるときがあるのは、私だけなんだろうか。

複雑な思いを抱えながら新さんに目を向けると、『次はどこへ行く』と言わんばかりの真っ直ぐな眼差しを返してくる。犬みたい。千切れんばかりに振り回される尻尾が垣間見えた気がして、思わず嘔吐してしまった。

「なに」

「いや、ちよつと疲れたね。休憩がてらにどこかでのどを潤しましよつか、新さん」

「いいよ」

誤魔化すために言ったけれど喉が渴いていたのも事実。丁度近くにあったオーブンテラスを指差すと、新さんも素直に頷いた。そのとき、まるで私たちの前を阻むようにして見知らぬお姉さんが立ちはだかった。

「新君？ 新君だよねえっ。うわあー、久しぶりね！」
誰。

フェミニンなOLのお姉さんって感じの人だ。思わず新さんを見上げると、思いのほか新さんは面食らったように目を丸くしている。何、覚えてないとか？

何も言わない新さんの返事を待たず、そのお姉さんは一発決めてるんですかってくらいテンションでまくし立てる。

「大きくなつたねえ。あれ、その顔はもしかして忘れたの？ やだなあもっ、超シヨック」

おいおいそこはかとなく喋り方がイラつくお姉さんだな。このおとか言つてさりげなくボディタッチしてるし。何なのこの人。すごい美人だし、年上の元カノ？ 随分しゃべり方といいお胸といい自己主張の強いお方とお盛んなのね。

なんて揶揄を込めて新さんを見ると、まだ何も言わない。というか、何かがおかしい。目を伏せ、いつもの無表情を決め込んでいる。心なし青ざめているようにさえ見える。なんだろう。雰囲気之急に硬くなったような気がする。目を顰めてじっと見つめると、目の前のお姉さんのことも私のことも見ていないその眼差しが、僅かに揺れた。

「新君？ どうしたの？ やだなあ、忘れてても怒ってないから、立ち話もなんだし」

「あー」

「あ、カエデちゃん、よね？ 貴方も一緒にいいわよ」

おおーい、なんで私の名前までご存知なんでしょうかね。しかも何気の上から目線。見るとうっとなじろいでもうくらい眼差しが

燃え盛るようにぎらついている。邪魔しないでよこのちんちくりん！とかいう声が聞こえてくる気までしてくる。言葉と態度が裏腹にも程があるでしょうが。

若干その必死すぎる形相にびびりつつも、何とか私も普通を装って言った。

「この子、新君なんて名前じゃありませんよ。人違いだと思っただけです」

「え？」

お姉さんの表情が怪訝になったその隙に、すかさず畳み掛ける、私。得意のスマイル。

「彼は本名を矢部野彦曆やべのひこまろと申しまして、先祖代々より受け継がれし陰陽師の家系の一七四代目跡取りであらせられます。本日下界に下りました故は話すと長くなるのですが」

「ちよつと、」

「そもそもこのような雑踏の中には我々の呼称で言いますと魑魅魍魎、所謂妖怪と呼ばれるものの類が時の狭間によく潜んでおりまして、このようにして一七四代目も御自ら修行の名目にて人の世にはびこる悪しきあやかしを成敗せんところして御身を以って街に繰り出しているのですが、あつ、すいませんこんな長話。立ち話もなんでもものね。場所を移動してじっくり門下入門の話を　　つてあーあー、行っちまいやがった根性ねーの」

気持ち悪いとか去り際に言っただけじゃねーぞ若干傷つきましたわよお姉さま。

若干周りの道行く人々がじろじろこつちを見ていて今更ながらにすごく気まずい。さっさとこの場を離れようと振り返ると、新さんがそのまま蹲るんじゃないかなろうかというほど身を屈めて震えていた。なによ。泣いてんの？

心配した自分を一瞬後には殴りばしたくなるとは知らず、彼の顔を覗き込んだ。

「ちよつと新さん」

「誰、だよ、矢部野彦磨って。時の狭間って、どこ……っふふ、ははは」

「おい今すぐ強制的に時の狭間にぶち込んでやるうか」
どうやら相当ツボだったらしく、立っていられないくらいおかしいらしい。かと言っても道のど真ん中。ここじゃあ迷惑になると忍び笑いを続ける新さんを半ば引きずるように連れ、少し先に行ったところのケーキ屋さんへと入った。

奥がカフェになっているので人目もそれほど気にならないしケーキは美味しいし一石二鳥。ただし若干お高め値段設定なので案内されたと同時に「ここ新さんの驕りね」と告げましたとも。入ってから言う。ここポイント。幸いなことに新さんは笑いが抜けない引け目からか特に文句を言うでもなく頷いたので、前々から狙っていたケーキセツトを頼んだ。段がついててね、色んな種類のプチケーキが味わえるんです。目の色変える私をよそに、新さんは普通のコーヒーを頼んでいた。

「で、さっきの人なに」
「え」

ちよつとねえ、異様だったから。当事者の私としては少しくらいお話を伺っても、罰なんてあたりやあしませんわよね。興味本位半分、そのほか諸々半分の気持ちで聞いてみた。首をつっこみたいわけじゃないから、追求まではしないけど。それでも新さんは私の本心を知ってか知らずか、馬鹿正直に反応する。いつも真っ直ぐなその瞳を曇らせ、怯えるように目を泳がせた。

「ごめん」
「謝れって言うてるわけじゃないんだけど。新さん悪くないでしょ」
「うん。でも、ごめん」

なんでそんな顔するの。まるで私が責めてるみたいじゃん、やめてよね。でも何を言おうと新さんは謝るだけのような気がして、二の句も告げられなくなる。

何故、彼が謝るんだろう。新さんは悪くないのに謝って、それで私が罪悪感を感じなきゃならないなんて、そんなの御免だ。冤罪だ冤罪。なにかが違う気がするけど、それは無視して問いかけた。

「なんで言わないの？ いやなら嫌って言えばいいじゃん」

「……言っても、通じないから」

「いや、誰の話してるの。今は私たちの話してるんだよ」

「ぱちくりと、子リスみたいな可愛い顔になる。それぞれ。そっちの方が新さんらしい。らしいって言うほど、知らないけどさ。」

「あのさあ、新さん言葉が足りないんだよ。だからごめんけど、わかんないの。新さんがどう思ってるのか」

「エスパーじゃないし、前世から約束された間柄でもなし、ぱつと見てその気持ちを察するなんて芸当、私には無理だ。愛やら友情やらを持っていてと出来るのかもしれないけれど、そんなに海より深い情も持ってない。つまり他人同士なんだから、言わなくても解るなんて、そんなの私はできっこないんだよ。」

物言いが辛辣すぎるせいか、新さんの眼差しが申し訳なさそうに揺れる。それ。それもなんかおかしい。つつい難しい顔で言ってしまう。

「なんで謝るの。新さんは悪くないって言ってるでしょ。なんか私も大概偉そうだけども、私の方が新さんに謝らなきゃなんだよ」

「それは違う」

「違うじゃないよ。私がおつと聴ければそうやって新さんに謝らせたり、本当は行きたくもない人ごみに連れ出したりしなかったのに」

新さんが、はつとしたように私を見た。それが私の言っていることを肯定しているようで、少しだけ悪いことをしたような気分になる。だから言えって言ったのにさ。誰も好き好んで悪者になんかなりたかないよ。きつと一番初めに出かけたあの時だって、本当は行きたくなかったんだ。それだけの理由でのあの態度ではなかったみたいだけだ。

罪悪感なのか怒るのかわからない気持ちが込みあがる。だって苛

々するから。新が余りにいい子ちゃん過ぎて。

「嫌なら嫌っていいなよ。なんで遠慮するの。私みたいにもっとばかすか言えばいいじゃん。ってなんかもう責めてるみたいになってるしさあ。ああもうどうせ私は性格きついですよ」

「そんなことない」

「……どうも。そういうことはすぐ言うんだもんね。あのねえ、あんまりこういう何様ぶったこと言いたくないんだけどさ、一個だけ聞いてよ」

言つと、新さんは神妙に頷いた。なんでこう素直なんだか。もつとなにくそ根性あつてもいいと思うんだけど。ああ、ないわけじゃなくて、根がいい子だからね。いやな風にとらないのね。けっ、どうせ私は根っから悪い子ですよ。まあいいや。この際だから言っちゃえ。

「大分前にさ、お母さんが私に言ったのよ。経緯は忘れたんだけど」

「うん」

「『言うより言わないほうがよっぽど困る』って」

いつだったっけか、私がお母さんに遠慮したときそういわれた気がする。私としては生意気にも気を使つたつもりだったんだけど、後で結局事が露見して、困った顔でお母さんがそんな事を言った。それがなんだか妙に、印象に残った言葉だった。

「別になんでも話せて訳じゃないんだけどね？ 多分お母さんが言いたかったのは、嫌なこととか困ったこととか、そういうことくらい素直に言いなさいって言いたかったんじゃないかなって」

そのときは我俣との区別がつかなかったから、そうしてしまつたでも今ならちよつとわかるかな。私だつてお母さんが困っている事を言ってもらわなきゃ、困る。それに哀しくなるし、寂しくなる。

そういう遠慮なんてされたくない。お母さんに出来ることなら私だつてなんでもしたいんだ。そう。力になりたいんだよ。

「他人に言えつてんじゃなくてね？ 言える人にくらい言いなよつてこと。まあ、簡単なことでもないだろうけどさあ。でも話しても

「ええ、結構寂しいもんだよ」

「そう、かな」

「そうだよ。言ってもいい人、いるじゃん。一条さんとか。予備でお母さんとか私とか」

「予備って」

「予備だよ」

「一番はやっぱり、一条さんでしょ。あの人が結構お父さんの眼差しで新さんのこと見てるんだ。きつと一条さんも寂しいって、思ったりするんじゃないかな。知らないけどね。他人事だし。」

無責任極まりないことを言うと、新さんがふつと笑う。

「あ、きた。その笑い方。それ一条さんが見るとね、伝染するみたいにおんなじ笑い方するんだよ。新さんが笑うのが嬉しいんだろうね。私が、お母さんが笑うのが嬉しいのと同じようにさ。」

「うん、ごめん。いやありがとう。じゃあこれから色々言っても、いい？」

「おう。遠慮すんな。なんてたって新さん我が家で最年少だからね。甘え盛りだよ」

いや全く羨ましいことだ。

心の中で揶揄したところで、ケーキセットが届いた。言いたいことと言ってスッキリしたら今度は食欲。もさもさと食べて、それを見ていた新さんが食べたくなったらしくケーキを注文したついでに便乗して同じものを頼んだ。そのときの新さんは、全く清らしいほど呆れた顔で「太るぞ」と私に言った。

それから、後で知ったこと。

新さんはあのことについては結局何も言わなかったけれど、ああいったことは彼にとっては日常茶飯事だったらしい。見も知らぬ人間に声をかけられ、相手は自分のことを名前どころか素性まで知っ

ていて、気安く話しかけてくる。その困惑と、得体の知れない恐れ。そんなことが何度も起これば、そりゃあ外に出るのも億劫だろう。

他にも色々あったようで、けれど新さんは私にその話をしたことなく一切なかった。けれど彼がそれさえも押し込めて私についていこうと思ってくれたことには、なんだか申し訳なくも面映かった。きっとそれを話さないのは彼なりのプライドと優しさがあったることなのだろう。

私は少しだけ、そんな彼の力になってやりたいと、思った。そのときはただ純粹に彼の力になればと、そう思えた。

何故、もっとよく考えなかったんだろう。

どうして新がそんな目にあうのか。そんな風に接触してくる人の目的は一体何なのか。

私はそのとき盲目過ぎて、そして救いようがないほど無知だった。

佐藤かえでと月夜の新芽

少なくとも、一年くらいは楽しかった。色んなことをして、色んなことを知って、今までの何倍も充実していた。不都合や戸惑いはあれど、それでもどこか満たされていた。きつと一時くらいは幸福ってやつを感じていたかもしれない。まやかしみたいなフワフワとした、理想の一年だった、はず。多分。

家族ごっこを始めて二度目の夏。ちょうど、一条さんたちに初めて会ったあの日と同じ頃。あのときは夏の暑さも吹き飛ばぐらい衝撃的なことが多かった。そして今年は初夏のうちから既に記録的な猛暑となる模様だなんだと言われ始めている。それを証明するかのように蝉がわんわんと声をあげていた夏。

その来る夏休み直前、終業式の日に呼び出された。

ここまでくると慣れたもので、私も特に気負うこともなくはいはいと呼ばれるがままに体育館の裏へと向かう。はてさてその心は。熱烈な愛の告白。違う。小生意気な佐藤さんに一学期分のお礼参り。違う。一条新君と一緒に住んでいるという噂の佐藤さんにちよつと言いたいこと、もしくは聞きたいことがあつて、きやつ恥ずかしい。そう、それ。大当たり。

既に春の終わりには全校に広まっていた一条新情報、一月もすればそれは確信に変わりネタの裏づけ、もう一月もすれば今度は未来のお姉さんに十人十色のアピールタイム、そして一条新の新鮮もぎたての情報争奪戦。今ココ。一番最初は「新君って彼女いるの?」だっけかな。その次が「好きな人いるの?」そんでもって「もしかして二人って付き合っていないよねえ?」何故にここだけ否定形。

最近の質問のトレンドは『新君っておやすみの日はお家にいるの？』おいおいその質問は家に押しかけること前提で聞いているのが見え見えなんです。解ってて聞いてるんですかね。そんな見え見えの質問に同じ家に住む私が正確な情報を与えると本気で思っただけで聞いているんですかね。何より迷惑って言葉ご存知ですかねえ。

諸々突っ込みことはあれど、答えはテンプレの如く用意してあるので慌てるべからず。むしろ最近はおつばら呼び出した側よりリラックス状態の義姉ですよ。今日は男だろうか女だろうか。もはや先輩後輩同級生のくくりなど無い。しかも今日は私に会える、もとい新さんの情報を引き出す機会を得る最終日。旧知の友人でなければ夏休み間は一切連絡が取れない、やばい。と感じた方々のアポによりわたくしこの後多忙を極めておりますのよ。もてる女は辛い。

しかし何故そんな呼び出しにいちいち答えているかというところ一度ぶつちしたときストーカーまがいにも何度か呼び出しを食らったためこうしていちいちわたくし自ら赴いているのであります。何故呼び出すほうに固執するのか皆さん。あ、ちなみに旧知の友人だろうか生き別れた双子の兄だろうかこの件に關しましては他人様と同列に扱う所存なのはクラスメイト各位にクチが酸っぱくなるほど伝えたために最近ではあからさまにアピールしてくる人は少ない。それでもないわけではないけれど。

そして、はい記念すべき本日第一号さん。同学年他クラス出席番号不明吉本さんよりのお便り。

『体育館裏で待ってます』

わお、なんて清しいほど簡潔なの。そしてこの面の皮の厚さに感心するほどの問答無用さ加減。果たし状に匹敵するパンチ力があると見た。これで素直に赴く佐藤さんって本当いい子よね。うんうん全くそう思うよ惚れ直しちゃうくらいにね。やだもうさりげなく告白だなんてジョントしたら大胆ね。

ジョンって誰よと思いつつ脳内の即席座談会が終了した頃、ちょうどその体育館裏とやらにたどり着いた。待っていたのは眼鏡の小

柄な女の子。こんな優等生タイプまで新さんに懸想しているのか、とほんの少しななんとも言えないものを感じましたよお姉さん。

「あの、来てくれてありがとう一条さん」

「いや別に慣れてるから。で、用って言うのは」

「あ、うん、渡したいものがあつて。でも一条さんのクラスに行ったらなんだかちよつと、入りづらくつて。ごめんね。なんか、呼び出しちゃつて」

小動物みたいな子だ。きよどきよどしながら言い訳するみたいにまくし立てている。まあ、言っていることはわかるけどね。どうも新さんムードがクラス中に充滿しているのか、私に用があると言つて入ってくる輩には容赦ない視線が浴びせられる。おかしいよね。新さんと会つたことも喋つたこともないっていうのに。まあ、そんなつっこみ今更でございませうが。

しかし渡したいものつて言うと、ラブレターの類だろうか。健気な少女が初恋に胸を震わせ恋心揺らくペン先で想いの丈を綴つた手紙、とかですか。なにやら昭和の香りに惹かれるものがありますが、ご愁傷様でございます。生憎当社では贈り物の類は受け取り不可となっております。ご自身で渡せるものなら渡してやってください。

コンマの速度でテンプレを思い浮かべつつ、顔は申し訳なさそうに眉尻を下げた。謙虚は大事。

「あの、悪いんだけど新へ届け物とかそういうのは」

「え、違つもの！ これ、一条さんに渡すものなの」

「へ？」

意外や意外、予想だにしなかつた切り替えしに阿呆面を晒す羽目になつてしまった。私に、つて。見ると、両手で白い封筒を差し出している。便箋とかが入っているやつじゃなくて、なんていうか、事務的な真っ白い縦長の封筒。何事かと見れば、彼女自身も戸惑っているように目を泳がせた。

「あの、私もよく知らないの。とにかく渡してこいって」

「いや、誰から？」

「お父さん」

お父さんだと？ 何を言っているのだろうか彼女は。勿論私には彼女のお父さんと面識などない。というか彼女でさえもほぼ初対面なのに、なにがどうして彼女のお父さんから手紙を預からねばならないのか。というかそれを知っているだろうに何故に私が受け取るという期待をもてるのだろうか。この子の面の皮の厚さはプレート並なの？ 分厚いってレベルじゃないんですけど。

なにやら少し必死な様子で差し出してくるけど、いまいち状況が飲み込めないので受け取るわけにもいかない。なんだってんだらう、こんなこと今までに無かったのに。

「あのさあ、私、吉本さん？ のお父さんにお手紙貰う覚えはないんだけど」

「あの、違うの。よくわかんないんだけどお父さんも、誰かから預かったらしくて、どうしても渡さないといけないものらしくて」

なんだかしどろもどろに弁明しようとしてるけど、益々怪しい。誰かって誰よ。余計に疑惑が深まってきたんですけど。なんで私がそんな見も知らぬ人からの手紙を預からなきゃならないわけ。

「でも、私知らない誰かから手紙貰う覚えなんてないし、そういうのはちよつと」

悪いけど、と断ろうとしたところで、彼女が動いた。手紙を持つたまま、ぐつと詰め寄ってくる。近い近い近すぎるって。

「お願い！ 大事なものらしいの。受け取ってくれるだけでいいから！」

てことは貴女も、大事なものだから、渡すだけでいいからと、今のような感じでお父さんに詰め寄られたわけね。

しかしもってその経緯が読めたところで差出人がわからないとなるとうんとも言えず。困った。得体の知れないもの受け取ってもどうしようもないし。カミソリ入ってたらやだし。断っちゃおう、と口を開きかけたところでやはり、先手を打たれた。

「じゃあお願いね！ 話はそれだけなの。さよなら！」

矢継ぎ早に言うつと私にそれを勢いよく押し付け、目にも留まらぬ素早さで走って行ってしまった。おいおい意外と運動タイプかい。だったら眼鏡かけるな。

全国の眼鏡使用者に全力で喧嘩を売る偏見を胸に抱きつつ、同じく胸に抱くこととなった一通の手紙を見下ろす。不覚ながらその怪しさ満点の手紙を受け取ってしまい、残された私は一人体育館裏で自身の詰めめ甘さを悔いることとなってしまった。

心は、目には見えない。手にとって触ることが出来なければ、匂いもないし、味も無い。もちろん音もない。厄介なことに、そこにあるかどうかすら解らない。でも、見れないわけじゃないし、感じられないわけじゃない。時に、目に見えること以上のものがそこに在ったりもする。

さて。それなのに気付けなかったのはどうしてなんだろうと考える。考えると、一つの結論に至る。ああ、そういうこと。見えなかったわけじゃないの。見なかったの。わたし。見ようと、しなかったの。私は。私だけ。そういうこと。

それはそこにあっても、私は常に単純な事実だけを拾った。だから目の前にあるものを拾い上げてみるなら、そう、大変そうだなっていう他人事な感情くらい。それだけだった。

もっと言うなら、お仕事かしら。更に言えば、電気くらいつけようよ。ついでに付け加えるなら、何このデジャヴ。まあ一口に言うつと、例によって翌日が休みで夜更かしであーでこーで以下略です。

つまり夜も更ける頃、リビングに居たわけだ。新さんのお父さん、もとい未来のマイフアーザーが。

二度目ともなるとほぼ一年経っていることもあり、それほど気まずさは無かった。いや、驚いたけどね。一度も二度も関係なく普通にびびったけどね。毎度思うけれど、どうしてこの人は電気をつけられないだろう。スイッチも見当たらないほど耄碌してるの？ それとも蛍光灯が嫌いななの？ どんな原始人？

いや、冗談はさておいても、今回は少し様子が違った。私が降りてきたことに気付いていないのか、以前と同じくソファに腰を下ろしなにやら難しい顔で書類のようなものを見ていた。テーブルの上には郵便物と思わしきものが、開封された状態で置いてある。

手紙？ それとも、仕事関係のなにかだろうか。暗いのでよくは見えないんだけど、こころなしいつもの穏やかな表情などではなく、なにやら眉間に皺を寄せて手元のそれを睨み付けるように見つめている。

なんなんだろう。ただそのまま黙っているのも妙な気がしたので、気付かせるためにもリビングの照明をつけた。途端に、一条さんははっとしたように顔を上げた。

「ああ、楓ちゃんか」

顔を上げた一条さんは私を目に留めると、はっとしたような、それでもまだ懸念があるような、微妙な表情を見せる。何事かと伺う余裕も無くすぐさまそれも打ち消すように微笑みだけだ。

なんだかなあ。大人の事情というやつだろう。首をつっこむのもどうかと思うので、私も軽く会釈を返すだけに留めておいた。

「眠れないの？」

この人は覚えていないのだろうか。去年も同じ質問をしたことを。「いえ。喉が……あ、えつと、水いります、か？」

「ああ。うん、お願いしようかな」

そこでやっと一条さんも私の抱く既視感に気付いたのか、苦笑しつつ頷いた。

それにしてもどうしてこう妙なタイミングで鉢合わせちゃうんだらう。去年ほど苦手意識はないにせよ、やっぱり深夜に二人きりは緊張するよ。しかもなんか誤魔化されたけどさっき難しい顔してたし。機嫌が悪そうだったらさっさと渡してさっさと去らう。そうしよう。そうでなくてもそうするつもりだったけどね。

今度はクールに「お疲れ様でした」と言い切ろう、と思いつつ水のボトルと麦茶のボトルを出す。目を走らせればすぐに見つかる私専用のコップと、一条さん専用のコップ。全員分揃っているそれは透明で型は同じだけど、色が一人ひとり違う。私のは、緑色。一条さんのは、オレンジ色。ついでに言うとお母さんのは水色で、新さんのはピンク色。

いつかのときに一条さんがニコニコご機嫌な様子でそれを買ってきて、その日の夜は四色のうち好きな色を巡り争奪戦になった。本人のイメージと相当誤差のある配色は、公平を期してくじによる選抜のため。一番人気だった水色は本当は一条さんに当たったんだけど、水色を欲しがっていたお母さんとくじを交換してあげていた。私も本当は新さんとくじを交換しようかと思っただけ、新さんがピンク所持というのもなかなか斬新な試みだったためにあえて緑に甘んじた。これも新緑の色みたいで綺麗だしね。

お母さんは一条さんの買ってきたそのコップをひどく喜んで、皆が揃っているときには必ずそのコップを使うようになった。とても大事にしていた。そんなお母さんを見る一条さんも、とても嬉しそうだった。きつとお母さんの喜ぶ顔が見たかったのだらう。

今更ながらにそんな事を思い出して、順当に家族ごっこが進んでいることを思い知る。あまりに順調。

さて、不思議なことに。

そのコップたちはいずれも欠けることなくそこにあり、また私の手の内にある。割ろうと思えば割れる。高いコップは割れ方も豪勢だ。これでもかと粉々に砕け散る。けれど、未だ私はその誘惑に沿わずそれを愛用している。麦茶の味など、どのコップに入れたとこ

るで麦茶以外のなにものでもないというのに。

「楓ちゃん？」

「あ、はい。今持っていきます」

催促したというよりも、手が止まったまま呆ける私を心配するよ
うに声がかかった。そりゃあキツチンで黙り込まれたら少々怖いも
のがある。何か仕込んでるんじゃないだろうかと疑われても仕方が
無い。って私は暗殺者かい。

たかがコップ。戯言はおよし、楓。されどコップと理性が二の句
を告げる前に、私は二つのコップを両手に掲げ一条さんの方へと向
かった。

あら。お手紙がしまわれている。

「どうぞ」

「ありがとう。あ、楓ちゃん。今、眠い？」

「いえ、ああ、はい……」

一条さんの言わんとしていることが解るのが辛い。くそう先手を
打たれた。間髪いれずハイって答えてたら私の勝ちだったのに。何
を競っているのか悔しさをかみ締めつつ、観念して私は一条さんの
前のソファに腰掛ける。

あ、そういえば『お疲れ様です』って言うの忘れた。いや、いい
よ、いい。こんなオヤジ。もういいよそんなこと言ってやらなくて
も。なんだか投げやりな気持ちになってしまい、どうでもよくなっ
た。去年は頭の先からつま先まで緊張一色だったのに。全く、いい
んだか悪いんだか。

「ふふ。なんだか思い出すねえ、去年のこと」

「はあ。さいですか」

一瞬、『なんのことでしょう？』とか言ってやろうと思ったけど、
掘り下げられるのがオチだから止めた。もういい加減一年も経てば
解るよこの人のパターンなんか。まあ、解っているのは私だけでは
なく、それはこの人も同じこと。私の性格も既に被る毛皮の内側ご
と把握しているらしく、それごと楽しんでる節がある。ほら、二

「ニコニコニコ。普段無表情の新さんとは大違いだ。

「」機嫌ですね」

「そりゃあ皮肉ですよ。一年経って皮肉も言えるようになりましたわあ進歩。」

「が、そうは問屋がおろさない、らしい。」

「解る？ いやあ、いいことあったんだ。聞きたい？」

別に。どうせお母さん関連のことだろう。いい加減耐性ついてきた自分も悲しいわ、こんちくしょうめ。」

是とも否とも言えず、私はだんまりを決め込んだ。されど一条さんは私の黒い呟きを知ってか知らずか、勝手に話し始める。

「さつきさ、新の部屋に行っただ。仕事終わりに子供の寝顔見るの、実は憧れていてね。父親っばいでしょ？」

「はあ……」

「ああ、珍しく新さん関連か。」

どうとも言えず生返事を返す私に、けれど一条さんはさも嬉しそうに微笑んで頷き返す。しまりが無いって言うのアレだけど、蕩けるみたいに嬉しそうに笑うものだから、こっちまで毒気を抜かれそう。

そんなに嬉しそうにしてるってことは、見れたのかな。新さんの寝顔。うーん、私もちょっと見てみたい気がする。何故か羨ましいぞ。

「それで、見れたんですか」

「うん、見れなかった」

見れなかったんかい。清々しい笑顔で言うな。何故に聞いた私がかっかり感を味わわねばならんのですか。

「いやあ、扉を開けるまでは良かったんだけどね？ 足音立てずに近付いたはずなのに、一メートル手前で起きてさ。『起きてたのか』って聞いたたら、『気配で起きた』って。あの子何者なんだろうねえ。忍者に育てた覚えは無いんだけど。ものすごい目で睨まれちゃったよ、ははは。あー怖かった」

いや、はははって笑い事じゃないんですけど。貴方の息子でしょ。心配で起きるって日常をどんな修羅道に染められてるの。怖いほど睨まれるってそれ嫌われてませんか。笑ってていいんですかね。ていうか貴方の喜びの基準が解らないんですけど、一体どの辺りで蕩けるような笑みを浮かべるに至ったんでしょうかね。ことによっては私もドン引きしますよ。もうしてますけどね。

「良かったですねえー」

新さんが。寝顔を覗き込まれずに済んで。私も嫌だ。絶対いやだ。想像だけでもいやだ。さすがに私にまではしないだろうけど。

しかしさつきは難しい顔をしていたくせに、一体なんなのかこの人は。表情と感情が一致しないって軽く問題じゃありませんかね一条さん。絶対笑いながら怒るタイプだこの人。うわあ私と一緒に嬉しくないですマジで。

「楓ちゃんは？」

「へ？」

「うん、楓ちゃんはどうかなくて。最近、どう？　ここの生活には、そろそろ慣れてきた？」

どう、って。言われても。なに、いきなり。

チラッと見ると、一条さんは自分で聞いてきたくせに私の方を向いていなかった。水がまだ半分入ったままのコップを、窓から射す月明かりに掲げて透かし見ている。その頬に当たる硝子のオレンジ。ちらり、ちらりと、グラスを揺らすたびに一条さんの頬を掠める。

それがなんだか楽しそうで、思わず私も、月を見上げた。

今日は満月。明日は晴れか。知らず知らずのうちに苦笑が、漏れる。はいはい。解ってますよ。明日の天気を気にするくらいの余裕なんて、もうとつくに出来上がってます。解ってるんでしょう。貴方だって。

「まあ、楽しいです。毎日。新さんも、いい子だし。……一条さんも、親切ですし」

それは、そう。日々の優しさが、思いやりが、ちらりと覗くんだ

もの。嫌とはいえない。嫌とは思えない。そうしたのは一条さん、貴方と、お母さん。それに、新さんも。解ってるんでしょう。聞かなくたって、解るでしょうに。

何かに観念したような、不思議な気持ちで答えると、一条さんの手が止まった。目はじつとそのまま、何かを見つめるように押し黙って、そしてふつと微笑む。力を抜くように、柔らかく。

「そう。それはよかった。……いいね。本当に。いいことだ」

そうしみじみと呟いて、一条さんは残りの水を煽る。空になったそれをまだ両手で握りこむように持って、膝の上に肘を突くようにした。一条さんは、ひどく穏やかな顔を浮かべていた。

「僕も楽しいよ。君たちのおかげで。この歳になっても、まだまだ知らないことが沢山ある。これからしたいことも沢山ある。それをね、君たちに教えてもらった。僕も、新も」

「……普通のことしか、していません」

「うん。普通だった。でもそれが一番必要だったんだ。普通が一番大事で、必要だったってことなんだ。きつとね」

噛み締めるように言うその言葉に、私はうまい返事を返せなかった。

解るようで、解らない。だって私もお母さんも、何もしなかった。ただ普通に生活してただけ。一条さん達はたぶん、それに合わせてくれた。不都合や不自由を感じたことだってあっただろうに、文句の一つも言わなかった。だから誰かのお陰というなら、一条さんや新さんのおかげで私たちは普通の生活が出来た、のに。それは一体一条さんたちに、何をもたらしたのだろう。その普通の中の一体なにが、一条さんたちに必要だったんだろう。

そんな風に、問いかけるように見ていたのかもしれない。一条さんは私を見ると、ふつと苦笑いを浮かべた。

「情けない話があるんだ。聞く？」

「……はい」

一年前の私ならどう答えただろう。解らないけれど、今の私は、

是と答える。だって、知りたいから。知りたいと、思えるから。

「僕はね、あの頃新の父親じゃなかった。他人よりも遠い、距離があつた」

「あの頃？」

「うん。あの頃」

『あの頃』を言う気がないのか、一条さんはただ頷いた。

「どうしていいか解らなかつた。あの子がなにを考えているか、そもそもどんな子なのか、なにが嫌いか好きかも解らない。どう扱っていいかわからない。僕は横に立つあの子にどう接するべきかすら、解らなかつた」

その頃を思い出しているのか、一条さんの言葉には苦々しいものが滲んでいた。悔いて、いる。もしかしたら、そうなのかもしれない。

「そんなときだつた。君たち親子に出会つた。僕はそのとき思つたんだ」

一目惚れと言つた、あの時の話のことだろうか。沈んだ気持ちが生上るように、一条さんの眼差しに光が宿る。

「『ああこんな親子になりたい。そうだ、真似してみよう！』ってね」

「え」

真似つて。

思わず呆ける私を見て、可笑しそうに一条さんは笑つた。

「はは。つまりお手本にしたんだよ。君たちを」

「お手本、ですか」

「うん。全くいいお手本だつた。何しろ、妬けるくらい仲良しだから」

妬いたりしてたんですか貴方が。意外な発言の連発に開いた口が塞がらない。大体、真似つて。新さんは娘じゃないのに安易に真似している、それ。

「そ、それでうまくいったんですか」

「うん。なんか微妙に訝られたね。避けられたとも言つかない」

「やっぱり。それでまた清清しく言うなってば。ていつかうまくいかなかったんならいいお手本じゃないじゃん。」

「それで、どうしたんですか」

「うーん、途方にくれたね。なにしろ僕にも初の試みだったし。情けないことに、僕は失敗が怖くて、びくびく尻尾を巻いていた。でも、救世主が現れた。ヒーロー、でもいいけど」

「きゅうせいしゅ？ ひーろー？」

「ものものしいな。誰よ。」

「誰ですか、それ」

「思わず聞くと、にやつと笑った。にやつと。あ的一条さんが。」

「誰かなあ。誰だろうねえ」

「ニヤニヤしながら、訳知り顔でほめかす。なに、これ、そこはかとなくイラつとする。そこまで言うなら言えよ。言おうよ。焦らすなよ。」

「まあ、そのお陰で結果オーライ。今じゃ少しは父親らしいこともさせてくれるようになった」

「言わんのかい。くっそう、まだニヤニヤしてる。誰だ、誰なんだ。救世主？ 誰かが何かしたってことだよ。一条さん、じゃないし。自分のこと言わないよね。もしかして私、かお母さん、なのかな。いや、でも、私何もしてないし、じゃあお母さんは あっ。」

ふと、思い浮かんだかの日の出来事。新さんが笑顔を見せたあの朝。そういえばあれくらいの頃から、新さんの素直さもアップしていた気がする。おいおい、じゃあ、救世主ってお母さんのことかなに、結局のろけ？ うわあイラつとくる。

「良かったですねえ」

「うん。ありがとう」

「皮肉二割増で言うと、同じく二割増の笑顔を返される。ああ、もう、バカッブルめ。」

「それはお母さんに言ってあげてください。私は、特に、何も、し

「はい」

「すいませんねえボケーっとしてまして。どうせ自分のことばっかりですよ。ええ、ええ、知りませんよそちらさんの親子問題なんて知るもんですか。」

「半ば自棄になつて強調しながら言つと、一条さんは何故だか目を丸くした。なによ、文句あんの。」

「楓ちゃん？」

「はい」

「何もしてない、って」

「何もしていませんが何か」

「うるっさいなもー何もしてないしてないってして欲しいなら金をくれ！ って違う違うそうじゃなくて、とにかく、文句を言われる筋合いはありませんよってことですよ。中学生になに期待してんのやったとしても廃品回収とか空き缶拾いとかなその程度ですよ。いいでしょそれくらいで。全くもう近頃の日本人ときたら無償化だのフリーだのうるっさいんじゃない。って私はいつの時代の人間だ。ああもう自己つつこみも忙しい。」

「気付いてないの」

「いや気付きましたよ？」

「いや、解つてないんじゃない」

「いや解りましたよ」

「なんなの？ 鈍感扱いしないでくれるお母さんじゃあるまいし。あ、お母さん御免。でもそこがいいところだから許してね。うん。」

「くっ」

「く？ 俯いた一条さん。小首を傾げたその途端、弾けるように笑い出した。」

「あつはつはつは。いやー、面白い。楓ちゃんってやっぱり面白いよねえ。うん、いい逸材だ」

「ああ、来たよこれ。自己満発言。コマンド、自分で言つて自分で笑う。効果、相手のテンションをがた落ちさせる。こうかはばつぐ

んですよコノヤロー。

「ああ可笑しい。これは苦勞するなあきつと、ははは。ああ楽しみ」
「はあ。それは良かったですね」

相当可笑しいのか、笑いをかみ締めながら右手で額を覆って肩を震わせている。完全なる棒読みで返してもちつとも屈辱感も拭えない。なーにがそんなにおかしいんだと問い詰めた。小一時間ほど問い詰めた。そんな不機嫌真つ盛り私を、まだ笑いが抜けきらないのか笑みを滲ませたままの一条さんがちらりと目を向けた。

「本当だよ。僕も、君と一緒に。楽しいんだ。今が、とても。時々、夢みたいと思うときさえあるくらい」

「……夢って」

「うん。格好悪いけどね。この夢がいつまでも続きますようにって、いつも寝る前に祈ってるんだ。いい年したオジサンが、子供染みてるかな」

そんなの。まるで、乙女みたいなことを言う。本気でそんな事を言っているんだろうか？ それでもそれが冗談などではないと、一条さんの微笑が告げる。どこか気の抜けたその笑みは、いつもの一条さんらしく、ほんの少し儚く見えた。

そんなことを言われても、困るよ。私には、解らない。そんな事を言われても、解らないのに。普通の生活を送ることを夢だという、その気持ちが解らない。それを言って、どう思って欲しいのかもわからない。私にはいつだって、一条さんの言っている意味も、気持ちも、何一つ解らないし、察してあげることが出来ない。元々のすむ世界が違うんだもの。当たり前でしょう。分かり合うことすら早々うまくはいかない。

ああ。

でも、そう、残念なことに。私にも解ることがひとつだけ、ある。解ってしまったことが、ある。

「夢じゃないですよ」

これは現実。私にもそれくらい解る。だから、解っていたの。多

分、もう、ずっと前から。

そう。私は思っていた以上に一条さんやお母さんを、煩わせていたのかもしれない、と。きつとこの人たちは、待っていてくれていた。物分りのいい振りをする、そんな嘘つきな私を許して、じつと辛抱強く待っていてくれた。何度も扉をノックしては、返ってこない返事に、けれども何も言わずに、ただ、じつと。

その間に一体どれだけ月が満ち欠けしたのか、彼らは数えていたんだろうか。途方も無い思いに駆られたりはしなかったんだろうか。私なんかの思いを伺うことに、苛立ちを覚えなかったんだろうか。いつまで、待ち続けるつもりだったんだろうか。思えば思うほど、私こそ途方も無い思いに駆られる。満月を幾度と無く見過ごすその日々は、きつと憂いを溜め込んだらうに。

もしかして、ことを急いで私がどうするかを、知っていたんだろうか。一条さんは。私にも想像のつかないその未来を、回避してくれたんだろうか。この人は。それに、こんな頑なな私に絶えず微笑みかけてくれた、お母さんも。いつそのこと、不毛にすら思える。

私にとっての救世主は、誰だったのか。誰が私から、私を守ってくれたのか。

それに気付けたからこそ、今更反発なんていくら私でも、とてもじゃないけど出来るわけもない。根負けだ。私の、負け。もうとっくに、私は負けていた。

「夢には終わりがああるんです。だから祈っても無駄だと、思います」
「……それは」

少しだけ哀しそうに、けれど、微笑んで目を伏せる人。そんな顔を見ると時々無性に苛立った。今ならその理由がわかる。

許されていることが、許せなかったんだ、私は。自分のしていることを解っていたんだ。一体誰を、何度、傷つけていたのか。私は知っていてなお、それを繰り返した。許されるたびに。貴方が、お母さんが、許すたびに。まるで何かを、試すみたいに。

「夢なんかじゃ、ないんです。だから」

だから、きつと見えないところで沢山悲しい思いをさせたけど。それでもまだ、許してくれるなら。また、許してくれるなら。

「続きますように、じゃなくって。続けてください。ちゃんと、責任を持つてください。……祈るくらいなら続けて、欲しい、です。私は、そう、思います」

私の頑なな態度で、何度傷つけただろう。それでも楽しかったと、楽しいと、言うのなら。貴方が、続いて欲しいと願うなら。だったら私も、今度こそ、ちゃんと向き合います。貴方とお母さんの望む未来を、私も、見据えます。抗わずに。背けずに。逃げずに。私も、そこにある私の未来を、望みます。

それから、急にデレを見せた自分が恥ずかしくなって、呆ける一条さんの前から逃げるようにして立ち去った。

そのとき思わず持ち込んだ、空のグラス。雲ひとつ無い月夜にかざすと、それはまるで新芽のような色を放ち、ちらり、ちらりと私の頬を照らした。

大事にしよう。

そう、思えた、一年後の夏の夜の夢。もう一つの芽には、まだ、気付かない。

<幕間>佐藤かえでとおかしな悪戯(前書き)

お気に入り一千名越えありがとうございます。それとは全く関係ありませんがさも関係あるようなタイミングでハロウィン番外編をご笑納ください。本編とは関係ないギャグ、いえグルメ、いえ息抜き幕間です。合言葉は『駄菓子菓子!』

<幕間>佐藤かえでとおかしな悪戯

ハロウィーン。

某説ではカトリックの諸聖人の日、万聖節の前晩に行われる伝統行事とされ、その起原はケルト人の収穫感謝祭より取り入れられた行事だと言う。

諸説蘊蓄はさておいて、こと日本ではいいとこどり楽しけりやなんでもいいじゃん化けとけ化けとけ精神で、さも応対するのが当然とばかりに成人に満たない幼子が珍妙な格好でもってして親兄妹親戚近所のおばちゃんおじちゃんじーちゃんばーちゃん果ては幼児愛好家にまで食指を伸ばす（もとい伸ばされる）、聞きしに勝る菓子争奪戦線が繰り広げられる、戦国武将も真つ青な謎の行事である。

かとも思えばこの行事、裏を返せば大人の入る隙は無い。外国の真似事の延長線で趣向を練った衣装を身にまとい参戦したところで、憐憫交じりの失笑でもってして試食のお姉さんに同情で一粒ハイチユウを拝借する、その程度の功績しか上げられないことだろう。

駄菓子菓子！

しからばそれが内輪でのみの話ならば勲功立てるは夢に非ずとはさもあらんと思えよう。ええいまだるっこしい。菓子ではない。物ではない。そこにあるのは己の見立てた首一つ！ 戦で勲功と言えば御印、御印といえは勝負、勝負とあらば、力と力のぶつかり合い！ 者共立てい。もはやこれは稚児の戯れに非ず！ 己の矜持を賭けた、これは、ここは戦場なのだ！ 武器を取れ！ 腰を上げる！ 必ずやその勲功、この手に掴んで見せようぞ！

と、いうわけで、長い前振りで読者離れを程よく引き起こしたところで、作戦開始。

「鳥筑、尾亜、鷄意図！ 御印頂戴、さもなくば、我が刃の錆にしてくれようぞー。ですよ。菓子おくれ、新さん」

折りよく以前に調子ぶつこいて買ったモノク口縞模様の丈が以上に長い個性通り越してトリツキー丸出しのずるずるアシメTシャツフード付を羽織り、イザ出陣。ノックもなしに即訪問。思春期の少年相手に何たる仕打ち。

駄菓子菓子！

これもトリツクの醍醐味のひとつは思いませんかね。例えそれが自家発電の途中であろうとも、戦は待つてはくれない。そういう大事なことを身をもって教えてあげようという優しい姉心の表れなのです。事前にデジカメを用意してあるとか、それを激写して今後に生かそうとか、そんなことは企んではおりませぬ。武士にあるまじき行いですよ、それは。ええ。なにはともあれ先陣きって特攻であります（もともと一人だけ）。

新さんは勉強机に向かっていたようだ。とりあえず自家発電フラグは撃墜。ちつ。と思いきや、予測していたのかいきなりの闖入者に驚く様子もなく、彼はくるりと椅子を回転させ振り返った。

「よかるう。さもあらん、受けてたとうぞ一騎打ち。よくきたな、

楓

「げえ」

あらお耳汚し失敬。だつてあーたそれ、顔につけてるの、噂のスクームさんじゃございませんこと。さり気に全身黒尽くめだし。

コワッ。不審者のな意味で。

「し、新さん……それ……」

「楓が来ると俺が予測しなかったと思うか？ 攻守が自分の手の内にあるなんて思わないことだな」

なんか勝ち誇ってますけど格好が格好ですから。思わず『なにフザケてんの？』と冷めた声でつつこむところだった。危ない危ない。

「トリツクオアトリートか。いいだろう、既に勲功は手配済みだ」

「は？」

「これを」

訳知り顔（といっても面だけ）で物申す我が弟、どこぞより取

りだしたるその箱を持ち、手招きをした。怪訝ながらも近寄る私に、彼はその箱を開き勲功なるそれを開示して見せた。

「こつ、これは……こつ」

開かれた神秘の扉の向こうには、幻と謳われるそれが、そこに鎮座していた。

「秘宝堂限定一日十個販売単価千五百円の『ジュエル・ア・ラ・モード・プレシヤス』。巷では幻のプリンと呼ばれ、予約販売は利かず己の足で並び買うしかない貴重かつ稀少なる逸品だ」

「説明乙ッ」

漂う濃厚で芳醇な香りのハーモニー。配色配置大きさまで全てが計算されつくしたまさに一つ一つが宝石と呼べるほどの輝きを放つフルーツ。一切の形を損なわずそれらを引き立てまた盛り立てる冒されざる絶対の純白^{クリーム}。そしてその中央に王者の如く鎮座する不動にて不滅の品格、主寶のプリン。更にはそれらをラッピングするかのように、優しく内包する繊細かつ美しい飴細工とチョコレートのコラボレートが添えてある。土台はタルト、いや、というより堅めのワッフルだ。見事なまでの曲線を描くその計算されつくした器は王者を守り湛えるベールのようにかたどられていた。

美しい……恐ろしいまでのその存在感は嗅覚視覚のみならず五感そのものを支配する。もはや一体これは何漫画なんだと思わせるような感想を視覚の段階から既に抱かせる魅惑の一品。

『ジュエル・ア・ラ・モード・プレシヤス』。恐ろしい子ッ。

「更に」

「なにつ」

更にだど？ 思わずそれに見惚れていた私を眺め、地を這う如き声でくつりと微笑んだ彼は、というかスクリームは、更なるもう一つの秘宝を取り出した。

「同じく秘宝堂ハロウィーン期間限定一日十五個販売、単価千二百円力ボチャのパイシュークリーム『シンデレラの休息』。例年より莫大な人気を誇ったあの泡沫の名品がこのハロウィーンの一月のみ

復活だ。この秋これを食べた貴方は解けない魔法にかかっているとだろっ」

「セールストーク乙ッ」

まさに。ジュエル・ア・ラ・モード・プレシヤスが王者たる資格を持ちえるならば、そう、この『シンデレラの休息』はまさに女王手のひらサイズのコンパクトなそのパイは程よい焼け具合と大きさを保ち、その存在を誇示しすぎず、けれど確たる気品を湛えている。その肢体をまるでドレスのようにカボチャのチョコレートとブラックチョコレートとが絡み合うよう、織り込まれるよう、手編みのレースの如く軽やかに包み込んでいる。更に頂には無垢な少女の名残を思わせる初心な木苺がちよこんと乗っかり、可愛らしさの一面も兼ね備えている。そして極めつけは金粉。惜しげもなく、けれど下品にならない程度に全体的に振りまかれた金粉はそのシュークリーム completionされた美を締めくくるのみに終わらず、食べる者に選ばれし者の栄誉と悦楽を味合わせてくれるだろう。

頑なであり不屈のそれに一さじフォークを入れれば、きつと見えるだろう。甘くたおやかな、洗練されたその真の美《味》が！
「って何だこれー。何グルメ漫画ー？」

「美味 んばじゃないか？」

「いや洋菓子だし西洋 董洋菓子店だと思っ。しかし……」

どちらも、甲乙つけがたい。なんたる完成された逸品であるうか。それそのものがまるで芸術品だ。

つとここで語りだすとまた長くなるから割愛するとして、この入手困難もいところ過ぎて手を伸ばすことすら憚られるこの逸品をどうやって、新さん。仰ぎ見ると、クリームの二つの覗き穴の向こうで、彼の双眸が怪しく輝いた気がした。

「こわいこわいこわいこわい、面外せ面を。」

「勿論、並んで買った」

「新さんが……？」

「無論。午後十時開店により早朝五時起床、六時から並び始めた。」

その頃にはすでに人が七人並んでいて、危ないところだったな……」
遠い目をしてふつと笑うスクリーは、それだけで歴戦を潜り抜けた猛者の面差しを湛えていたと言う。というか誤魔化されそうだけれど一介の男子学生が早朝から洋菓子屋に並んで限定品を買うつてどうよ。いいの？ ありなの？ 昨今は普通なの？ スイーツ男子つてやつ？ なんでも男子女子つけるんだつたら24時間男女でも歌っててくださいかしこ。

「つまり？」

「そう、つまりはこれを手に入れたければ」

何故だかヘッドライトもないのにスリームにカツと後光が差した。

錯覚が、見えた。

「全身全霊で悪戯を仕掛ける。俺を、嵌めてみせる楓」

なんだあああめんどくせえええ。

「見事俺が悪戯を回避できなければ、これは二つとも楓のものだ」

「なにっ。二つも！」

「駄菓子菓子。俺が勝った場合、俺の言うことをなんでも一つ聞いてもらおう」

ぐぬぬ。姉を限定品で釣ろうとはいい度胸だ新さん。よかろう。

その勝負。

「のつた」

がしっ。

今ここに熱き魂がぶつかり合う！

みたいなアオリ文が、固く握り交わしたこぶしの上に見えた気がした。

つまり、二つ二つと。

新さんは『攻守が自分の手の内にあるなんて思わないことだな』と、言った。ということははてつきり化かしあいなのかとも思ったけれど、彼はこうも言った。

『俺を、嵌めてみせる』

まさしく、当初の予定通り。しかしまあ本来の目的で言えば、お菓子をねだりつつもし用意していなかった場合は心行くまで嫌がらせしてやろうとか、そういう心積もりだった、のだけど、ねえ？

私が負けたら、つまり彼に仕掛けた悪戯が失敗したらペナルティが待っている。受けたのは時期尚早だったのだろうか。スクリームの奥でどんな表情を浮かべていたのか想像もせずただただ魅惑の二品に心奪われたあの時の自分が憎い。

されど、幻の一品。危険を冒しても手に入れるに値する。しかも二つもだ。これは勝つしかない。彼奴が腰を抜かすような悪戯を仕掛けるしかない。どの道負ければ地獄。よもや死に物狂いで弟に悪戯を企てる日がこようとはこの姉、想像もせなんだ。

しかし、気になることがある。どうして新さんはあれほどまでに自信満々だったのだろうか。『嵌めてみる』というくらいだから彼が受身側だということは前提として、仕掛けられるそれに絶対引つかからない勝算でもあるのだろうか。作戦タイムとして引き返した私だったけれど、これはもしかや絶好のチャンスを逃したのだろうか。

新さんが早朝に並んでまで勝ち取ったあの二品。裏を返せば新さんは以前からそれを企てていたことになる。ということはその心積もりだったということであり、あのファーストコンタクトで私が速攻で悪戯を仕掛けていれば成功する確率は今より高かったのでは？

いや、予想していたのならばその覚悟も既に織り込み済みだろう。ならば今とて条件は一緒。この勝負、仕掛けるほうが色々と自由度が高く有利かと思っていたけれど、存外そうでもないのかもしれない。宣戦布告してしまつた今、あちらもそれ相応の心構えが出来上がってしまったているだろう。それなら今更ちゃちなどつきりなど仕掛けたところでうまいこと驚いてくれる確立は格段に低い。普段

より警戒心も高まっていることだろう。不意をつくのは難しい。か
とって今この急場でどう彼に悪戯を仕掛ければいいのか。

隙が、無い。

「しまった」

愕然とした。勝った気で勝負に乗ったのがまず間違いだった。新
さんの言葉通り、いつのまにか選択の余地もなくまんまと攻守を決
められてしまった。

ぐぬぬ生意気な。よもやこの姉を嵌めようとは、それでも弟か。
ハンデくらいよこせ、小賢しい奴め。いや待てよ。嵌める。嵌めさ
せられる。嵌めさせる……。

はっ。

「いいこと思いついちゃった」

ルンルン気分で傍らの携帯に手を伸ばす。

サブ画面には『17:35』と記されていた。

「しーんさん」

あれからすぐに新さんの部屋をノックすると、新さんはさほど間
を置かず扉を開けた。もう面は外しているらしく、ただ単に黒尽く
めの格好なだけみたい。警戒してすぐには開けなかなと思ってい
たけれど、余裕の表れかそれほど緊張も見られない涼しい顔でお出
迎えてくれた。可愛くないの。

「なに。悪戯、思いついた？」

「うーん。思いつかないから、こうなったら新さんの油断を誘おう
と思ひまして。というわけで、夕ご飯まで一緒に下でゲームしよう
よ」

下というのは、大画面のテレビある部屋、つまりリビング。あれ
で格ゲーとかモンハンやると爽快なんですわ、ええ。勿論映画もイ
ケます。何はともあれリビングへ。新さんの答えも待たず階段を下

りていくと、特に反論もなく新さんもついてきてくれた。

精々余裕ぶってるがいい。

心の中で大いに嘲笑いつつ、私は新さんと共にリビングにてゲームのセッティングを始めたのでした。

「楓」

ゲームを始めて小一時間。隣りでコントローラーを握りながら敵を倒している新さんが、相変わらずの涼しい表情で画面から目を離さずに呟いた。それが聞こえてちらつと仰ぎ見るけど、私も顔は画面を向いたまま答える。

「なに」

「悪戯は諦めたのか」

「んなわけないじゃないすか」

「だよな」

不毛な会話を繋げつつ、どんどん敵を薙ぎ払っていく。それにしても新のスコアが半端無い。もう私の倍以上いつてる。くそっ、指何本ついてんだ。気を逸らす意味も含めて揺さぶりかけてみようかな。

「もしさあ」

「うん」

「こうやって新さんをじりじり精神的に追い込むのが私の悪戯だって言ったらどうする?」

「それは」

かちかちかちかち。と、コントローラーのボタンの音が耳につく。

新さんが、傍らの私を見下ろした。

「楓がそれでいいって言うなら」

かちかちかちかち。コントローラーを握りながら、操作しながら、新さんが言う。

「別に、それでも、いいけど」

こ。わ。い。画面画面画面見て前見て操作して。どこに目がついてんの。お姉さんなんか寒気がしてきた。

何気なく言ったそれは、恐らく新さんからしてみれば最悪、いや、邪道なのだろう。是と答えれば何をされることやら。

寒気を感じて、私も目を逸らすことができなかった。勿論コントローラーを操作するなんて化け物じみた神業できるはずも無い。フルスコアたたき出すとか無理。無理だから。

「あ」

若干冷や汗をかきながらなんて返そうかと逡巡したその刹那、救いのチャイムが鳴り響いた。きつと一条さんだ。私は新さんの無言の威圧から逃れるようにして一目散にドアホンへと駆け寄った。

『ああ楓ちゃん？ ただいま。開けてもらっていいかな』

「はい」

鍵でも開けられるけど、基本この家はドアホンで確認してから開けます。防犯諸々のためです。誰のためやら解説しつつ、ぽちつとなど開錠ボタンを押した。ちなみにこれ、一定時間たつと勝手にしまります、かしこ。

「あ、そういえば一条さん」

『ああ、わかってるよ。ちゃんと用意したよ』

「お手数おかけします」

『はいはい、じゃあ行くよ』

軽快に言いながら、一条さんは画面から姿を消した。

よし、あとは締めにかかるとするか。画面から目を離すと、後ろでは新さんが早々にゲーム機を片付けているところだった。時計を仰ぎ見れば、六時五十分を指している。もうじき夕食だ。しめしめと浮かぶ笑みをかみ殺しつつ新さんに話しかけようとした、そのとき。

「かえでちゃん。ちょっと手伝ってー」

お母さんだ。うーん、うむ。まあいいか。一人納得しつつ、ゲーム機を片付け追えた新さんに近寄った。

「新さん。私玄関に手動ロックかけちゃってたかもだから、ちょっと行って外してきてくれる？」

「うん」

新さんは別段渋ることもなく、素直に頷いてリビングを出て行った。

くっくく。これで幻のスイーツ（笑）は私のものだ。その瞬間が見れないのは残念だけど、後はあのお方にお任せしよう。

悪役さながらの笑みを浮かべつつ、私は再度呼んでくるお母さんの声に間延びした返事を返した。

そして。

私がキッチンに入るのが早いか、新さんが玄関のドアを開けて一条さんを迎えるのが早いか。その、刹那。

『うわっっっ』

二人分の叫び声が、家に木霊した。

さて。どういうことかと、言つと。私は新さんへの悪戯を、一条さんに仕掛けさせるといふ手法でもって企て、新さんは見事に引っかかってくれた。

新さんいわく、『玄関開けたら鹿がいた』だそうです。驚かす手段はお任せします、とは言っただけど、まさか首から上がリアルな鹿のサラリーマンが玄関にいるとは、新さんは愚か私ですらも思いつかない。趣向懲りすぎ。その被り物の現物を目の当たりにして、そのあまりのリアルさに私でさえも思った。

けれど、話はそこで終わりじゃあない。新さんは確かに私の悪戯に引っかかった。けれど同じとき私も、彼の策略に見事嵌ってしまった。新さんは言っていた。

『攻守が自分の手の内にあるなんて思わないことだな』

あれは言葉通り、そういう意味だったのだ。

攻守が自分の手の内にあると思うな。即ち、攻守共々新さんの手の内にあると言う意味。その辺りのルールにおいて、明言しなかったのは私の過失だ。会話の流れから、自分だけが驚かす側だと思い込んでいた。

勿論それを見越していた新さんは、抜け目なく手を打っていた。その下準備は既に終えていたからそのあれほどまで余裕だったのだろう。そして私がいつ悪戯を仕掛けるかと待ち、私に疑問を抱かせないためにも受身の姿勢に入った。

しかしそこで誤算があつたらしい。一向に悪戯を仕掛ける気配が無い私。その辺りはまあ想定内だとして、その後の私にとつても計画に無かつた不意の会話。それが新さんの企てに穴を作つた。

『こうやって新さんをじりじり精神的に追い込むのが私の悪戯だつて言つたらどうする？』

意外なことに、この言葉は思ひのほか新さんに打撃を与えていたらしい。ただし失望という意味で。もしもそれが私の本心ならば、これほど邪道なことも無い、と新さんは思つたらしい。そして私の怯えの表情。まさか本気か、と思つたところに一条さん帰宅で、私が誤魔化すように立つたために、それを新さんは本気と捉えた。ならば甘い考えの私に敗北の二文字を味合わせてやろうと最後の詰めを済ませ、失望と共に玄関へと向かつた。

私はというとお母さんの呼ぶ声に何の疑いもなく向かい、そしてまんまと罠に嵌る。はいはいとほくそ笑みながら向かつた先に待っていた母の頭部は、奈良の大仏と化していた。

「つまり」

夕食を終えソファに身を沈めた新さんは、沈痛な面持ちで言った。「ネタがかぶつたと」

イグザクトリー。なーんてしよっぱいオチざんしょ。アホくさくて笑えもしません。結果的に両成敗引き分け。目下私たちの目の前

には、居場所を失った幻の二品が、居心地悪そうにそこに鎮座していた。

あーあつまんない。絶対いい案だと思ったのに。まさかのネタかぶり。負けるより辛いわ。それは新さんも同じようで、屈辱のためか自身が買ったその二品を穴が開くほど睨みつけている。

それもそうだ。私も同じだけど、自分と同じことを相手が思いつくかもしれないという可能性にどうして気付かなかったのか。名案だと思っただけなんだかそれしかない気がしてそうしてしまっただけだ、新さんならば気付けたはずだ。大方私への罰ゲームを思い浮かべて判断力が鈍っていたに違いない。何をさせるつもりだったか知らないけれど、今更ながらにほっとする。

ともあれば、引き分けでも結果オーライということだ。正し問題は、このデザート。私が勝ったら、二つとも。じゃあ引き分けだったら、これは一体どうなるのだろう？

「新さん」

「いや、駄目だ。負けは負けだ」

「新さんだって負けたじゃん！ 一個くらいいいじゃないすか！」
「だから俺も楓には何も課さない。でも楓が一個食べたら楓だけがいい思いをするだろ」

男の癖にみみっちい事言う奴だなー！ 真のフェミニストは『はは、勝っても負けても君に食べてもらうつもりで用意したのさ』とか言うところだと思っんですけど。

けれど思いはしつつも、どうせ新さんの気持ちはこうと決めたら揺るがないので言わない。結果がどうあれ私は新さんを負かし、そして新さんに負けた。この宝石たちに手を伸ばす権利は、その瞬間に剥奪されてしまったのだ。

「うぐぐぐ、目の前にあるというのに……っ」

「言っな。俺だって勝っていたらと思うと」

くっ。とか言っつて、新さんはめちゃくちゃ悔しそうに歯を食いしばっている。だから何をさせるつもりだったんですかね。我が弟な

がら得体の知れない奴だ。

それにしても、いやしかし、やっぱりもつたいたい！ 諦めきれない！ 君を愛してるんだー！ ってこれは違うか。

「じゃあこれはどうするの。新さんが食べるの？ そっちのほうが不公平だと思うんですけど」

言つと、新さんは苦虫噛み潰したみたいに目を逸らした。毎度の事思つけど、苦虫だろうがなんだろうか虫を噛み潰した時点でそりゃあ嫌な顔にもなると思う。例えですけど。例えなんですけど。

「これは勝者のみが食べることを許される。つまり……」

「お母さんが食べるんですよ。かえでちゃん」

「なにっ」

その至極の品を、小さな手のひらが大事そうに、けれど有無を言わせず持ち上げた。お母さんだ。いつのまにか傍らに迫っていたお母さんが、私の、私のケーキを掠め取った。私のケーキを掠め取ったのです。大事なことなので二度略です。

「わーい戦利品ですよ始さん」

「よかつたね」

同じく傍らでいけしゃあしゃあと温和な笑みを浮かべる始さんと一条さんが、無邪気に笑う私のお母さんに頷き返す。

って打ち合わせ済みかい。どうりで一条さん快諾したわけだ。

そうか、それで新さんはこれほどまでに悔しがっていたわけか。新さんが勝つたらデザートは二つお母さんに渡る取引で、例えそれがうまくいなくても一条さんづてに一個だけでも手に入る算段。策士。我が母親はやっぱり我が母親でした。

愕然とする私を前にして、二人は罪の欠片も無い笑顔で和気藹々と相談事を始める。

「始さん、どっちを食べたいですか？」

「紅葉さんはどちらがいいのかな」

質問に質問を返すのはいかかと思うんですけどどうせお母さんが食べたいほうと反対の方を選ぶつもりで聞いているんだろうなあ

思うのであえてつつこみませんよ。ええ、つつこむ気力もありませんとも。

「どっちか迷うんですよねえ」

悩ましげに、けれど選ばれし者が浮かべることの出来る贅沢な苦笑を浮かべ、お母さんが小首を捻る。きい奈良の大仏だったくせに。おでこにスイツチみたいなのついてたくせに。

「じゃあこうしよう。それぞれ半分ずつ食べるんだ。そうしたらどちからも食べられるよ」

「ああ。それすっごく名案。そうしましよそうしましよ」

ボツ。ボツ。ボツううううう。

にこやかに頷きあう二人を前にして必死に念を送る私。そんな未練がましい私を、同じく新さんが未練がましく見つめていたとかいないとか。

だからなにをさせるつもりだったのかと以下略で御座います。お粗末さまでした。

<幕間>佐藤かえでとおかしな悪戯(後書き)

読了感謝でございます。次話より再び本編をお楽しみください。

佐藤かえでとお母さん

一条家豆知識第十三回、我が家のポスト事情。

我が家のポストはほんのちよつと普通と違う。郵便物は大抵のものなら受け入れ可能。でも入れることは出来るけど、誰にでも回収できるわけじゃない。それは他人ならず私たちまでも、簡単には入手できない。作りそのものが、ぱかつと蓋を開けてさつと取るとかそういうものではなくて、特別な鍵がついている。それは一条さんの持っているキーでぽちつと押さなければ中身を取り出せない代物で、ポスト一つに大仰なセキュリティがついている。聞くところによると、壊したり無理やり開けようとした場合警報が鳴って警備会社にも連絡が入り、すぐさま駆けつけてくるらしい。しかも中に赤外線センサーがあるらしく、おかしなものが入っていけばすぐに解るとのこと。おかしなものってなによ、とつつこんだら負けだ。まあ大事な書類はその家にいちいち届いてくるわけではないけれど、念には念を入れていろいろしく、そんな嚴重かつ強固なポストが設置されたらしい。

そういうわけで毎回回収する人は一条さんで、それから家人の各人に届いたものが振り分けられる。私は別にダイレクトメールとかその程度しか届かないだろうからいいけれど、それにしたってドン引き極まりない。一条さんはポストに何らかのトラウマでも抱えているのだろうか。もしくは郵便物に並々ならぬ憎悪と不信を抱いているとか。どの道無機物相手にそれほど確執を抱く一条さんはやつぱり底知れない。ていいうかなんか怖い。意味なく怖い。

そんなこんなで、あまりにぞつととして大事なことを聞くのを忘れていた。そしてその大事なことは、私の勉強机の引き出しの奥へと、深く深く隔離されてしまった。

パンドラの箱は未だ、閉じたままだ。

人生で最も刺激的なハロウィンを経て、落葉真つ只中の十一月。そろそろ本格的に肌寒くなり始め、着るものにも自然と厚みが出てくる頃。当然比例して朝起きるのも億劫になる。一年経つと慣れという厄介な慢心が出てくるもので、一年前はどんな日でもきつちり朝の定時に起きていたものを、休みの日くらいいまあいいかと勝手に作り上げた免罪符で寝坊する休日も定番になってきた。

ちやつかり前日夜更かしをして、翌日きつかり八時間ほど眠った土曜日の九時。いつもの支度をいつもの倍の時間をかけてのんびり済ませ、のろのろと自堕落極まりなくリビングに下りると、そこには既に普段着に着替えた一条さんがソファにくつろいでいた。どっかで見たとある光景みたいに、新聞を広げて読んでいる。ただし、スポニとかじゃなくてなんか細かい字がずらーってしてる方だけ。朝っぱらからあんなの読んでよく目が回らないもんだと逆に感心する。

「あ。おはよう楓ちゃん」

「おはよう、ございます」

私の気配に気付いた一条さんが振り返って、朝一番の爽やかスマイルをお見舞いしてくれる。慣れたとはいえ、寝坊した朝一番に一条さんを見るとやつぱり落ち着かず、ちよつと戸惑う。そのまま椅子に座ると、お母さんがさつとご飯を用意してくれた。御飯茶碗を差し出してきたときに、私は声を潜めて聞いてみた。

「あの、今日なんかあるの？」

「え、なに？」

声大きいお母さん！

ちらつと後ろを見たけど、気付いているのかいないのか、一条さんはまだ新聞に目を通したままだ。ふう、危なかった。慎重を期してお母さんを手招きして、前に座らせた。内緒話のお約束、お互い

前のめり。

「あのね」

「うん」

「一条さんがあんなにのんびりしてるの、珍しくないかな」

「そう？」

うう、話が繋がらない。きよとんと目を瞬かせるお母さんは、本当にわかっていないようで小首をかしげている。こんな幼い仕草が似合うのも、ひとえにお母さんが童顔で可愛いからこそ許される。ふわふわ緩めの天然パーマで身体ちっちゃいし童顔だし可愛いしで、守ってあげたくなるタイプそのものだ。直毛で比較的長身な方の私とは大違い。

お母さんに言わせれば私はお父さん似らしいけど、お母さんに似たかったなあなんて時々は思わなくも無い。まあ私がお母さんみたいな子ウサギタイプだったら色々破綻してたような気がするから、これはこれであるべくしてなった結果のような気もするけど。

って今はそういう主観は置いて、一条さんよ、一条さん。

「あのね、だからね」

「かえでちゃん、ご飯冷めちゃうよ」

「うん、そうだね、冷める前に食べなきゃね、美味しいうちにね」
ぐむむ。話が進まない。でも折角用意してくれたのでちゃんと味わって食べなきゃ。気がそぞろだったり早食いしたりすると拗ねるんだよね、お母さん。まあ私が悪いんだけど。

観念してご飯に集中すると、湯飲みにお茶を注ぎながらお母さんが言った。

「今日はね、お出かけするんだって」

「え」

おでかけって、一人で？ もしくは、誰かと？ 私誘われてないよね。いきなり皆で行きますって言われても困るよ。私にだって予定というものが、まあ、今日は無いけど。いや、時々忙しいよ、私だって。うん。

脳裏に一瞬で巡った思考に苦しい言い訳をしていると、お母さんが違う違うと首を横に振った。

「かえでちゃんが行かなくて大丈夫だから」

「え？　じゃあデート？」

「ちっ、違う違う。そういうこと言わないの！」

言わないの！　って言われても普通好きあつてる男女が出かけるといえばデートじゃん。全くいい年こいてカマトトぶっちゃって、お母さんたら初心いのう。そこがまた私と違って憎めないところでもあるんだけどさ。

「あのね、そういうんじゃないじゃなくて今日は始はじさんと」

「おはようございます」

慌てふためくようなお母さんの声を遮り、ふっと後ろから声が出て振り返ると、新さんがいた。私より寝坊するなんて珍しい、と思つてみてみたら、なんとなくいつもと装いが違つていた。淡い水色のシャツに紺と赤の縞模様のネクタイを締めて、グレーに近い色の黒いベストを着ている。下はカーキのスニーカーを履いて、上着に袖の黒いベージュのジャケット、暗めの紺色のストールを首から下げている。しかも何故か伊達眼鏡着用で、髪もバッチリセットされている。

完全にお出かけモードの装いに、フード付パーカー&ジーンズの完全部屋着スタイルの私は圧倒されてしまった。

なに、なんなの。今日は英国紳士チックに決めてみましたっけか。畜生似合ってるよ、足長いよ完璧モード系だよ新さん。今だけは新さんって言うよりARATAって感じた。ていうか本当に何事。

「ん、用意できた？　もう行くか」

「うん」

一条さんだけは解つたようで、傍らのソファの背にかけていたジャケットを羽織った。え、なに、どういうこと。お母さんのデートに新さんも着いていくの。私だけのけ者？　とか思っている間に、お母さんが立ち上がって世話女房よろしく一条さんの襟を正してあ

げている。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい。行ってらっしゃい。気をつけてくださいね」

「うん。じゃあ、楓ちゃんも。行ってくるね」

「え、あ、はあ……いえ、いって、らっしゃい、です」

何故だか私にもふってきたので慌てて駆け寄ると、にっこり満足そうに笑って私に新聞を手渡してきた。その新聞を受け取りながら新さんを見ると、彼はいつもよりも更に寡黙になってしまったように、目を伏せていた。機嫌が悪い？ いや、というよりむしろ。

首を捻っている間に、リビングの扉が閉じる。見送りにお母さんまで行っちゃって、私一人がぼつねんと残る。取り残された私の耳には、まだあの言葉がリフレインしていた。新聞を受け取るときにこっそりと囁かれた嬉しそうなその声によって。

『驚いた？ これが、イイコトの正体だよ』

イイコト。

私の頭の中にはその声と、そしてあの夏の夜に垣間見た蕩けるような微笑がぼつかりと浮かんでいた。

「試写会に行くんだって」

「ふーん」

結局中途半端に冷めてしまった朝食を再開しながら、私はお母さんにこの経緯を改めて説明してもらっていた。つまり、デートはお母さんと一条さんじゃなくなって、新さんと一条さんだったんだ。いや、親子でしかも同姓同士でデートって、あんまり言わないだろうけど。一部マニアックな設定をお持ちの世界を除いて。

それをデートといわずしてなんと呼ぶかはさておいて、一条さんのイイコトってこういうことだったのか、と今更納得した。いやあ、あの時はてっきり息子の寝室に不法侵入を試み、結果侮蔑の眼差し

を向けられたことによってある種の性癖を刺激されて得もいえぬ快感を得ることが出来て重畳でした、とかそんな才子だと思ってた。いや、嘘だけど。そういう設定を練って楽しんでたっていう。ごめんなさい一条さん、妄想で変態扱いしてしまつて。

しかしそれにしてもだね、てえ事はだよ、あの夜に新さんとその約束を取り付けたから、一条さんはあんなに嬉しそうな顔をしていたって事か。そっか。試写会に誘ったわけだ、一条さんが。で、新さんはそれを断らなかつた。真夜中に？ 新さんもよく断らなかつたもんだ。あ、真夜中だから断るのも面倒くさかつたのかな。一条さんはソレを狙つたのかな。どうよソレ。父親として邪道まっしぐらつてどうなのよ、ソレ。じゃあさっきの妙なムツツリ顔は、照れてたのか。なんか新さんにしては珍しく目も合わせようとしなかつたし。なるほどねえ。可愛いとこあんじゃん。そりゃ一条さんもお機嫌になるわけだ。

「はあー、あの二人がねえ」

「ね。今まで二人で私的な用事で出かけたことがなかつたんだって。良かったねえ」

「うーん。そうねえ」

私的な用事つてことは、色々事情によつては借り出されることもあつたけど、個人的に二人で出かけたりすることが無かつたって事か。それつてどんだけなの。何かお母さん今日は晴れてよかったね位の軽さで笑つてるけど、よくよく考えてみるとそれつてすんごく切ないものを感じるね。

なんなのあの二人つて。本当位置関係とか距離感とか意味不明なんですけど。けどなんか若干デリケートな感じですよ。こみづらい。どう接したらいいのってか今までどうも接しなかつた私つて何なの。一年経つてやつとこさ現状掴むつてどうなの私。無関心にモ程があるでしょ。一年前と大違いだよ。緩みすぎ、マジで。

「お、お母さんは、その……」

「んー？」

「知ってた、の？」

諸々。ていうか多分まだ私が知らないこと山ほどあるんだろうけど。どこまで知ってるんだろう。ていうか知ってたなら少しくらい教えてくれてもいいのに。のほほんとして笑ってくれちゃって。

「んー？ 知ってたって、何がかなあ。なんだろうねえ」

首を右に左にわざとらしく傾げながら、いつのまにか食べ終えていた空の食器を回収していく。ナニソレ。はぐらかしてるのかな。はぐらかしてるつもりかな。つつこんじゃ駄目なの。どこまで。さじ加減がわかんないんですけど。ええええ。何この置いてけぼり感。もしかして私、一番出遅れてる？ ウソ、ヤダ、マジで。私としたことがっ。

「お母さん！」

「うーん、あ、かえでちゃんも早く準備してねー」

「えっ」

食器を洗いながら、こっちに振り向きもせずになにやら言い出す始末。

「今日のかえでちゃんも久しぶりにお母さんと一緒にでかけましょ

ーねえ」

「ええええー」

イキナリ！ 突拍子も無い。あたふたと意味なく左右を見渡して、それでもお母さんはもう何も言わずに黙々と食器を洗っているの、私も仕方なくすごすごとリビングを出た。

聞くなつて事ね、お母さん。

「……はあ」

少しだけひんやりと温度の下がった廊下を進みながら朝一番でため息をつき、私はのろのろと階段を上った。

十一月ともなると、自然周りは早々とクリスマスモードになる。

街はイルミネーションに昼夜輝き始め、BGMは流行の曲から一挙にクリスマス風のイメージソングへと移り変わり、どこもかしこも赤と緑の配色に包まれる。

その様変わりした街中を車から降りたときに一望すると、なんだか自分まで心が沸き立つような、様変わりしたような、毎年の既視感と新鮮さを同時に味わえる。

「では、またご帰宅の際にはご連絡ください」

後ろでめちゃくちゃ低い、けれどいい声がしたかと思えば、私に続いて車から降りたお母さんがにこにここと愛想よく、その低いけどいい声の主にお辞儀した。

「はい、ありがとうございます常田さん。ホラ、かえでちゃんも」

「あ、ありがとうございます常田さん」

「いえ。ではまた後ほど」

そう言つと常田さんはあつという間に車の雑踏の中へと車体を滑り込ませて行ってしまった。それを見送る私、と律儀に手を振るお母さん。立ちっぱなしもなんなので歩道を歩き始めると、お母さんも横についてきた。

「……はあ」

「どうしたの、かえでちゃん」

どうしたもこうしたも、ないと思うんですけど。ちろりと横目で盗み見ると、なんともまあほえほえと何もわかっていないようなお気楽な表情で首をかしげている。うん、癒される。癒されるはず。

「お母さんはさあ、なんでそんなに平気そうなの」

「平気って何が？」

「だからさ、常田さん」

吃驚したように目を丸くする。その顔、まるで子ウサギちゃんみたい。小首をクイツとかしげちゃってさ。

「かえでちゃんは常田さんが嫌いだったの？」

「ちっ、違う違うそういうんじゃないよっ」

好きでもないけどさあ、好き嫌いの話をしてるんじゃないのよ、私は。本当に解っていないようで、益々といったように眉を顰めている。その表情に、ああやっぱりこんな風に思ってるのは私だけなんだ、と納得した。

「もういいよ。それで、どこいくの？」

「えー、気になるなあ」

「いーの。ホラ行った行った」

不満そうなお母さんの背を押して先を歩かせると、私は歩道側からさりげなく車道側に移動した。それからちらりと常田さんがいなくなつた方角を見てから、すぐにお母さんとの他愛の無い会話を再開した。

常田さん。本名、常田聡介。一条家、っていうか私とお母さんの専属の運転手さん、である。

運転手なんていつからいたのかっていうと、正確には最初から居た、らしい。らしいっていうのは、私が常田さんという人と直接面識を持ったのはこの間の夏休みの頃が初めてだったので、らしいというほか無い。元々、一緒に暮らし始めてからはお母さんの買い物なんかの送り迎えをしてくれていたようで、私も何度かはお世話になつたことがある、っぽい。それもまたその都度一条家御用達のお抱え運転手さん達の誰かなんだらうなあと思つていただけで、まさかそれが同一人物で、しかも基本お母さん専用とか知るはずもなかった。聞かなかつた私もアレだけど、言わなかつたお母さんも相当アレだと思う。

で、その常田さんと私が直接お抱えの間柄になつたのが、夏休み直前、だつたかな。ふいに一条さんが、『この季節になると夜道どころか昼間でも変なのが沸いてくるからね、念のためと思つて』とかなんとか言い出して、常田さんは私とお母さんの兼用になつた。今まで普通に通っていたんだからそんな必要はないと最初は断つた

んだけど、お母さんにまで頼まれては無碍にも出来ない。結局私が折れることになり、夏休みを開けても通学のときなど逐一常田さんにお世話になっっている。

学校までそんな送り迎えだなんてどこのお嬢様だと最初はすつごく嫌だったんだけど、そこは気を利かせてくれるのか、最初に学校の近くのコンビニに下ろしてもらったらそれで降コンビニからの乗り降りになった。無口なくせに気が利く人だ。車内での無言の威圧と送り迎えの大仰さに慣れてしまえば、なんてことは無いのかもしれない。

けれどそれだけじゃあない。常田さんは、それだけじゃなかった。いつかのとき、こんな風に常田さんに送られお母さんと街を歩いていた頃、ふいに道端であるう事か私とお母さんがそこを通り過ぎようとしたときに、殴り合いの派手な喧嘩が起こった。勿論私とお母さんは関係ない。けれど突如起こったそれに人だかりが出来始めるわ、その喧嘩が白熱するわで私とお母さんはその喧嘩の間に居ながら身動きが取れなくなり、いつ火の粉が降りかかるかとヒヤツとしたそのときに、現れたその人。

言わずもがな、常田さん。いつのまにか私達の背後にぴつたりと寄り添っていた彼は『奥様、お嬢様、こちらへ』とかさらっと言うかと思うと、お母さんと私をやりわり誘導しながら的確に人の合間を縫って離れたところに連れ出してくれた。

それはいい。いいの。いいはず。百歩譲って『奥様』と『お嬢様』はスルー。でもやっぱりよくない。絶対これは譲れない。

おかしいでしょ。どんだけ絶妙のタイミングで現れるの。ついさつき颯爽と去ったかと思えば後ろにいるんだよ。怖いでしょ、どう考えても。百歩譲ってお母さんを助けるためだとしてもね、やっぱりスルーできませんから。

私は聞きたかった。すごく聞きたくてたまらなかった。いつからいたのかと。ていうか、もしかしてずっとかと。何時からとかいう

問題じゃない。出かけるたびに、貴方はそうしていたのかと。SPとか言えば聞こえはカッコイイかもしれないけど、これ、ていどいい監視じゃん。

それを当然のようにつつこんだら、お母さんは困ったように呟いた。

『そうねえ。多分、お母さんがしつかりしてないから、常田さんがお守りをさせられてるのかも。もっとしつかりしなくちゃね』

違う違う違う。悩むベクトルが明後日の方向向きすぎ。ある意味ネガティブだけど要らないところで前向きすぎ。そんなところもいところだけど時々無性にもどかしくなるよ、お母さん。

そしてまだ納得のいつていない私に、ダメ押しの一言。

『かえでちゃんも、始さんに自分の娘のように思われてるんじゃないかな。よかつたねえ』

よくない。諸々良くない。

良くないけど、これ以上心の地雷をピンポイントで突かれるのは勘弁して欲しくて、結局私が黙る羽目になった。

おかしい。何かがおかしい。そう思うのに、あれよあれよと私は流されていた。思えば、今に始まったことじゃない。何かと流されて、私は色々と見過ごしてしまっているんじゃないだろうか。

私とその違和感に気付いた頃、お母さんはまだ昼食を和食にするか中華にするかで思い悩んでいるところだった。

昼食を終え、再び買い物魂に火がついたお母さんと私は、それはもう練り歩くというほど街中を闊歩した。喧騒の中を行き交う中で色々と消耗した私たちは、帰宅前の一服にと一軒のカフェに入った。「はあ。今日は沢山歩いたからお母さんちよつと疲れちゃった」「そうだねえ」

そう言いながらも、お母さんの傍らにも私の傍らにも荷物は無い。

それを購入と同時に常田さんが颯爽と現れ、瞬く間にそれを回収すると共に再び颯爽と去っていったからだ。もう何も言うまい。霞む如くさつと過ぎ去る常田さんの背中を見て、私も悟った。一つ、大人になった気がする中三の冬。

数あるビルの中の一角にあるこのカフェは見晴らしもよくって、運よく窓際にて目下米粒のような人々行き交う交差点を一望できていたりする。優雅なもんだ。以前はこんなところにくることもなかったのに、随分生活水準が上がってしまった。この上もしもこれががた落ちするとなれば、落差はこの景色も笑って見られないほどとなるだろう。そう思えばこそ、一服だというのに途端にそわそわしてくる始末。お母さんは『ここ、始さんと入ったの』とかのろける余裕があるみたいだけど。ああ、私にもその余裕を分けて欲しい。「かえでちゃん、どうしたの、ぼーっとしちゃって」

「ああ、うん、あー……」
言うか言うまいか。ふっと過ったそれに一瞬逡巡するけれど、この際だからと腹をくくる。

「あのさあ、えっと、お母さんと一条さんって、どうやって知り合ったの？」

「ええ？ いきなりそれ聞く？」

「いや、だって聞いてなかったじゃん。馴れ初め……とかさ。そういうの」

途端、窓に目を向けていたお母さんがこっちを向いて吃驚したような顔をする。それも無理からぬと思うので聞いておいて私の方が目を逸らす。聞いてなかったっていうか、聞かなかったんですよ。つまり、もっと言うと、聞きたくなかったっていうかさ。むしろ聞く必要なんかないし、みたいな感じだったね。ハブられたんじゃないし俺がハブったんだしの要領みたい。違うか。

自分でも可愛くないと思うけど。自分ではそんなつもりなかったけど、お母さんには見えていたんだろ。その辺の、その、私

の頑なさだ。そう思えば少し、悪い気もするもので。気まづくなつて目を泳がせる私に、お母さんは優しい目をして微笑んでくれる。

「うん。言つてなかつたね。ごめん」

「いや、」

気恥ずかしさに、後に続くフオローの言葉すら浮かばないときだ。あー、もう。なんか、へたくそだ私。

でもそんな私をお母さんは許してくれる。いつも、いつだって。見透かすように緩く微笑みながら、お母さんは思い起こすように窓の向こうに眼差しを馳せた。

「そうだねえ。うん、お母さん、あの頃お花屋さんで働いてたでしょ？」

「うん……」

あの頃って言うと、私が中一かそこらの頃からかな。お花屋さん、本屋さん掛け持ちしてた。お休みの日は少なくて、その代わり夜は家に居て家事もちゃんとこなしていたお母さん。ほえほえしてるのに、やることはきっちりしてるんだよねえ。本当によく頑張ってた。お花屋さんは意外と朝早いし、本屋さんもレンタル業兼ねてるから割と落ち着いてるようで動き回る職業だったし、すごい頑張ってたよ、お母さん。自分では大変とか疲れたとか、仕事の愚痴すら言わなかつたけど。

「それでね、そのお花屋さんに始さんが来たの。身なりのいいお客さんがきたなあなんて思ったら、ふいに胡蝶蘭の鉢植えを指して、『コレ包んでください』って。聞けば、お見舞いの品だつて言ったんだよ。面白いよね」

まあ、うん。普通一般常識だとお見舞いの品に鉢植えは病が根付くからって避ける品だつてことは、中学生の私だつて知ってる一般教養だ。しかも見舞いに胡蝶蘭の鉢植え。チョイスが、また。一条さん、意外とも知らずなのだろうか。お母さんはそのときのことを思い出しているのか、クスクス笑つて言った。

「それでね、そのことやんわり注意してみたら、それを聞いた途端

に始さんたらあちゃーって顔して、困りきつたみたいに『じゃあ年頃の子に似合う花はありませんか』って。もうそのピンポイントな注文がおかしくって。思わずその場で笑いそうになっちゃった」
年頃の男の子に似合う花。

一条さんて、勉強できる馬鹿だったのかな。私だったら絶対冷やかしかなかだと思っけど。

「それでお母さん、お花選んであげたってこと？」

「ううん。追い返しちゃった」

「はあ？」

折角の客ですか。ていうか想像できない。ほんわかふにゃふにゃのお母さんが一条さんを追い出した。どうやって。ていうかどうしてそうなる。どうせ自分で花を買ったこともないお金持ち様様なんだから、高値の花でも売りつけてやればよかったものを。

そんな考えが顔に浮かんでいたのか、お母さんは私を嗜めるように見て、苦笑する。

「追い出したっていうかね、よく解らないものを買うより、ご自分のお好きなものを差し上げてみたらいかがですかって言っただけ」

「ええー。そんなこと言っちゃったの」

若干喧嘩売つてるとも取れるような言い方だなあ。人によっては絶対怒るよソレ。よく言ったもんだ、あ的一条さん相手に。思わず目を丸くしていると、悪戯っ子みたいな目をして笑うお母さん。

「やんわりね。だってよく解らないから適当に見繕ってくれ、なんて言うから。聞けば事故で入院した息子さんへって言ってたし、仮にもお見舞いでしょう？ そんな投げやりじゃ息子さんもお花もいい迷惑じゃないの」

「事故？ 新さんが？」

「そうみたいね。接触事故らしくて、それほど大きな怪我でもなかったみたいけど、検査入院させられたらしいの」

嘘、そんなの知らなかった。愕然とする私に、私たちと会う随分前のことだから、とフォローするようにお母さんは付け足した。う

「ん、まあ、それなら仕方ないかもだけど。全然知らなかったよ。そんなことあったんだ。なんていうか、意外だ。新さんが事故にあつとか、自分から飛び出す以外全部回避しそうなイメージだから。いや、だからって自分から飛び込むほどDMでもないだろうけど。」

「それでね、話に戻るんだけど、好きなものって言っても何が良いかよく解らないからヒントだけでもください、なんて言うものだから、それならお客様の好きな本を差し上げてみたらいかがですかって言ったの。そしたら『そうか……』なんて呟いて、フラフラ出て行っちゃって。これじゃあ本当に冷やかしたよね」

まあ私がそう仕向けちゃったようなものだけど。なんてお母さんは笑った。

それから後で一条さんが『お礼がしたい』だのなんだのとベタな誘い文句でもってしてお母さんに接近を図って、交流を深めるうちに今に至る、と。はあー、なるほど。あるようで、ない話って感じ。よほどのことがあつたのかと思えばロマンスというには地味すぎるし、かといつても現実的に考えるとそうある話でもないような気がするし。うーん、摩訶不思議。

しかし一条さん、意外なところで色々ベタだなー。益々あの人の人物像が解らなくなってきた。今に至る、のところとか大分はしよられたし。これはまだまだ追求が必要なのかも。

うーんと一人で唸っていると、不意にお母さんがくすつと笑った。

「なに？」

「ううん。まさかこんな風になるなんて、思いもしなかったから」

こんな風。

それがどんな風なのかは知れない。けれど、私にもお母さんがそう言ってしまう気持ちは少しだけ、解る気がした。それこそあの時の自分が、一年前の自分が見たら開いた口が塞がらないことだろう。何が変わったとか何がどうしたとか、そういったことは深く追求するとそれほど明確ではないんだけど、でもやっぱり私は変わってしまった。それがいいのか悪いのかは解らないけれど、確実に今の私

は一年前の自分とは違つと言える。それが何によるものなのか、或いは誰によるものなのかを考えると、少し面映い。変わってしまった私。残念なことに、今の私はさほどそれを後悔していない。むしろ。

「でも、どうしよつかない！」

突如私の思考を遮るように、いやに明るい声を出して、お母さんは困つたように微笑んだ。

「なんか、もつたいなくなつてきちゃつた、お母さん」
「もつたいないって、なにが」

「だって、もうお母さんだけのかえでちゃんじゃあなくなつちやうんだなあつて、思つたら、ね？ だから、なんだか寂しくなつてきちゃつて」

「寂しい……？」

一瞬、何を言われているのか、わからなかった。けれどお母さんのその、ほんの少し切なそうな眼差しを見つけたとき、すぐに理解した。

まさか、いや、でも。そうだ。そうなんだ。お母さんは結婚をまだ、迷つていたんだ。いや、まだ迷つてるっていうよりあと一歩が踏み出せずにいる、のかも知れない。

なにそれ。どうして今更。いや、どうしてじゃないでしょ。どうしてじゃない。解つてるでしょ。気づいてるでしょ。そうだよ。

私。

私、がお母さんの一歩を、踏みとどまらせているんだ。

『もうお母さんだけのかえでちゃんじゃあなくなつちやうんだなあつて、思つたら、ね』
は。

なに、言つてんの。逆でしょ。

お母さん。お母さんが、そうなるんじゃない。お母さんが、私だけのお母さんじゃなくなつちやうじゃない。お母さんが勝手に私の手を離して一条さんのところに、私を独りに、

違う。

そうじゃない。そうじゃないの。

ううん、そうだったんだ。お母さん。知ってたの。ずっと解っていたの。見えていたの。私がそう思っていること。心のどこかでお母さんを責めていたこと。私が、裏切られたって、思っていたこと。知っていたの。気付いて、いたの。気付いていたのに、見ない振りをしていてくれたの。

そんなの。そんなこと、知らなかった。全然、知らなかったよ。

「お母さん……」

「んー？」

急に俯いた私の顔を覗き込むように、お母さんは首をかしげる。解っているのかいないのか。ううん、全部解っているんだ。それを知った上で、私はこの上なく酷な言葉を口にする。

「結婚、やめて、って私が言ったら……止めてくれる？」

「うん、止める」

「……ふ」

即答、なんて。不自然なほど軽快な声に、ぐっと喉が詰まる。少しでも息を吐けば、全てが瓦解するような気がして、唇をかみ締めてなんとかとどめた。

そんな、止めるって、本気で言ってるの、とか。そんなことしたら一条さん悲しむよ、とか。今更そんなことしたらみんなに迷惑掛かるけどそれでもいいの、とか。

そんな言葉が頭の中をぐるぐる巡るのに、一言たりとも呟けやしない。お母さんが本気で言っているのが解る、から、何も言えない。本気なんだ。私が嫌って言ったら、止めてくれるんだ。いいじゃない、好都合だよ。言っちゃえば。こんなに簡単に言えるなら、それほどじゃないんだよ、きつと。こんなチャンス二度と来ないよ。もう後戻りできなくなるよ。言っちゃえば、試しにさ。ホラ。言いなよ。

「馬鹿言わないで」

思ってもみない言葉が、頑なだった口からするりと零れだす。お母さんが息を呑むのが、目を伏せていても伝わった。それでもするする、するすると、私の口が勝手にまくし立てる。

「無責任なこと言わないでよ。一条さんが聞いたら泣くよ。あの人の間『今が夢みたいだ』って言ってたんだよ。それね、去年も同じこと言ってたの。そうやって同じこと言うってことは、それまでずっと、あの人はそうやって不安定な気持ちを抱え続けてたってことなんだよ」

ぐらぐらと、揺れていたのは私だけじゃなかった。新さんも、一条さんも、お母さんも。きつとみんなが、私を含めて、不安定な足場でどちらを向けばいいのか、探り続けていた。私がそれに気付いていなかっただけ。

私だけじゃ、なかった。

「私のせいにはしないで。押し付けけないですよ。したいならすればいいじゃん。お母さんの気持ちで決めることだよ。……私の気持ちは、もう、決まってるから」

それは、嘘偽りなく、そこにある。いつからだろう。解らないけれど、それはもう撤回できないほどに育ってしまった。それが真実。

お母さん。私もう、目を逸らさないって決めたんだよ。あの夜に顔を上げて、泣きそうな顔をしているお母さんにとっさり、微笑みかけた。

「いいんじゃないの、結婚しても。きつと楽しいと思うよ。今よりもっとね」

「かえで、ちゃ……っ」

お母さんの顔がこれ以上なくらい真っ赤になって、見る間に目じりが潤みだす。消え入りそうな声で「ごめん」と呟いたお母さんは席を立って、化粧室の方へと消えてしまった。

私は、なんだか最初の居心地の悪さもすっかり忘れて、驚くほど穏やかな気持ちで窓の外を眺めた。

「……言えたよ、新さん」

イルミネーションに飾り立てられた街中は、それはそれは色鮮やかで、とても、楽しそうに見えた。

佐藤かえと一年で最も喜びに満ちた日

十二月に入るとクリスマススムードにもいよいよ拍車がかかり、クライマックスに向けて猛進するようにあれやこれやと何もかもが目まぐるしく移り変わる。天気もそう、人もそう、市場もそう、世情もそう。浮き足立つとはまさにこのこと。この頃の私といえば丁度推薦入試の合格通知が届いて程よく肩の荷も下りて、周りの空気に感化されるように浮かれていた。順調といえば、そう、何もかもが順調だった。私に限って言えば。

それに遭遇したのは、丁度コンビニ帰りのときだった。冬ともなれば自然と日中はどんどん短くなり、この頃になると五時にして辺りが夜のような薄闇に包まれる。そんな中コンビニ袋を片手にぶら下げてだるだる歩いているときに、鉢合わせした。

なだらかなフォルムを描くその車種はよく解らないけれど、車に疎い私でも一目で外車と解る。その傍には見慣れたその人がいて、思わずあつと声を上げてしまった。当然、彼もこっちに気付く。よくよく見れば運転席に居るその誰かも、こっちを向いていた。どうやら話中だったらしく、完全に邪魔を入れてしまったようだ。

そのままでも気まずいので、お世辞にも行儀がいいとは言えないぎこちない愛想笑いでお辞儀をすると、先に新さんの方がふいっと目を逸らし、運転席側の人に目を戻した。無視かい。

「じゃあね新。また連絡するから」

街灯からの明かりをフロント硝子が反射していたから、ただでさえ視界が悪いのでその人の顔なんか見えなかつたけれど、声からすると女の人だったらしい。それも結構年上の、お上品な人。声だけ

でなんで解るかかって言うと、聞いているこっちの背筋がぴんと張るほどの気品のある声音だったからっていう。

なんとなくものしい空気を醸しつつ、新さんの返事を待たずにその人はゆっくりと車を滑らせた。途中、その緩やかな速度の刹那にすれ違う瞬間、目が合う。真ん中分けの、スツキリと髪を後ろで纏めた、涼しげな目元の人。微笑を浮かべまるで意図的に私にそれを向けたその人の顔は、こっちが面食らうほどの美貌をたたえていた。

うつむ、お姉さんとは言えないけど、おばさんとは死んでも言えない感じの人だったなあ。強いて言えば奥さん。三文官能小説かい。おかしなベクトルに向きかけた思考を胸に秘めつつ、車が過ぎ去ったところを確認して私も止まっていた歩みを漸く再開させる。新さんは私が近付くと共に、言葉も無くわたしの歩調に合わせ斜め前を歩き始めた。そのせいか、表情が伺えない。嫌に押し黙ったその背中はあえて表情を読ませまいとしている、そんな風に見えた。

「新さん」

「……なに」

心なし、いつもより硬質な声。というより、聞き覚えがある声。さほどの変化は無いけれど、こんな空気を感じていたのは覚えていた。丁度一年前の、あの頃とか。

振り返りもしない今の彼は、言葉をかけるのも憚られるほどの雰囲気纏っている。ただ、傍らには空気も読まずガサガサと世話しなくがなるコンビニ袋。ちらりとそれを横目で見つめ、仕方なしにとため息をついた。

「食べる?」

答えは、無い。それでもしょうがないので、優しい私は選択肢を出してあげる。

「新発売のラー油肉まん、子猫まん（つぶあん）。どっちがいい?」

本当はどっちも食べるつもりだったんだけどね。甘いのが食べたら

しよっぱいのも食べたくなる。これ自然の摂理。それでも涙を呑んで選択肢を差し出す私、姉の鏡だね。

暫くの間ガサガサとコンビニ袋だけがやかましく囁り、そしてふいに、新の足が止まった。じつと地面を見つめる彼の顔を私が覗き込むと同時に、ぼそりと呟いた。

「……つぶあんの方」

夜闇に翳る彼の面差しに赤みが差していたかどうかはわからない。ただ私も心が広いので、快く頷き返してあげた。

「おっけえ、子猫まんね」

「つぶあん」

「だから子猫まんですよ」

「つぶあんだつてば」

「つぶらな瞳がチャームポイントの子猫まんが食べたいんですよ。」

正直に言いなよ」

「違う。心のそこから純粹につぶあんが食べたいんだ」

しょうもない言い合いを繰り広げ、羞恥に目を顰めながら「子猫まんが食べたいです」と新さんが呟く頃には、既に我が家の玄関に足を踏みいれているところだった。

今年もやってきた。一年前はどこかぎくしゃくしていた、ぎこちないクリスマス。

十二月初旬、夕食を終えリビングに皆で寛いでいたとき今年はどうしようかという話になり、私はふいに新さんがご飯を作ってくれたことを思い出してその話題を振った。私としては新さんって何でもできるんだねえという一言で終わらせるつもりだったんだけど、そこに食いついたのが他にもないマイマザーと未来のマイファザー。

どうやら新さんがあの日料理を作ったことはおろか料理を作れると言っ事実も知らされていなかったらしい（それもどうなんだ特に

一条さん）二人は、いわく驚愕の事実で大層なりアクションを返してきた。

その時若干新さんが恨みがましく私を見つめていたため、ああ内緒だったんだとそこで空気を讀んだところで後の祭り。あとはもう普段のテンションに三割足した具合でちらちら恨み言を盛り込みつつ自分達も食べたいと言い出し、私たちの二人へのクリスマスプレゼントが手料理ということで決定打を押されてしまった。

ていうか私も巻き添えってこれ墓穴って言うのだろうか。嫌じゃないんだけど、あるとき食べた新さんのご飯は中々手が込んでいて美味しかった。私がそれに加わったところでプラスはおるかマイナスにさえなりかねない。

新さんもあれだけ上手に作れたくせに何が不服なのか気が進まない様子。結局なんだかんだで私と新さんだけが置いてけぼりのまま、親ばか二人はきやいきやい楽しそうにクリスマス話を進めていった。

「ごめんってば」

「別に」

「怒ることーないのではないかね。そんなに嫌だった？」

「別に」

いや、別に、って感じじゃなさそうじゃん。怒ってるじゃん、やっぱり怒ってるじゃん。

あの後、やっぱり悪いことしたかなあと部屋を訪ねてみると案の定この様子。こっちを向かずににやらパソコンでカチカチやっている。照れてるのか怒ってるのか紙一重だから新さん攻略レベル10の私にはちと難関です。

一体どうやって機嫌を直してもらおうか。ぼーっと突っ立っているのもあれなので勝手にソファに腰を下ろし、新さんの後姿を眺め

ながら考える。うーん、良策、良策つと。そんなもんあるかね。

っていつか新さんの怒りどころがよく解らない。何がスイッチなの？ ごめんね、無神経でさあ。デリケートなお坊ちゃんのお心なんざ所詮庶民の私には解らないっつーの。

だんだん逆切れしかけていく思考を展開しているとき、ふいにくるりと新さんが椅子ごと振り返った。どうやらスーパーカタカタイムは終わった模様。やれやれ。

「まだ怒ってる？」

「怒ってないよ。でもそのクリスマス、楓も手伝ってくれるんだろ
う」

「そりゃあ勿論、言いだしっぺだし」

自信はないけどね。内心舌を出しつつそう言うと、疑っているのなんなのか、新さんがじつとこっちを見つめてくる。いやに真摯な眼差しを向けられてみると、なんだか段々何もしていないのに悪いことしたような気分になってくる。

なに、なんなのさ。

「じゃあ25日、一緒に出かけよう」

「へっ」

「買出しに」

あっ、ああ。

買出しね。買出し、うん。

なに、一瞬ぎくつとしたのは何で。妙にどぎまぎしてしまったのはなんでなの。うわあいやだ、なんか気持ち悪い。買出しだよ買出し。ただの買出し、うん、よし。

なんだか必死になって心を落ち着けて、それでもせかせかソファから立ち上がりドアに向かう。なんだかこのままじーっと見られているのもいやだ。ついでにどぎまぎしていることを悟られるのもなんとなく癪だ。君子危うきに近寄らず。寝た子を起こすな。三十六計逃げるに如かずっ。

「よし、おっけ。じゃっ、クリスマス買出しね。おーけーおーけー。

「じゃあ失礼さーした」

さらば、つと振り向かずには部屋を出て、なんとなくくほつと胸を撫で下ろす。何を一人で動揺してるんだか。まあいい、25日はお出かけ。買出しのため。お母さんといいでに一条さんのため。それだけ。

なんだかぐるぐるとおんなじ単語を呪文のように心の中で唱えながら、自分の部屋へと戻った。

それから、あれよあれよと日は過ぎていき、皆で家の飾り付けをしたり、外にも電飾をつけてみたり、学校では最後の大掃除に精を出したりなんだり、なんだかんだで忙しい日々を過ごした。

イヴは当然終業日。去年のようにお母さん達はデートで、私と新さんは学校から帰ってから予行練習をしたり当日の計画を練ったりあーでもないこうでもないの中々濃い一日を過ごした。

そして来るクリスマス。昼間は一条さんは仕事でいないしお母さんもやることがあるらしいので、私と新さんは心置きなく買い物。前日はもの見事に空気を讀んだイヴによってホワイトクリスマス、そして当日は打って変わってあっけらかんとした快晴の空の下、なんと気持ちのいい買い物日和となった。

とってつけたような好条件の元、行ってきますと声高に、行ってらっしゃいと背に受けて、私たちは例によって常田さんの送迎に預かり家を後にした。

「それにしても」

「なに」

「いや」

後部座席で二人並んで座る。助手席に座る勇気なんてありません

からねー。まあ折角隣りに座ったので、ここぞとばかりに車が走り出してからじーっと新さんを見る。

うん、やっぱし。

うんうん頷くと、怪訝な眼差しを向けられる。いつもと違う雰囲気で見つめられると照れるねえ。うん。

「なんなの」

「いやさ、新さんって意外と可愛いカッコするよねーって」
「は」

心外とばかりに目を顰めるけど、私の言ってること間違ってるじゃないよ。この間も思ったけどね、新さんって意外と洒落こいてる。私の中のお坊ちやまファッションって大抵アーガイルのニットにシャツかっちり着てずっしり重いコート着てるようなお決まりな感じなんだけど、新さんは違うんですねー、これが。とりわけ今日は一段と可愛い。かつこいって言うより可愛い。

まずまた伊達眼鏡でしょ。しかも前とはまた違うお洒落ぶち眼鏡で、ニット帽、上はファーのあるフードがついたブルゾンに？ ネット、下にもなんか重ね着してるかな。で、ベルトにその下がハーフパンツ、レギンスに編み上げブーツ。鞆はボデイバッグ。つか足ながつ。ほそつ。

「新さんぼくはないよね。普段あんなお堅い制服かっちり着こなしてるのに」

普段の制服の新さんだと、すごくすらつとしていてその制服も似合っているんだけどどこかお堅い感じを覚える。対して今だと逆にラフっていうか、私もそうそうかつちりした格好をしないせいか並んでいてもあんまり不自然じゃない。まあ、美醜とかにじみ出る才一ラとかそういうものを除外したらの話だけ。

ちなみに私はジャケットにニット、下はスキニー、エンジニアブーツ。至ってシンプル。着まわし苦手だし貧乏人だからそんなに服持っていないの。だから少ない服で着まわす癖がついちゃったの。悪いか。

新さんも私がじろじろ見ていて気になったのか、私の格好を頭のとっぺんからつま先まで眺めて、それからふいつと顔ごと逸らした。「か……似合ってるよ」

「ど、お、も」

社交辞令つて時と場合を考えたほうがいいと思うんだ新さん。あまりにわざとらしいその配慮に憎憎しく返す。全く忌々しい。どうせ私は何着ても似合う新さんと違って服に選ばれちゃってますよーだ。

「でも俺っぽくないなら上々だ」

「どっぴいこと？」

「TPOに合わせる。今の格好が俺っぽくないなら変装の価値ありということだ」

あれ。

今変な言葉が聞こえませんでしたかね。

返送。変奏。変装？

「へんそお？」

なに言っちゃってんのなに言っちゃってんのこの人。

バーロー。バーローなのか。真実はいつも一つのあれでもするつもりなの。これから殺人現場に向かう途中なの。実はその眼鏡は特殊望遠機能付で、そのブーツは筋力増強シューズだったりしちゃうの。

やだ、うそ、わくわくしてきたんですけど。うぶぶ、江戸川アラタ。見せて見せて、謎が解けるところ見せて。麻酔針刺して。常田さん狙いで。

口に出さずに心の中で妄想炸裂、一人でにまにました私を、新さんの伊達眼鏡がキラんと写す。やだ、睨まれてる。

「泣かすよ」

「……サーセン」

っかしーな、口に出したつもりないんだけど。

ていうかボソツと言われると地味に怖いです。ゴメンナサイ、調

子にのりました。

「俺と判別つかなければつかないほどいい。そうしたかっただけ。それだけだ」

確かに、ぱつと見だと新さんとは解らないかもしれない。雰囲気そのものが違うから。残念なことに滲み出るオーラとか覆い隠せない美貌とか、そういったものはどうしようもないけど。

でもなんだかそこには新さんなりの努力が潜んでいるように思えた。隠す努力？ どうして。態度に偽りや誤魔化しはない。けれどどこか妙に芯のある意志がある。再び窓の外に顔を向けてしまった新さんの表情を伺うことはできず、その答えを見つけることはできなかった。

新さんはあの日私が謝りに行ったとき、パソコンでめばしいメニューを調べていたらしい。なるほどそういえば熱心に力チ力チ画面を見つめているものだから、確かに気になってはいた。まあ仮にも年頃の女子の前でエロサイトを検索するほど豪胆な奴でもないのだからそれほど気にしてなかったんだけど。

かくいう献立は私のリクエストで去年も食べたミネストローネ、一条さんのリクエストでポテトサラダ、お母さんのリクエストで手作りケーキ。それだけじゃわびしいのでローストチキンとパエリア、それからお酒を飲むであろう大人たちのためのつまみ、って感じ。

ご飯はいいけどケーキ手作りって。買ってきたほうが美味しいんじゃないかと思うんだけど、どうしても手作りケーキがいいと二人がきやいきやい盛り上がったために拒否権はなかった。

ていうかその他の内容も洒落こいて若干中級レベル以上な気がしてならないのは気のせいではないだろう。ケーキやポテトサラダくらいならお母さんと一緒に作ったことあるけど、パエリアとか、どこのイタ飯屋っていう。うまくできるんだらうか。不安でならな

い。

まあそのために休日にも各一つずつ二人で作ってみたいから初めてよりはましだけど、それで身に染みたのはやっぱりお母さんのありがたさだね。慣れてないから手際が良くないって言うのもあれだけど、一つ作るのに思ったよりも時間かかったもん。いつもご飯を作ってくれてるお母さんがどれだけ手間隙かけてくれたのかっていうのが痛いほど解った。

そしていくら新さんでも初めての料理となるとそうそう完璧にはできないということも。新さんは言わなかったけど、あのとときのクリスマスの料理も相当時間をかけたのだらう。練習のときも私以上に真剣で慎重すぎるほど慎重だった。確かにやっけることは流石新さんとだけあって丁寧で綺麗な仕事なんだけど、いかんせん時間がかかりすぎ。ちまちま分量キッチリ測るわ徹底的に時間を計るわ手順をいちいち計算するわ面倒くさいことこの上ない。

逆に私は全体的にアバウトすぎたらしく何度も新さんにつっこまれたけど、正直どっこいどっこいだと思います。小姑め。その辺りのことも含めて、練習してよかったねーって改善点を見出せた。

今回はその辺りの段取りや時間の計算も含めて計画に織り込み済みだから余裕はある、はず。計画の本筋は新さんがきっちり組んでくれたので、後は私が足を引っ張らないようにできる限りサポートするのみだ。

やるなら美味しいものを作って食べてもらいたい。口にはしなかったけれど、なんとなく新さんもそう思っているような気がする。渋っていたわりにやる気満々なところがまた新さんの可愛いところだ。

最近、解ってきたんだけど、新さんは言葉よりも態度で心を示してくるのね。あえて言葉にすることは少ないけれど、それ以上に彼の仕草や行動によってその時の気持ちが見える。それは何かを事細かに説明するよりも不思議と重みがあり、そしてどこか不器用な素直さを思わせる。

そういう新さんの行動に目を細めて微笑む一条さんやお母さんに気付いてから、私も新さんが名実共に我が家のアイドルとなったということを確認した。共に過ごすことに、新さんの本来持っているだろうその本質が見えて、不思議と惹きこまれていくような気がする。

だからこの一年をかけて、新さんが色々な人の注目を集める理由がわかった。見た目の麗しさだけじゃない。内に秘めるそのまっさらな純真さが、人の心を惹くのだろう。

一条さんやお母さんだけじゃない。私のそのうちの一人。全く厄介なものだけど、不思議といやじゃないのがまた困る。一緒にいると、自分の中にあるはずの悪い気持ちかなりを潜めてしまう。本当に不思議な子だ。けれど、憎めないから、むしろ可愛いと思えるから、この子をまっさらなままに守ってあげたいと望んでしまったりもする。

彼を知れば知るほど、誰もがそう思うのだろう。近寄りたいたいけれど、近寄りがたい。けれど受け入れてもらえると、とてつもなく嬉しくなったりする。一年を通してなんて随分遅いけれど、私も痛いほどに新さんの魅力が解った。この子にそのまっさらな心で接してもらえるなら、私も出来る限りの真心を尽くしたい。そんな風まで思ってしまう、今日この頃。

面映いから本人には言わないけれど、どうやら私も新信者の一人になってしまったらしい。だからと言って、追い詰めたりはしたくない。家族となるなら家族として、傍で見守ってあげたいと思う。時には姉らしく彼をサポートしたりして、支えになれたらいい。なんて願望。

こういうのなんていうのかな。ブラコンってやつだろうか。恐ろしや、新フェロモン。そこまでいっていないと思いたいけれど、そこに行き着くのもそう遠くないだろう。なにせ我が家には既に親ばかり二人がいるのだから。あの度を越えた二人から新さんを守ってやれるのは私しかない。私がやらねば。うむ。

「楓よ、いかなされた」

ふつと、眼前を影が遮る。反射的に顔を上げると、息をもつかせぬ麗しいご尊顔が私の粗末な顔を覗き込んでいた。ええい、麗しい奴め。本当にまつこと麗しい奴め。

「すまぬ。某、^{それがし}あい呆けており申した」

「ならばよし。来たれ」

「うむ、苦しゅうない」

ちよつととんちんかんな会話を育みつつ、新さんの隣に並ぶ。食材の買出しは、家より離れたところにあるちよつとお高いデパートにした。そこだと香辛料も豊富だし何でも揃っているから材料には困らない。

デパ地下のスーパーに入って数十分か、材料はメモにきっちり記してあったのでそれほど時間もかからずにあらかたのものは揃えられた。既に会計を済ませ、荷物は手元にはない。例によって常田さんが以下略でつつこんではいけない法則です。

「意外と早く済んだねえ」

「うん。まだだいぶ時間に余裕がある」

左手に嵌めた腕時計を見つめながら新さんが言う。地下をエスカレーターで上がり出たところで彼の足がびたつと止まり、私も数歩遅れて歩みを止めた。ぽつりと、呟いた、らしい。新さんが。

「お」

「お？」

よく聞こえなかった。振り返ると、じいじいと見つめてくる新さんの真摯な眼差しにぶつかる。真摯っていうか力こもりすぎて殆ど睨まれてるって感じなんですけど。

何を言われるやらと身構えた瞬間、口を幾度か開閉していた彼が意を決したように言った。

「お茶してく？」

ぼそつ、と放ったその台詞。見る間に新さんの顔が紅色に染まりだし、耳までそれに染まり目は潤み、ほぼ同じ身長だというのに若干上目遣い。寒気にあてられてか口からは白い息が漏れ、ゆらゆらと揺れる透き通った濁りない瞳。真正面でその衝撃を受けた私はおるか、傍にいた通行人でさえ足を止めたのが解った。

これはまずい。非常にまずい。

危機回避本能から反射的に新さんの手を取り、その場から逃げるように足早で歩き出す。

「楓？」

「新さん、その顔は反則」

「え」

何あれ。なんなの。なんで赤面するかなあ。ていうか乙女ならいざ知らず男が頬染めただけだというのに嫌悪感どころか心臓止まりかけるくらい魅入られてしまった。あのままあそこにいたら新さんの貞操が危なかったかもしれない。

嘘じゃない。その証拠に歩みを止めた通行人には中年男性やらバリバリのサラリーマンなんかもいて、何故か顔を真っ赤にして新さんを凝視していた。恐るべき破壊力。男女問わずどこるか無差別にも程がある。

今だってホラ、ただ歩いているだけだというのに道行く人が振り返る。目で追う。凝視する。なんで数メートル手前の人まで気配を察知して振り返るの。ここまでくると怖いわ、新オーラ。

久しぶりに一緒に出かけたのでこの現実をすっぱり忘れていた自分が恨めしい。そうだよ、新さんはこういう奴だ。要注意なの。主に周囲。

セオリーから逆転している我が身を嘆きながら、戸惑う新さんを見つめて引つ張り、仕切りのあるカフェへと駆け込んだ。ああ、無情。

空いていたのでこれ幸いとばかりに案内される前に店の最奥に向かい、問答無用でジェラートのセットを頼んだ。勿論新さんもちなのはいわらいでか。さっきのことを踏まえて考えれば、新さんは私に喜んで奉仕して然るべきだ。

漸く落ち着けるところに腰を下ろし、段々と怒気がふつつ湧いてくる。対して新さんは呑気に外の眺めなんかを見つめて、さっきのあの乙女のような表情は欠片も見当たらなかった。少しは気にしろ元凶め。

「あのさあ、ねえ。なんでさあ、頬赤らめるの。おかしくない？普通に言つてよ。なんでいちいちフェロモン撒き散らすの。頼むからTPOを考えてよ」

「なにそれ。知らない、そんなの。俺はただ、その」
むっと拗ねたように目を逸らし、口ごもる。またこの表情が素なのが解るから逆にいらつと来る。いらつとくるが、可愛くも見えてしまう新マジック。

ふん、私はその辺の新初心者と違って玄人レベルなんだよ。さっきは油断したけどそうそう何度も通じませんから。さっさと言えばかりに鼻息荒く睨みつけると、また若干ぽつと頬を染めつつ白状した。

だからそれを止めると。

「なんか、台詞が一昔前のナンパの常套句みたいだったから」
はあ？

と、口に出さなかつた私は偉い。偉いが、顔には顕著に表れていたらしい。何故か新さんは羞恥のためか益々頬を赤らめ、私の凝視から逃れるようにしてまた外の眺めに目を移した。

ていうか、あの、あのね。意味、解らないんですけど。つまり、あれでしょ。ナンパの台詞みたいなこと素で言っちゃったから、恥ずかしくなつたってこと？

いや、解る。言いたいことは辛うじて解る。解るけど、総合的に意味わかんない。それで頬赤らめたの？それだけで羞恥に赤面し

て辺り一帯の視線を独り占めしたの？

意味解らんです。新さんの価値観が謎。頬の赤らめどころが解らない。ていうか危険。危険だよこれ。いつつもうこうなの？ 普段でも、外でもこんな感じなの新さん。そりゃ老若男女魅了されるわけだわ。フェロモン垂れ流しなんだもん。常に出血大サービスのへヴン状態でしょ。しかも本人解っていない。自覚していない。素で己も周りも見っていない。

もうやだ、なんなのこの子。危なっかしくてこっちが怖いわ。天然系乙女ヒロイン男バージョンみたいな。苛々しながらももどかしってという術中に見事に嵌りましたよお姉さんは。

「まあ、あの。その、なんですかね。そういう顔は、好きな子の前だけに見せてあげなさい、ね？」

自分でも何を言っているのか意味不明ですとも。言いながらも筆舌に尽くしがたい虚しさを覚える。これって年頃の女の子が年頃の男の子にかけられる言葉かな。ありかな。ありなのかな、これ。我ながら痛々しい。

「好きな子」

新さんは、私の意図に反して余計なところに反応した。不思議そうにはちくりと目を瞬き、比類なく純粋な眼差しでじつと私を見つめてくる。そんな、『好きな子って、誰のこと？』とかききたげな眼差しで見られても、私も知らんがな。そういうのは自分の心に聞いてほしい問題なんですけど。

そうして『赤ちゃんってどこから来るの？』的な質問をされたような居心地の悪さに身をすくめたとき、天の救いが現れた。

「お待たせしましたー。こちら、三種のジェラートとフルーツティのセットをご注文のお客様」

「あ、はいはいこっちですー」

近場なのにわざわざウェイトレスさんに向かって大げさに挙手して場を有耶無耶にっつと。なんかまだじーっと見てるけど、『わあ美味しそう』なんてオーバーアクションでスルーしきってみせた。

ふいー、やれやれ。なんだこの面倒くさい空気。危つく『好きな子とはなんぞや』とか真剣十代な話題に突入するところだった。さて、それはともかくジェラートを頂くとするかね。

「美味しそうだねえ」

全くです。

あれれ。

一匙掬い、さあ食べようと大口開けたその瞬間を狙うように、合いの手が聞こえた。新さんの声じゃない。もっと低くて、そう、大人の男の人のような。

「あのう」

「うん。あ、続けて続けて」

顔を上げると、目の前に知らない男がいた。正確には、斜め前。私の向かい側に座る新さんの横に、知らない男の人がいつのまにか腰掛けていた。二十代後半辺りでやや頭髪の色味が明るい。グレーのスーツに紺色のネクタイを締めていて、人当たりのいい笑みは一見爽やかそうに見えるけれどこの場ではどう見ても胡散臭い微笑にしか見えない。

大口開けていた私はそれを口にすることなく匙を置き、また新さんも警戒するように眉を顰め佇まいを正す。異様な緊張感がさつと走り抜けると、突然現れたその男はその空気に苦笑するように肩をすくめた。

「そんなに怖い顔しないで、楓さん」

きた。また、きた。既知の感覚に、背筋にも力が入る。

ああ、また、知らない人のお出まし。正確に言つと、一方的にこちの情報を把握している知らない人。新さんも思い至ったようで眉間の皺を濃くして立ち上がるうとして、けれどすかさず男が新さんを制するようにさつと片手でそれを遮る。

上手だ。いや、いつもこんなものなのだろう。最近新さんと出かけることもなかったから、こちらもすっかり失念していた。ぬかった、馬鹿め。予想できたことなのに。

内心舌打ちをして、けれど表情では努めて平静を装う。こういうのは舐められたらおしまいだ。相手の空気にまんまと呑まれちゃいけない。

「どなたか存じませんが、あまりに不躰ではないですか」

「やあ、はは。ごめんね。どうしても君達に会いたくって」

君達、と。新さんだけじゃなくて、私も含まれているんだろ
うか。

その言葉に引つ掛かりを覚えた私に目ざとく気付いた新さんがもの言いたげに私を見つめてくる。うん、まあ、相手にしちやいかんのは解ってるんだけど。ちよつと待つて、とアイコンタクト。

「ご無礼をお許しください、若様。こちらも立て込んでおりまして、このような形で拜謁いたしますこと、ひらにご容赦くださいますようお願い」

私のアイコンタクトに便乗してか、畳み掛けるように言う。どこか慇懃無礼なその物言いに、新さんの表情も険しくなる一方だ。この人、まるであえて挑発しているみたい。いや、みたい、じゃなくて。

「当主の許しを得ていないのならばお引き取り頂くほかありません」「そうは申されましても、こちら承諾いたしかねます。どうか暫しお話を聞いてはいただけませんか、若様」

『若様』のイントネーションがいやにこれ見よがしだ。やっぱりこの人挑発しているんだ。しかも新さんが嫌がる言葉を知っているらしい。

新さんの眼差しがどんどん険しく、そして冷ややかになっていく。スーツの彼はそれをもとめせず薄ら笑いを浮かべ、挑発的な態度を崩そうとしない。こりゃ呑気に話を聞いている場合じゃないな。

「あの、お話を聴く前にお名前を伺ってもよろしいですか？」

「その前に私の話を聞いてくだされば、喜んでお教えますよ、楓嬢」

楓嬢ゆーな。この歳でお水みたいじゃろが。フェミニストぶりや

がつていちいち癪に障るヤローだな。新さんじゃなくてもイラつくわ。

って術中術中。嵌っちゃあかんで。私の土俵私の土俵。新さんがギリギリ相手を睨む傍ら、私は心の中で呪文を唱える。

「基本的な素性も示せない相手とお喋りする余裕はないんです。プライベートですよ、お分かりですか」

「ふふ、プライベート、ね」

てんめええええ。こっちだって気取った喋り方したくねーんだよど畜生馬鹿にしゃがって。クスツとか笑ってんじゃねえですよおお。気持ち悪いんだよおお。

頭の中で罵詈雑言、表面上にはわか笑顔の応酬。このままだと多分同じような応酬で埒が明かない、平行線だ。一気にぶちきれて店を飛び出すか、と机の端に両手をついた。ガタツと些か荒っぽい音が物静かなカフエに響く。

が、私じゃない。新さんの方が先に、立ち上がっていた。

「ふざけるな。不愉快だ。非礼を承知ならばそれ相応の報いを受ける。次期の名を舐めるなよ」

輝きの一かけらもない凍て付く眼差しを男に向け、そのまま椅子の背にかけていたジャケットと鞆を引っつかみ、もう片方の手で私の右手を掴んでわき目も振らず店を飛び出した。

私はといえば二の句を告げることもできず、ただあわあわと空いてるほうの手で自分の荷物を引っつかむしかできなかった。何がどうしたというのだろう。いつもの新さんとは違う。荒々しく、そしていつも以上に直情的で、およそ普段の淡々とした様が欠片も見当たらない。ただただ引かれるその右手が少し痛くて、けれど振り返りもせず憤然と前を歩く新さんにそれを言うのは何故か憚られた。

どんどん、どんどん、街場から離れていく。人氣がなくなつたところで漸くその競歩並みの歩みが止んで、それと同時に右手も開放

される。けれど新さんはそのまま勢い良く振り返ると私の両手を掴みなおしその両手でぎゅっと包み込んで、近すぎるほどに私の顔を覗き込んできた。

「ちよつ、新さ」

「大丈夫か。ごめんな、怖い思いさせて」

私の声を遮り矢継ぎ早に言う新さんの表情こそ不安げな色に染まっている。請うようにも見えるその切なげな眼差しに圧倒され、私は半ばのけぞるようにながらもなんとか首を横に振った。

「いや、大丈夫、だけど新さんが」

「俺は」

ふと、思いつめたように新さんの瞳が揺れる。揺ら揺ら、揺ら揺らと揺らめくそれは、もう元の澄み切った色に戻っているようで、私は寧ろそのことにほっとした。さっきの新さんは吃驚するくらい、いつもと様子が違っていた。怖かったのは新さんなんじゃないだろうか。

意気消沈したように頂垂れ、今さっきこれでもかと握り締められた両手も辛うじてつま先が繋がっている程度。ころころと変わる彼の態度に戸惑いながらも、どうにか慰めようと今度は私が新さんの顔を覗き込む。

「あの、大丈夫だつてば。新さんこそ、大丈夫？」

何故だかものすごく落ち込んでいらっしやる。このまま帰ったら何事かと私がお母さんや一条さんにどやされてしまう。そんな面倒なことは御免だ。心配半分自己保身半分で伺ってみた。

「俺は」

「うん」

「不甲斐ない、よ。楓に悪いことした」

悪いこと？

なんだか悲壮感たっぷりにも思えないことを言うものだから、頭の上にはてなが幾つも乱立する。悪いことってなにが。新さんっていうより、あの人でしょ。むしろ新さんも一緒に迷惑被ってただ

けじゃん。

「あのー、新さんは別に悪く、ないよ？ 私も悪いだなんて思ってもないっていうかさ、」

「食べられなかったから」

「は」

何を。何を、って。あれか。まさか、ジェラートのことでしょうかね。疑い交じりでじっと見ると、私の言わんとしていることに同意の意を示すためか、こくんと無言で頷く。どうやら本当にジェラートのことらしい。

いや、待て。待つてください。ジェラート？ あのジェラートで落ち込んでるのですか、貴方は。不甲斐ないとか、ズガンときてるんですか。マジで。新さん、マジですか。

「はあー？ ……はっ。ちょ……と、もう……ハハハ」

突如笑い出した私の声に反応して、新さんが顔を上げる。私はこみ上げる笑いかみ殺しながら新さんの頭を少し荒い手つきで撫でてあげた。意味が解らないとばかりに目を白黒させている新さんを見ると、益々笑えてくる。でも違うよ。新さんにはわからないだろうけど、可笑しいって言うより嬉しいって感じなの。だから笑っちゃうんだ。

「そんなこといーんだよ。らしくないね、落ち込んだじゃって。謝ることなんてないじゃん。むしろ見直したよ」

不思議な子だとは思ったけど、ここまでとは。まだ解っていないのか、子リスのようにはちばち目を瞬かせている。普段はホラ、こんな風に、かつこいいって言うより可愛い感じ。守ってあげたくなくなるみたいな。でも。

「新さんは不甲斐なくなかない。かつこよかったよ、さっき。ありがとう」

ジェラートのことなんかチャラになるくらいすかつとした。正直直前まで私が新さんを守ってあげなくちゃーなんて思っていたからなおさらだ。まさに度肝を抜かれた。私が手を出す余地もなかった。

そんなに落ち込むってことは、少なからず私を守ろうとしてくれた
ってことですよ。しかもジェラート含めて。そんなところで落ち込
んじゃうのがまた新さんらしいっっちゃあらしい気もするけど、でも
そんなことはいいんだよ。とにかく嬉しい。なんだかすごく、嬉し
いぞ。頑張ってくれたんだね。さっきだけじゃない。きつと、今日
一日。

「わはは、いい子だねー新君は」

「褒めてないだろ、それ」

「んなこたあないですよ」

にやにやしてしまったせいか、頭を撫で付けていた手も避けられ
る。けれど背けられた顔はやっぱり赤くなっていて、その素直な態
度を嬉しく思いつつほっとした。さっきの新さんは、正直とても怖
い顔をしていた。けれど今の新さんはもういつもの新さんだ。それ
がなんだか、本当の新さんはこっちなんだと示しているようで安心
できる。なんとなくだけど、新さんにああいう顔をさせたくはない。
ああいう顔も気持ちも、新さんが望んでいるとはあまり思えない。

それに憶測だけど、一条さんもきつと見たら悲しむだろう。お母
さんも、きつと。それが想像できるから、余計に立ち直ってくれた
ことに安堵する。解らないことも色々起こりすぎて混乱したけれど、
今こうであることがなによりだ。

穏やかでいること、笑うこと、怒ること、落ち込むこと、立ち直
ること。それらを素直に示せるこの環境はきつと新さんにとって大
事なことのような気がしてならない。間違ってもあのカフェのとき
のように、いやな緊張感が満たされてはいけけない。姿の見えないも
のに脅かされることの恐ろしさをなによりも知っているのは、きつ
と新さんに違いない。薄氷の上でこれまでの日常を築き、けれどい
つ崩されるかと憂う危うさを私ですら感じていた。何がと言いつ
れないから歯がゆいし悔しいけれど、確かにそれを守りたいと思っ
たのも事実だ。

私だけじゃない。多分、お母さんも、一条さんも、そして新さん

も。この日常が何より大切なんだ。だから守ろうとするし、そのために変わることさえできる。私はこの一年で自分の心を向き合い、そして新さんは避けることから立ち向かうことを覚えた。変わったのは、私だけじゃなかった。

なんだかそれが、嬉しい。共に歩む心が見えたようで、嬉しい。労うように新さんの背中をぽんと叩いて、隣に並ぶ。歩き出すと、歩調を合わせるように新さんも歩き出した。

「サンタさん来るといいねえ」

「いくらなんでも子ども扱いしすぎだ。一歳しか変わらないだろ」

「でも身長はまだ私の方が上だもんね」

辛うじてだけど。ご機嫌を損ねたようにむっと押し黙る新さんの横で、空を見上げた。

「美味しいご飯作って、お母さんと一条さんに食べてもらおうね」

「……うん」

同じ高さで見上げる、凍て付く寒空の下、火照る心を抱きながら暖かい家路へと向かう。

その年のクリスマスは喜びに満ちていて、一年を締めくくるには相応しい思い出の日となった。

佐藤かえでと誘因

クリスマスプレゼントと称してもらったものは、なんと人生初の海外旅行。それで年明けに皆でイギリスで過ごして、その後ヨーロッパの観光地を一巡りしてまったり楽しんだ後に帰国しましたとき。その間ブルジョワの気前のよさにとことん引きまくったのは内緒だ。下手に遠慮すると『子供になんでもしてあげたいって思う親心、楓ちゃんには伝わらないのかな……』とかこれ見よがしに言われるからたまったもんじゃない。まあその辺は少しでも度が過ぎそうになるとお母さんから意外に厳しく待ったが掛かっていたからそれほどということも無かったんだけどね。

それから、四月までに残っていることといえば入学の準備くらい。気が抜けて、のほほんとして、油断もいいところだった。

何もかもうまくいっているなんて誰が宣言したというのか。誰も宣言などしていない。誰も、そんなことは、言わなかったはずだ。

二月。短い冬休みも終え新学期から一月過ぎ、休みボケがやっと抜ける頃。外を歩けば屋根は珍しく雪化粧、道路は擬似アイスリンク、ついでに惜しみながら最後の止めとばかりに肉まんやらおでんやら鍋やらに大いに舌鼓を打つ美味しい季節の終わりごろ。人生でふぐちりを初めて食した季節でもある。

推薦で早々に受験を済ませた私といえば、学校は既に自由登校だったしすることもない、ということではほぼ巣籠もりな日々を過ごしていた。夜更かしの日々も多くなり、朝寝坊することもしばしば。ついにお母さんに苦言を呈されるようになった頃、それでも性懲りもなく、勿論その日も夜更かしを謳歌していた。そういう、ありふ

れた夜に起きたこと。

例によって何か摘むものでもありはしまいかと抜き足差し足で階下へ渡り、リビングへ向かおうと歩みを進めたとき、それに気がついた。

明かりだ。明かりがついている。階段の角を曲がればすぐにリビングの扉に行き着くんだけど、そこから指すおぼろげな明かりが私の足元を照らしていた。時刻は深夜も深夜、二時だ。こんな時間に電気が灯っていることが珍しい。

なんとなく足音立てずにゆっくり近付き角に身を潜めると、案の定話し声が聞こえてくる。勿論一人などではなく、二人ぶんだ。予想通り一条さんだけじゃないらしい。おかしいと思ったよ。一条さんだけなら深夜に帰宅したタイミングで私と鉢合わせするとかザラにあることだけど、そういう場合大抵はあの人いつつも電気付けないもん。人が点けるまでぼけーっと暗闇の中で座ってるの。怖いけどいい加減慣れた。でも私が来る前に電気がついているということとは、一条さん以外の誰かが点けたってことだ。聞こえてくる声音から察するに、十中八九お母さん、かな。

でも何を話しているかまではあんまりよく聞こえない。忍者よろしく壁に背中をぴったりつけて、漏れる光の死角ギリギリまで身を寄せてみる。誓って言うけどこれは盗み聞きじゃない。そんな卑劣な真似など、断じてこの私がするはずがない。これはあれだ、偵察ですよ、うん。いきなり乱入して親のいちやらぶシーンに出くわしたくないし、そうでなくてもお母さんの機嫌が悪そうだったらきつとお小言言われる。早く寝なさいとか。いやそれは機嫌に関係なく普通に言われるか。

ともかく、少し様子見だ。できるだけ息を殺し、耳を澄ます。近付いた分、さっきよりもいくらか鮮明に彼らの会話が聞こえてきた。

「今更こんなことを言うのは間違っているかもしれない。でもやっ

ぱり君を」

「駄目。今更言いつこなしですよ、それは」

んん？ なにやら切迫した様子。痴話喧嘩かしら。いいぞ、もっとやれ。」

冗談半分で野次を思い浮かべつつ、何を話しているのかその本質が知りたくなつて退きがたい。ばれたらことですよ、これは。でも、幸いなことに二人は私の気配に気付いてはいないらしい。

「いや、やっぱりそんな訳にはいかないよ。確かに今更僕が言うことではないかもしれない。けれど、君はもっとよく考えるべきだ。」

これはそんなに単純な話なんかじゃないのは、解っているだろう」

「ええ。解っています。でも、私も言つたでしょう。もう覚悟はできているって」

「紅葉さん」

動じないお母さんに、一条さんは焦れているみたいだ。単なる難しい話というよりもずっと事情が込み入っているらしい。興味本位に聞くべきではないと理性が訴えるけれど、足は遠のかず微動だにしない。聞いてはいけないと心が警告するのに、その警告こそ私に僅かな不安を導き出しこの場に留まらせる。

少し、少しだけ。何の話をしているか、それを知るだけ。

言い訳をしながら、じつと耳を澄ます。

「始さん。私は前にも言いましたよね。私、努力は惜しみませんって。あんなに素直でいい子がそうあれない環境なんて、地獄ではないんです。それをまた引き戻したりしたら、それこそあの子は二度とどこにも寄り付かない。心を閉ざしたまま、この先を一生生きていくことになってしまふ。そんな気がしてならないんです。それこそなによりも、避けなければいけないと思いませんか」

「それは、僕だって。でも君は」

「私は平気です。どんなことを望まれても強いられたとしても、それに従います。ねえ、始さん。あの子が大好きなんです。私は、子供が子供らしくあれないことが、なにより一番我慢ならないの。大

丈夫。伊達にシングルマザーやってきてないんですから、私だって
『あの子』って、誰だろう。余程大げさな話に聞こえる。いや、
そうじゃなくて、大げさなほどのことなんだろう。その、話が。い
よいよ本当に、話を聞いてるのが恐ろしくなってくる。悪い話と
もい話とも判別つかないけれど、お母さんのいやにすっかりした
声音が、怖い。

私は知ってる。お母さんが、いつものほわほわした声じゃなくな
るとき。しっかりと芯のある話し方をするとき。そういう時お母さ
んは一步も譲らない。絶対にそれをないがしろにせず、とことん突
きつめてくる。そしてそうされると、何も言えなくなる。そのどこ
から引き出したのか計り知れない力強さに圧倒されて、言い返すこ
とすらできなくなる。少なくとも、私は。それでもきつと今、一条
さんも同じ心地を味わっているんだろう。その確信を裏付けるよう
に、僅かな落胆交じりの一条さんの声が聞こえた。

「紅葉さん、じゃあ」

「はい。今更逃げたりしません。かえでちゃんもきつと解ってくれ
る」

わたし。

私？

あ。

私、は、そうか。そうか、私は『あの子』じゃない。『あの子』
はきつと。

「なんと言われたって私は私ですから。愛人でもなんでもどんど
いんです。だから始さん、そんな顔しないで」

あいじん。

「僕はそんな覚悟を望んでいるわけじゃない。あなたの口からそん
な言葉を聞きたくもない」

「それは……あの……うん。ごめんなさい。でも、私……」

ちよつと。

ちよつと、待ってよ。なんの話をしてるの。二人してどんどん、

どンドン、訳のわからないこと。なんなのこれ。意味解んない。どうなってんの。聞けば聞くほど、解らなくなってくる。なんだって言うの、さっきから。二人は、なんの話をしているの。

「楓」

「う」

わあ。

ありえないくらいびくつと体が揺れて危うく漏れかけた声を、後ろから伸びてきた手のひらがタイミングよく塞いでくれた。いや、その元凶なのだからくれたってのはおかしいか。

不満をぶつけるべく振り返ると、それと同時に腕をつかまれ、問答無用で再び光の届かない薄闇へと連れて行かれる。拒んでどたばたしても本末転倒なので階段を上りきるところまでは大人しくしておいて、私の部屋の前に着いたところでここぞとばかりに振り払ってやった。

「もう、危ないじゃん新さん。こんな夜中に夜更かししてその珠のお肌が荒れたらどうするの」

「誰の何を心配してるんだ。自分こそ取り返しがつかなくなる前に努力したらどうなんだ」

う。深夜のせいか返しがいつもの二割り増しきつい。家の中は空調が利いていて夜中で廊下においてもさほど寒くはないというのに、足元をいやな寒気が通り抜けていくような気がする。それにさっきまで明かりの方ばかり見つめていた私には新さんの表情も計り知れない。じつと押し黙り私を見つめる新さんがなんだか怒っているように思えて、彼を責めるどころか口答えさえも口の中で萎んでしまった。

黙って盗み聞きをした私を責めているのだろうか。でも、新さんは一体いつから私の背後にいたのか。いつからあの話を聞いていたのか。あの話の内容がなんなのか、知って、いるのか。なんであれ、何か言って欲しい。

ねえ新さん、『あの子』ってやっぱり。

薄闇に目が慣れる。暗がりの中で神妙な顔つきとなった彼が、呟いた。

「変な顔」

そう、へんなかお。

へ？

へんな。へんなつて。

へんなかお。

「へっ」

変な顔とはなんだ！

何を言うかと思えば淡々と無礼な口を利く新さんに思わず声を上げかけた。けれど、それは発せられる前にまた萎んでしまう。気がつけば至近距離から彼の手が私の頭に伸び、触れるか触れないかのところでゆっくりと、撫で付けていた。

優しいというよりもどかしいその感触に戸惑っていると、ふと、微笑んだ。よくは見えなかったけれど確かに新さんは、微笑んだ。「寝なよ。大丈夫だから」

言葉とは裏腹に睡魔を吹き飛ばすような艶やかな笑みを私に向け、もう一度私の頭を撫ぜるとそのまま新さんは自分の部屋へと戻って行ってしまった。後に残された私は到底何か言えるはずもなく、また下に戻って立ち聞きの続きをする気にもなれず、すごすごと部屋に戻る。ベッドの上で布団を被るように包まり悶々と考えたけれど何も答えは出なかった。ただ一つだけ、思い出したことを除いて。

あの夏貰った一通の手紙。私は、一度はそれを一条さんに渡してしまおうと考えていたのにも拘らず、結局それを示唆することさえもせずに机の奥深くへと封印し、自分自身ですらその存在を忘却の彼方へと置き去りにした。

それに触れずらしなかつたのは、得体の知れないもので不安を仰ぐことへの忌避か、それとも単に一条さんを信用していなかつたのか。

私はその答えを知っている。だから余計に、今更言えなかつた。あんな立ち聞きをしておいて、言えるはずがなかつた。

『いつでもご連絡ください。お会いできる日を、心よりお待ちしております。』

封筒の中にはまた封筒があり、その上質な手触りの封筒にはご丁寧に深紅の蜜蝋で封がしてあった。そしてその中には、縁が金、内枠が赤で装飾された一通のカードが入っていて、ただそれだけ記されていた。

連絡先どころか差出人の名前すら記名されていない、それだけ見たらただの不審な一文。微かなものを鼻腔に感じ鼻を寄せれば、薔薇のような華の香りの感触。私はそれを元に戻し、携帯に手を伸ばした。

好奇心かと問われれば、否定はできない。それだけかと問われれば、そうではないと確信を持って言える。根拠のない自信に身を任せつつもりはない。ただそれを、ほんの少し糸口を辿るだけ。それさえ掴めればすぐに手を引けばいい。

そう思っていた。結果的に言えば、悔っていた、という言葉に尽きる。私は悔っていた。私だけが、悔っていた。姿を捉えきれない、その深淵を。

「私今日ちよつと帰りが遅くなるかもしれないから、先にご飯食べていいからね。……って、なに、みんなして」

一条さんは会社に行く直前。お母さんはそんな一条さんがコート
を羽織るのを手伝っている。新さんと私はまだ時間に余裕があるので朝ごはん継続中。そんな慌しさとは無縁の空気の中お母さんに向
かってそう言った。はず、だったのにどうして全員こっちに注
目するの。

え、駄目。駄目なの。一条さんなんかしょっちゅういないじゃん。
私だってそういうときくらいあるよ。

なんだかどきまぎしながら突き刺さる視線から目を泳がせてなん
とか回避していると、何故かコートを羽織り終えた一条さんがにっ
こり微笑んだ。

「楓ちゃんが遅くなるなんて珍しいね。学校の用事？」

「ああ、まあ、はい。文集の編集に選ばれて、その打ち合わせ
やらなんやらで集まることになったんです」

「ああ、それは出世だね。ねえ紅葉さん」

「そうですねー。お赤飯炊かなくちゃ」

やめて。お願いだからやめてください。年頃の娘に文集委員に選
ばれたからってお赤飯とか家庭内いじめにも程があるでしょ。めで
たく感じて何でもお赤飯炊いてたら月一でお赤飯定期摂取してしま
うわ。ていうかそもそもおめでたくもなんともないし。

にこやかなカップルの傍らでドン引きしていると、僅かに口元を
緩ませる新さんが視界の隅に移る。てめっ、後で覚えてるよ。

「まあなんにせよ、あまり遅くなるようだったら常田さんをすぐ呼
んでね」

「そうねー。かえでちゃんすぐ一人で帰ろうとするんだから。ちゃ
んと呼んであげなくちゃ可哀相よー」

いやだって私あの人苦手なんだもん。ていうか可哀相ってお母さ
んの中で常田さんのポジションはどうなってるの。私と常田さんの
距離感はどうな風に配置されてるの。激しく気になるんですけど。

などなど、諸々つつこみどころが多すぎてどこからつつこんだらいいのか見当がつかず口をパクパクさせている間に、一条さんは悪戯っ子のようにぱちつとウィンクを私に投げつけ、それじゃあ行つてきますとばかりに颯爽とリビングから出て行ってしまった。勿論お母さんを携えて。

この間の暗黙の了解は、お母さんと一緒に玄関までの見送りに行つてはいけないということと、近寄つてもいけないということ。別に見送りたくもないからいいけれど、その理由というのも言わずもがなだ。暗黙の了解だから黙って然るべき。

毎朝の光景に若干胡乱な眼差しで彼らの背中を見送ると、私も新さんのように朝食を再開させる。と、思っていたら今度は新さんがこつちをじいじいと見つめていた。だから、なんなのさ。みんなして。

「なに」

「文集の編集つてそんなにかかるものなの」
うっ、するどい。さすが現役学生。しかしここで動揺をちらつとも見せたら最後、何が何でも白状させられてしまうだろう。眼球運動で探られるのも癪なため、ご飯を食べる振りをしながら伏し目がちに答えた。

「新さん私に友達がいらないと思ってるの？ 失敬な。居るわ。時間のめどもたたないくらい遊んじゃう友達がわんさか居て手が回らないほどだわ。失敬な。デリカシーないわあ、白けるー。ホント失敬」
計三回ほど失敬ジャブを織り込みつつ、暗に『その後遊び倒すんだよそれくらい察しろ』オーラを醸す。ジャブが効いたのか新さんもそれ以上は何も言わず、ただ二人黙々とご飯を食べ続ける。

お母さんがリビングへと戻ってきたのはご飯を食べ終えた頃。長いわ。と私も新さんも言わなかったのも、暗黙のお約束。

『良かった。本当に良かった』

電話越しに聞こえた涙交じりのその声には、抱えていた不安の重さとそれから開放された安堵の大きさを示していた。何度もありがとうがありがとうと述べる彼女に向ける言葉など、一つとしてなかった。何かを言える立場ではないという漠然とした罪悪感と、かける言葉など無いという無言の叱責。相反する二つの感情に根拠などなかったけれど、確信だけはあった。

もしかしたら私はこれから間違いを犯そうとしているかもしれない。いや、確実に間違いであり過ちだ。普通に考えて、してはいけない選択だろう。そうは思えど、後には引けない。きっと彼女に連絡を取ったことで、既にそれは坂の上を緩やかに転がり始めたのだから。

毎年のことだけれど、この季節は一年の中で最も過酷だと思う。少なくとも私にとっては。

暑さは我慢できるけれど、寒さは我慢の限界値が格段に下がる。だから外を歩く時いつも、ある種の覚悟が必要だ。肌を突く寒さを堪え、凍える寒気を受け入れ開き直る覚悟。そうでなければむき出しの肌から滑り込むその冷たさにいつまでも震え、猫背がちになりながら暖を求めて未練がましく彷徨う羽目になる。いったん深呼吸をしてその寒気を内に取り込んでしまえば、案外なんてことはないものだ。そういう小さな覚悟を済ませてしまえば、いかに凍て付く風が頬を撫で行く手を阻もうとも、足取りを鈍らせるほどにはならない。前を向き、背筋を伸ばし、しゃんと立って目的へと一步一步進めばなんてことはない。

そうだ。なんてことはない。例え姿の見えない風に晒されよ

うと、覚悟を決めた私の意思に勝てるはずがない。ああそうだ。勝てるはずがないんだ。きつと。

そう言い聞かせて足取りはゆったりと、けれど酷く重々しく、一歩一歩地面の硬さを踏みしめる。その一歩をまた踏み出したとき、初めて柔らかな感触が足の裏に伝わった。上等な深紅のマットの上をゆっくり、ゆっくり、私のローファーが踏みしめる。そして目の前で絶えず巡るその透けた回転ドアにも惑うことなく滑り込み、どうにか滞りなくそこへと進入することが適った。

中へ入ると一変して乳白色の大理石が足元からこれでもかかと思われ、空気をすら暖かく身を竦ませることなど一度も起きないだろう快適な温度を保っている。目も眩む光がそこかしこに乱反射し、誘われるように上を見上げれば呆気にとられるほど見事なシャンデリアがあった。

けれどそれに目を奪われている暇はない。というより今ここに入ったこの瞬間から、ここにあるすべてのもの、どれにも心を預けてはいけない。そういう決心があった。それは確かに私に必要な決心だったようで、一歩歩みを進めることに様々な誘惑が私の足に、意思に絡みつく。それらを振り切るようにわき目も降らず前を進み、聞いていたとおりの場所に目星をつけそこへと向かう。

眩むようなこの空間。広く、豪勢で、何一つ穢れも曇りもなく完璧に整備された、世界。行き交う人々はどれも私より住む世界が三段飛ばしに違うと思わせる様相の人ばかりで、自分がそこで唯一つの違和感として浮いていることは辺りを見回さずともありありと感じられた。

居心地が悪いだのという話どころではないけれど、これでいいとも思う。ここは私とは違う。私はここにいるべき人間じゃない。私はこの世界の人たちとは違うんだ。なんとなく、そう思っていないければいけないような気がした。

それでもできるだけ自然を装い慎重にそこへと向かう。回転ドアから向かって左、カウンターよりも奥、ラウンジの両端にあるエス

カレーター。前の人に続きそれに乗り込み、ただ足元だけを見つめる。気を抜けばすぐにでももつれてしまふんじゃないだろうか。そんな不安と戦いながら、早く上へ、いやもう少し遅くなれ、と葛藤する。そうしている間上へ上へと、前へ進むことを余儀なくされる。

そして、とうとう頂上にたどり着き小さな覚悟だけを支えに前を向いたとき、その人はそこにいた。

「初めまして、でもないかしら。お久しぶり。佐藤楓さん」

頭のとっぺんからつま先まで微塵の隙も感じられないその人は、明らかに余裕のある笑みでもって私を出迎えてくれた。

一度しか面識のない同級生に、クラスメイトの連絡網からなんとか辿って連絡をこぎつけた。

突然電話した私にあの子は 記憶によれば眼鏡で意外と足の速い、今まで出会った人の中では厚かましさと群を抜く野生の小動物みみたいな吉本さんは 驚くよりも先に電話口で突然泣いた。一本の頼りない回線を隔てて聞こえる彼女のすすり泣きは、ただの音声のみだというのに目の前で見るよりも生々しく、その時私は既に電話を切りたい衝動に駆られていた。けれど切れない。切ったら彼女はまた、ここまで彼女を追い詰めた衝動のままにむせび泣くだろう。この音声の比ではなく。

そうして暫く辛抱して待っていると彼女は漸く持ち直したようで、未だ涙交じりのか細い声で謝罪を呟き、すぐに折り返し電話をするから待っていて、とだけ言うと一方的に電話を切った。相変わらずの問答無用な厚かましさつぷりに苛立ちよりも幾分安堵を覚えたのも、また事実。そうして妙にどきどきしながら待つこと数分、予告通りかけ返してきた彼女は理由も告げず時間と場所を指定し、私が何を言う間も与えずにただありがとうとごめんねを自分の気の済むまで繰り返し呟いてから、再び間髪いれずに電話を切った。

一瞬掛けなおすことも考えたけれど、やっぱりやめた。きっと何度電話してもかけられる義理もない謝罪と感謝の言葉しか聞けないだろう。もう一度それを聞くためにだけに電話をかけても、結果的には自分が何かを余分に磨耗するだけだ。

結局それ以上のことは諦め、私は半ば自棄になった気持ちでその指定された場所へと向かった。たった一つの意味、何があっても揺るがされないというちっばけな決意を携えて。

文集委員の集まりがあつたのも事実。けれどそれも昼前には終わってしまったので適当に街をぶらついて指定の時刻まで時間を潰した。指定されたのは四時。場所は一泊十数万円ともウン十万円とも聞く噂の某高級ホテル、ラウンジの真上に位置する場所で、エレベーターのすぐ傍の店の前で待ち合わせ。入ったこともなければ行ったこともないし事実まともに見たことさえないくらい敷居の高すぎる場所だ。正直迷子による遅刻とかで無駄に恥を晒したくなかったので早い段階から下見に行ったのは内緒。

で、持てる最大限の勇気を振り絞り女子中学生が学校帰りの制服でどうぞ見てくださいとばかりに単身踏み込み、その異様さにも関わらず何故かホテルマンに足止めされることもなくどうにかラウンジを通り抜け、目的地へと辿り着けた。自分じゃこれだけでも重畳つてもんだ。

けれどそうは問屋とブルジョワが下ろしてくれない。さあ目的は果たしたし帰ろう、なんてギャグをかます余裕も与えず真打登場。恐らくはあの手紙の差出人であり、私を呼び出した張本人、ついでに厚かましい吉本さんを得体の知れない重圧で泣かせた鬼畜大人のご登場。

どんな人かと想像してみれば意外や意外、女の人であった。けれど既知だとばかりにこの人が言うとおり、私も彼女には見覚えがあ

った。一度だけ、出会ったとも言えないくらいの接触ならば覚えがある。それは一度見たら嫌でも目に焼きついて離れない、そんな人。

昨年、クリスマスの前頃に新さんと言葉を交わしていた、おばさんとは言えないド綺麗なあの人だ。

淡いクリーム色のドレープのついたブラウスにワインレッドのタイトスカート、腕にはプラチナの時計、すらりと均整のとれた足元は私が履いたら一歩目でずっこけそうな黒に近い濃紺のピンヒール。いでたちはすつと芯が通ったように真っ直ぐで、佇まいが凛としている。すつと切れ長の目元は涼しげに、けれど口元はスカートと同色の艶やかな色を放ち、全身に余裕と自信が満ち溢れていた。あの時と同じように髪を後ろで纏めているらしく、けれど後れ毛のように前髪だけ少し顔の脇に寄せられているのがまた妙な色気を感じる。見ているだけで自分という存在を根底から覆されそうだ。完璧すぎて同じ人類とは思えない。日本人なんだろうけど膝の位置が高いわ細いわ鼻筋通ってるわで、もうなんかごめんなさいですよ。私がこの人に意味深な手紙の文句を言うより先に服従するほうが早いんじゃないだろうか。

早くも決意やら意思やらなんやら諸々と崩れ落ちていく。人間なんて脆いもんですね、ええ。悪いよ。私が悪かったよ。だからおうちに帰して女王陛下。

「そんなに怖がらないで。とって食いやしないわよ」

「はい？」

何言ってるの何言っちゃってるのこの人。怖くねーしビビッてねーしむしろこのまま紐なしバンジーもやぶさかではないし。何ならこっから飛び降りて三回転半にスピもおまけして華麗にロビーのど真ん中へ着地してやるうか。ん？

あんこらとばかりに内心メンチきりつつ表面上は純真無垢な眼差しを意識して、というか普段の新さんを真似して小首を傾げると、目の前のマダムは艶やかか唇に弧を描き、それを指摘した。

「あなた今すぐ家に帰りたい、って顔してる」

ふっ。

嘘。やっぱ怖い。この人怖い。怖いよ、怖いに決まってんじゃん。微笑みながら人の心読んだよこの人。怖いでしょ。笑顔で心読まれたら流石に怖いでしょ。

なに、アレですか。美女エスパー的な感じですか。一条家はキワモノで構成されてるんですかね。普通の人は居ないんですかね。笑顔で人の心読むのがセオリーだと。標準装備だと。それってどんな人類補完計画。昨今のトンでもアニメでも流石にそれはないよ、ねえ。あの裏国民的アニメでさえATフィールドつつーすーパーマインドウエポンが取り入れられてるんですよ、ねえ。心の中くらい一人にさせてよ、お願いだから。あ、なんか今中學生日記みたいなのと言った。って私まだギリちよん中學生か。いやーリアルタイムー、ってというかパニくりすぎて脳みそ現実逃避みたいない。

「まあ、来たばかりで帰るのも、ね。寒かったでしょう。暖かいものでも飲みながら、ゆっくりお話ししましょう」

「はあ」

考えれば考えるほど冷めていく思考を展開させている私を見下ろし、超絶マダムはうっとりものの笑みを浮かべたまま私の背を押すように促した。

ゆっくりお話、ね。こりゃそんなに早く帰してくれそうにはないな。とりあえず無駄に口答えしないでハイハイ言っとこう。そんでもって一言一句覚えて一条さんにちくってしまおう。餓鬼を舐めんなよ大人め。あることないこと涙目で誇張累乗しまくってやるわ。

ほくそ笑みつつ謙虚な姿勢でマダムに促されるままエスカレーターの上から離れ、案内されるまま歩き出す。どうやらカフェというよりサロンらしく、白塗りの壁の上を水が絶え間なく上から下へと流れ落ち、下は白い砂利で敷き詰められ本物かどうかは定かではないけれど蔦が所々張っていた。それらを伝うように通り過ぎると中

央に凝った意匠のアーチがあり、金色の文字で英語ではない、恐らくはフランス語かなにかで表記された店名がざらりと記してあった。入り口にはボーイらしき人が立っていて、マダムがカードを差し出すと隙のない動作で先を案内するように歩き出す。これがまた中は中で天鵝絨ビロードの、深紅の絨毯に壁は下から半分が漆喰にペイズリーの凝った彫刻、半分から上は中世の絵画を模した半裸で布一枚纏ったベイビーやらおっさんやらヴィーナスやらがあつちらこつちら、なんとという優雅な乱れ模様。アンティークの照明に照らされた演出が憎い憎い。テレビの取材を体験している気分だ。

などとこの場のイレギュラー最高潮な自分を叱咤激励している間に、こちらです　なーんて、執事さながらにイケメンボーイさんが白い手袋に覆われた指先で終着点を示した。いつのまにか重厚な扉が開かれていて、広々と開けた部屋が視界を覆った。ほの暗くアンニユイな雰囲気の廊下から一変して眩いばかりの輝きに、目を顰めつつ前を行くマダムに続いてそこへと足を踏み入れると、背後で音もなく扉が閉まる気配がした。

「立ち話もなだから、座ってちょうだい。まだ少し時間があるから、先にお飲み物でも頼んでおきましょうか」

マダムは勝手知つたるとばかりに私を促し、部屋の中央に位置するソファへと座らせた。その間にもメニユーらしきものを私に手渡し、上着や鞆を受け取りハンガーにかけたりと卒がない。やらせっぱなしというのも気まずいんだけど、ほぼ相手の土俵で甲斐甲斐しく動く度胸もない私。仕方がないのでメニユーに目を写す振りをしつつ、辺りに目を配つたりしてみた。

広さは十五畳ほどだろうか、割と広い。踏み心地の柔らかい上等な絨毯も、両開きの扉の装飾も揃ってアンティーク調。全体的なコンセプトがそう設計されているのかもしれない。部屋の端に扉があり、奥に進むと今私が座っているソファがある。ソファは三対になつていて、長方形の机の両脇に二人掛けほどのソファ、その間に一人掛けのソファが鎮座している。そしてその一人掛けのソファの反

対側に暖炉が位置していて、ご丁寧な黒い鉄柵がついている。ソファと机の下には絨毯の上にまた白い絨毯、というか恐らくは本物の毛皮らしきものが敷いてあり、足元が異様にふわふわしている。

ゴメンヨ、足蹴にしちゃって。

脳内で謝るそんな私の頭上には同じくアンティーク調の照明がぶら下がっていて、すずらんを模したような形のランプが四つぶら下がっているような形。それだけだと全体的に薄暗く見えそうなものだけど、暖炉のすぐ脇から部屋の最奥の方、つまり部屋半分暖炉側の壁は完全なガラス張りになっていて、外の光が惜しげもなく入るようになっていて。今は四時で丁度夕暮れ時なので、部屋の色調も相成って部屋全体が茜色に染まっているみたいに見える。良く見ると一番奥はカウンターがあるらしい。ここでお酒も飲めるんだろうか。益々サロンっぽい。

そんなことを延々と考えている間に、いつのまにかマダムが私の向かい側にあるソファに座っていた。足を組み、その上に肘をついてなんだか心持楽しそうに私を眺めている。いつから見られていたんだろうか。慌てて目をメニューに戻すと、彼女がふっと笑ったような気がした。

「決まった？」

「あ、ええと……じゃあ、紅茶をお願いします」

「はい、紅茶ね」

笑い混じりに答えているから、やっぱり私の様子が可笑しかったんだろう。そりゃそうだよな。何語表記か知らないけど紅茶の種類が幾つも表記されてんのに『紅茶』って。いやだってよく解んないし読めないし。紅茶通じゃないから紅茶は紅茶しかないんだよ。

内心ふてくされつつも、まあ居心地は悪いけれどそんなにいやな感じはしないな。なんて思う。馬鹿にされてるって訳でもないみたいだ。子ども扱いは確実にされてるだろうけど。元より子ども扱いされていたほうが色々と容赦があっという間のような気がするし、それに甘んじておこう。

おっと、それよりすっかり空気に吞まれて忘れていた。携帯携帯
つと。手に持っていたメニューを机の上に戻し、制服のポケットを
弄って携帯を取り出す。許可もなくいじっちゃって体裁が悪い気も
するけど、賤のなっていない餓鬼認識されたほうが都合がいい。黙
って弄っちゃおうつと。

「お家の人に連絡？」

室内電話ですぐに連絡したのか、マダムが戻ってくる。一瞬ぎく
りとしそうになって、けれどなんとか身じろぎ程度で済ませた。危
ない危ない。

「連絡の方は、もう既に。あの、電源切つところかなって」

「……そう。まあ、あまり意味はないわね」
う。

見透かしたように呟かれたその言葉に、今度こそ本当にギクツと
僅かながら肩を揺らしてしまった。本当に見透かされているのかも
しれない。なんだか恐ろしくて顔を上げられず、それでも下を向い
たまま私は携帯を閉じて口を嚙む。

ばれたんだろうか。ばれてるんだろう。私が携帯を切ってい
ないこと。というか、ボイスレコーダー機能を開始させたこと。

意味はないって、どういうことだろう。携帯取り上げられるって
言う意味？むしろもうお家には戻れないわよ、とか拉致を匂わせて
るの？ いや、それはないか。だったら『お家の人に連絡？』なん
て聞かないもんね。この流れで私に危害を加えるなんて色々考えて
リスクがありすぎる。

「大丈夫だから、落ち着いてちょうだい」

「……え」

「もっと堂々としていなさい。あなたはお客様なんだから」

もう完全に私の心情を見透かしていると言っても過言ではないだ
ろう。マダムはゆつたりとソファに背を落ち着けて、言葉の通り随
分落ち着いているように見える。

けっ。それはそうだろうとも。大人はいつだって子供の目線に立

つ振りをしながら、自分の土俵で話をする。そういう大人に問答無用で合わせられるのが、力も経験も無い圧倒的に不利な立場の子供だ。

なんとなく、そんな彼女の余裕さに私も幾分冷めた心持になり、図らずも少しだけ落ち着くことができた。

どうあるかと、私を見失っちゃいけない。そうだ。私は、私。

小さく息をつき、今度こそきちんと前を向いた。

「さっき、時間があると仰っていましたが、それはもう一人来るということですか？」

「そう。さしずめ私は案内人といったところね。本命は一応、別」
その一応がまた引つかかるんですけど、あえていったんでしょうねえ。なーんかこの人と話していると妙な既視感を覚える。なんなんだろう。そうは思いつつも表面上はどうか平静を装ってみる。見透かされてようとね。ふんだ。

「本題は、まだ教えてもらえないんですか？」

「あら。私は貴方がご用命だとばかり伺ったのだけど？」

にこやかに、けれど有無を言わさない雰囲気で言い切るものだから、つい口を噤んでしまう。

くそう、まだならまだつて言やあいいのに。この人面白がつてんな。ええ、悔しがつてたまるか。クールだ、クールに行くぞ楓。おうよ。

「ではまだですか？」

「そろそろよ。そんなに時間をとりはしないから安心して」

宥めるなー、くそー。安心できるかー、一から十まで胡散臭くつて酸素マスク欲しいほどだわー。高山に匹敵する息苦しさにも早くも眩暈を起こしそうだったっーの。

全力で無表情装いつつ頭の中でそんなことを叫んでいると、ふつとマダムが口元を歪める。艶やかな唇から忍び笑いを漏らしながら、肩を揺らしてくつくつと笑う。なにが可笑しいんじゃ。

「あなたって、素直なのね」

「はあ」

そんなこと今まで言われたことないんですけど。貴女が悟りすぎなんじゃないですかね。今すぐ心を読むのをやめてください。さもないと警察を呼びますよ。十中八九虚言癖扱いで先に私が病院送りになるんでしょうけどね。

「まあ、頭は悪くなさそうだけど、少し危うそう」

だからなにが、だ！

いい加減眼差しくらいには苛立ちが現れているかもしれない。平常心平常心、と全力で表情括約筋のコントロールに勤しむ私を、マダムの綺麗な眼差しが写る。笑みに潜むその薄茶色の瞳ははっと息を呑むほどに澄んでいて、その瞬間妙な既視感を抱いた。

あれ。なんかこの感覚、覚えがあるような。そんなことを思いつきながらも目を離せずに居る私に向かつて、彼女はいつそう美しい、美しすぎて凄みすらある微笑を浮かべた。

「忠告しておくわ。あの人の言うことを鵜呑みにしては駄目。いいわね」

あの人。

反論する余地もない。彼女の有無を言わせないような壮絶な微笑みに向けて返す反応なんて、頷くことだけで精一杯だった。なんなんだろう。この問答無用さ加減。逆らっちゃいけないっていうか、それ以前にそういう気すら起きなくなる。でも私はどこかで似たようなものを感じたことがある。ぼやけた記憶とうまく繋げられないけれどいつかもあった。こんなことが。

一瞬の静寂が空間を包み込んだその時。思考を一気に引き戻すようなブザーの音が、その空間を突き抜けた。

「あら。御大尽のご到着。さあ、本番よ楓ちゃん」

まるで舞台の幕開けを示すように、彼女は言った。

私は満足に心の準備を整えることも出来ず、ただ、ただ、ゆっくりと開かれるその扉を見つめた。

佐藤かえでとお爺ちゃん

面食らった。

それもそうだ。マダム言う『あの人』とは初老の男の人 所謂、お爺さんだった。

ブザーが鳴った後すぐさまマダムは立ち上がりその人を迎え入れ、コートやストール、帽子などを丁寧に受け取り自らハンガーにかけたりと、いやに甲斐甲斐しく介助する。彼女より立場が上の人なのかもしれないけれど、ここまで大物そうな人が来るとは予想していなかった。

そのお爺さんはグレーのスーツによく磨かれた黒い靴を履いていて、背格好はそれほど高くも無いのか彼女と同じくらいの身長だった。でも肩幅は男の人らしくがっちりしていて、背筋だつてちつとも曲がっちゃいない。白髪交じりの髪はほぼ灰色だったけれどしっかりと後ろに纏められていて、身だしなみは完璧とあっていいほどにぴっちりとの隙の無い様で、老人とは呼べない澆刺さを感じる。その後姿を目にして異様な緊張感が生々しく湧き上がり、まるで受験の面接官と対峙している時のような感覚が蘇ってきた。

もー、なんなの。というかそもそも私は何をしに来たんだっけ。そんなことまで今更ぶり返してしまうくらい、無意味に焦る。それでもどうにか相手の一挙一動を見逃すまいと観察している間に、その人と彼女が私の元へやってくる。

おっと、やばい凝視してたし。慌てて立ち上がったときに、真正面から見た表情は印象に反してとても好意的な笑顔で、正直拍子抜けしてしまうほどに穏やかなものだった。

「君が佐藤楓さんだね。初めまして。私が一条源治だ」

「……はじめ、まして。佐藤楓です」

諸々の違和感を突き抜けて、相手が差し出してきた握手に答える。握り締めてきた手のひらは思いのほか乾ききっていて、けれどがっ

しりとした重厚感のある感触がした。それだけでなんだか気圧されてしまう。ああ、私は今、うまく笑えているだろうか。

相手の何気ない一挙一動にすら身構えて、緊張感が拭えない。それでもどうぞと促され、私はひたすら自分に落ち着けと言い聞かせながらその場に腰を下ろした。そしてその人　一条源治さん、私の向かい側のソファに腰を下ろし、マダムはというとその真横、間を挟むように置かれた一人掛けのソファへと静かに腰を落ち着けた。

沈黙。あー、ああ、あー。困った。まだよく状況が掴めない。結局この人は誰なんですかね。どういうポジションでここにいらっしやるの。

そんな私の戸惑いは顕著に現れていたらしく、その一条源治さんが怪訝そうな顔を、私の横で澄ました顔をして座るマダムへと向けた。

「なんだ朔子、まだ話していなかったのか」

「ええ、まあ。お話は全てご自身がとのことでしたので」

「おいおい。それにしても加減があるだろうに。すまないね、佐藤さん。これじゃあ訳もわからないはずだ」

全くその通りで。

ともいえず曖昧な愛想笑いを返すと、彼はうむ、と何故か一つ解ったように頷き、改めるように佇まいを正した。

「自己紹介が遅れてすまないね。私はさっきも言った通り一条源治。これは私の娘で、一条朔子いちじょうしやくこというんだ。まあ、私の秘書と言ったところかな」

はあ、娘さんでしたか。で、それが何か。

心象とは裏腹に無言で頷くと、何故だか苦笑いを浮かべながら言い含めるように。

「私は君のお母さんの婚約者の父だよ。一条始は私の息子。つまり私は新の祖父、ということになるな」

そふ。

祖父つ。マジでお爺ちゃんかい！

これほど度肝を抜かれたことも早々無い。吃驚過ぎて言葉も無い。つてことはこのマダムは、つまり朔子さんは新さんの叔母さんつてこと？　なる。道理で所々に妙なデジャヴを感じたわけだ。ごく近いご親戚だったわけね。そりや似てるわ。そりやこの美貌だわ。となると朔子さんと一条さんは兄妹か姉弟つてことか。さすが美形一族、一人残らず無視できない美貌。そういえばよく見るとこの爺さんもナイスミドル。どうでもいいトリビアがまた増えた。お母さん知つてたのかな。帰ったらさりげなく聞いてみよう。

驚きのあまり目まぐるしく同でもいい思考をぐるぐる展開していると、爺さんがそれすら悟つたようににやりと口角を上げる。ああそうそう、その全部解つてますよと言いたげな微笑もデジャヴだ。オールド一条さんじゃん。年取つた一条さんがいるじゃん。タイムスリップしてきました？　一人二役？　あ、クローンですかそうですかお疲れ様です帰っていいですか。

「やはり驚かしてしまつたようだな。朔子、説明くらいしておきなさい。佐藤さんも訳がわからなくて怖かつただろうに、突然こんな爺と対面させられて」

「私は指示に従つたままです」

「融通の利かん奴め。すまないね、佐藤さん。そういうことなんだが、納得してくれたらどうか」

「はあ……」

見た目に似合わず多弁なお爺さんだ。それとは打つて変わって彼女の雰囲気もさつきとまるで違う。クールさが増したというか、滲むサド気質がなりを潜めたというか。親の前だから控えてるとか？

それなんて二重人格。

ていうか相手が誰だかは解つたけど、呼び出された理由がわからない。いや、正確に言つと私が呼び出したんだっけか。どのみち作

為的な事は否めない。すつとぼけちゃいるけど、この人は何か目的があつて私をここに導いたつてことだ。危うく雰囲気にも飲まれそうになつたけど、そこんと忘れちゃならない。とにかくあんまり食われないように、目的だけどうにか引き出そう。

「あのう、それで私……」

「ああ、そうだったそうだった。で、どうなのかな」

はい？ これまた何を言い出すのかなお爺ちゃん。キングオブマイペース。

もうね、最早半分飲まれかけているという自覚はあるよ。でも人生の先輩であるご老人相手に先手を打つほどの気概も起きないつていうか、ねえ。なんというか、相手の土俵過ぎて立っているのがやつとみたいな感じ。きつとこの爺さんもそれが解つていてあえてこんな態度をとっているんだらう。その証拠に、未だ戸惑う私にはもう付き合うつつもりもないのか更に押し通してきた。

「新のことだよ。近頃はとんと顔も見せてくれない。私の孫は、そちらで元気にやっているのかな」

「はあ……」

笑い皺が、目尻に濃く刻まれる。

戸惑う私に、隣で知らぬ存ぜぬとばかりに澄ました顔を続けるマダム、もとい朔子さん、そして食えない一条進化系爺さん。挑む気概の糸口すら掴むことも許されず、まあ面白いように、私はずぶずぶ飲み込まれていった。

あえて言おう、苦痛であると。

いったい何十分、いや何時間経つたんだらう。というか、そもそもこの部屋には時計が見当たらない。これじゃあ一体どれだけ時間が経ったかも解らないじゃないのよさ。VIPの部屋の癖になんてこういうところ行き届いていないんだらう。調度品とか景観とかの

前にそこんとこ抑えて然るべきでしょうが。

いや待てよ、むしろこれはアレかな。時間の概念を忘れて憩いのひと時をお過ごしくださいとか、そういうことですか。それどんな精神と時の部屋。余計な配慮だよ。貧乏人は生き急ぐのが世の常なの。時計がないと生活もままならないの。って貧乏人には用は無いですよ。そっかー、あははー、こりゃ一本とられたー。引きつり笑いが止まらないですう。

「んん、どうしたのかな。ああ、こんなに話して喉が渴いただろうね。紅茶も冷め切ってるじゃないか。朔子、楓さんに新しいものを」「はい」

いやそういう問題じゃないから。お爺さんの孫ラブマシガントークに付き合わされて闘争心どころか平常心すらぶち折れて精神磨耗の疲労困憊で一氣に若さを吸い取られたとか、今そんな感じ。時間の経過と共に爺さんがいきいき若返って私がよぼよぼ気が萎えていくっていう悪循環。

もう開放してくださいお願いですから。何かっちゃあ新新新。孫ラブにも程がある。聞いてるだけならまだしも時折会話の内容を復習させるみたいに聞き返してきたり新さんの話をあれはどうだこれはどうだと搾り出してきたり、実質時間がどれだけ経ったかはわからないけど相当色々聞きだされた気がする。主に新さんについて。

すっごい疲れた。もうなんか色々どうでもいいから帰りたい。心配した自分が馬鹿みたいだ。もうこれただの孫コンじゃん。つうか新ファンクラブの会長じゃん。私関係ないじゃん。聞きたいなら本人に聞けばいいじゃんっていかほば他人の私に聞いてどうするよ。誰か助けてー。

思わせぶりの朔子さんは相変わらず我関せずで裏方に徹してるしさっきのあの何か有り気な態度はなんだったんですかねー。私をおちよくったんですかねー。そんな気がするんですがねー。あーもういやだー。かえりたーい。

「おっと、いやあ、少し喋りすぎたかな。君ほど若い娘さんと話す

機会なんて早々無いから張り切つてしまつたよ」

タヌキめ。なんてことはなさそうに微笑みながら朔子さんの差し出したコーヒーに口をつける爺さんは、台詞から風貌、雰囲気仕草に至るまで本当に一条さんに似ている。この台詞とか年取つた一条さんならそういうこと言いそうだ。そして相手を自分の土俵に担ぎ上げてくるくる踊つてわあ楽しいみたいなた茶番を繰り広げる。ソツクリ。言つとくけど張り切るつてレベルじゃなかつたですからね。ハッスルもいいところでしたからね。

紅茶を朔子さんから受け取りながら、打ち明けられない想いを胸にそつと飲み込む疲労のため息。よくよく見ると、外から漏れていた夕日はなりを潜め外はすっかり暗闇に包まれ、部屋全体を穏やかなオレンジ色の照明が照らしていた。

あーあ。プロペラのように回る照明からの陰を見つめながら、私はまたこつそりと息をついた。だって、なんだか拍子抜けだつたからさあ。随分と緊張していたわりに、思っていたのと大分誤差があるというか、なんとというのか。繋がらない一連の不安要素が紐解かれると思つたのに、一向にその気配すら見当たらない。この爺さんは全く関係ないってことなのかな。それとも、関係あるのはやっぱり思わせぶりだつた朔子さんの方か。

私は、誰を相手にすればいいの？

気付けば、言われたとおり確かに喉がからからに渴いていた。まったく、一体どれほど時間が経つたのか。今日はもう深入りはやめて、この辺で帰つたほうがいいのかもしれない。巡る思考にそう決着をつけ、差し出された新しい紅茶に手を伸ばす。湯気の立つそのの香りを確かめながら、お暇を言い出すタイミングを計る。そんな私に先手を打つように、先にお爺さんが呟いた。

「新は、不憫な子なんだ」

不憫。

はい？

いきなり投下されたその言葉はあまりに不自然で、それそのものの意味さえ一瞬掴めなかった。

ええつと、不憫って言ったんだよね。新さん、が？ その言葉はなんだか妙に尤もらしく、けれど違和感を覚えるほど不適切にも感じる。ついでにそのことについて、どこがと思うと同時に、そうだねと思う自分にも、違和感。

不憫って、新さんが、ねえ。なんと答えるべきか迷っていると、ふと、爺さんが微かに笑った気がした。

「新は佐藤さんに何も話していないようだ。散々君と話しても、その片鱗が見られなかった」

私が、何も知らない。この穏やかな空気の中でそんなことをまだ考えている私が穿ちすぎなのか。まあ、でも、それは確かにその通りだとも思う。だって一年経ったとしても、所詮一年。この人の言つとおり私は新さんのことなど何も知らない。特に深くまで知ろうとも、しなかった。

「始もどういいうつもりなのか知らんがね。君は、どこまで聞いている？」

「……どこまで、とは」

「一条の話だよ。あいつが現当主なのは知っているかな」

「はあ……」

知っている、というよりそれしか知らない。一条とか言うどころの名家の御当主で、そのどれだけいるかも定かでない一条家の人々とやらを総括しているらしい、なんてあやふやな情報だけだ。聞くうにも一条さんにはまともに質問する機会もそんなにないし、お家の事情とかおいそれと聞けるものでもない。お母さんもその辺りの話はふつてこないし、どうも情報を量されている感も拭えない。でもお母さんはある程度までは知っているらしいし、お母さんがいいなら私もって

『なんと言われたって私は私ですから。愛人でもなんでもどんといです』

思つて、いたけど。いたんだけど。

掠める思考を繋げるように、お爺さんがうんと頷く。

「そう。一条の元は辿ると華族の一つでねえ、ホラ、君も見たことはないかな。ここよりも少し行ったところに屋敷があるだろう。古めかしくて敵わんのだが、何せ大戦前からあるものだから手を加えるわけにもいかん。時代錯誤に居を構えているんだが」

屋敷、ねえ。なんのことやら、思い当たるものが無いから連想できもしない。そんなもの、この辺にあつたのかな。というかこの辺でさえ市街地でこんなホテルがどーんと建つてるといふのに、屋敷なんてあるのか。

必死になつてそれらしきものを思い起こそうとして、一つだけ思い当たる節があつたことを思い出した。

「 塀……」

塀。そう、塀だ。

以前この辺りからもう少し離れた付近を常田さんの車で通つたときに、延々と続く塀があつた。いやに長く終点に着く前に曲がつてしまったのでどんだけかいお寺なんだろうと思つていたんだけど、もしかして。

唯一思い当たるそれを思い浮かべてつい頬が引くついたとき、それだとばかりに爺さんが食いついてくる。

「おお、それだ。敷地ばかり広いもんだから年寄りにはちときつい。古いばかりであちこちガタがきとるんだが、修繕だけ繰り返して騙し騙し今まで持つてる家だ」

ああそう。そうか、あの家か。つくづくとんでもないなあ。確かあの時私、お寺か神社かな、なんてあたりをつけた覚えがあるんですけど。少なくとも一般人の民家には当てはまらないよね。そりゃ住む世界も違うわ。

「古いといつてもうちは戦前から閨閥にのっとり通婚ばかり繰り返していたからなあ、今じゃ血なんて怪しいものだな。そのくせ同族意識だけは高いもんだから、頭の緩い馬鹿者ばかりだ」

ぐちゃぐちゃ言われても知らないですよ。でも言ってることに棘を感じるなあ。穏和な爺さんの皮が剥げかけてますよ。笑っちゃいるけど目の奥が剣呑に煌いてるし。ついつい、びびっと僅かに身を引いて反応してしまうと、途端にくしゃりと目じりに皺の慣れた微笑。あ、誤魔化そうとしてる。爺さんめ。

「すまない、身内の恥なんざ聞かせてもどうにもならんね。まあそんなうちなんだが厄介な慣習が根付いていてね、本来ならば世襲制である当主の任命もまた、面倒な方式に則っている」

「世襲制じゃない、と」

「そう。普通は直系の者から選出されるが、一条のそれは直系に限らず四親等までだ。心身ともに健全でありその系譜に属するものは資格ありとみなし、幼い内から相應の教育を施される」

四親等ってどこまでだろう。下っていくと考えると、えーと、直系だと、玄孫まで、かな。当主から下るなら　うわ、微妙に範囲広っ。思わず目を瞬かせると、いつから見ていたのかそんな私を眺めながら爺さんがにんまり微笑む。

「頭の回転が速いようだ。実によろしい。そうさね、現当主は始だが、あいつの代にはライバルが十人いた。いずれも次期当主としての教育を施された精鋭ばかりだった。が、始はそれを当時最年少の二十歳でもぎ取り、二十九にして当主の座に就いた。異例の早さだよ」

「はあ」

わあ、お間抜けな返事。でもしょうがないじゃん。そう答えるほかに無い。一条さんが凄いらしいなんて、そんなの今に始まったことじゃなさすぎて意外性に欠ける。正確には今じゃないけどさ。

大体、あの人の凄さはもう日常生活に滲み出るレベルで思い知らされてるからこれ以上余計な情報要らないんですけど。ていうかあ

れだけ孫自慢したにも拘らず今度は子供自慢？ ちよつとちよつと勘弁してくださいよ。爺さんの家族愛はもう身に染みて解ったから。続きは今度聞くから、今日のところはもう返して頂戴よ、ねえねえ。とは、口が裂けてもいえない。だからこそその生返事である。

爺さんは相変わらず笑い皺を湛えたまま、私を捉えて離さない。

「あの頃は奴も若くてなあ、着任当初はワンマンとも言える策に一族で非難轟々だったが、せんだつての社会現象でピタリと納まったよ。誰もが責任逃れで手一杯の中、あいつはよくやった。その件もあつて正式な当主に成り上がったのだがね、それからこの数年、見事なものだよ。小姑みたいな一族をまとめ、地道な邁進を続け、あげく婚約者にその娘まで手に入れる始末だ」

爺。

いやお爺さん。なんでもいいけどその言い方やめて。絶対わざと言つてるでしょ。微笑ましい笑顔で言う台詞じゃないからそれ。誤解を招くこと山の如しだからそれ。しかもその項は別に付け足す必要なかったよね。あえて言ったよね。反応待ちだよ。スルーするから。全力でスルー申し上げるからねお爺ちゃんよ。なんか面白そうにこつち見てるし。やつぱりわざとかい。

「ふふ。一時は景気を取り戻したかに見えたが昨今は就職氷河期に経済格差、なんだかんだとろくな時代じゃない。不景気真つ盛りもいいところだ。切迫してはいないとはいえども、うちだつて笑つちゃ居られない。そういう流れだったからな、自然、周囲の期待も次代に注がれるようになる。当代に生まれた子らはこそつて教育された。勿論新も漏れず」

そう言つた途端、爺さんの笑顔が翳つた。何かを思い起こしているのか、物憂げに組んだ指先を見つめている。

「あの子に自由は無かつた。物心ついた頃には既に私の手元には居なかつた。後継候補の子供はね、基本親の一存でその教育方針が決められるが、あの子はとにかくあらゆる意味で特別だつた。子供らしく振舞うことすら許されず、ひたすら試され続けた。頭角を現せ

ば周囲の期待は益々高まり、愛情なんてものの欠片も与えられず海外で何年も孤独の生活を強いられていた」

その、ポツポツ明かされる新さんの事情には、ところどころ思い当たる節があった。

『僕はね、あの頃新の父親じゃなかった。他人よりも遠い、距離があった』

一条さんはあの夜、そんなことを言っただけではいかなかっただろうか。あの頃って、今この爺さんが話している頃と同じときの話なのかもしれない。でもあの一条さんが新さんにそこまでのことをしたのだろうか。今を知っているぶん、俄かには信じがたい話だ。

それに、海外の話。噂で聞いたときは眉唾だと思っただけだけど、住んでいたのはどうやら事実だったらしい。でも新さんはそんなこと一度も話さなかったな。それとも、話せなかったのかな。

「年端もいかぬ子供にかけるにしては過大な期待があの子に寄せられた。そういうしているうちに新は次期当主に指名された。まだ十二になったばかりの子供が、だ。異例の早さだ。異常と言ってもいい。しかしそれこそがあの子の……なんだろうね。神聖性とも言うのかな。一族内ではあの子に傾倒するものが現れ始めた。祭り上げるように、多くの者があの子を支持した」

とてもじゃないけど笑えそうにないことを、自嘲するようにお爺さんは告げた。正直、このスケールが違いすぎて受け止めきれない。不憫なんていう話どころじゃないよ。想像の枠を超えすぎて、誰の話をしているのかも見失いそうだ。世界が違うと思っただけけれど、こうなると次元そのものが違う。あんな純粋な子からどうやってこんな異様な逸話が生み出されるっていうのさ。どう思えばいいのか、どう感じたらいいのか、感情の置き場さえ解らない。こんな話を私に聞かせて、この爺さんは一体どういつつもりなんだろう。私は何かを、試されているんだろうか。

なんと答えていいやら解らず逡巡しているうちに、何かを読み取ったかのように爺さんは苦い笑みを目尻に浮かべた。

「そんなに言うなら何かしてやろうと思わなかったのか、と言いたそうだね」

「……いえ」

違うよ。そんなレベルじゃない。情報を飲み込むだけで手一杯だ。それでも爺さんはふるふると首を振る。

「そうだ、私を手を差し伸べてやればよかった。だが一線を退いたこの老いぼれにどれだけの影響力も残されていなかった。年寄りの戯言だよ。誰も耳を貸さなかった。私はそこまで、出来た人間ではないんだよ、お嬢さん」

私は、責めてなんかいないのに。けれど自嘲的に笑う爺さんはそれこそ誰に言われずとも、悔やんでいるように見えた。自分を責めているのかな。

でも、ただ一つ気になるのは いやに無表情のままの朔子さん人形のように、今の話に機微も返さず、じつと黙って前を向いている。いくらなんでも無反応が過ぎるんじゃないだろうか。それとも、甥の話になんて興味が無いのか。まるでさっきまで微笑んでいたのが嘘のように、色の無い美貌だけが目の端に映る。ちらりとい横を伺った瞬間、「楓さん」と爺さんに呼ばれた。

「あの子は、変わったんだね。きつと、君たちと暮らし始めてから。あんなに子供らしい笑顔を浮かべたあの子は、初めて見たよ」

あ。嬉しそう。

思わず愛想笑いを返すと、満足したようににこやかにうんうん頷く。

なんかなあ、普通のじいちゃんだ。孫が大好きで、孫を心配する、普通のお爺ちゃん、ばいよねえ。おかしな話だ。あれだけへビーな話を聞いた後に、爺さんとニコニコ微笑みあってるっていうのも。一人無表情貫いてるけどさ。

「楓さん」

「……はい」

ゆったりと爺さんが立ち上がり、私もその声に引き上げられるよ

うに立った。目尻に笑い皺をたつぷり湛えた老人は、かみ締めるように笑って、その節くれ立った右手を差し出した。

「あの子をよろしく頼むよ。どうかこれからも、仲良くしてやってくれ。何かあつたら、力になってやってほしい」

「は、はい。こちら、こそ……」

しっかりと両手で握るその力が面映くて、なんだか無愛想にそれしか言えなかった。それでも爺さんは満足のいく答えを得たようで、より笑みを深くして手を離してくれた。

「さて、それじゃあそろそろお暇しようかな。悪かったね。こちらから呼び出しておいてこんなに暗くなるまで長居をさせてしまつて、朔子、送つて差し上げなさい」

「はい」

「いや、あの」

なんか怖いんで別に必要ないんですけど　と心のそこから思ったところで、押し留めるように爺さんがにつこり笑顔でダメ押し。私がまごまごしている間に既にコートを羽織つて、帽子を手にしていた。はやっ。

「いいんだよ。こんな時間にこのまま君を放り出したら親御さんに申し訳が立たない。　ああ、そうだ。失礼ついでに言うのもなんだが、私たちがこうして話したことは、あれらには内緒にしてくれかね。勝手に会つたとなつちゃあどやされかねんからな」

「はあ……」

茶目つ氣たつぷりにウインクして、悪びれるつもりもないらしい。まあ私も内緒で来たわけだし、もとから話すつもりもなかったしむしろ『言つといて』なんて言われなくて好都合だから別にいいんだけどね。

結局終始爺さんのペースに飲まれたまま、「じゃあ」と挨拶代わりに帽子を上げて、爺さんが部屋から出て行く。妙な爺さんだったなあと思いつつぺこりとお辞儀をした瞬間、何かが引っかかった。

あ。

「そうだ！ お爺さん、待つ

「あ……っ」

呼吸が喉を掠める。はっと顔を上げたその時にはもう、爺さんはいなくて 代わりに朔子さんが、掠めた私の声を遮るようにして、眼前に立ちはだかっていた。目を細め、決して逃さないばかりの微笑みを浮かべながら。

引いていたはずの悪寒が、指先からぞわぞわと、舞い戻ってくるような間隔がする。

その時、今まで充満していた穏やかな空気がまるで引き波のようにザアッと指の合間をすり抜けていく心地が確かに、した。

佐藤かえと一条朔子

「まずは移動しましょうか。時間はまだ大丈夫？」

そう言つとさつと私にコートを鞆を手渡してくる。問答無用というよりただの確認に過ぎないつもりなのか、答えを待たずに彼女は扉を開けた。

これからか。私もまた、聞くまでもなく解っていた。

今が、冬で良かった。煌びやかな空間から逃れるように一歩踏み出し、その凍て付く外気に晒された瞬間ふいにそう思った。今更だけど、あの部屋は快適すぎた。丁度いい室温に居心地の良さを設計しつくした空間。現実には縛る時計も無く、あそこだけ時の流れが違ふようにまで感じた。あれじゃあ誰だってリラックスせざるを得ない。恐るべしブルジョワの世界。調度品が高いから緊張するとか、そういう次元も超越するように作られてるんだね。勉強になりました。

そんなことをうただうだ考えつつ朔子さんの後について歩いていたら、バタンという音に意識を引き戻される。おっと。いつのまにかすぐ目の前に朔子さんのものらしき車。黒の外車だ。艶やかで滑らかな車体の右ハンドルには既に彼女が座っている。ボーイさんらしき人が向こう側でドアを開けて待っているようで、こっちに隙のない笑みを向けて待っていた。ひえー、すいません。だって入り口から出てからちよつとしか歩いてないんですけど。いつのまに車待機させてたんですか。

頭の中で言い訳しつつ、引きつった愛想笑いを浮かべながら車に乗り込む。常田さんの車と負けず劣らずの座り心地に俄かに感動している間にドアが閉められ、それと同時に朔子さんはアクセルを踏

んだ。

「一応シートベルト、して頂戴ね」

「あ、はい」

ですね。私のせいでパクられても困るし。ってそういう問題じゃないけどさ。わたわたシートベルトを締めつつ、さりげなく内装をチエックしてみる。外からは真つ黒に見えたけど、中のシートはワインレッドよりちょっと暗めの紅色。しかもさりげなく華の香りがする。どこかで、嗅いだ匂い。うーん、大人の女の車って感じ。この人、いちいち隙がないよなあ。まさに格好いい女の代表。

心の中で何様な品評をし始めると、その思考を遮るように朔子さんが前を向いたまま凜とした声を発した。

「時間がないからこのまま話すけど、いい？」

「あ、ハイ」

きた。急に突きつけられた緊張に自然と背筋が強張る。

さあ、いよいよお出まし。ここからが本番。楓、ファイト！

気を引き締め、こっそりと深呼吸をした。余計なことに気を取らずに、冷静になろう。理性、理性。揺ぎ無いハンドル捌きを眺めながら、できうる限りの平常心を装って私も腹を決める。

「そうね。まずは、貴方も聞きたいことが山ほどあるでしょうから、なんでも聞いて。答えられることは答えるから」

うん。ということは、答えられないこと、ないし答える必要が無いと判断したことは答えないと、そういうことですね。ってことはうだうだ様子を伺って聞いてても時間の無駄かも。

ええと、そうだな。とりあえずさっきまで気になってた、もとい聞き損ねた事実関係を確認しなくちゃ、かな。

「あの、私の同級生の子に接触したのは、あなたですか」

「そうよ」

わあ、清らしいほど悪びれない。私の記憶だとあの子相当怯えてた気がするんですけど。それを踏まえてのこの態度だったら、怖いって。いやいや、とりあえず事実確認が先だ。

「差出人不明の手紙は」

「私」

あけすけなさすぎ。唾然と朔子さんの横顔を見つめると、意図してなのか何なのか、彼女は前を向いたままふつと口角を吊り上げる。いちいち思惑めいてるんだってば。

「そうね。じゃあ一からお話しましょう。あなたが始と新とあなたのお母さん、四人で暮らし始めた頃から、私はある指令を受けていたの」

「指令？」

「そう。佐藤紅葉とその娘佐藤楓の素性調査及び身辺調査、並びに日常生活の監視、情報収集、それらをまとめた定期報告と調査書の提出」

「は」

おーい。

ちょっと、待って。実際予想はしていたけど、そうさざつと言われると、困る。困る、っていうか意外と、キツイ。調査とか、監視とか。探偵ドラマじゃあるまいし。いや、それよかどぎついかもしれない。リアクションにすら困る。

「……マジですか」

「マジよ。当たり前じゃない。あなた達に、うちの連中がどれだけ注目していると思ってるの。当主の婚約者とその娘よ？ 一度目があるとはいえ、気にしないわけにもいかないもの」

「え」

え。

え、ちょ、えええ？

「一度目？」

思わぬ発言に食いつくと、策子さんは私を一瞥するとちょっと馬鹿にしたような目で笑った。

「あら、知らなかったの。あなた、仮にも一つ屋根の下で暮らしていた相手の基本情報すら知らないって、いくら中学生でも問題だと

思っけど」

「もう卒業しますっ」

「あ、そう。どうでもいいわよ。知ってるし」

「ですよね！ くっそ。一条さんバツ一だったんかっ。あのタヌキっ、よくも黙ってたなそんな大事なことっ。いや、流石にお母さんは知ってたでしょ。てことは私だけ知らなかった、いや、知らされなかったってことだ。」

「ちよっとちよっとちよっ。もう、ホントに皆、どういうつもりなの。あーやばい、さっそく頭に血が上ってきた。」

「ま、その辺りも見当つくけど」

「どういうことですか」

「それは後で教えてあげる。話が逸れたわね。そう、それで最初の一年はまあ色々あつて様子見ね。あなた、それから新と出かけて知らない人に話しかけられたこと、あるでしょう」

「ある。そりやあもう、ありますとも。やっぱりですか。やっぱりあなたがたの仕業ですか。どうせそんなこつたるうとは思ってたけど、何割かは新さんフェロモンのせいだとばかり思っていたのに。いや多分それもあるか。なににせよやっぱり大本の元凶はこの人たちだよ間違いない。」

「思わずじと目で見てしまっ。華麗に鼻であしらわれちゃってますけどね。」

「あれはね、あなたを試していたの。新とどういう距離感なのか、どういった対処をするのか、それによってどんな人間か判断するためにね」

「はあ？」

「訳わかんないんですけど。試すって。それはギャグのつもりで言ってるんですかね。どのみち笑えませんけどね。ちっともねっ。」

「ふふ。うちの連中、揃いも揃って陰湿なのよ。それにこうでもしなきゃあなたと接触する事もできなかつたし」

「どういう意味ですか」

「そのままの意味よ。始が何もしなかったと思う？　あなたが出かけるときはいつも護衛を付けていたわよ。一般人装ってでもなきや近づけない具合にね」

「はあー？　驚愕の事実の連続に眩暈起こしそうなんですけど。この人たちも大概だけど、一条さん何してくれてんの、人に無断で。全然知らなかったんですけど。それって私が常田さんに送り迎えしてもらおう前からって事ですよ。つまりそれってさあ、私がどこに行つたとか、何してたとか、逐一一条さんに報告されてたってことだよな。筒抜け状態だったってことだよな。」

「ふざけてるっていうか嘘だと言って。信じらんない。サイアク。何がサイアクかって何も知らされずにのうのうとしてた自分が一番サイアク。屈辱だよこれは。覚えてるよ一条さん。いや一条。絶対この恨みは忘れないからな。」

「あら、怒ってるの？」

「これで怒らないほうがおかしいと思いませんか」

「頭がぼっぼしているので普段なら我慢することもおつぱらと零してしまう。それどころか言つたれ言つたれと急ぎ立ててくるくらいだから始末に終えない。冷静になれー冷静になれー、っーかなつてくださいー。でもムカツクんだよー。」

「ま、しょうがないじゃない。年頃の女の子に護衛付けますなんて怖がられて敬遠されるのが関の山だし、それで不自由感じられたりガードに不都合が生じて困るでしょう。妥当な策じゃないの。知らぬは当人ばかりなりってね」

「当事者の気持ちは」

「安全の前には二の次ねえ。それにあなた、案の定今の今まで知らなかったんだから支障はないでしょう。結局のところ」

「なんか楽しんでるように見えるんですけどこつちや一ミリたりとも楽しくないですよ。安全の前にはってその安全すらキツチリこなせてなかったじゃん。穴という穴から米の如くぼろぼろ零れ落ちてたじゃん。鼠がうまうま群がってたじゃん。やるならキツチリ仕事

こなせよ。

不可抗力？ 知るか。乙女のプライバシーのがウン万倍も大事だね。あーもー信じられない。どいつもこいつも大人って！

「それで、大の大人が子供一人相手にそんなご大層なこととして、なんになるって言うんですか」

些か言葉尻に棘があるのはご愛嬌。大人の事情が不可抗力なら私のこれだって不可抗力なんです。それでもそんな私の態度を気にしていないのか、そもそも歯牙にもかけてすらいらないのか、意に反して朔子さんは幾分楽しそうな面持ちだ。

「あら。大の大人だからよ。大人だから、目的の前には今更な良識や常識なんて通用しないの。あなたの快不快なんて関係ない。もちろん新もね」

「だから何が言いたいんですか」

「あの一件であなたは無視できない存在になったってことよ。不測の事態への対処にしては突飛だったじゃない。私も笑わせてもらってたわ」

入門の話のときね。くっそ。咄嗟だったからって前夜見てた動画の話なんてするんじゃないかった。絶対変な奴って思われた。そのときのことをどうやって知ったか知らないけれど、朔子さんは思いついたように笑っている。美人の笑顔は見惚れるほど素晴らしい。素晴らしいけれど笑っている対象が対象なのでこっちとしては苦いものがある。

それ以上蒸し返されたくなくて、気を逸らすように鏡越しのサイドミラーを無意味に睨みつけた。なんか悔しい。

「やり方はともかく、アレが普通の対応なんじゃないですか」
「あなた自分を解っていないわね。経験があるならともかく、初見のあの事態でアレはないわよ。あなたは充分に普通ではない要素を備えている。少なくとも、一条の幾人かはそう判断した。まあ一部じゃ失笑受けてたみたいけど」

おいおい、ちよっとちよっと、待ってくださいよ。なんてこった。

たったアレだけでそんな大層な話に。そもそも普通だったらどうしたっていうのさ。あの場合誰だってあんな不審な人まともに対手するはず無いじゃん。どうすればよかったんですか。

ああもう早速なんか疲れてきた。話が通じないっていう問題じゃなくて、理解の範疇を超えてる。一体何がしたくて何をさせたいんだか。

いや、ちょっと待ってよ。

「新さんは……」

「そうね、新は気付いていたわよ。だから外ではなるべくあなたを一人にしようとしなかった。でしよう？」

しれつと言ってくれる。けれど悲しいかな、それが私の確信を後押しした。

そうか。いやに付いてくるとは思ったけど、そんな事情があったってことか。知ってたけど、私には言わなかった。どうして。私が怖がるといけないから。それにしてはいやに怯えてなかった？ 予想して私に付いてきたくせに、何に怯えたんだらう。

思考を巡らせている間に赤信号にでも行き当たったのか、車が止まっていた。ふと自然に気付きそろりと横を伺い見ると、ハンドルに手を置いたまま、朔子さんが私を見つめていた。それは一見無表情であつて、けれどギクツとするくらい場違いに柔らかな雰囲気纏う眼差しが、私に向けられていた。

「あの子のあんな顔は私も初めて見た。それが写真でだなんて、皮肉な話かもしれないけれど」

自嘲的な物言いは、およそ目の前のその人には似つかわしくないものだった。けれど戸惑う前に車が発進し、私が声をかける隙も与えず再び前を向いた彼女は語り始める。

「あの男もあなたに目をつけたうちの一人よ。新の状態にも目ざとく気付いて、あなたとコンタクトを図ろうとした。でもそのときはまだ始の方が上手で、難航したわ。あなた方に近付こうとする一条に類あるものはとことん排除されたし、あなたには常田が付けられ

た。手を尽くしたけど結果は全敗。どうあってもあなたとあなたのお母さんを守り通したかったのね、始は」

聞けば聞くほど謎が深まるその話は飲み込むのに精一杯で、けれどその時やっと一条さんの不可解な行動を紐解くヒントを見つけた。いつもにこにこ微笑んで何事もないかのような顔をしたあの男は、けれど常にその背後に何かを隠していた。それを明かそうと私は躍りになったりもしたけれど、今の話を当てはめれば、それは私とお母さんをその得体の知れないものから守るためで、そしてそれは徹底されていた。

思えば常田さんが私の送り迎えをするようになったのは、あの新さんとの出来事があってから。それからお母さんと出かけたときに常田さんが私達に常に付いていると意識したのも、それから間もなくしてのこと。

いや違う。意識、させたんだ。今までは私に内緒だったけど、意識させる必要性が生じたから。私に警戒心を持たせるためと、もっと確実に私を守るため。私に気付かれないように遠巻きに守るだけでは充分ではないと、判断したから。

そうだ。郵便物。郵便物だってそうだ。一条さんあての重要書類は家に届かないなんていつつ、郵便物を一番最初にチェックするのは一条さんだった。その必要があると判断したからだ。自分の認識外の、外部の人間が私やお母さんに不用意に接触しないために？

怖いくらいすると、薄れ掛けていたはずの疑問が掘り出され紐解かれていく。それを知っていたのは誰。一条さんだけ？ でも私がそれに違和感を覚えたくらいだったのに、誰もその当たり前の疑問や違和感について質問することも、話題に出すことも無かった。そうなるって知っていたのは いや、違う。知らなかったのは私。私だけ、だ。

絶句する。言葉すら、見当たらない。何が、どうして。いつからこんなことって。

「解らない。一条さんも、あなた方も。意味が、解りませんよ。なんだっていうんですか。どうして、こんな話。………おかしい。絶対おかしい。みんな、おかしいですよ」

謎は解けていくはずなのに、不可解なことは次々と山積みになっていく。正体の無い獣を前にしているような気味の悪さが、じりじり背後から近付いてくるみたいだ。何も解りたくない。そう思うのに、何も知らないことがとつもなく恐ろしいことのように感じる。私は一体何に怯えているのか。何と、対峙すればいいのか。

気がつくと、また車が止まっているのがわかった。今度はエンジンの僅かな振動さえ感じない。路肩に止められているんだ。ぎくりとして思わず顔を上げると、さっきと同じように朔子さんが私を見つめていた。同じ無表情。けれど底冷えするくらい冷徹な、色の無い眼差しを私に向けていた。

「おかしいと思うでしょう。でもそれが今あなたが対峙している相手。あなたが探ろうとした本性、そのものよ。………残念ながら、思っていた以上にあなたは何も知らなかった。流石にあなたのお母さんは覚悟があるでしょうけど、あなたは………過保護なほど、庇護されていたのね」

酷いほど醒めた眼差しを向けてくるくせに憐れめいたその物言いは、私の頭に血を上らせるには充分だった。

「何が言いたいんですか！」

待て。駄目だ。これじゃ駄目だ。

「なに、どうして……っ。私は、だって、誰も、何も教えてくれなかった。そんな私にどうしろって、」

「喚かないで」

ああ、駄目だ。

絶望的なほど冷静さを失った私に、凍えるくらい冷静さを保ったこの人。

「話してあげる。貴女の知りたいことも、知りたくないことも。全て私が、今から教えてあげる」

敵わない。今の私じゃ、勝負にならない。

凍て付く瞳に捉えられる。頭の中で鳴り響くはずの警鐘も、正常を失った私に聞こえるはずも無かった。

暗幕を張ったような夜闇が広がるどこかの路肩に止まる、一台の車。その閉鎖的な空間の中で、肌を撫ぜる僅かな空調の音を聞きながら、その昔話は始まった。新さんが生まれる、もっとその前に遡って。

「私はね、大学を卒業してすぐに嫁いだの。年端も行かない頃から決められていた相手方の許婚とね。当時の企業統合のはしりよ。政略結婚ってやつね」

そう、朔子さんは言った。ごく普通に、冷静に、他人事の如く、時刻を告げるような、そんな語りだしで。そんなどこかのお話のよくな状況も一昔前のことのように感じるけれど、その風習は今でも多少の形は違えど廃れてはいないらしい。そんなものだから当時なら尚更当然のことで、その頃の朔子さんも特に異論はなかったという。それから当然のように嫁いで、身ごもって、新さんを生んだ。

新さんはやっぱり、朔子さんの息子だった。

一条さんは父親じゃない。一条さんは新さんの、叔父。その偽りの親子像を、少なくとも今の今まで本物だと思っていた私には衝撃の事実だったけれど、朔子さんにはどうでもいいことだったのか、それともまだその話は早いと判断したのか。そこに合間をはさむ隙も無く、朔子さんは淀みなくその過去の出来事を次へ次へと流していった。

そして朔子さんが新さんを産んだ、それが嫁いだから三年後のこと。当時の一条家といえば既にあ的一条さんが台頭していて、一条

家の建て直しの計画の一つだった朔子さんの政略結婚もあいまって、どうにか盛り返しているところだった。新さんが生まれてからは、待望の長男に喜んだ相手方の両親はそれはそれは新さんを可愛がっていたらしい。子供を生んでから役目を果たした朔子さんも事業を始めて、子育てはご両親にまかせっきりの日が続いたそう。夫婦仲は良くも悪くも無く、強いていうならビジネスパートナーの延長線にいるようなものだったと、朔子さんは失笑しつつそう漏らしていた。

それから二年の間朔子さんは各地を点々とし新さんとそのご両親のいる家に帰ることも殆ど無くなり、殆ど他人同然の生活をしていったという。

「一条の跡継ぎはね、殆ど男なのよ。代々で女性がその台頭に立ったのなんてほんの一人か二人。それも相当昔の話。元より私に期待をかける者なんていなくて、私の許婚が決まる前から始が当主の有望株とされていたのよ」

嫌に自嘲気味に笑うその面差しにおかしな既視感を覚えて、なんだか戸惑う。私には兄弟なんていないのに。同調するほどでもなかったけれど、なんとなくそのときの気持ちが解るような気がして、けれど私はただ相槌を打つだけに留めた。

朔子さんも気に留めて欲しいとすら思っていなかったのか、なんごとはなさそうに話を続けた。

「楽しかったの。私に向いていたのね。ひとところに大人しくして家を守っているより、自分で会社を動かすほうが余程有意義だった。一条の家にいた時は殆ど嫁入りのための教育ばかりされていたから、余計に外の世界にのめりこんだわ。まあ楽しいのは今も、変わらなっただけだね」

つまり朔子さんにはお嫁に入るなんて殊勝な真似は向いていなかった。そういうことなのだろう。

家を空けて、新さんは両親にまかせっきり、夫の動向に気を向けることも無く、ただただ外の世界を飛び回っていた。それが因果な

のか、それとも別の要因があったのか。気がつけば夫は愛人を作り、それどころか子供まで作り、しかも男の子。事実上は次男でも、相手の女性は相手方の一族の女性。両親の愛情はそこからすっぱりと新さんからその新しい子供に移り変わり、気がついたときは離れに一人新さんが置き去りにされていたという。その時新さんは三歳間近、よちよち歩きの甘えたい盛り。賑やかな母屋の声も届かない離れで一人、最低限の世話だけで、家族の誰も新さんには寄り付かなかったという。

「嫁いだ女が本当は高慢ちきな実力主義で、家にも寄り付かず機嫌を伺おうともしない。そんな女の息子だから、替えが出来たと解つてすぐに乗り換えたんでしょね。その頃には事業の統合も済んでいたし、私は形式上の嫁として、長男の新は無視され、本家筋の血を継ぐ者が事実上長男としてもはやされた」

朔子さんが新さんと顔を合わせたその時は、丁度一年ぶりのこと。朔子さんを見ても寄り付かず、離れの窓から空を眺めていたらしい泣き声もあげず、あるはずの感情の機微も見せず、新さんは自分一人だけの世界を作り上げていった。そういった様子が子供らしくなくて誰も彼もが新さんを気味悪がっていたと、朔子さんは笑って言った。

「困ったものよ。玩具を買ってきてあげたっていうのに、受け取るなりにこりともしないで『ありがとうございます。嬉しいです』って。棒読みよ。ちつとも喜んでいないのが丸解りだったし、子供の癖に何を考えているかも読み取れなくて、ああ気味悪がられるのもしょうがないって思ったわ」

「……自分の子供でしょう」

「そうね。でもあの子、三歳にしてもう独自の世界を作り上げていたのよ。誰も彼を育てなかつたから、彼は自分で自分を育てた。会うたびに教えてもないことを覚えていて、でも一度も笑つたり泣いたりしなかつた。……正直、あの頃はあの子に会うのが怖かつた。得体が知れなくて」

他人事だ。この人は心底他人事だと思つて話している。そんな、親が、自分のお腹を痛めて生んだ子供を相手にして、得体が知れないなんて思つてしまうその気持ちは、私には理解できない。

理解できないけれど、ふいに初めて新さんと出会つたときのことを思い出してしまつた。機械的な機微しか見えない、不思議な雰囲気を持つたあの少年を。

「それから、あの子が五歳になつたところ。いい加減私も居場所がなくなつていたし、頃合だつたのね。あの……父が、ね。相手方に縁を申し出たのよ。統合で得ていた自社株の何割かの無条件譲渡と引き換えに」

「離婚した、つてことですか」

「そ。相手方には願つても無い好条件よね。でしゃばつていた目障りな嫁と、邪魔な長男をまんまと追い出した。私と新は父にとりなされ、本家に戻つたのよ」

それから。それから、また朔子さんと新さんは別々の道を辿つた。朔子さんは一条さんの下につく形で事業に貢献し、新さんは一人本家で一から教育を施され、他家の血は混じれどその資質の高さを見込まれて、後継候補の一人に組み込まれた。それから渡米して飛び級を経て大学を卒業したのが十二歳の頃。後に帰国して中学校に入学し、そして。

「そして……？」

辺りは真つ暗で、カーライトもついていない。付属のナビの心もとない明かりだけを頼りに隣を伺つても、その表情は伺い知れないけれどやっぱり、彼女は笑っているような気がした。あの夜すれ違つたときのような、そんな微笑で。

「それからつて言つても、それから先は貴女の方がよくご存知ですよ？」

「大事なところが抜けてます」

「大事な、ところ」

それは、

「新さんが帰国してから、一条さんの息子としてうちのお母さんに
出会い、私に紹介し、四人が生活するまで。その推移です」

それは、パンドラの箱だったのかもしれない。或いは甘く熟
れた、禁断の果実。どちらにせよそれに手を伸ばしてしまった時点で、
引き返すことはできなくなっていた。

夜闇の中で朔子さんの笑みが途切れたことを、私は知らない。

それは、一枚の写真だった。

上から見下ろすような、それこそ第三者の視点を切り取ったよう
な、そんなそっけない一枚。きつと望遠で撮ったのだろうと素人で
も解るような斜め上よりの角度からは、当然誰の視線も笑顔も向け
られていない。勿論記念撮影の類でないことは一目瞭然。まだるっ
こしいこと抜きで言えば、盗撮なのだろう。

その不躰な一枚に映っていたのはフラッシュの必要も無いくらい
眩い昼の陽光と、清潔感と調和に溢れたどこかのロビー、そして或
いはそこを利用してゐるだろう人々。焦点は勿論、その中心に宛が
われている。

艶やかなこげ茶色の円卓の傍らに三人の男女が立っている。撮つ
た人間の腕がいいのか、ただ単にタイミングと角度が良かったのか、
頭上からでもしっかりと顔が確認できる出来合いだ。にこやかに向
き合う壮年の男女と、男性側で感情の機微も現さず佇む少年。それ
が誰と、誰と、誰であるかなんて、いちいち確認するまでも無かつ
た。

彼女に手渡されたそれを暫しじっと見つめていたけれど、ぱちり
と音がして、車内の照明が再び途絶え、馴染んだ薄暗がりに染まっ

た。もはやその写真を見つめている意味もなくなって、私はそれを手渡した人に写真を返した。

「……これが？」

新さんの表情だけですぐ解った。それでなくとも、一年だけでも成長期の少年の顔つきに多少の変化があるのだから、当然頷ける。

つまり この写真は、私が初めて新さんと出会ったときよりも前に撮られたということになる。何故かってそれは、新さんの顔つき云々の前に、そこに私が居ないのだから。

「見ての通りよ。あなたはどう思ったの？」

「……そういう問答は、もういいです。本題に入ってください」

「……そうね」

もしかしたら。もしかしたら、きつと、多分、ワンクッション入れてくれたのはこの人なりの気遣いだった、のかもしれない。

写真一枚ごときでそんな気持ちも上手く汲み取れなくなった私。

余裕のストックが、もうない。

「あなた達が出会う二ヶ月ほど前、始と新、そしてあなたのお母さんはこのホテルのロビーで落ち合ったの」

それは、私の知らない、本当にひとかけらも知らされなかった、新さんと一条さんと、お母さんの話。

帰国した新さんがある事情で事故に合い、その頃から一条さんは新さんのお見舞いに行ったりと頻繁に接触し始めて、そしてその時期が丁度お母さんと一条さんが出会った時期と重なる。新さんが病院から退院した頃になると、一条さんが新さんを引き取りたいと朔子さんに直接申し出たらしい。

元々、一条の慣習として、当主が次期当主、或いは次期当主候補を傍に置くということは代々でもよくあったことらしい。そうすることによって次期当主候補は当主に認められたとして実質次期当主と見做されるようになり、周囲の反応も変わる。名実共に次期当主、

未来の当主としての本格的な教育と自覚を得るための一環として、当主が認めた次期候補、または次期が、家族のように、親子のように、当主と生活を共にする。そんな慣わしがあつたそうで、誰も疑問や異論を唱える者もなく、勿論朔子さんもあのお爺さんも否を唱えることはなかつたという。

それで、突然。本当に突然、本家に住んでいたはずの当主、一条さんは新さんを道連れに本家を出て行ってしまい、内密に購入していたマンションの一室へと二人だけで越してしまつたらしい。親子と、銘打つて。

「そりやあもつ、大騒ぎよ。本家に居なきやならないはずの当主と次期候補が居ないんだから。古参の連中なんて真つ赤になつちやつて、そんな話を聞いてなかつた私は大目玉を食らつたわよ。始の馬鹿のせいだね」

それから、経緯はともかくもどうにかこうにかその古参の人々も、一条の人々も、勿論朔子さんやお爺さんすらもねじ伏せて、一条さんはそのままそこに新さんと一緒に落ち着いてしまつた。

一条さんは尤もらしいことを言つて一族の人をやり込めてしまつたそうだけれど、朔子さんは一条さんの目論見を探っていた。そして一条さんと新さん、それから私のお母さんとの接触を知つて、一条さんの『目論見』に見当がついたと、言つた。

「目論見？」

理解の範疇を超えた話は遠すぎて、朔子さんの指し示す話の筋さえ読めなかつた。ただ、オウムのように意味さえ解らず問い返すと、隣で苦笑を返された。ような、気がした。

「あなた、始を随分と誤解しているみたいだけど、そんなに生易しい男じゃないわよ」

じゃあどんな人だというんだろう。

脳裏にふと、いつものように穏やかに笑っている一条さんが浮かんだ。そう言われてみると確かに、生易しくはないだろうと思える。けれど優しかつた。お母さんにも、新さんにも、そして私にも。

優しかった。確かにあの人は、優しかったはずだ。

「あの男はね、新を利用するつもりなのよ。だから新に余計な影響を及ぼすものから隔離して、自分の手元に置いたの。都合のいいように使うために」

「使う、って」

「始には前妻が居たって、言っただわよね。その人、最初はよく笑う人だったのよ。本家に入ってからだんだんと笑わなくなって、人形みたいになった挙句、逃げ出したの。ある日突然。失踪ってやつね」

普段の私なら、そんな話を他人事どころかドラマの話をするような感覚で話す相手に、嫌悪感を示しただろう。でもどうしてだろう。そんな当然の感情すら、引き出されるのに時間がかかる。次々放り込まれる情報に、追いつかないみたい。

この人も、あのお爺さんも、そんな話を私に聞かせて、どう思えというの。

「思えばその頃からののかもかもしれない。誰も気付かなかったけれど、多分きつとそう。始は当主を辞めたがっている。貴女のお母さんと出会ってからはそれが顕著になった。で、押し付けようとしたのよ。新に全部、ね」

一条さんが、新さんに押し付ける。
利用、する。

嘘だ。

「……母親として、思うことはないんですか」

別に反発心とか、攻撃的な意味で聞いたわけじゃない。ただ本当に、自然すぎるほど他人事みたいに説明するから。

でもきつと、愚問だったんだろう。可笑しそうにふっと笑って、緩やかに首を振った。まるで私に「馬鹿なことを聞かないで」と優しく諭すように。

「そりゃ、思うことはあるわよ。してやられたってね。だって私も新を利用しようと思っていたのに、先を越されてしまったのだから」

ありえない。

新さん。本当に、新さんのお母さんなの。なんか、怖いよこの人。硬く閉じた瞼の裏に、あの時見た新さんの後姿が浮かぶ。決して表情の伺えない、薄暗い新さんの背中。

「もう解っているでしょう。私だけじゃないわよ、あの爺もそう。誰も彼もが新を利用したがつてる。さしずめ今は新争奪戦、かしらね」

ああ、そう。あの人の良さそうな爺さんもか。

今更驚かないけど、やっぱりかとガツカリする。どいつもこいつも、反吐が出そう。ていうか眩暈を起こしそうだ。何もかも無茶苦茶すぎる。

「一条にはね、『翁』という古参がいるの。当主の上とでもいうのかしら。ようは会社で言うとする社長の上の会長よね。複数人居るんだけど、その多くが前当主とか、前当主候補。あの爺もそのうちの一人。旧世代の異物。老害の吹き溜まりよ」

無機質に話していた朔子さんの表情が、その一瞬だけは、汚点を晒すかのように苦々しく歪んだように見えた。

「元々がね、当主を諫める役割だったんだけど、いつからか当主を退いてなお一条を動かしたがる馬鹿共の巣窟になっちゃって。いまじゃ自分の推した当主候補が当主になると発言力が増すものだから人材集めに躍起になってるのよ。揃いも揃って馬主気取りよ、笑っちゃうわね」

嘲るように言う朔子さんは、もう私の返答なんて待っていないようだった。まるで独り言を呟くみたいに、淡々と話し続ける。

「あの爺は新に目をつけたのよ、誰よりも早くね。それなのに始が横から新を搔つ攫ったものだから、面白くないのよね。それで私を動かして新の動向を探って、そして今度はあなたに目をつけた。ここまで言えばもう解るでしょう」

解る。

解る、けど、解らない。新さんが変わったのは解る。確かに、みんな住みはじめてから、新さんは変わった。何がとは言えないけ

れど、最初よりもずっと柔らかくて優しい雰囲気になった。でもそれは私のせいとかじゃないし、多分環境のお陰なんだ。一条さんの思惑がどうあれ、あれだけ穏やかな人たちに囲まれていれば、どれだけ頑なな心の持ち主でも一年もあれば嫌でもほぐれてしまう。私だって。私だって、その一人だ。

だからこの人が言う一条さんがどうの言う話だって全く信じられないし、たかが他人の私に目をつける理由にもならないはずだ。少し、仲が良いってだけで？ そんなのは、大げさすぎる。いくらなんでも。

戸惑いが顔に表れていたのかもしれない。じっと私を見下ろしていた朔子さんは呆れたように小さくため息をつく、再び車内の照明をつけて私に一枚の写真を差し出してきた。それは　あの日アイスを食べ損ねて、喫茶店を飛び出したときの写真だった。

「これは……」
「あの時おかしな男に絡まれたでしょう。それからあなた達は帰ったのよね。二人仲良く、手を繋いで」

いやに含みがある言い方だ。でもやっぱりあの男もこの人の差し金か。怒りを通り越してももう呆れる一方だ。

「別にどう思われても今更かまわれないけれど、一応弁明しておく。彼は独断だったのよ。私は何も指示してないもの」

「はあ……」
本当に今更だよ。どうでもいい。

「まあいいわ。それでね、それが決定的だったのよ。あなた、なんの躊躇も無くあの子に触れてるじゃない」

「……それが？」
そんなの今に始まったことじゃないと思うんだけど。そりゃ今までだってベタベタ触ったことなんて無かったけど、触るくらい日常生活でありえることでしょ。

「それがじゃないわ。それこそ、よ。あなたは知らないだろうけど、あの子は……なんて言うのかしら、一種の接触嫌悪？ 潔癖症とは

また違つてね、他人との触れ合いを拒否する癖があつたの。母親の私でもあの子に触れたのなんか数えるほどしか無かつた。いつも他人と距離を置いていた。そうしないと落ち着かないからよ。手を繋ぐなんてもつてのほか」

「それは、病気とか……」

「さてね。必要に迫られれば我慢できていたようだし、本人の意思じゃないかと私は思うわ」

意思、つて。なんか、言つてることむちゃくちゃじゃないの、それ。

そりや嫌になるでしょ。ちっちゃい頃から誰にも相手にされないで過ごしてさ、それがいきなり手のひら返されてちやほやされてると思えば結局誰も自分のことをちゃんと見てないなんて、ふざけてるにも程がある。わたしが新さんでも『誰も近づいてくるな』つて思うかもしれない。

いや、正直なところ、解らないけれど。私は新さんじゃないからでもそんな環境に居れば他人にうんざりするのもしつたことなのかもしれない。期待も何も無い目で見てしまうのだから、しょうがないのかもしれない。初めて会つた、あのとときみたいに。

「これで解つたでしょう。新はあなたに心を許してる。それにあの爺が目をつけるのも、遅かれ早かれ仕方ないことだつたのよ」

「それであんな回りくどい真似を。どういう方法使つたか知りませんし知りたくもないですけど、他人まで巻き込んで。あんな真似したら普通警戒しますよ。やることにつじつまが合つてないです」

なんでだろう。無性に苛々する。食つて掛かるように言つた私にけれど朔子さんは意に介した様子も無くしれつとした様子で言つた。「それは、私」

「は？」

「だから、そう仕向けたのは私よ。あの爺に普通に呼び出されたんじゃないあなた、いいところ丸め込まれて思う壺だつたでしょう。ああでもしなきゃ警戒心なんて持たなかつたんじゃないの。ヒントもちや

んと用意してあげたし」

「それは……」

あれか。彼女が最初から私のことを『一条さん』って呼んでいた、こと？ そりゃ、可笑しいなって思ってたけど。内情を知る人間じやなきゃ私のことわざわざ一条さんなんて呼ばないはずだし、そうなるとうち八九一条の関係者だということ。しかもあえて一条呼びってことはそうさせられたわけだって ああなるほど、だからヒントね。

いやいやいや。だとしても尚更訳わかんない。益々訳わかんない。この人あの爺さんの手先なんじゃなかったの？言ってることやつてることちぐはぐ過ぎない？ 何がしたいのこの人。っていうかどうしたいの。どうして欲しいの。

いよいよ頭が混乱してきた。ああもうキャパオーバーだってば。

「結局私にどうしろと……」

言いよの無い疲労感に、自然肩も下がる。

もう何聞いても驚きようが無いわ。さっさと聞いて帰る。

「身を引いてほしい」

は。

え？

緩慢に顔を上げると、かっちりと目が合った。ぎくりとするくらい、真摯なあおの眼差しと。

「出て行って欲しいの、あの家から。勿論あなた一人で。そして一条と縁を切って、生涯関わらないと約束して欲しい」

は、い？

それは、暗闇でも解るくらいに、明確な訴えだった。

嘘偽りの無い、真摯で誠実な、そう まるで彼がいつも向けて

くる、真っ直ぐな瞳で彼女は言った。

「これはあなたのためでもあるの。

藤楓さん」

私と、取引しましょう。佐

佐藤かえでと取引

「取引、て……」

とりひき。

なに、それ。

てか、話す相手、間違ってるし。いやだって、部外者じゃん私。何も、知らされてなかったし。なんでいきなり私ですか。

え。

え　　わたし？

「あなたで合ってるわ、楓さん。正式な書類は追々こちらで用意させてもらうけれど今日は　　それを受けるかどうか、あなたの意思を確認したかったの」

いやいや、書類って。ちょっと待ってよ。いきなり意味わかんない。出てけとか、縁を切れとか。

はい？ さっきなんて言った？

「ひ……ひとりで、って」

呆れるくらい、喉が引きつる。

淡々と事務的に話すこの人から見れば、私はみっともないくらい今取り乱しているだろう。

だって意味わかんない。なんでいきなり。どうして、私が。

急に、心臓が身体の中から追いついて立ってるみたいに打ち鳴らす。寒いのか暑いのか、握った手のひらに汗が滲む。

「じゃあ、言い方を変えるわ。みんなの幸せのために身を引いてくれるかしら？　佐藤楓さん」

みんなの幸せ。

なに、その、ほわほわした言い方。幸せって、私は？

いや。じゃなくて。

落ち着きなよ。落ち着いて。そうじゃなくてさ、色々おかしいじやん。そうだよ。色々おかしい。さっきの話だとさ、この人あのお爺さんに恩があるんじゃないの？　なのに爺とか言ってるし、邪魔するようないざつかりしてるみたいだし。それに一条さんのことだって、言っていることが曖昧すぎるし。それにほら、あの写真。写真のことだって、ちゃんと聞いてない。

そうだよ。そう、落ち着いて。落ち着くんだ。そう、必死なくらい自分に言い聞かせながら硬く目を閉じて、数秒息を止めていた。何故だか、深呼吸したほうが力が抜けてしまいそうな気がしたから。そうしてやつとの思いで最低限の自分にとつての体裁を整えて、どうにかこうにか朔子さんの方を向いた。逃げ腰のように、目を合わせることができなかつたけど。

「意味が、解りません。そんなことする義理もありませんし、させられる理由も無い。受けるわけがありません」

「いいえ。あなたは受けるわ。というより、受けざるを得ないの。あなたは断れないし、断らない」

「なんでそんなこと……」

いやに断定的で自信に満ち溢れたその物言いが気に食わない。

気に食わない上、信じられないことに　　怖い。心が、気圧される。

「解るわよ。だてにストーカー紛いの真似してないもの。あなたのことなら多少のことには検討がつく」

自嘲気味に言いながら、はあ、と疲れたようにため息をついた。疲れたのはこっちだ。いつそ何もかも投げ出したい気分ですれでも言うべき言葉を搜していると、ふいに車のエンジンがかげられた。常闇のように真っ暗だった車道に薄ら青いライトがパツと照る。

「時間が時間だし、もう出るわ。行きながら話すから。シートベルト、締めて頂戴」

あなたの言うことなど聞きたくない。このまま帰るから下ろして

ください。そう言っつてしまえたら、どんなに楽だろう。

けれど私をそう言わせないだけの引力が働いていて、結局私は言われるがまま、けれど無言でシートベルトを締めた。車はそれと同時に緩やかなスタートを切った。

もう、止まらない。

「現状を話すよね、酷くややこしいのよ」

「これ以上にですか」

「……そうね。それ以上に」

私の棘を含んだ言い方に苦笑を返してくる。さつきとは打つて変わって億劫そうだ。まるでこれから話すことを指し示すように。

「まずはあの男の話ね。あの男の目的はあなたを餌にして新を釣ること。そして自分の手元に戻すこと。それがあの男、一条源治の目的。だからあなたにはあれだけ甘い態度だったのよ。気味が悪くて何度席を立ちたくなつたことか」

吐き捨てるように言つたその面差しは前を向いていたけれど、多分あの爺さんを思い起こしているのかもしれない。第三者の私ですら異様に思うくらいその面差しにはありありと憎しみが籠もつていて、とても一般における実の父親に向けるような眼差しには当てはまりそうもない。

父親の居ない私に、その一般がどれほどのものかなんて、知らないけれど。でも、あの裏はありそうだけど悪い人ではなさそうなお爺さんに向けてそんな顔をするほどなのだから、あのお爺さんもよつぽどの食わせ者なのだろう。そんな人とにこやかに話して一瞬でもほだされかけた自分が怖い。

こんなことという肯定しているみたいだけど、この人があんな不審な真似して呼び出さなけりゃ、完全にお爺さんのことを信用しちやっていたかもしれない。それほど、いや、今でも半信半疑なのだから、困る。一体この人の言っていることと、あのお爺さんの言っていたこと。どちらが本当なのだろう。

「あの、さつきから色々大げさに言つてくれますけど、私にそん

な価値はありませんよ」

「あるわよ。……あるの。あの子は始に似て甘いところがあるから。あの爺もそれを知っているからあんな薄ら寒い演技までしたのよ。」

あなた、ちゃんと解っているの。あの男はね、あなたが思う以上に自分本位で、我欲しかない、下劣な男なのよ」

そんな、剣幕で言われても。どれだけあの爺さんを憎んでいるっていうんだろう。

意外なほどに感情をむき出しにして吐き捨てた朔子さんは、小さく息をつくとき、改まったように落ち着いた声で言った。

「あの男、『あんなに子供らしい笑顔を浮かべたあの子は、初めて見た』って言ったわよね。近頃会ってない筈の祖父がどうやって孫のそんな顔を見られるというの。十中八九盗撮か、なんにしてもまともな手段じゃないわよね。そんなことする爺が人当たりのいいお爺ちゃんな訳ないじゃない」

「……それは」

「それだつてどうとでも言い逃れできるけど。だけどあなたに散々話をせがんだのだから、あの子とどれだけ関わっているか読み取るためよ。あなたが新を釣るための餌になりうるかどうかを見極めていたの」

餌つて。

いや、それにしても、やっぱり解らない。私が新さんの餌になるとか、どうにも理解できない。新さんがそこまで私を気にするだろうか。そりゃ、見捨てられてもそれはそれで困るけど。」

「まだ半信半疑って顔ね」

う。ばれてる。てか運転に集中してよ。こっち見ないで。意味はないだろうけどサイドミラーを見る振りをして顔を背けると、くすつと横で軽く笑われた。

「あなたたつてやっぱり素直。そういうところが付け入りやすいつてあの男も見抜いたわよ、きつと。今後気をつけなさいな」

「……ゴチューコクどーも」

この歳でそんな話聞く前から全部疑ってかかるような疑心暗鬼な高校生が居たらお目にかかりたいもんですわ。けっ。

「ま、そりゃ私に言われたくはないわよね」

はいそのとおりです。あんたが一番疑わしいってんですよ。

「……始もそうだったのよ。あの頃はあれでも、馬鹿正直だった。

親の決めた婚約者同士だったけど、とても素直で……ほんと、世間知らずなお嬢さんをお嫁さんにして。何にも知らないって顔で、ほわほわ笑う柔らかい人だった。それで感化されたのか、それまで仕事一辺倒だったのがどんどん顔つきまで変わっていった。……それで、欲が出たんでしょうね」

「あの……一条さんの、前の、奥さんのお話です、よね」

いきなり話がシフトチェンジしたから思わず確認を入れると、朔子さんは「そう」と頷いた。そのまま私の返事を待たず、過去を思い返すように話し始める。

「それまで爺共の話には大抵のことには逆らわなかった始が、否を唱えだしたのよ。一条のあり方に疑問を持ったのね。自分にはそれを変える力があると過信したのよ。若かったの。生まれたところから当主候補の一人に選ばれて、周囲から期待されてちやほやされてた。そのツケね、きっと。自分に自信を持ちすぎていた」

あの一条さんに若いときが……いや、あるか。あるよね。流石にあっただか。

ほっとしたような信じられないような気持ちで、そんな一条さんを想像してみた。若くてニコニコ笑う可愛い奥さんが居て、自分の仕事も上手くいって、権力もあって、若いうちからそんな力を手にしたら何でもできるって、思うかもしれない。幸福ゆえの活力、っていうか。多少のことには「大丈夫だろ」って思っちゃう気持ち。そんな、気持ちを持ったことがあったのかな。あの一条さんにも。

「まあ、結果的に言うとは勿論返り討ちよ。その頃は奥さんと一緒に本家に居たから、多忙な始に付け入る隙は充分あったのよね。気付いたときにはもう彼女は笑わなくなっていて、まあ……色々あって、

彼女が家を出たように見せかけてそのまま崩しに離縁、つてわけ。そのごたごたで始の改革も元の木阿弥にされていたし、踏んだり蹴ったり」

「……それで」

「そう。それで始はどこまでも利己的な一条のあり方に見切りをつけて当主の座を降りようとしたけど、でも当然許されなかった。

もう解るでしょう？　そういうわけで始も新に目をつけたのよ。

そして誰かの手で懐柔される前に、自分の懐に困ったの」

そんなこと、言われても。

確かに辻褄が合っている話に聞こえる。聞こえるんだけど、違うような気も、する。そりゃ一条さんもあのお爺さんも一筋縄ではいかなそうなんだけど、でも一条さんはあのお爺さんとは似ているようで、根本的に違うような気がする。そうとしか思えない。

だって、あのお爺さんは初対面で内面なんか底知れないけど一条さんは　あの方は、一年だよ。一年、そう濃密ではないにせよ、一緒に過ごした人だ。今言われた真実が事実だと裏付けるには足りない。そんなとってつけたような理由で一条さんが新さんを『息子』と呼ぶなんて、絶対に思えない。この人が嘘を言っているようにも聞こえないけど、一条さんがただそれだけの為に新さんと一緒に住んで、あんな風に笑っているわけがない。

きつとこの人が知らない真実があるんだ。それこそ一条さんだけが知ってる、理由が。そうでなくて全てが演技だって言うのなら、私は間違いなく人間不信になる。いや、もうその演技とやらの片鱗をあのお爺さんにまざまざと見せ付けられたんだけどさ。

それにそうだったとしても、どうだとしても、それで私がお母さんの下を離れる理由になるだろうか。ならないよ。いざとなればなりふり構わず大反対してお母さんとあそこを出て行けばいいだけの話だ。そうだよ。どうして私が一人で出て行かなきゃならないんだ。馬鹿馬鹿しい。

「話になりませんよ。あなたの言っていることだって、憶測でしか

ありませんし、私が信じる理由もなければ義理もありませんよね。その話がただあなたの都合のいいように事実を改竄されていると考えたほうがまだ納得できます」

一気に言って、ごくりと、唾を飲み込んだ。これ以上の話をされても、私には判断がつかない。解らないことはまだあるけど、このままやり込められてしまうよりマシだ。

気まずい気持ちで、けれどももう飲まれてたまるかと思い込みながら、暗闇に紛れて隣にそろりと視線を移した。彼女も私を見下ろしていた。表情は見えない。見えないというのに、ひどく居心地の悪い視線に晒されている。そんな気がした。

どのようかと言えば 駄々をこね泣きじゃくる子供を見下ろす、赤の他人のような、決して暖かくはない、眼差し。

「そうね。私の主観から話しているだけだもの。そう思ってくれてかまわない。けれど あなたも何か思うところがあったから、ここにいる。そうでしょう?」

「そうですね。でも、もういいです。無駄に混乱するだけだからわかりましたから」

なんて白々しい。頭の中で、自分が自分に鼻白む。彼女の言う『思うところ』が、まだ私の中に引っかかっているというのに。それはまだ鮮明に、私の大切な人の声そのもので、何度も思い起こすことができる。

『あんなに素直でいい子がそうあれない環境なんて、地獄でしかないんです』

『私は平気です。望まれるまま、それに従います』

『あの子が大好きなんです』

お母さん。

「何も知らなくていいと?」

「はい。もう、結構です」

『もっとよく考えるべきだ』

『僕はそんな覚悟を望んでいるわけじゃない』

一条さん。

「駄目よ」

「は？」

「駄目。知りなさい。あなたにはその権利と義務がある」

『変な顔』

『寝なよ。大丈夫だから』

新さん。

『だいじょうぶだから』

ねえ、新さん。

「言ったでしょう。一条の当主は本来本家に居なければならぬって」

ねえ、みんな。

「当主だからと言って、いつまでも押し通せるわけがない」

みんな、何を。

「ましてや一条となんの縁もコネもない素性も定かでない女性との

結婚まで押し通すんだから」

なにを。

「あの連中が許すはずがない。遅かれ早かれ新が、始とあなたの大
事なお母さんが」

何を、隠しているの。

「本家に囲われる。一生、あの家に縛られることになるのよ。
勿論、あなたも一緒にね」

は。

じれったいくらいゆっくりと顔を上げると、目が合った。息が止
まりそうなほど真っ直ぐな、いつか見たことのある、その揺ぎ無い
瞳と。

「そうなたらあなた自身の自由もないし、あなたのお母さんは飼
い殺しにされていずればあの女性と同じ末路を辿るでしょうね。良
くてお人形、悪くて傀儡よ。まともな神経してたらあんな連中と付
き合っていくなんて無理よ、絶対。もしくは始のように新を売るな
ら　あなたと、あなたの大事な大事なお母さんと、始は自由にな
って、素敵な人生を送れるんじゃないかしら」

は？

今度こそ掛け値なしに、顔が歪んだ。

怒り。怒りだ。不快だ。とにかく頭の中を無遠慮に乱雑にかき乱
された、そんな最低な感覚が駆け巡った。

「馬鹿言わないで！　いい加減なこと言わないでくださいっ」
「言っていないわ」

「言ってますよっ、さつきからめちゃくちなことばかり！ 自由はないだの飼い殺しだの、なんだってんですかっ。売る？ 新さんを？ あの子は物じゃありませんよ！ 馬鹿にするにも程がある！」
「黙って。静かにして。喚かないでと言ったはずよ。これで二度目。三度目は言わせないで頂戴」
なに。

なんなの？ この人本当に新さんのお母さん？ ばっかじゃないの？ 馬鹿ばかりだろこれ！

「あなたが新さんのお母さん？ それこそ嘘でしょう。嘘なんですよ。そんなわけないですよ。それこそ信じられない」

「信じなくてもいいから話を聞きなさい」

「だからっ」

「聞きなさい」

悔しい。

こんな時、どうしたらいいんだ。どうしたら、それが正解だって言えるんだろう。

このままここを飛び出したい。けれどそれを絶対にできないと押し留める自分がある。結局この人の、この人たちの思うがままじゃないか。どうしたらいいんだ。ああ、もう。

「解ったでしょう。始は新を自分の身代わりにするつもりなのよ」

「……違う」

「そうなの。あの男はそういう男よ。あの子の一生と引き換えに自由を望んでいるの」

「違う。違います！ ……じゃあ、じゃああなたこそなんだって言うんですか！ さっき言ったことと辻褃が合わない。何がしたいんですかそんな話を私に聞かせて！ 一体誰の味方なんですかあなたはっ」

「私は、私の味方。それだけ。そしてその為には、新が必要なの。でも今本家に奪われたら元の木阿弥になってしまふ。だから例え始の傍だとしても、もう少しだけ外に置いておきたいのよ。……その

為に」

やんなるくらい温度のない言葉が、そこで途切れた。

無駄に長い一拍を置いて、朔子さんはぼつりと、けれどしっかりと宣言した。

「一条と縁を切ってもらわなければいけないの。あなたに」

それは。

それはやつぱり、私だけなのだ、示唆していて。えもいわれぬ感覚に、皮膚の下がぞわぞわした。

「どうして、私が」

勝手に薄ら笑いが浮かぶ。

変だな。妙に息苦しい。

「あんな家でも一条だって最低限の血統は守ってきた。始はあなたのお母さんと結婚すること引き換えに相続権を放棄させられる。だからといって、次代の新までそんなことになったら示しがつかない」

一言一句聞こえているのに、意図文字たりとも意味が解らない。脳みそが動かない。動きたくないって、言ってるみたいに。

「うちの連中は、あなたが新を誑かして一条に取り入るつもりなんだって、本気で懸念している。怖いよ。当主を意のままにしなければ気が治まらないの」

ああそうか。

そうか！ 私が新さんとそういう仲になると！

酷い侮辱だ。顔が引きつるほど、頭に血が上った。

「ありえない！」

「あなたの意見は聞いてない。そういう可能性があるという事実が重要な。それを忌避するためにはあなたごと困って一生監視するか、あなたが縁を切るか。そのどちらかしかないのよ」

「どうしてそんな。ありえない。極端すぎる。異常ですよ！」

「あなたが新を変えたから。だからその可能性を見出したのよ」

そんな、そんなの。違う。私は何もしていない。何かしたとして

も、それでもそれは違う。そんな話じゃない。この人もその一条の人たちも、勘違いしている。いや、そうじゃなくて解らないんだ。この人には。この人たちには。新さんのことが。彼のしてきたことが。

私を変えたんじゃない。そんなんじゃない。新さんは自分で、自分の力で乗り越えたんだ。この一年頑張つて、自分で変わろうとして、変わつて、受け入れたんだよ。一年かけてやつとの思いで、それまでされてきた全てのことを受け入れて、変わることができたんだよ。私を変えたとかそんな単純な話なんかじゃない。それは新さんの、新さんだけの、途方もない思いの結晶で努力の結果なんだよ。それだけのことを新さんは、成し遂げたんだ。これまでの一年。たったの一年で。それまで生きてきた十数年分の思いを、ひっくり返した。

それがどんなに凄いことなのか、何にも解つちやいない。解ろうとしてもいけない。そんな人たちの中で新さんはずっと一人で生きてきたんだ。誰も解つてくれない、解ろうとしてもしてくれない、それこそ孤立無援の世界で。

悔しいやら悲しいやらで、喉が詰まる。なんでこんなにやるせないんだろ。どうして新さんはそんな世界で耐えてこれたんだろ。こっちは想像するだけでこんなに息が詰まるほど、苦しくて悲しくなるって言うのに。そんな子がどうしてあんなに優しく、屈託のないいい子に育てるって言うんだろ。

凄すぎるよ新さん。なんで、どうして、あんな顔で笑えるの。笑ってくれるの。

「……そ、そうだと、しても、お断りします。私にだって、優先順位つてものがあるんです」

言い訳がましく聞こえたかもしれない。だって自分にですらそう聞こえた。

でも、ずっと前から私の気持ちは決まってる。お母さんを守る。一条さんが現れてからはそれを『見守る』に方向転換したけど、結

婚する相手の実家がそこまで不穏なんじゃそんなことも言ってもらえない。例えお母さんが悲しもうと、これからもっと苦労しそうなところにお嫁になんか行かせられない。

「……お母さんのことね」

「関係ないでしょ」

思った以上にきつい口調になってしまった。それが余計に肯定してしまったようで、しまったとは思いつつも今更訂正しようもない。反骨心に任せて顔を背けると、暗がりのサイドガラスの中の自分と目が合う。露骨なくらい、苦渋に満ちた情けない顔だった。そんな自分からも目を逸らす。

ああ、もう。誰か。

「貴方はそれでいいの」
「なにが。」

「本当にそれでいいの」
「知らない。うるさい。」

硬く目を閉じてても、どこかで鳴るクラクションの音は耳を突き抜ける。

「そうやってまた逃げるのね。それで守ってもらおうでしょう？」

あなたの大事なお母さんに」

「あなたに何が解るってんですか！」

知ったような口をそれ以上聞かれたくなくて顔を上げてしまった。案の定、同情交じりの冷めた眼差しにぶち当たる。

ああ、もういやだ。散々だ。

「いい加減にしてくださいよさつきから！ 知ったかぶらないでください何も知らないくせに」

「そうかしら。知ってるわよ。だって私、なんでも調べるもの」

「だから何をっ」

駄目だ。聞いちゃ駄目だって、解ってるのに。いやに生温い眼差しを向けられると、引き返せなくなるくらい煽られる。

「マンションにバイオリン、指輪」

「なに……」

それは。

「あなたのお母さんが、今まであなたを守るために手放したもののよ。そこそこお嬢様だったのに駆け落ち同然で家を出て、好きな男とマンションの一室で暮らしてあなたを産んで、なのに夫が突然亡くなった。それから生きていくために一つ一つ大切なものを手放していったのよ。思い出のある部屋を引き払い、音大出の彼女がご両親に貰ったバイオリンを売って、最後には結婚指輪まで。かけがえのないはずのものと引き換えに、貴方を優先させたの。どう？ 知ってた？」

「そんなの……」

知らない。いや、薄々気付いていた。でも。

でも 知らない振りをしていた。私の知らない何かに執着するお母さんを見るのがイヤだって、そんな幼稚な感情のせい。それをこんな形で暴かれるなんて。 無様だ。なんて惨めなんだ。

それでも未だ足りないのか、黙りこくった私に畳み掛けるように囁きかけてくる。

「あなたのお母さんが始と結婚するのだって、感情論だけかしら。金銭的に余裕のなかったあなた達が いえ、これからあなたにかけるべきであろう金額はそう安くはない。それを考慮するとあなたのお母さんは始と」

「やめて！」

ああもう。もういやだ。お母さんまで貶めないで。

「わかりましたから、もうやめてください……」

どれだけ弱弱い声が出ただろう。取り付くしまもないくらい、打ちのめされてしまった。

卑怯だ。こんな。私にとって一番のタブーは、お母さんなのに。あなたのお母さんと始の結婚を認める代わりに本家に移れという声が上がっているの。その際の条件にも、一条の相続権放棄のほかにもう一つ 嫡子を設けないことまで入っている。……解る？

愛する人との子供は産まないと、作らないと、約束させられるのよ。そうでなければ婚姻は認められない。今だって　本家じゃ愛人扱いよ。当主に媚びる厄介な女だって」

お母さん。

「当主を一刻も早く本家に戻せと囁かれる一因には勿論あなたもある。というかそのせいで付け入られているのよ。年頃の男女を一般の民家に住まわせていいはずがないって。状況証拠も揃ってるし、当主もそうそう好き勝手は許されない。それでも。それでもね、楓さん」

おかあさん！

「あなたが高校卒業までに出て行ってくれれば、もう少しは時間を延ばせる。そうすればそれまでならあの家でみんな仲良く過ごせるし、勿論あなたのお母さんも条件を緩和して始と円満に結婚できる子供だつて好きに設けることができるようになるわ。新も高校卒業……いえ、大学卒業までは本家に近寄らずにすむ。あなたが一条……新と関わらないと確約してくれれば、事が円滑に進むの。解るでしょう？」

ああ。

そうね。

「あなたが約束してくれれば、私も約束する。私があなただの代わりに大事なお母さんを守ってあげる。今後あの家から脅かされることのないよう、私がああなたのお母さんの盾になると約束するわ。勿論あなたの今後についても、最大限のサポートをさせてもらう。それが私の条件」

そう。

「解った？」

ええ。

「解りました」

解りましたよ。ええ、全部。全部ね。

気がつく、車は既に止まっていた。硝子越しに見える対向車線の向こう側からぼんやりしたオレンジ色の光が辺りを照らしていて、そこが家のすぐ近くにある公園なのだとすぐに解った。だから、もう着いたのか、とだけ思っただけでシートベルトを外す。同時にカチャリとロックが外れる音がして、ドアノブに手をかけた私の背後に付け足すようにして彼女は言った。

「次会う時まで、心を決めておいて頂戴。待ってるから」

そんなようなことを言っていたけど、車を降りて夜光虫みたいに公園の明かりに向かつてふらふらと歩く私には、返事を返す余地もなかった。ただ、ぼんやりしつつも「送ってもらったのに一言も無しかよ」なんて他人事に笑いながら、もう誰もいない静まり返った公園の敷地に立ち寄る。

あちこちにオレンジ色の小さな街灯があつて、遊具は一塊にかたまり、それから中央には一際輝きを発する大きな明かりがある。それに寄せられるようにふらふら歩いて、見上げながら、もうまともに働きもしない頭でつらつら考えた。

お母さんは、私に言うよりも早く、新さんと出会っていた。それは何らかの必要性があつたということ、少なくとももうその頃には結婚の意志が固まっていた。多分打ち合わせや、これからの計画を話し合っていたのかも知れない。新さんを交えて。

それなら最初から、私が引き合わされたあの時から既にお母さん達の結婚は私の同意待ち いや、それすらも見越して、ただの猶予を設けていただけなのかもしれない。恐らくは新さんもそのことを知っていた。知らなかったのは、知らされなかったのは私だけ。

それは多分諸々の事情を知っていたら私は、絶対に反対したから。そんなことを知っていたら、首を縦に振るはずがない。問答無用で拒否しただろう。そうなる前に一緒に過ごしていれば、多少なりとも絆される。事実、私はあの二人に気を許してしまったし。

そしてそこまではきくと、どうしても結婚をする必要がある

ったからだ。籍を入れなきゃ一生お母さんは愛人扱い。良くて内縁の妻。それだって認識は変わらない。それだけじゃないかもしれない。もしかして一条さんはお母さんの籍に入って一条と縁を切るつもりなんだろうか。

ああそうか。

違う。新さんだ。新さんを一条から引き抜くつもりなのかもしれない。そうだ。きっとそうだ。一条さんは新さんを利用したいんじゃない。お母さんは自分の為に結婚したわけなんかじゃない。

守りたかったんだ。凍えるほど凍てつく針の筵から。惨いまでの、途方もない牢獄から。

ただ、新さんを守りたかった。

それだけだ。そうなんだ。きっと。ううん、絶対。絶対そうだ。新さんの為に。

『あの子』の、為に。

「はっ」

殆ど吐息のような、乾いた晒いが口から零れた。眩い明かりに群がる羽虫を見つめながら、自分でも薄ら寒く思えるような奇妙な笑みが浮かんでくる。

だってあんまりだ。一条さんとお母さんは新さんの為に結婚をする。そうでなきゃ新さんは一条に引き戻されてしまう。朔子さんの条件は、私が約束を守ればお母さんを守るということ。裏を返せばあの人がお母さんの敵に回る。結婚を反対すればお母さんが悲しむ。一条さんが悲しむ。新さんも多分、悲しむ。

きっと、今の状態の鬼門は私だ。私がつっぱねれば一条に付け入る材料を大いに与えることになるし、受け入れれば。

受け入れたら、みんなから、お母さんから離れなきゃならない。そんなのいやだ。でも私は守るって決めた。決めたのに、ずっと守られていて、今だって余計なことを教えまいとみんな黙っていて、

私は知らされなくて、それから。

それから。

「……うう」

立っているのも辛くなって、しゃがみこんだ。

力が湧かない。もう一步も歩けない。

解ってる。解ってるよ。答えなんて一つしかない。はなから選択肢なんてない。お母さんを、お母さんの幸せを守るために私は。

ああ、でも。ねえ、でもさ。

どうしよう。一步も歩けない。立ち上がれない。逃げてしまいたいけれど、逃げる気力もない。

どうしよう。どうすればいいの。

誰か。

だれかだれかだれか。

神様。仏様。この際悪魔でもなんでもいい。

魔法でも、奇跡でも、なんでもいいから。ほんの少しだけ、一瞬でも、いいから。

お願いだから、どうか。

誰か。

だれか。

「おとうさん」

これまで生きてきて、一度もまともに思い起こしたことのないその人を、呼んでしまった。

でも、そう、当然。

当然誰も来ない。神様も仏様も悪魔も誰も。お父さんも。

来るはずがない。何も起こらない。誰も何も信じず今まで生きてきた私に手を差し伸べてくれる誰かなんて、居るはずがなかった。

だから私はそこでずっと馬鹿みたいにしゃがみこんで、延々と自

分の影を見つめ続けた。

気が遠くなるくらい、ずっと。

それから帰宅すると、一条さんから私とお母さんに向けて、一条の主催するパーティに出てみないかという提案をされた。それは事実上、一条さんの再婚相手のお披露目の場を設けたということ。そしてその時が彼女の言う『次』なのだ、未だ働かない頭の隅っこで、漠然とそう感じた。

佐藤かえでとばか

願っていたのは、たった一つのことだけだったのに。

お母さんを守って、ずっと傍にいて、面白おかしく暮らして、つらいこともあるだろうけど支えあって、お母さんの横で見守って、見守られて、そういう感じですっと生きていく。それだけが目標で、願いで、望みだったのに。

でもそれって、そんなに、いけないことだったのだろうか。そんなに、分不相応で、途方もない願いだったりしたんだろうか。他愛もないとさえ思っていたこの願いは、そんな資格などないと容赦なく切り捨てられるほど、私にとって相応しくないものだったんだろうか。

それだけなのに。それだけだったのに。それがなければ全てに意味がなくなるくらい、私にとって唯一だったのに。それなのにそれこそ、望んじやいけないものだったんだろうか。

だったら私の人生に意味なんてない。意味なんて、なかったんだ。誰かの都合の為に簡単に切り捨てられちゃうくらい価値のない、薄っぺらなものだったんだ。そんなのが私の人生で、私なんだ。私は、そんなもの、だったんだね。

いや、そうか。そういうことか。

何が、ひどいってそりゃあ、その事実。

お母さんから離れるとか、私一人が家族から引き離されるとか、もちろんそんなの受け入れられるわけがなかったけれど、一番ショックだったのはなによりも、自分自身にだ。ここにきて今更、気づくはずのなかったことに気づかされた。『お母さんを守る』だってとんだ茶番だ。そんな虚構を後生大事に抱えて、それを支えに私は

十数年を過ごしてきたなんて、愚か過ぎて笑えもしない。

『守る』だって。馬鹿か。私が守りたかったのは、守り続けていたのはお母さんなんかじゃない。私自身だ。ずっとずっと、目の前ものから、お母さん自身からも目を逸らして、お母さんを守るなんて口だけの大義名分ぶら下げて偉そうにふんぞり返ってたって訳か。その実結局は自分がお母さんに見捨てられないようにって、お母さんには自分が必要なんだって、思いたかっただけの癖に。それでただそのちゃちなハリボテみたいな嘘っぱち並べてお母さんにしがみついて生きてきた。

冗談じゃない。見下げた根性だ。性根が腐つてるとしか思えない。それでなお且つ偉そうにお母さんの結婚の是非を問おうだなんて滑稽すぎて羞恥心すら湧いてこない。ここまで自分がクズだったなんて、自分の事ながら呆れてしまう。そりゃあ罰も当たるってものだ。いずれ家族になる新さんや一条さんよりも、誰より一番大事だと謳う母親よりも、自分の幸せを最優先させたんだから。子供だったら普通親の幸せを喜ぶもののはずなのにさ。

拳句の果てにいるかどうかも定かでない神仏に頼って、奇跡を願って、終いには死者を見下していたくせに、この世にすらいない父親にまで縋ろうとしたってさ。無様というより最早惨めだ。見苦しいよ。見られたもんじゃない。

ここになって今更こんなことに気付くなんて。とんでもない。本当に、とんでもない。一番の裏切り者はここにいた。私が、私を、裏切ったんじゃないか。酷い顛末だ。因果応報だ。嘆く権利もない。私に残された道なんて一つしかない。いや、一つもない。

もういい。全部いららない。全部捨てる。私には必要ない。もう何もいらぬ。もう求めたりしない。何も信じない。誰も信じない。私自身を、絶対に信じない。もう誰のことも、願わない。

そのパーティーまでの準備とやらは、それはもうなんの滞りもなく着々と進んだ。日程を知らされてから、そのお披露目で着るものを買いに行ったり、パーティーでの作法を新さんや一条さんに教わったり、あれやこれやと諸注意を受けたり、じつくりと、けれど確実にその日は来た。

その間私はその日が来るまでに何度も何度も意味のない自問自答を繰り返して、夜ベッドの中で苦悶しては疲れ果てて眠り、朝になるとできうる限りの笑顔をこさえ、まったく馬鹿馬鹿しくなるくらい同じ事を繰り返す。あと一月、あと一週間、あと一日と数えるごとに、いやだいやだと小さな子供のように泣き喚きなくなる心を押さえ込んで、その日を迎える覚悟を積み上げていった。

誰かに話すなんて発想ははなからなかった。だって、誰に言えるというの。こんな話。話したところで、なんになるというの。誰が聞くというの。終着点がもうすぐそこに、見えた話を。

お母さんと一緒に選んだドレスは紺色のワンピース。そんなに派手な様式も着たくなかったし、加減もわからなかったから、変に安っぽく見えたり下品に見えたりしないように、膝丈のシンプルなものにした。髪はそんなに長くなかったけど斜めのアップにして、淡い色合いの花を差し込まれた。首にはパールチョーカー。これは一条さんに贈られたもの。

お母さんもお揃いみたいに髪に真珠の飾りをさして、ドレスはごく淡いシャンパンゴールドの、シフォンドレス。ふわふわしたお母さんにぴったりの服で、それは一条さんと選んだみたいだった。本当に、綺麗だったの。

会場は一条所有の洋邸で、二階建てのちょっとレトロな様式だった。大正時代に作られたという割には管理がいいのか随分綺麗で、日当たりのいい大広間はテラスからそのまま整備された庭に出れるという、どこかのテレビ番組で見たことがありそうな典型的なお屋敷だった。

パーティーが始まるまでの間に一度そこまで案内されてから説明を受け、二階に用意された控え室でそれまでの時間を潰すことになった。

その控え室は淡いクリーム色の壁紙で、西日の当たる居心地のいい部屋だった。意匠の凝った額縁に入れられた楕円の鏡が小さな照明をはさんで等間隔に壁に並んでいて、どの角度からも自分が見えて面白い。

そんな部屋をお母さんと一緒に物珍しく見渡しているところに、新さんと一条さんが入ってきた。

「いいねえ二人とも。とてもよく似合ってる。なあ新」

「うん。いいと、思う」

そういう一条さんはアスコットタイのタキシードで、新さんはクロスタイのタキシードだ。二人とも嫌味なくらい足が長いので眩しくて目を逸らしたくなるほど完璧に着こなしていた。一条さんは髪を後ろに撫で付けていて、初めて会ったときみたいなナイスミドルになっている。新さんはアシンメトリーみたいに片側だけ撫で付けている。これがまた余裕がにじみ出るのが、なんともいえない色気があるから始末に終えない。

こんな出来すぎた人たちに褒められても卑屈な感情になるだけだといういい例だ。お母さんもそう思ったのかアイコンタクトでお互い苦笑いを交し合う。解つてもやっぱり腹立つよねーってことだ。ここは一つ意趣返しでもしてやろう。

「照れるなあ。あ、じゃあどっちが似合ってます？ 私とお母さん、どっちの方が綺麗？」

あざとくはにかみつつ言うと、私の意図するところを察したのか隣でお母さんがくすつと笑う。お母さんはお母さんで「そうね。どっちなの？」なんてノリノリのいい笑顔で小首を傾げる。反して、一条さんと新さんは「え」とばかり口を開けてに固まった。ざまあみさらせ。どっちを選んでも重箱の隅をつつくように苛んでやるわ。

ほくそ笑んだ瞬間、けれどやってくれやがりましたよ一条さん。それはそれはいい笑顔を浮かべたかと思うと突如、隣の新さんの肩を引き寄せるように抱いた。

「そりゃあ勿論決まってるじゃないか。新が一番カワイイよ」

イラツとするくらいに輝ける惜しみなない笑顔を隣の息子に向ける父の図。ザ・ワールド発動かと思われるほど、時が止まった。

「よし。そろそろ帰ろっか、お母さん」

「そうねー。やる気失せた。帰りましょ」

「待って。俺も帰る」

「おーとつと、待った待った待った。ウソウソウソ、ジョークだよジョーク。やだなあノリ悪いよみんな」

いやあなたはノリすぎでしょ。引いたわ、ガチで。

全員の白い目を一身に受けつつも、わざとらしく困ったような笑顔で一条さんははにかんだ。

「でもみんな似合ってるのは本当だよ。楓ちゃんは可愛いし、新は僕に似ていい出来栄えだ。それに紅葉さんはいつも可愛らしいけれど今日は特別……綺麗だ」

「始さん……」

けっつ。

キザっただらしが。似非フェミニスト気取りが。全員褒めてるようで約一名にのみ真心尽くしてるのが丸見えだわ。とってつけたように私に可愛いとか抜かしたところはさておいても新さんの事だつて褒めてるように見せかけてさりげなく自己賞賛だし。薄っぺらい賛辞に騙される私と新さんではないわ。

じと目で変わらず冷ややかーに見上げるも、けれど約一名には効果抜群だったようで、胸焼けするような甘ったるい視線が二人の間で交わされている。このバカツプルめがっ。

と、ギリギリ歯を食いしばったところで控え室にここんつと軽いノックの音が聞こえた。

「ああ、もう時間か。じゃあ寂しいけどお先に失礼するね。新、紅葉さんと楓ちゃんを頼んだよ」

「はい」

そう言っつて、しっかりと返事をした新さんへ朗らかな笑みを向けると、一条さんは「またね」とウインクを残して控え室から出て行った。その扉が閉まる直前、すぐさまその取っ手を掴む。

「楓？」

「ちよつと一条さんに聞きたいことあったから聞いてくる。すぐ戻るから」

後ろを振り向かず一口にそう言っつて小走りで一条さんの元へ向かう。声をかけるまでもなく、私の足音に一条さんを呼びに来た秘書らしい男の人も一条さんも、同時に足を止めて振り返ってくれた。

「楓ちゃん？ どうしたの」

「あの、言いたいことがあって」

「ん。なにかな」

特に急いでもないのか聞いてくれるみたいだけど、いかんせん他の人がいる前でつていうのも気が引ける。いや、邪魔だとか不都合があるとか、そんなんじゃないんだけど。それでも私の態度で察したのか一条さんは片手で先に行くように促してくれて、改めて廊下には私と一条さんの二人だけになった。

「それで、どうしたの」

「はい、あの、今日くらいは外してほしいなつて、思っています」

素なのかそれとも惚けているのか一条さんが小首を傾げる。あ、その顔新さんみたい。本当に似てるよねえ。まさかの叔父でも、やっぱり親子だ。いやいやいや。そうじゃなくて、なんとなく言い辛

いけれど、でも言わなくては。

「あの、えーっと、私を見守ってくれてる小人さんたち、というか、ですねー……えーと、うーんと」

ああもう。今度こそ本当にきよとーん、だ。だってなんて言えばいいかわかんないんですよ。素で「私のSP」とか言えるほど玄人じゃないし。中学生に何言わすんじゃコラ、だ。

と、しどろもどろしていると、頭上でふっと一条さんが噴出したようだった。堪えきれないとばかりにくつくつ笑っている。うぐぐ、屈辱。

「ふっ、くくく。小人さんかあ。可愛いねえ、楓ちゃん」

「止めてください」

思った以上に冷ややかな声が出た。なんか一条さんに可愛いって言われるとゾワゾワするんだよなー、背筋の辺りが。生理的嫌悪とでもいうのだろうか、これ。

「ははは、ごめんごめん。いやしかし、気付いていたんだねえ。……怒った？」

さらっといいやがりますか。血は争えないなあ。どこかで聞いたような質問には答えず、出来るだけ無邪気に微笑み返してみる。

「ただでさえ今日は注目集めそうなのに、その上監視の目線とか勘弁です」

「監視とは言うねえ。いやでも、女は見られてこそ綺麗になるとか」「あ、そういうのいいですから」

少しでもこの人のペースに合わせるとすぐに足元をすくわれるといい加減理解した。もう高校生になりますしね、学習能力はあるんですのよオホホ。乾いた笑みを浮かべると、若干一条さんのどや顔が引きつった。

「楓ちゃん、絶対一年前より僕への風当たりきつくなっただよね」

それは違う。一年前からそうでした。ただ遠慮というフィルターが薄くなっただけです。

「一条さんと新さんからは離れないようにしますから。余計な目線

を気にするよりお母さんの方に気を向けたいんです」

卑怯かな。いや、だからなんだという話だ。今更なりふり構って
いられない。

困ったように眉根を寄せる一条さんを今までにないってくらい熱
心に見つめると、どうやら折れてくれるらしい。仕方無しとばかり
に、肩をすくめた。

「解った。小さな子供じゃないもんね。過保護すぎたね、ごめん。

……でも本当に、できるだけ僕や新から離れないでね」

「はい。もちろん」

「それから」

言質をとって安心したのもつかの間、一条さんが身をかがめ、近
すぎるくらいの距離で私の視線を真っ直ぐに捉えた。まるで、揺ら
ぐ水底を見極めようとするかのように。

「他に、話したいことは、ない？」

射抜かれる。

見透かされているのか。

いや、関係ない。この人の土俵には、上がらない。

「特に、何も」

何も無い。貴方に言つべきことは。

「……本当に？」

「はい。……あの、時間、大丈夫ですか？」

「ん。そうだね、そろそろ行かなくちゃ」

一条さんが身を起こしたのに今度こそほっとして、もう追及され
ないように私も背を向けた。その背中に、穏やかな声が降りかかる。
「話したいことがあったらいつでも言つて。最近楓ちゃんと話して
ないから、面白みがないんだ。あとそれ、つけてくれてありが
とう」

やんなるくらい、優しい優しい声がする。振り返らずに、「暇つ
ぶしのネタにされるなんてごめんです」とだけ返した。でも、本当
はもっと他に言いたいことがあった。

「ごめんなさいと言いたかった。一言だけでいいから謝りたかった。」

「すみません。ごめんなさい一条さん。こんなによくしてもらっても、結局私はあなたに何も返せない。あなたは私の父親にはならない。私に父親はいない。これまでも、これからも。ずっと、ずっとこの先ずっと、父親はいない。お父さんは、いない。」

控え室に着くまでスキップ気味で、声にならない言葉を繰り返した。

控え室に戻るとお母さんは椅子に座っていて、新さんがその前に立ってなにやら和やかに話していたようだった。そうして戻ってきた私に気付くなり、新さんは聞いてきた。

「なんだったの」

「ん、ほら、考えてみれば会場つてつまり『一条』だらけじゃない？ 一条さんのことなんて呼べばいいですかーって聞いたら「パパって呼んで」だって」

「セクハラじゃないか」

「ね。法廷に立ったら新さん証言よろしく」

「任せろ」

本当はそれは前日の夜に質問済みのやりとりだったけど、今しがた尋ねたかのようにさらっと軽い調子で言つと、新さんは疑いもせず渋い表情を作る。日ごろの行いの成果だね。

「ちよつとちよつと。あんまり始さんのこと苛めちゃ駄目よー、二人とも」

苛めないよ。半分本気なだけだよ。そんなことを新さんと言い合つと、「始さん泣いちゃうつて」とか言いながら、自分も笑うお母さん。あんまり緊張した様子でもなくて、少しほつとした。

お母さんはなにも言わないけど、一条での心象が良くないのはきつと解っているんだろう。それは私だって同じだ。今更他人にどう

思われようとかまわない。でもお母さんにその余波が及ぶことだけは許せない。例えたかが知れてるとしても、できることをしよう。

そんな決意を胸に固めているうちに、再び控え室にノックの音が響き、常田さんのつそりとドアの狭間から顔を覗かせた。

「お時間です」

それだけ言っただけでドアを開放して、私たちに促す。さっき私が出て入るまでの間には常田さんなんて微塵も見かけなかったのに、いつものまに扉の前に接近していたのか。下手したらその辺のホテルより廊下が長いこの場で、ちらりとも見ないというのも変な話なのに。相変わらず謎な人だ。

「はい。じゃあ行きましようねーかえでちゃん、新君」

にこにこしながら椅子から立ち上がるお母さんに続くように返事をしつつ、私はその場を動かなかった。私を先に行かせようと思っただのか、新さんが顔を覗き込んでくる。そのきよとんとした無邪気な横顔がついさっき見た誰かさんとカブって、なんだか微笑ましくって笑ってしまった。

「なに」

「うん。あのね、お母さんのこと」

お母さんには聞かえないようにひそひそ声で話しかけると、新さんも「うん」とひそひそ声で返してくれる。それもなんだか、面白い。

「傍にいてね。ずっと」

「……うん。楓も」

「おう。任せるよ」

ちょっと驚いたようで子リスみたいに目を丸くした新さんは、けれどきりつと気を引き締めるようにしっかりと頷いてくれた。だから私も安心して頷き返して、行こうと新さんに促す。

新さんは頼もしい。頼もしくなった。これでいい。安心、できるよ。

居心地のいいその空間を振り返ることなく、私たちは会場へと向

かった。

きらびやかな、空間。そこだけが別の空気、別の時間、別の世界を醸しているみたい。

見上げるほど天井は高く、くもの巣状に見事なシャンデリアがかり、きらきらと絶え間なく昼の星のように瞬く光。そういう構造なのか他の部屋とは比べるまでもなく格別明るく、昼間だとしてもさっきの控え室とはまるで明度が違う。これはきつと夜でもかなり明るくなるだろう。

一度はそれにほーっと目を奪われたけれど、今はそういうわけにもいかない。なにしろこの空間にも負けないくらい煌びやかな人々が今、目の前に軒を連ねている。呆けた姿なんて晒したら即笑いものだ。歩きにくい深紅の絨毯の上を慣れないミュールで一歩一歩丁寧に歩きながら、なんとか一条さんのもとまではぐれないようについていくことができた。歩くだけで相当の疲労感を覚える。

うぐぐ、早くも座りたくなってきた。けれどそういうわけにもいかないで、佐藤さんは我慢の子ーと堪えるしかない。今回のパーティーは立食らしくて、おいそれと座ることができない。壁際に椅子が並べられてはいるけれど、今一条さんから離れて椅子で孤立するわけにもいかないからだ。とりあえず一条さんが紹介する人にそこそこ挨拶してそこそこ愛想笑いを浮かべてそこそこ大人しくしている。そんなところ。

そんな中で慣れない薄ら笑いを浮かべつつ会場をさりげなく観察してみるとまあ、見る見るわ。私は芸能人ですかっくらいの注目っぷりだ。例えその視線に芸能人に向けられるような好意が含まれていないということは置いておいても。さすがに近所のおばちゃんほどあけすけに見るような無作法をする人はいないようで、けれどそれでも視線はビシバシ感じる。覚悟してたことだけど、人に見られるって疲れるなー。内心げんなりする。顔に出ないように努め

るので精一杯だ。

でも、お母さんは、違う。一条さんの斜め隣に控えて、けれど毅然と前を真っ直ぐ向いて堂々としていた。なにも後ろ暗いことなんてないと言明するかのように、背筋からかかとまでぴんと張っている。

やっぱり、お母さんは強い。私が思っていた以上にお母さんは強くて、しなやかで、かっこいい。きっと私だけじゃなくて一条さんも新さんも心配していたはずなのに、その諸々を全て跳ね飛ばしてしまうような力強さを感じる。

解ってた。

お母さんが、ずっと私を守っていてくれたこと。私がお母さんを守ると心に誓いながら、ずっとお母さんに背負われ続けていたこと。そしてそんな私を許して、ずっとずっと、背負い続けてくれたこと。その為に捨てたものなんて、あの人に言われなくても数え切れないほどあったことも知ってる。

でもお母さんは文句も言わず、嘆くこともなく、今みたいにただ真っ直ぐ前を向いて歩き続けてきたんだ。一番大事なものを無くしてから、それでもなお沢山の物を捨て続けて、ずっと、私だけは落とさないようにしながら。私はそんなお母さんにずっと甘えてきた。しがみついていた。

だからもしも、もしもこれからお母さんが報われるとしたら、それは一条さんと一緒になることなんだと思う。一条さんと支えあって、新しい人生を歩んで幸せになったとき、その時漸く報われるんだろう。

その為に今私がするべきことは一つしかない。それだけしかできないし、その程度しかできない。それでもこれまでお母さんにもらったものを少しでも返せるなら、その足がかりになれるなら、これくらいのことはほんの瑣末な代償に過ぎないのだろう。

ずっと、口ばかりだったから。

こんな時くらい、一度だけでも、叶えてあげたい。
守ってみせたい。お母さんの望んだ幸せを。

「どうした」

ふわりと、甘酸っぱい香りが鼻腔をくすぐる。いつのまにか、新さんが横に並ぶように立っていて、手には二つのグラス。控えめに注がれたオレンジ色が、ゆらりと傾けられた。

「あら、ありがとう。いただきますわ」

わざとらしく気取りつつ、差し出されたグラスを受け取って少しだけ口に含んでみる。絞りたての、ちよっと酸っぱくて甘苦い、オレンジの風味が舌の上に広がった。ああ、苦い。

「む、これはフロリダ産のオレンジの味がする」

「誤魔化せてないよ。変な顔してた、楓変な顔」

「二度も言うな。レディに向かってそういうこと言うとか、そのデリカシーの欠如は見過ごせないよ新さん」

ふんと拗ねた振りをして、顔を逸らしてみる。危ない危ない。気取られるかと思った。いや、もう気取られてるかも。気をそらすためになんかないかなんかないかと会場をぐるりと見渡したとき、それに、気がついた。

「……新さん」

「なに」

「私ちよっくらレコーディングしつつ雉撃ったついでに花摘んでくるわ」

「は」

言うのが早いか、グッドタイミングで前を通りかかった給仕のお兄さんに今しがた口をつけたばかりのグラスを預けて、一歩踏み出す。けれどその後ろ手を、新さんに素早く掠め取られてしまった。

「俺もついていく」

「いや出待ちとかマジ勘弁。そういうのは事務所通してください」
「楓」

あくまで軽いノリで押し通そうとするも新さんは乗ってこず、逆に押し留めるように私の名を呼ぶ。掴んだ腕を拒むようにさりげなく外して、私もあくまでスタンスを崩さず笑った。

「すぐ戻るって。さっそと行ってさっそと済ませて帰ってくるから。これ以上言わせんな恥ずかしい」

ダメ押しに肩をぼんぼんと叩いて、早歩きで歩き出す。さっき過った影を追いかけるように、私は会場を後にした。

例え一度見ただけの顔だとしても、あれほどいかがわしい出会いならば忘れるはずもない。

入り乱れる煌びやかな世界の狭間で目が合った瞬間の、あのしたり顔を忌々しく思いながら、ただでさえ絨毯で歩きづらい上無駄に装飾のついたミニールをしゃらしゃらと鳴らせて廊下を押し歩く。

しかし無駄に長い廊下だ。これ帰りは慎重をきたさないと絶対に迷子になりそう。姿の見えない陰を追いかけることの焦りに、漸く辿り着いた角を勢いよく曲がる。

と、思うやいなや、壁にぶち当たったとき。やれやれ。

「やあ」

「う、わ」

予測しなかったその展開に足がもつれて、身体が後ろに傾く。ひやっとした瞬間、待ち構えていたように差し出された腕に腰を支えられ、ありえないくらいのに至近距離で体勢を立て直すことができた。助かった。て、いやいや、わざとだろコノヤロウ。

「離してくれませんか」

「冷たいな」。助けてあげたのに」

「ありがとうございます、命の恩人ですう」

「わあ、ミス大根」

そういうのいいから。

限りなく他人の男の人に触られていることは思った以上に気分が悪いらしいので、早々に距離をとる。見上げる先には、見知った面影。誰かにほんの少し似ていて、けれど飄々と重みの欠片もない笑みを浮かべる人。いつかのアイスを台無しにしてくれたその人は、大げさな身振りで一礼しながら、上目遣いで茶目つ気たつぷりに囁いた。

「ご案内いたします、お嬢様」

今更その微笑みにうるたえる心なんて、残っていなかった。

そういえば。あの時起動した携帯電話。

それに内蔵されているボイスレコーダーの最長録音時間は15時間。世の中便利になったものだと感心しながら半ば悪戯心で忍ばせたそれは、一秒たりとも漏らさず最後まで機能し続けていた。最も後半はただの雑音か無音かで殆ど無駄に消費していただけたし、初頭の録音模様もポケットに入れていたせいも異様にノイズが多かったり音が拾いきれていなかったりして、あの人の言うとおりにさして何かの役に立つことはないだろうと思われる有様だった。

とはいえ、例え鮮明に音を拾い期待される機能を果たし本来の役割を優等生ばりに全うしたところで、結果は変わらない。それこそあの人が示唆したとおり、何の役にもたたない。なんのためにもならない。私と同じで、ただそこにあるだけの、備えていようがいまいがなんら利便性に支障をきたすことのないものだと思いついた。

15時間ぶんものそれを聞くただに時間を費やしたのち、それを削除するときになってなにやら無性に憎らしくなった。滑稽なだけのそれが存在することが、腹立たしかったのかも知れない。

洋館の二階は、一回と違って客室などの細々した部屋が並んでいる。その途方もない廊下の突き当たり、一番端の部屋で、彼女は待っていた。控え室とは違いもう少し小ぢんまりとしていて、最低限の調度品と家具があるだけの、ごくシンプルな部屋だった。その片隅にあるソファに腰を落ち着けていた彼女は何か書類に目を通していたようで、私が入ってきたのに気付くとそれを傍らに置いて、向かい側のソファに座るよう促した。

「お久しぶり、でもないわね。先日は非礼が過ぎたわ。ごめんなさいね」

謝意のかけらもない、そっけない社交辞令だ。それに答えない私を見て取ると、朔子さんはさっきまで目を通していた書類を、私の眼前に差し出した。

「これが用意した書類。目を通して異論がなければ最後のページの書名欄にサインして。要望があればなんでも言ってちょうだい」

数ページに纏められたそれを受け取ると、思いのほか薄っぺらくてなんだか笑えてしまった。怪訝そうな視線を感じながらもそのささやかなページをめくり、読む振りをして目を伏せながら、その答えを告げることにした。

「私、考えたんです」

「そう。なにを？」

ひどく穏やかな、声だ。まるで思いやるように、聞き返してくれている。

「どうしてだろう。でも、どうしてかでも、どうでもいい。」

「どうでもいいの、もう。」

「私の人生って、こんなものに振り回されるほど、薄っぺらいのかって。何度も、何度も考えました」

後ろで、くすりと笑う声がある。そりゃあ笑うだろう。見当違いなもの。

私も笑った。答えは逆さだ。

「でも違うんですね。私の人生が薄っぺらいんじゃないかって、あなたたちにとって私がこんなものなんだって。あなたたちにとって、私の人生より、この紙の方がはるかに重い。ただそれだけのことだったんですね」

ぺらりと、捲る。何が書いてあるかなんて、それほど細かく読んでいない。今は、きっと、どれだけ努めようと、頭に入らないだろうから。

この数ページ分が、私のこれからと引き換えだ。あと一枚二枚捲ってしまえば終わる。こんなもの、だ。

「重いかどうかなんて、問題じゃないのよ。優先順位の話。ただそれだけ」

「……そう、ですか。そうです、よね」

そうだろう。そういうものなんだろう。私個人の感情とか、諸々、考慮の上にも上がらないものなんだろう、きっと。

「でも、思っていますけど」

「……なにかしら」

「ここまでする理由、ですか。やっぱり、じっくりこないんです。もっと他にあるんじゃないかな、て、思えて」

もっともらしいこと、散々言われたけど、どれも決定的じゃないような気がしたから。私に決意させるには充分だったんだろうけど。なんだろう。根拠もないのに、納得しきれない。

そう言っつて朔子さんを見ると、ちらりと天井を仰いで、苦笑した。「察しがいいわね。中学生の割にあなたって……いえ、もう高校生か。でもね、あなたがそれを知ったところで何が変わるわけでもなければ、理解も及ばないと思うけれど。それでも、聞きたい？」

いや。今更、どうでもいいし。事実、なにも変わらないだろうと、私も思う。

首を横に振りながら最後のページをめくり、備え付けられた万年筆で署名した。

「もついいの？ 貴方の要望にはできうる限り応えたいの」

「いいんです。ただ一つ、約束してくださいね」

それを手渡して、佇まいを正す。頭に過った人たちを打ち消して、胸いっぱい息を吸い込んだ。

「なんでも言うことを聞きます。できるかぎりやり遂げます。だから、そちらも完璧に遣り通してください。なんの心配もなく、何を不安に思うこともなく、ごく普通に暮らせるだけの日常を約束してください。半端な対応だけは、絶対にしないでください」

言い切った。言い切れた。でもこれで何かが完全に絶たれてしまったような、気がした。

すみみあがりそんな自分が怖くて思わず立ち上がると、朔子さんは真っ直ぐな瞳で私を見上げた。誰かと同じ、あの揺ぎ無い眼差しで。

「約束するわ。あなたが守るといふのなら、やり遂げるといふのなら、その限り、私も守る。守り通すわ」

ああ、そう。

それで充分だ。それ以上のことはない。信用したいとは思わないけど、何故だか疑る気にもなれなかった。私に出来ないことを、この人はできると、そう思えたからかもしれない。

だから自然と笑って会釈をして、部屋を出た。けれど今度は膝が笑って上手く歩けない。数歩歩いて壁にもたれかかると同時に、背後から声がした。

「わかんないなあ」

ああ、びっくりした。

思わず肩が揺れそうになった。内心ばくばくと揺れる心臓を抑えつつ、壁に背を預けるようにして体勢を立て直す。名前も知らないその人は、数歩離れた先で不可解そうに眉根を寄せて私を見下ろしていた。

「なにがですか」

「だってさあ君ってあれでしょ、重度のマザコン。それがあんな風に簡単に身を引くかなーって。なに、そういう自分に酔ってるの。」

続かないよー、そんなだと。ちょっと甘いんじゃないかな、色々」

「ずばずばと言ってくれる。そうじゃないと言いたいけれど、むきになるのも肯定しているようで気に入らない。というか何故にあなたがつつかかってくるんですか。容赦のない侮蔑をひしひし感じる。ああ疲れた。」

「なんなんですか一体……」

「ああ、俺。俺はね、未来のご当主様の、これまた未来の腹心の部下ってやつかな。元候補なんだけどねえ」

「あつそ、なんだかぺらぺら聞いてもいないことをご丁寧にどうも。ようは新さん関連の人ね。未来の部下って、これまた面倒そうな人が新さんの人生に食い込んでくるときたか。つくづく新さん苦労しそうだわ。なんてことをつらつら考える私の横で、またも勝手に話し出す。」

「聞いたよ。君、小学生の頃同級生の女の子に片親のこと言われて、仕返しにそれはもうこっぴどく泣かせたんだって？ その様子が子供の喧嘩にはあんまり苛烈なもんだから学校が君のお母さんを呼び出したら、手のひら返したように素直に謝ったってね。なかなか奇抜なエピソードだよねえ。お母さんのためなら意地も折れるときたもんだ」

「よく知ってますね」

「まあね」

「全く個人情報もなにもあったもんじゃない。人の黒歴史まで漁るとかえげつないわ一条め。」

「そこまで知ってるなら解りそうなものですけどね」

「なにが」

「ふつと笑うと、今度は向こうの笑みが掻き消える。それをちょっと小気味よく感じながら、天井からぶら下がるずらん型の照明を見つめた。」

「仰るとおりマザコンですからねえ、我慢も限界なんですよ、いい加減。いきなり交際相手紹介してきたと思ったら結婚するとか言い

出して、こっちの意見なんか聞きもせずにあつという間に同居してこんなところに連れてこられて。もううんざりなんです。こうなると自由になったほうがナンボかマシってもんです」

ほんとウンザリ。自分がさ。

「自由のために大事な母親を売るってわけ。ていうか、切り捨てるって言ったほうが正しいか。意外と薄情なんだね」

あーウザ。ばすばす地雷踏んでくるなあこの人。どうせわざとやってんだろうけど、その手には乗りませんから。

大体、言われなくても知ってるから。そうだよ、あんたの言うとおり。

最低。最低だ。こんな子供持って不幸だよ、お母さんは。はずれくじだ。

「人聞きが悪いです。てか、別に大したことじゃないじゃないですか。ちよつと親離れ子離れが早まるだけの話です」

へらへら笑って、ただただ見上げる。

なにも見ちゃいない。なにも見ない。もうなにも、見ない。

「なんと言われようと、やることはやりますよ。こう見えても、自分の発言には責任を持つタイプです」

「そう。でも、彼のことは。そういう気持ちは、なかったの」

そういう気持ち。そういう気持ち、ね。

「好きですよ」

そりゃあ、そうでしょ。

もちろんお母さんのことも大好き。一条さんの事だって、好きだから新さんのことも、好きだよ。あんなにいい子はそうそういないもん。好きにならないはずがない。でもね。

「でも すきにはならない」

もしかしたらと思うこともある。でも全部、形になりもしない仮定の話だ。ありえない。これまでも、多分これから。何もかも、もう今更の話。言った傍から空に浮かんで、現実味も何もない。ただただ、身体だけが鉛のように重い。

ぼんやりしていたら、ふっと視界に影が差して追い討ちをかけるように頭に重みが増す。それに釣られるみたいにずるずるとその場にしゃがみこんでしまった。ああ、まいった。身体に力が入らない。疲れたなあ。そんな私をじっと見下ろして無言でしゃがみこんだその人は、性懲りもなくまた私の頭に手を置いて、ぽつりと呟いた。

「泣かないの」

無邪気な顔してなにを聞くかと思えば、なんだか可笑しくって、ちよつと笑って目を閉じた。

もうお喋りは沢山だよ。

「泣きません、この程度で。誰が死ぬわけでもなし」

「そう。ばかだね。君って」

うん、馬鹿なんだ。

ずつとずつと、馬鹿だったよ。救いようのない、馬鹿だったんだ。

不自然に屈いだ心をもてあましながら、一つ思いついた。

そうだ。

あのコップを割ったことにしよう。そうして隠して、いつか持っ
ていこう。それ一つだけでも許されるだろう。大事にしようと、確
かにあの時誓ったのだから。

あれがあればきつといつだって思い出せる。

ちらちら、きらきら、過る輝き。

どこかで見た萌黄色が、ずっと瞼の裏で灯り続けた。

佐藤かえで

もしもこの世界のどこかに天国があつて、そしてもしかしてそこにお父さんがいるなら、今の私を見てどう思っているだろう。

馬鹿げた選択をした私に憤っているだろうか。もしくはできもしない誓いに挫けた私を笑っているだろうか。それとも、こんな道しか選べない無様な私を、哀れんでいたりするのだろうか。

そのどれもであるような気もするし、好きに思えばいい、とも思う。

心のどこかでずっとあなたを否定してきた娘を、あなたも同じだけ否定すればいい。多分それが、因果応報ってやつなんだろうから。

間違いだと、気付いている。明らかかな過ちだと、解っている。そうだよ。解ってるんだよ。解っていても、こうするしかない。これしか、なかったんだよ。やっと思い知ったの。

人には、明らかにそれが過ちだと知りながら、それを選択してしまふことがあるんだって。解っていて間違つた道を歩んでしまふこと。それは間違っていることなんだよ、なんて簡単に言い切れる。

でも、間違つた道を選ぶことの虚しさを知っている人が、どれほどいるだろう。それをわざわざ見つけてくれるような奇特な人がこの世に、どれだけいるっていうんだろう。

多くの人はそれを弱さと切って捨てるものだ。私だってそう思う。

そうだよ。これが、弱さに見てみぬ振りをしてきた、結末なんだよ。

正答にだつてもちろん気付いていた。簡単な話だ。あの時、あの帰り、お母さんに泣きつき、一条さんに訴えればよかった。私は嫌だと、そんなことはしたくないと言えよよかった。それだけの話だ。それだけで全てが万々歳、ハッピーエンドだ。

きつと一条さんはこう言うだろう。『楓ちゃんはそんなことしなくていい。なにも心配することはないんだよ』って。お母さんはこう言う。『ごめんね楓ちゃん。怖かったよね、大丈夫だよ』ってさ。優しい人たちだから、何を言うかなんて想像がつく。で、その後は全て話し終え安心してのうのうと日々を過ごす私を抜きにして、お母さんと一条さんと本家の人たちとでのごたごたしあうだろう。そのうちお母さんは『結婚なんてしなくていい』と言い出すかもしれない。一条さんはそれを許さなはずだ。そんなことになったら名実共にお母さんは愛人扱いだもの。

それで、またごたごたする。最悪、お母さんと一条さんは別れてしまうかもしれない。突飛な想像だけどありえないことでもない。たとえ私がそこで、別れないで、結婚してと訴えたところで、その言葉になんの効力もないだろう。大人の話だからと一蹴されるんだ、きつと。

そこまで考えて、ぞつとした。お母さんは泣くだろう。死に別れてはにせよ、愛する人との離別だ。また、泣くのだ。私の前であるうとなかうと、きつと、嘆くのだ。お父さんのときと二の舞だ。それで私はあの時同様なにもせず、なにもできず、ただただ嘆くお母さんを見つめるしかなくなる。とんだハッピーエンドだよ。お母さんの幸せを願ったはずの私が、お母さんの幸せを奪うんだ。そんなのはいやだ。絶対にいやだ。でもひとりはいやだ。どうしてこうなるの。私関係ないじゃない。なんで私が。私だけが。そんなことを考えて、また堂々巡り。パーティーが終わってから、居心地が良かったはずの真綿が今なお、ゆるりゆるりと私の首を締め付ける。もどかしいほど緩やかな坂道を、じりじり、じりじりと転げ落ちる日々が始まった。それからが多分、もう顛末を迎えた物語の、

情性の話。

決定事項となった契約の内容は、後日メールで届いた。提示された条件は大まかに四つ。

一つは高校卒業後の進路に、指定する区域を選択すること。ようは一条の息のかかった界限には絶対に近づくなということ。その限りであれば、全面的に援助は惜しまないと記されてあった。

二つめはその後一条との関係を絶つこと。私の方から連絡することはおろか、家族から連絡があっても、余程のことではなければ安易な対応をしてはならない。そこまで徹底する必要があるのかどうか甚だ疑問だけど、大方過度な接触につながることを避けるためなのだろう。

三つめは、それらの環境を私自らが整えること。つまり、私が自分の意思で一条との関係を絶つことを明示しなければならない。

そして最後。これらの条件を踏まえた上で、期限は無期限。通達がない限り、それを怠ってはならないこと。

結局あの人たちが何を目的にこうまでしたのかといえは、あくまで私の意思による行動だと示したかったのかもしれない。他者から強制的に強いられたのではどうあっても不自然さが生じる。だって私がそれを望んだこととすれば、誰も追求はできない。一条さんも、お母さんも、誰も。勿論望んでなどいない。けれど自分で選んだのは事実だ。後々言及されたところで私の意思だといわれてしまえばそれまでだ。

それと引き換えに得られるのはお母さんの平穏。子供のことにしても、継承権を放棄する旨の念書があれば認められるよう図ると書いてあった。そして副産物ではあるけれど　　新さんへの僅かな猶予。ようは私が家を出て、一条と縁を切って生活していれば、お母さんの安全と新さんへの幾ばくかの時間が与えられるって事。

いつ終わりがくるかも解らないものと引き換えに手に入れるものが、それ。

何度文字を反芻しても、その対価が同等なのかどうか、正確に測ることはできなかった。

春。目を走らせればどこにでも淡い桃色が散りばめられ、日差しは暖かく風はまだ肌寒かった。

新しい制服に新しい靴、鞆、それから　　新しい、名前。

本当は入籍はまだだったんだけど、その来る日が来年の秋。つまり新さんの誕生日を迎えてから、という話になっているから、途中で名前が変わるのも憚られるため特例として、私は早々に『一条楓』となった。何故新さんの誕生日を迎えてからかというと、新さんが十六歳になったら正式に次期当主としての任命式が行われるらしい。その時に様々な取り決めと共にお母さん達の婚姻も認められるらしくて、詳しくは知らされなかったけれど、私の知らない裏が色々あるのだろうということとは解った。

なににせよ、これからの高校生活を私は『一条楓』として過ごすことになった。

「一条さん」

よく、そう話しかけられては、慣れない呼称に戸惑った。

入学当初私が一条の者だということが知れ渡ると、中学のとき以上に人が寄ってくるようになった。高校は中学よりも範囲が広い。一条の名を耳にする者も少なくはないということ、いやというほど入学早々思い知る。教師でさえ「あの一一条の家の娘さん」なんていやに構ってきたりする始末で、今後の高校生活が思いやられたと

同時に、少しだけ新さんの気持ち解ったような気がした。知らない人間にまるで既知の如く気軽に話しかけられると、不快以前に気味が悪いし、何より対応に困る。

それでも、中学のときは違う。新さんのことを聞かれても中学の頃以上に拒絶を示し、できるだけ人と関わらないようにした。下手に他人と関わって面倒になっても後々面倒なのは解りきっている。吉本さんのことだって多分、私とそれほど関係の無い人間でも枷にはなるのだと朔子さんは示したかったのだろう。だから同様の理由で、小学校中学校からの友人との連絡も絶った。相手からなにか誘いかけてこようと一貫して断つていれば、遅かれ早かれみんな離れていく。

そうやって自然消滅のように友人達とも疎遠になったし、一時期はクラスの中でとっつきづらいと敬遠されたものの、三ヶ月も経てば皆自身の学校生活に夢中になり私に目をくれる者も殆どいなくなつた。

けっして居心地が良いわけではなかつたけれど、それも慣れた。贅沢は言わない。残る三年間、公私共にできるだけ平穩に過ごせたら、これ以上のことはない。

限りなく普通に、けれど常に気を張りながら、受験した当初は想像もしなかつた味気ない高校生活が始まつた。

誰が見てるか解らない。常にこんなことを、念頭に置くようになった気がする。

人を見る。私を見る。学校の人は私を「一条」だと見る。一条の人は私を「厄介な連れ子」と見る。

他にも、ある。

お母さんが私を見る。時々、もの言いたげに私を見る。その度に見えるだけ能天気な振りをする。

一条さんが私を見る。時折、何かを見通すようににっこりと微笑みかけてくる。だから私もにっこりと微笑む。お陰で笑顔のいい練習になった。

それから新さん。ただ、じつと。ごく稀にじつと、見つめてくる。そんな時、無性に胸がざわつく。だからそういう時は普段より余計にかまい倒す。そんな風に新さんと接しながら、ふと頭に「この子は私がこれから失うものを得られるんだ」という思いが浮かぶ。そんな風に思ってしまう自分が解せなくて、すぐに別のことを考えて気を紛らわす。

この頃からだろう。時々私の心が考えていることとは裏腹な思いを抱くようになったのは。

けれど、物事をポジティブに捉えられなくなったら人間お終いだ。だから後ろ暗いことを考えそうになるたびに、色々なことを自分に言い聞かせた。

あの契約だって、一生な訳じゃない。もしかしたら数年で解除されるかもしれないし、そうでなくなつていつか終わりが来るはずだ。そりゃ少しは寂しいけれど、それこそ親離れだと思つて、自分の人生を見つめるいい機会になるかもしれない。その間お母さんのことは心配だけど一条さんがいるし契約が守ってくれるし、私が居なくても新さんがいる。お母さんは新さんが大好きだつて言つてた。なら、そんなに寂しくもならないと思う。

きつと本家の人にちよっかいをかけられなければ、お母さんは笑つて過ごせるだろう。それなら、いい。それ以上のことなんてないし。元々それが私の願ひだったんだし。ただ予定とは違つて傍にはいられないだけで、結果的には私の願ひは叶っている。お母さんが笑つていればいい。大好きな人の傍で、幸せそうにしていればそれ

でいい。

それに、新さんだって。これから面倒なことが待ち受けていそうだけど、あの家にいれば大丈夫な気がする。きつと新さんはもつとずつと、強くなれる。そうなるよう、あの家が守ってくれるだろう。一条さんやお母さんが、全力で守ろうとするのだろう。

いいこと尽くしじゃないか。私はその間ちよつと家を出るだけ。きつとすぐ戻れる。大丈夫。きつと、すぐ、会えるはずだから。

そう、思い込んだ。何度も何度も、心が不穏になりかけるたびに刷り込むように、自分に言い聞かせた。

けれど私は一つ思い違いをしていた。

心は腐る。

人の心は育つこともあれば、腐ることもある。

私の場合はというと、一見葉は青々と、けれど順調に根腐れを起こし始めていた。それに気付いたのが、あの夏。身も心も全てを溶かし尽くし暴いてしまっそうな、あの夏だ。

六月も、もうすぐ終わり。心を湿らす梅雨も明け、もうじき快活なああの季節がやってくる。いや、もうそれに差し掛かっていた。だつてこんなに、暑いんだから。肌を熱らす嫌気を紛らわすため、ふと思い立ち新さんの部屋へと遊びに行った。

案の定涼しげな顔で読書に勤しんだりなんかしちゃって、なんだかつまらない。「何しにきたの」なんて一瞥で示されたらなおさらだ。そこで少しばかりちよつかいをかけてやろうと思いつたところまで目に付いたのが、あの紙だった。進路調査書。見覚えがあるの

も当たり前。私だって一年前には割と悩んで提出した覚えがある。

そうだ。あの頃は、余計なことなど考えずに、過ごしていた。今となつては羨ましいほど、無知だった私。

ふと暑さを忘れ、けれどすぐさま本来の目的を思い出す。

そう。そうだよ。ただ、少し、からかいたかっただけ。いつものかけあいをして、それで済ませるつもりだったんだよ。それだけ、だったんだよ。

なのに。

「……なんでえ？」

新さんの表情が、凍り付いていた。決して、夏の兆しに似つかわしくなどない、絶対零度の眼差しが私を映す。そこでやっと気付いた。自分がどれだけ、異常な様相を晒しているのかということ。

恐ろしくなつて、すぐに逃げた。すぐに自室に引きこもり、そして新さんが追ってくることはなかった。私はというとベッドに突っ伏して、めちやくちやに攪乱された脳内で何度も意味不明な自問自答を繰り返した。

なんで。どうして。どうして新さんが来るの。私の学校だよ。新さん関係ないじゃん。でも、来るって。あの目はもう決めていた。決まっていた。じゃあ、来るの。新さんが。どうして。やめてよ。あそこは私が通う学校なんだよ。新さんが来たら。新さんまで来たら、もっと見られるじゃない。ただでさえ新さん有名なのに、うちの学校にきたら、そんなの。そんなのって。やめてよ。どうしてやだ。もっと見られる。学校の人に見られる。一条の人に見られる。ただでさえ居場所なんてないのに。ねえ、なんで。どうして。やめて。お願い。やめてよ。もう無理なの。これ以上は無理。

これ以上、もう、私　　背負えないよ！

今までこんなこと、考えているつもり、なかったのにさ。次から次へとあふれ出して、もうやめようと思っても止まらなくて、何度も何度も際限なく色んな思いが噴きだした。色んなもの一緒くたにして、頭ん中で、乱雑にかき回されているような不快感。胸がえづいて仕方なかった。

何がどうなっているのか、自分でも解らなかった。ただ確実に何が崩れ始めた、それだけはなんとなく、感じ取っていた。

「なんで？」

前日同様、半笑いの呆けた声が出た。異様な出来事から翌日、何事もなかったかのように朝の挨拶をした私に向かって新さんが言ったからだ。「これから、姉さんと呼ぶ」と。

「別に。ただ、便宜上だよ」
お行儀よく箸を置いて、それだけ呟いた。
べんぎじょう。

言葉の意味は解るのに、言われている意味そのものが全く理解できない。ぽかんと呆ける私から新さんがさつと目を逸らした瞬間、そこでやつと気がついた。

ああ、気付かれたんだ。

なにがとは言えない。ただなんとなく漠然と、けれどそれは揺ぎ無い確信として、ことりと音を立てて私の心に落ち着いた。だから私もこう答えた。笑って、答えた。

「そうだね。もう、きょうだいに、なるんだもんね」

一握りの寂しさが、言葉の狭間から零れ落ちる。不思議な心地でそれを見守りながら、心は異様なほど凧いでいた。まるで、これから吹き荒ぶ嵐の前触れのように。

それから、何かが劇的に変わるでもなく、昨日までの日常も継続して今日に続き、今日終わる日常も明日に続いていく。何の変化もなかったはずだ。それなのに、目に見えて変わっていった。何かがいや、わかつてる。わかつてた。心のどこかで。多分、きっとそう。

わたし、だよ。

目に見える世界が見る間に色を変えていった。いつも何気なく眺めていた日常ががらりと反転する。

朝起きて、顔を洗って歯を磨いてリビングに向かう。出迎えるのは、楽しそうに談笑するお母さんと一条さんと、新さん。たったそれだけの何の変哲も無い風景が、それまでとは全く違う意味を持って私に知らしめる。楽しそうな三人を見て、どうしようもない息苦しさを感じる。

だって、その何気ない風景が、完成された親子の図のようで、まるで入る隙が無いように私を追い詰めるから。それがこれから訪れる、私が見ることさえ叶わなくなる未来予想図そのものだと思いき知らすようで、見ていられなかった。

ついこの間までは確かに自分もそこに居たのに。私が居なくても、この幸福な光景は成り立つんだ。

それを望んでいたはずなのに、それこそがなにより恐ろしくて、なにより寂しかった。何の変哲も無い、朝の風景。それがまるで拷問のように、朝から私の心を苛む。

学校でも、そう。平穩だったはずの学校生活も、新さんが受験するという噂が広まってからはその話題のお陰で入学当初の再来の如く耳障りなものになった。

それでも、前は平氣だったのに。ああまたかって、その程度で済

んでいたはずなのに。それなのにどうしてか、誰かに聞かれるたびに、小さな苛立ちがちりちりと胸を焦がした。鬱陶しくて、うんざりで、意味もなく無性に腹立たしく感じた。内心、同じようなことを聞く人々を根拠も無く見下しもした。

慢性的な苛立ちが、私の心に巣くい始める。そしてその矛先はとんでもないことに、新さんへと向かっていった。

理由など無い。根拠も所以もない。それなのに時々、いや段々と、新さんと話すたび、見るたび、言いようのない苛立ちが募った。最初はそれを堪えたり、誤魔化したり、どうにかしてやり過ごそうと必死だった気がする。でもそれも時間の問題で、抑えきれないその感情は彼に向かって発散された。

無垢で、無邪気で、罪も過ちもない、比類なく純粹な新さん。そんな彼にどうにかして傷をつけてやろうと、私の中の黒いものが容赦なく刃を向ける。いやだいやだと思うのに、自分を止められない何かにつけてつかかかったり、じゃれあいでは済まされないような嫌味を言ったりやったり、不遜な態度や冷淡な態度を気まぐれにとったりもした。

普通の人なら憤るだろう。もしくは嫌いになったり、倦厭したり、なにかしら距離を置こうとするものだ。でも新さんは、変わらなかつた。新さんは、なにもしない。仕返しもしない。怒りもしない。嘆く様子もなく怯える素振りや嫌がる態度もとらず、一歩たりとも私から距離を置こうとはしなかった。むしろ　そう、むしろ積極的に私に接近してくるようになった気さえする。どんなことをされても言われてもめげることなく私に近付き、私への態度を一向に変えようとしない。不思議というより異様なほど、彼は私に対して普通だった。いつそ不自然なほどに。

でもそんなことを続けられると、ますます私は増徴する。自分で自分が止められない。それでも新さんは変わらない。彼を苛んではその後自分を苛み、慰めに彼に優しくしてみてもその後また同じ事

を繰り返す。悪循環だった。どんどん深みにはまっていく。

そうやって、プラスとマイナスが、ころころと世話もなく反転しあう。忌々しいことにその二つはオセロのように相反していて、それだというのに容易く裏返る。白から、黒へ。黒から、白へ。その繰り返し。繰り返して、繰り返して、繰り返し続けて、解らなくなる。

一体どちらが、表だったかと。

意地もあつたのか、それとも一歩も退かないその態度にこそ苛立ったのか、どうしても彼に八つ当たりする自分を止められなかった。苦しかった。悲しかった。怖かった。どんどん自分が変わっていく。こんなはずじゃなかったのに、罪もない彼を憎む自分を止められない。何度「あんたのせいで」と叫びそうになったか解らない。新さんが悪いわけじゃないのに。彼はなにも悪くないのに。彼のことは好きだったのに、いや今でも好きなのに、好きだからこそ憎らしくてたまらない。これから彼が得られるものを思えばこそ、大声を上げて何度でも詰ってやりたくなった。

そうやって、いつしか私と新さんのいびつな関係が出来上がり、そしてそれは隠し通せないほどに肥大していった。

新さんと私が接触していると、お母さんは不安そうな眼差しで私を見た。そしてその眼差しの奥には悲しみと苦悩の色が混じり、「どうして」と私を詰るように潤んでいる。そんなお母さんすら無視できるようになった。

一条さんは時折笑いもせずじつと私を見つめ、私はそれにきつちりと作り上げた微笑でかわす。最早一年前とは程遠い感情で、一条さんを見ていた。

後から思えば、ぐだぐだとそれらしい理由を並べ立てたけれど、

実のところ口を閉ざす理由はもつと根本的なところにあつたのかもしれない。ただ単に、一条さんに頼りたくなかったのだ、私は。私はずっと望んでいたポジションに、ぼつと出で納まってしまったあの人に縋るのが、どうしても我慢ならなかった。

なんだかんだといいつつ心の奥底ではやっぱり、恨んでいたんだろうか。私の最初の居場所を奪い、なおも私に優しくする、あ的一条さんを。簡単に母の大事なところに収まることのできる、父親という存在を。その証拠に、その頃私は言葉にできない想いを何度も抱いては積み上げた。

『あなたたちなんかいなければ良かったのに』って。

なんてことのない日常が、ひとつ、ふたつ、積み重なっていく。日を追う事に重くなる。

『かえでちゃん。学校　どう？　楽しい？』

楽しいよ、お母さん。

『弟さん、入学したね一条さん』

はい、先生。弟をよろしく願います。

『楓ちゃん、調子はどう？』

上々です一条さん。

『一条さん、弟くんってすごいね』

そうですね。

『姉さん』

なあに、新さん。

『一条さん、新くん紹介してよ』

無理です。

『姉さん』

なあに。

『一条君のお姉さんって結構普通だね』

結構もなにも普通ですがなにか。

『姉さん』

なにさ。

『一条姉、感じワル』

知ってる。

『姉さん』

なに。

『一条さんと新君って全然似てない』

そりゃ赤の他人ですから。

『姉さん』

なに。

『一条さんって新君のこと好きなんじゃないの?』

張り飛ばすぞこのくそアマ。

『姉さん』

なに。

『一条姉』

はい。

『一条さん』

はいはい。

『新君のお姉さん』

……はい、い。

『新の姉ちゃん』

はあ。

『一条の姉』

ああもう。

『お姉さん』

うるさい。

うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい。

うるさい。

黙れ。呼ぶな。どっか行って。ほっといて。

私は一条なんかじゃないの。一条姉なんて名前じゃない。あなたの姉なんかじゃない。

私は私。私の本当の名前は佐藤楓。私は、本当の私はわたし、は。

『姉さん』

だれ。

笑ってしまいそうなほど簡単に、歪んでいく。苦しくて、悲しくて、やるせなくて、もうどうしたらいいかも、どうしたかったのかすら解らなかった。

どうすればよかったの。どうしたら、最善で、最良で、正解だったの。私には解らない。一条さんほど大人でもなければ、新さんほど頭も良くない。ただ普通に生活して、普通に望んだ人と一緒にいたかっただけなのに。

わけがわからない。もうめちゃくちゃだ。気がついたら、こんなことになっていた。こんなの私じゃない。私はどこに行ったの。一体私は何になったの。私って、本当は、どんな子だったの。

でも、もう、なにを思い起こそうと掘り下げようと、引き返せない。前に進むこともできない。歪んだ過去を積み上げて、色も形もない未来に向かって茫洋と歩き続ける。もうどうでもいい。なんでもいい。どうだっていいから、もうなんにもいらぬから、全てなくしてしまいたい。早く終わりになって欲しい。

ここではないどこかに行きたい。誰もいない、なにも知らない、私のことを知らない、まっさらな世界にいきたい。ゼロから初めて私もまっさらな自分になりたい。新さんのように、みんなのように、

綺麗な心で綺麗な未来を歩みたい。

何度も願った。そんな夢のようなことを、何度も夢想して、何度も馬鹿みたいに願って、何度も打ちひしがれた。奇跡も、夢も、変化も変革も、なにも起きない。願って、願って、願いつつ、願いつつ、果てにはいつも無為な世界が待っていた。

新さんを傷つけて、お母さんを悲しませて、一条さんを失望させる日々。

終いには、あれだけ望んでいなかったというのに、早く出て行きたいとまで思うようになった。

早く出て行きたい。早く離れたい。取り返しのつかないことをしてしまう前に、全部終わらせたい。

早く。早く。早く。

そんな時、だった。

「異世界」

「ここが？」

「ここが。」

召還よほれたのは私じゃない。新さん。

魔術 まほう。奇跡。違う世界。違う自分。

いつか、私が願ったもの、全部。でも一つも、ただの一瞬も手に入らなかったもの、全て。新さんは持っていた。全て与えられていた。何もかも完璧で、完成していて、満ち足りている。彼が。全て。

私は全部失うのに！

全部、無くなったのに！

どす黒い憤怒が身の内に猛る。心を覆う暗雲は見る間に隅々まで覆い尽くし、私の心を一筋の光も灯らない暗闇の化け物へと変貌させる。

いい機会だ。こんな好機はない。このチャンスもこの世界も、利用してやればいい。どうやっても新さんが私に立ち向かうというのなら、完膚なきまでに叩き潰してやればいいんだ。あの子の心も私のように黒く染まればいい。たとえ一点の染み一つだけでも、残してやりたい。彼の思い通りにならないこともあるのだと知らしめて、屈させてやりたい。

どうせもう戻れないんだ。だったらもうなにをしようが関係ない。どうなるうが、もう知ったことではない。

決別しよう、新さんと。彼を憎む、私の醜い心ごと。もうこれ以上彼を苛むことのないように。これ以上、無為な傷をつけることのないように。この世界で私ごと、私を捨ててしまおう。

そうしたら、守れるだろうか。

私から、新さんを。いつかの日、確かに抱いた誓いを。

だから。

どんなに潔い決断を下そうと、どんなに清らかな美談を彩ろうと、それが一瞬のことであるなら、中身の無い宝箱と一緒だ。その時思い描いたそれを損なうことなく貫き通すことができないのなら、口先だけだと笑われるだけ。献身なんて、言葉にするほど簡単なものではない。私の選んだ選択が導き出した答えはたったのそれっぽっちで、それこそが今ある事実を証明していた。

有体には言えば失敗したのだ、私は。たったこれだけのことなのに。たったこれだけのことでさえ。望んだ自分を得られず、望んだ未来を満身に作ることも出来ず、ただただ逸れていく道程を歩いてい

くしかない。首に縄をかけたまま歩き続け、歩みを進めれば進めるほど苦しいのに、立ち止まることもできない。

だったらいつそのこと、首が落ちるまで歩き続けるしかない。歩いて、歩いて、歩いて、肉を殺ぎ骨を絶ち神経の一本足りとて残すことなくくびり落としてしまおう。それが唯一残った、私の意思なのだから。

そして、そう。

これが、一つの物語なのだとしたら、これほど読み甲斐のないものもない。ハッピーエンドでもなく、ましてや目を覆うようなバッドエンドでもない、ただ少し後味が悪いだけのこんな終末。

それでもこれが物語なのだとしたら、ここで終わり。

終了。打ち切り完結。最終回。

「愛読ありがとうございました。」

はい、ストップ。

佐藤かえで（後書き）

読了感謝です。

慌てて投稿なのであとで見直しますがもしも誤字脱字誤用等ありましたら拍手や感想欄、メッセージなどにてご一報くださるとありがたいです。

もちろん感想だって待ち遠しいよジュテーム。

これにて過去編は終了です。

今後の活動と言いついては毎度の如く後で投稿の割烹にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7806m/>

COMPLEX TRIP!

2011年8月22日03時25分発行